

関越自動車道関係発掘調査報告書

ご ちよう ぶ 遺 跡
五 丁 歩 遺 跡
じゅう に き
十 二 木 遺 跡

(本文編)

1992

新潟県教育委員会

関越自動車道関係発掘調査報告書

ご ちよう ぶ 遺 跡
五 丁 歩 遺 跡
じゅう に き
十 二 木 遺 跡
(本文編)

新潟県教育委員会

序

関越自動車道が全線開通したのは、昭和60年10月のことであるが、平成3年11月に関越トンネルが4車線化し、文字どおり関東圏と新潟を結ぶ大動脈となった。開通以来、高速道路のもたらした効果には絶大なものがあり、新潟県全体が大きく変わろうとしている。特に県内では、リゾート開発がめざましく、魚沼地方はその影響下にある。

このような大きな開発の陰で、失われていく遺跡も数知れず、記録保存でしか残らない遺跡は増加の一途である。

本書は関越自動車道建設に伴って、昭和58、59年に新潟県教育委員会が実施した南魚沼郡塩沢町五丁歩遺跡、十二木遺跡の発掘調査報告書である。

五丁歩遺跡は縄文時代中期の集落の跡である。集落のほぼ全面が調査され、その全容をつかむことができた。集落は中心に広場、墓をもち、それを囲むように住居のあるいわゆる環状集落と呼ばれているものである。全体が調査されたのは全国的にも例が少なく、縄文時代の典型的な集落として広く知られるところとなった。出土遺物も大変な量で、土器や石器に地域性がよく表されている。遺跡地が魚沼地方であり関東方面に近いこともあり、関東系の土器も見られる。当時から関東地方との交流があったことを示すものであり、その状況は現在と変わることろがない。

当時の人たちは自然にうまく適応しながら、自然の中で生きてきた。この五丁歩遺跡においてもその姿が浮かび上がってくる。環境破壊が深刻化し、世界的な地球規模の問題と化し、自然保護が叫ばれている今、今を生きる我々が将来に残せるものは何か。古代人の残してくれたものを前にして考えてみる必要があるのではないかと思える。その意味も含め、本書が研究の一助となれば幸いである。

調査にあたっては、日本道路公団新潟建設局並びに、同六日町工事事務所に格別のご配慮を賜り、また地元塩沢町教育委員会には、多大なご協力とご援助をいただいた。ここに深甚なる謝意を表する次第である。

平成4年1月

新潟県教育委員会

教育長 堀川徹夫

例　　言

- 1 本書は新潟県南魚沼郡塩沢町大字舞子2056他に所在する五丁歩遺跡並びに十二木遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は関越自動車道建設に伴い、新潟県が日本道路公団より受託して実施した。
- 3 調査主体は新潟県教育委員会で、昭和58年、59年に発掘調査を実施した。発掘調査面積は、昭和58年度12,000m²、昭和59年度6,000m²の計18,000m²である。また、十二木遺跡は昭和58年度に調査を実施した。調査面積は約930m²である。
- 4 整理作業、報告書刊行は、昭和63年・平成1・2・3年度に実施した。調査及び整理体制は第3章のとおりである。
- 5 出土遺物と調査にかかる資料はすべて新潟県教育委員会が保管している。遺物の注記は五丁歩遺跡は「G C」、十二木遺跡は「十二木」とし、出土地点を併記した。また報告書に使用した遺物については本書の図面番号も付記した。
- 6 本書の作成は、新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係職員があつた。ただし、「第IV章 5 自然科学の分析・調査」の土器の胎土分析は奈良大学教授三辻利一氏、C14年代測定は学習院大学教授木越邦彦氏、花粉分析については鈴谷良一・サープエイ、テフラ分析については山梨文化財研究所河西学氏にそれぞれお頼いし、玉稿をいただいた。
- 7 本書の作成は中島栄一(県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長～平成2年度まで)、本間信昭(同課埋蔵文化財第2係長)の指導のもとに高橋保(同主任)、高橋保雄(同文化財主事)が担当した。本書の執筆は前記2名の他、茂田井信彦(前文化財主事、現新津市立金津中学校教頭)、藤巻正信(同主任)北村亮(同主任)があつた。執筆分担は第II章1、2が茂田井、第III章2が高橋保雄・高橋保、第IV章4-A2) bが北村亮、第IV章4-B(第IV章4-B2)のみ藤巻正信)、6-Cが高橋保雄、第IV章6-Dが高橋保雄・高橋保、第V章4-Bが高橋保雄のはかは高橋保である。第IV章3の遺構各説については発掘調査を担当した職員の作成した遺構カード及び整理を担当した茂田井、田海義正(同主任)の整理結果をもとに高橋保が執筆した。また「土器」の執筆においては小田由美子(同文化財専門員)の協力を得た。
- 8 本書は本文編と図版編の2分冊である。図版編には主な遺構・遺物実測図・写真をおさめた。
- 9 遺構番号は、住居跡については現場で付したものそのまま用いたが、その他の大型フラスコ状土坑(大フラ)、小型フラスコ状土坑(小フラ)、土坑、トランクビット(Tビット)についてはグリッド毎に付されていたため、遺構種別または類毎に通し番号を新たに付け直した。
- 10 註は脚註とした。引用文献は著者と発行年(西暦)を文中で示し、巻末に一括して掲載した。
- 11 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示、ご協力を得た。厚く御礼申し上げる。(敬称略)
赤山容造、荒川勝利、石本弘、金子拓男、河内一男、木島勉、小島俊彰、小林達雄、後藤秀一、鈴木憲元、鈴鹿良一、竹之内耕、田中耕作、田中靖、堤謙、寺内隆夫、前山精明、松本茂、三上徹也、南久和、村松俊雄、日黒吉明、芳賀英一、藤谷誠、堀田雄二、山口逸弘、渡辺誠、下総考古学研究会

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 位置と地理的環境.....	2
2 歴史的環境と周辺の遺跡	4
3 魚沼地方の縄文中期の遺跡群.....	5

第Ⅲ章 調査の概要

1 発掘調査.....	8
A 調査方法	
B 調査経過	
C 調査体制	
2 整理作業.....	11
A 方法	
1) 遺物	11
2) 遺構図面	11
B 整理体制	

第Ⅳ章 五丁歩遺跡

1 概要	13
2 層序	14
3 遺構	16
4 遺物	34
A 土器・土製品	
1) 土器の概観	34
2) 土器各説	38
《土器観察表》	
B 石器類	
1) 資料提示の方法	108
2) 石器類の分類と分析	114

《出土石器一覧》	
5 自然科学の分析・調査	232
A 五丁歩遺跡出土縄文土器の蛍光X線分析	
1)はじめに	232
3)分析結果	232
B 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	
C 五丁歩遺跡の出土物自然科学分析報告	
はじめに	236
2)分析方法	236
4)考察	236
D 五丁歩遺跡のテフラ	
1)はじめに	244
3)鉱物組成	244
5)従来の鉱物分析との比較	246
6まとめ	250
A 遺構について	
1)住居跡の分析	250
3)集落の構造について	262
B 土器について	
1)各系列の土器	264
3)出土土器の編年	289
C 石器について	
1)板状石器	299
3)彫刻石皿	307
5)石器組成—魚沼地方の中期前業から後期前業を中心に—	313
6)清水上・城之原遺跡との比較	318
D 五丁歩遺跡の性格と位置付け	321
2)土坑について	261
4)「新巻類型」「鶴町類型」と五丁歩遺跡の土器	286
について	297
2)片刃打製石斧	304
4)器種と石材選択	311
7)石器の出土分布状況と遺跡のありかた	320

第V章 十二木遺跡

1 遺跡の概要	323
2 層序	323
3 遺構	323
4 遺物	325
A 土器	
B 石器	
《要約》	
《引用・参考文献》	

挿図目次

(五丁歩遺跡)	
1 確認調査トレンチ設定図	1
2 周辺の地形と遺跡分布	3
3 飯土山周辺の地質図	5
4 魚沼地方における縄文中期遺跡分布図	7
5 グリッド設定図	8
6 プレ試掘トレンチ設定図	9
7 土層柱状図	15
8 Tピット分布図	30
9 器形分類図	34
10 土器系列分類図	36
11 各部位名称	37
12 実測図法の模式図	109
13 実測図の主な表現例	110
14 素材の計測部位と名称	112
15 主な器種の並べ方及び部位名称と 計測基準	113
16 石鏃出土分布図	115
17 石鏃長幅分布図	116
18 石鏃厚さ分布図	116
19 石鏃重量分布図	116
20 石錐出土分布図	118
21 石錐長幅分布図	119
22 石錐厚さ分布図	119
23 石錐重量分布図	119
24 石匙出土分布図	121
25 石匙長幅分布図	122
26 石匙厚さ分布図	122
27 石匙重量分布図	122
28 ピエス・エスキーユ出土分布図	123
29 ピエス・エスキーユ長幅分布図	124
30 ピエス・エスキーユ厚さ分布図	124
31 ピエス・エスキーユ重量分布図	124
32 不定形石器A・B・C類出土分布図	131
33 不定形石器D・E類出土分布図	131
34 不定形石器F・G・H・I類出土分布図	132
35 不定形石器J・K類出土分布図	132
36 不定形石器長幅分布図	133
37 不定形石器厚さ分布図	133
38 不定形石器重量分布図	134
39 板状石器出土分布図	139
40 板状石器長幅分布図	139
41 板状石器厚さ分布図	140
42 板状石器重量分布図	140
43 打製石斧撥形・短冊形の分類基準図	142
44 打製石斧A・B類出土分布図	144
45 打製石斧C・D・E・F類出土分布図	144
46 打製石斧長幅分布図	145
47 打製石斧厚さ分布図	146
48 打製石斧重量分布図	146
49 打製石斧遺存部分と破損の仕方模式図	148
50 打製石斧刃部平面形模式図	149
51 磨製石斧出土分布図	151
52 磨製石斧長幅分布図	152
53 磨製石斧厚さ分布図	152
54 磨製石斧重量分布図	152
55 磨製石斧刃部断面形模式図	153
56 碓器類出土分布図	155
57 碓器類長幅分布図	156
58 碓器類厚さ分布図	157
59 碓器類重量分布図	157
60 磨石類A・B・C・D類出土分布図	161
61 磨石類E・F・G・H類出土分布図	161
62 磨石類長幅分布図	163
63 磨石類厚さ分布図	164
64 磨石類重量分布図	164
65 磨石類接合品の出土分布図	167
66 石皿出土分布図	169

67 石皿長幅分布図	170	100 五丁歩遺跡23D区風-2（東壁）の模式断面 図および花粉分析試料の採取層位	241
68 石皿厚さ分布図	170	101 花粉化石写真および状況写真	242
69 石皿重量分布図	170	102 状況写真	243
70 石皿接合品の出土分布図	171	103 五丁歩遺跡試料の粒径組成、火山ガラス・ 鉱・重鉱物組成、火山ガラス含有率、 重鉱物組成図	248
71 砥石A類出土分布図	174	104 五丁歩遺跡住居跡構造断面模式図	250
72 砥石B類出土分布図	174	105 住居跡形態分類図	251
73 砥石長幅分布図	175	106 住居跡類別分布図	254
74 砥石厚さ分布図	175	107 住居跡配列分布図	258
75 砥石重量分布図	175	108 住居跡と土坑の関係分布図	260
76 台石出土分布図	177	109 五丁歩遺跡集落構造概念図	263
77 台石長幅分布図	177	110 隆I a系列の土器	264
78 台石厚さ分布図	177	111 隆I b系列の土器	265
79 台石重量分布図	177	112 隆I c系列の土器	267
80 三角錐形石器及び中期前業以外の 土器分布図	178	113 隆II a系列の土器	268
81 三角錐形石器長幅分布図	179	114 隆II b系列の土器	270
82 三角錐形石器重量分布図	179	115 隆III a系列の土器	271
83 石核出土分布図	184	116 隆III b系列の土器	272
84 石核分類別長幅分布図	186	117 隆IV系列の土器	273
85 石核石材別長幅分布図	186	118 隆V系列の土器	274
86 石核厚さ分布図	187	119 繩I系列の土器(1)	276
87 石核重量分布図	187	120 繩I系列の土器(2)	277
88 刺片類出土分布図	189	121 繩II系列の土器	277
89 刺片類石材別・形状別長幅分布図(1)	191	122 繩IV系列の土器	278
90 刺片類石材別・形状別長幅分布図(2)	192	123 繩V系列の土器	278
91 板状石器の素材出土分布図	196	124 繩VI系列の土器	279
92 自然縫類出土分布図	198	125 繩VII系列の土器	280
93 自然縫類重量別出土分布図	198	126 繩VIII系列の土器	280
94 五丁歩遺跡出土土器Rb-Sr分布図	233	127 繩IX系列の土器	281
95 五丁歩遺跡出土土器K-Ca分布図	233	128 繩XI a系列の土器	282
96 クラスター分析	234	129 繩XI b系列の土器	282
97 分析に使用した土器	234	130 繩XII系列の土器	283
98 五丁歩遺跡18Cグリッドにおける模式土層 断面柱状図および花粉分析試料の採取 層位	239	131 繩XIII系列の土器	283
99 五丁歩遺跡20Cグリッドにおける模式土層 断面柱状図および花粉分析試料の採取 層位	240	132 繩XIV系列の土器	284
		133 勝坂系列の土器	285
		134 阿玉台系列の土器	285

135 出土土器編年模式図(1).....	292	142 彫刻石皿出土分布図.....	308
136 出土土器編年模式図(2).....	294	143 彫刻石皿集成図.....	309
137 「新巻類型」土器主要出土遺跡分布図.....	297	144 分析遺跡の位置図.....	313
138 土器分布図.....	297	145 使用痕のある剝片長幅分布図.....	318
139 板状石器及び類似品出土分布図.....	301	146 石器種類・石製品・剝片・石核出土分布図.....	
140 片刃打製石斧出土分布図.....	306		320
141 片刃打製石斧装着例.....	306		
（十二木遺跡）		148 十二木遺跡土器出土分布図.....	325
147 南壁セクション図.....	323	149 十二木遺跡出土石器分布図.....	328

表 目 次

(五丁歩遺跡)			
1 周辺の遺跡一覧.....	4	24 ピエス・エスキュー分類表.....	122
2 小型フ拉斯コ状土坑一覧表.....	29	25 ピエス・エスキュー分類別出土数.....	124
3 大型フ拉斯コ状土坑一覧表.....	29	26 ピエス・エスキュー石材表.....	124
4 T・P一覧表.....	31	27 ピエス・エスキュー素材表.....	124
5 土坑I類一覧表.....	32	28 不定形石器分類表(1).....	127
6 土坑II類一覧表.....	32	29 不定形石器分類表(2).....	128
7 土坑III類一覧表.....	33	30 不定形石器分類別出土数.....	130
8 出土石器の固化数量と固化率.....	109	31 不定形石器石材表.....	135
9 各器種の諸尺度.....	109	32 不定形石器使用痕表.....	136
10 頁岩系の各石材の主な特徴.....	111	33 不定形石器素材觀察表.....	137
11 石器類の器種別数量.....	114	34 板状石器分類表.....	138
12 石鎚分類表.....	114	35 板状石器分類別出土数.....	138
13 石鎚分類別出土数.....	115	36 板状石器石材表.....	140
14 石鎚石材表.....	115	37 板状石器自然面集計表.....	141
15 石錐分類表.....	117	38 板状石器使用痕表.....	141
16 石錐分類別出土数.....	118	39 打製石斧分類表.....	142
17 石錐石材表.....	118	40 打製石斧分類別出土数.....	143
18 石錐錐部断面形表.....	120	41 打製石斧石材表.....	146
19 石錐使用痕表.....	120	42 打製石斧素材表.....	147
20 石匙分類表.....	120	43 打製石斧自然面集計表.....	147
21 石匙分類別出土数.....	121	44 打製石斧遺存部分と破損の仕方集計表.....	148
22 石匙石材表.....	121	45 打製石斧刃部平面形表.....	149
23 石匙素材表.....	121	46 打製石斧刃部断面形表.....	149
		47 打製石斧刃部使用痕表.....	150

48 打製石斧基部使用痕表	150	74 三角錐形石器の分布による相違	180
49 磨製石斧分類別出土数	152	75 刺離作業工程表及び石核分類表	182
50 磨製石斧石材表	153	76 石核分類別出土数	185
51 磨製石斧遺存部分と破損の仕方集計表	153	77 石核石材表	185
52 磨製石斧刃部平面形表	154	78 刺片類遺構別出土数	188
53 磨製石斧刃部断面形表	154	79 刺片類石材表	190
54 磨製石斧使用痕表	154	80 刺片類石材別觀察集計表	194
55 碾器類分類表	155	81 板状石器の素材遺構別出土数	196
56 碾器類分類別出土数	156	82 板状石器の素材分類別出土表	196
57 碾器類石材表	156	83 自然疊類遺構別出土数	197
58 碾器類使用痕表	157	84 五丁歩遺跡出土土器の分析値	233
59 磨石類分類表	158	85 五丁歩遺跡試料における花粉分析結果	238
60 磨石類分類別出土数	160	86 試料表	244
61 磨石類石材表	166	87 五丁歩遺跡の鉱物組成	249
62 磨石類被熱表	166	88 住居跡分類一覧表	252
63 石皿分類表	168	89 出土土器編年対比表	296
64 石皿分類別出土数	168	90 板状石器製作工程から施業までの流れ、 及び素材分類表	300
65 石皿石材表	170	91 板状石器及び類似品出土地一覧表(1)	302
66 石皿被熱数と被熱部位	170	92 板状石器及び類似品出土地一覧表(2)	303
67 石皿破損品の分割状況	170	93 片刃打製石斧出土地一覧表	307
68 砥石分類表	172	94 彫刻石皿文様分類表	308
69 砥石分類別出土数	173	95 彫刻石皿出土地一覧表	310
70 砥石石材表	175	96 石器類器種別、石材別出土表	312
71 砥石遺存状態表	175	97 各遺跡の石器組成	314
72 砥石砥面數表	176		
73 砥石敲打痕表	176		

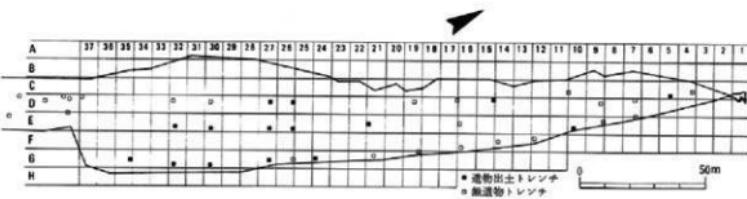
(十二木遺跡)

98 十二木遺跡出土石器一覧表	328
-----------------	-----

第Ⅰ章 調査に至る経緯

今回報告する五丁歩遺跡、十二木遺跡及び協議対象となった惣ヶ沢遺跡のうち、惣ヶ沢遺跡は、すでに戰前の開墾によって遺物の出土していた遺跡である。また十二木遺跡は昭和42年の畑地造成の際多量の土器、石器が出土しており、1971年に刊行された『塩沢町における考古学・民俗学の調査』にも紹介されている。また五丁歩遺跡も以前より知られていた遺跡であるが、これら3遺跡は、昭和52年度の県教育委員会による南魚沼郡遺跡詳細分布調査において地点等明確化された。

さて、昭和40年代後半から本格化した日本道路公団による関越自動車道新潟線の工事は、昭和50年代に入りビーグを経て、長岡以南については、遺跡も多く、県教委の発掘調査も全く余裕のない状態の自転車操業の様相を呈していた。上記3遺跡について、最初に協議対象としてあがったのは、昭和51年の土取場候補地及び石打サーサイア予定地としてであった。これに対しては、予定地内に遺跡が存在するため、その取扱いについて協議が必要な旨回答し、結局、土取及びサーサイア候補地からは除外された。昭和54年に入り道路法線予定地について分布調査を実施したが山林のため遺跡範囲をつかむまでにはいたらなかった。その後路線発表がなされ、上記3遺跡が本線にかかることが明らかとなり、昭和56年度に発掘調査をしてほしい旨日本道路公団から要望があった。しかし、56年度は他の発掘調査のため、実施不可能と判断されたため、とりあえず試掘、確認調査を昭和56年11月に実施することになった。惣ヶ沢遺跡では、6ヶ所の試掘溝(2×2m)を設けて確認調査を実施したが一ヶ所で土層でフレークが出土したにすぎない。このことから、惣ヶ沢遺跡については、立合調査でいいのではないかとの結論に致した。次に五丁歩遺跡では39ヶ所の試掘溝(2×2m)を設定して確認調査が行なわれた(第1図)。遺跡の南側では谷部斜面も含め縄文中期土器の散布が見られ、包含層も良好に残存していた。また一ヶ所で住居跡の炉と思われる石組みも検出された。北側の方は、南側に比して遺物の散布は希薄であるが、フレークを中心として遺物が認められた。このようなことから、法線内全面発掘が必要との結論が得られた。面積はおよそ18000m²である。昭和57年度には調査に入れる予定であったが、堀之内町清水上遺跡、六日町金谷遺跡等の調査が優先され、五丁歩遺跡の調査に入れたのは、昭和58年4月からであった。また十二木遺跡も法線斜面掘削部拡大により、一部かかることになり、急遽58年度に実施することになった。



第1図 確認調査トレンチ設定図

第II章 遺跡の位置と環境

1 位置と地理的環境

五丁歩遺跡は新潟県の南部、南魚沼郡塩沢町大字舞子字五丁歩に所在する。人口約21,000人、面積191.78 km²の町である。周囲を巻機山など越後山脈と魚沼丘陵地帯に囲まれ、町の北部では、魚野川・登川が合流し、魚沼盆地の一角を形成している。近世を通して三国街道に沿った塩沢には宿場が置かれ、米・白布・繩の産業で大きく発展した。このような伝統のある町が、現在では、高速交通の確立が観光地にとって重要な要素となり、ウインタースポーツを中心とした新たなレクリエーション地域として発展している。

周辺の地形 遺跡の位置する南魚沼地方の地勢は、本県の石油構造といわれる南南西～北北西へ延びる明瞭な地質構造を反映し、主要な山並みや河川がこれに沿って尾根や谷を形成している（第3図）。魚野川本流から約15km離って、平行な流路をとる信濃川沿岸には河岸段丘の発達が極めて顕著であるのに対し、魚野川両岸（小出～石打間）には河岸段丘の発達がほとんど見られない。このことは、魚野川低地帯が段丘時代に入ってから形成され、中期洪積世から沖積世を通じて沈降性の運動を継続したことの意味する（新海平野団グループ、1972）。しかし、石打以南の魚野川本流・登川・三国川・水無川・佐梨川などの河川には1～2段の河岸段丘が発達している。

魚野川両岸（小出～石打間）には、河岸段丘の発達が不良であるのに対し、扇状地の発達が極めて顕著である。左右両岸の扇状地の規模を比較すると、左岸のものは小規模であるのに対し、右岸地域では大規模扇状地が発達している。水無川・三国川・登川がその良い例である。扇状地には、新旧2種が区別される。旧期の扇状地は魚野川に接する前線に高さ1～3mの侵食崖をもつ。新規のものは魚野川河床面に連続する扇状地を示している。左岸地域には両種のものが発達し、しばしば複合扇状地を形成している。一方、右岸の大規模扇状地はいずれも新規のものである。

南魚沼地域の地質は、破間川及び魚野川を北北東～南南西方向の構造線（新発田一小出線の一部）を境としてその東西の地において地質系統及び地質構造について極めて顕著な差異がある（第3図）。魚野川以東には、「いわゆる古生層」、水無川変成岩、はんれい岩及びこれらを貫く白亜紀花崗岩が分布し、魚野川東岸沿いには城内層群と呼ばれる特徴ある新第三紀層が分布している。また巻機連峰及び谷川連峰一帯は、フォッサ・マグナ地域を特徴づける新第三紀の石英閃長岩によって構成されている。

飯土山の地形はドーム状溶岩による鐘状地形と、火山碎屑流が形づくった腰傾斜面とによって特徴づけられている。鐘状の溶岩ドームは中央火口丘として山頂部の急崖に閉まれた山体を形成しているほか、側火山としての立柄山を形成している。飯土山の北方、北東方及び東～南斜面には腰傾斜面が広く発達している。これらの腰傾斜面はいずれも火山碎屑流によって形成された原地形面であって、厚いローム層によつて覆われている。山体を刻む谷形はいずれもV字形をなし、主として北及び西方に発達している。



第2図 周辺の地形と遺跡分布

2 歴史的環境と周辺の遺跡

塩沢町における人類の歴史は、今からおよそ9千年から2千5百年前に始まったといわれている。

上越国境にそびえる三国山脈の万太郎谷・仙の倉谷等を源とする溪流は、北に流れ、飯土山のふもとで大源大川と合流し、湯沢にいたり魚野川となる。そして、さらに北流し登川・五十沢川・三国川・庄え俣川・宇田沢川・水無川・その他十数の清流を合わせて、南魚沼郡大和町をうるおしている。それから魚野川は北魚沼郡小出町に入り、ここで三用川を合わせて川口町に入り日本第三の長流信濃川に合流する。この信濃川の支流魚野川の河岸段丘上と上田富士とよばれる飯土山の麓の扇状地上の標高330m以下に縄文時代の遺跡が確認される（第2図）。

これらの遺跡の大部分は、山地の斜面や段丘面などに立地する。しかし、一部は沖積面上にも立地している。

飯土山より上流部の沖積面上に立地する遺跡では、下位に草津黄色軽石層が堆積しており、森原B遺跡（58）ではその上位に燃糸文系土器が存在することや、宮林B遺跡（52）では礫層の上位から押型文土器が出土することなどから、縄文時代早期には既に段丘化が始まっていたものと考えられる。しかし、宮林B遺跡のように押型文土器包含層と諸磧b式土器包含層の間に、洪水堆積物と考えられる層が存在することから、完全な段丘化は縄文時代前期前半以降と推定される。

飯土山より下流域の沖積面には、魚野川左岸に妙丸（5）・糠塚（6）・畔上（13）・八竜原（23）・諏訪原（24）・神明原（32）など多くの遺跡が存在しており、右岸の登（14）・お江作り（15）の二遺跡を圧倒している。これらの遺跡群はすべて扇状地上に存在するが、左岸の遺跡が扇状地の谷口部や扇先に立地しているのに対し、右岸の二遺跡は扇端部に位置しており、豊川の作る扇状地が魚野川に対して大規模で比高の

表1 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	樽 下	縄文（中・後期）	23	八竜原	縄文（中・後期）	45	十二木	縄文（早・中期）
2	柄庭儀子山	縄文（中・後期）	24	諏訪原	縄文（中期）	46	上ノ平	縄文（前・中期）
3	北 山	縄文（中・後期）	25	八幡	縄文土器・石磨	47	丸山	石器
4	森 前	縄文（中期）	26	堂沢	縄文（前・後期）	48	一本杉	石器
5	妙 丸	縄文（中期）	27	上平	縄文土器・剣片	49	大刈野	石器・鐵文（早・後期）
6	瓢 塚	縄文（中期）	28	防坂	縄文（中期）	50	城平	縄文（中期）
7	滝 谷	縄文（中期）	29	柳 平	縄文（中・後期）	51	川久保	縄文（中期）
8	南 山	縄文（中期）	30	台上十二木	縄文（前・中期）	52	宮林 B	鐵文（早・前・後期）
9	前 田	縄文（中期）	31	一之沢	縄文（後期）	53	荒谷	鐵文（中期）
10	森ノ木平	縄文（早・中期）	32	神男原	縄文（前・中期）	54	岩原 III	鐵文（中・後期）
11	寺 林 A	縄文土器	33	天台	剣片	55	岩原 I	縄文（早・前期）
12	寺 林 B	縄文土器	34	花岡	縄文（中・後期）	56	岩原 II	縄文（早・中期）
13	畔 上	縄文（中期）	35	南方山	縄文（前・中期）	57	派名	縄文土器
14	登	縄文土器	36	大原 A	縄文（中期）	58	萩原 B	縄文（早期）
15	お江作り	縄文（中期）	37	大原 B	縄文（中期）	59	萩原 A	石斧
16	楽 平	縄文（前・中期）	38	万条寺林	縄文（早・後期）	60	宮ノ下	縄文（中期）
17	谷 地頭	縄文（中期）	39	坂田	縄文（中期）	61	小坂 A	縄文土器・剣片
18	大沢柳平	石器	40	万条	縄文（中期）	62	小坂 B	剣片
19	登 立	打製石斧	41	切石	縄文（前・後期）	63	滝ノ又	縄文（中期）
20	芦 平	打製石斧	42	林	縄文（中期）	64	向原	縄文（中期）
21	地蔵堂	石器・剣片	43	原	縄文（中・後期）	65	上林塚	縄文（早・前期）
22	山 岸	縄文土器	44	慈ヶ沢	石器・石斧	66	巾上	打製石斧



第3図 鮎士山周辺の地質図（新潟県文化財調査年報15）

高いことを示している。なお、左岸の扇状地には魚野川扇状地内の河川によって侵食され、段丘化したものも存在する。この地域の扇状地上に分布する遺跡の年代が、一部縄文時代前期は存在するものの、大半が中期以降に属することから、扇状地の形成及び段丘化が始まった時期は縄文時代中期以降であり、その後安定した状態を保っているものと推定される。一方、登川左岸谷口から鮎士山北方の火砕流平坦面までは、沖積面上にまったく遺跡が分布していない。このことは、この流域が魚野川・登川の氾濫源であったためと考えられる。

鮎士山周辺の縄文時代遺跡は、時期により分布状況が異なっている。早期には遺跡の数も少なく魚野川・大源太川の合流地域と、鮎士山北西の山麓斜面・魚沼丘陵の比高の大きい東斜面の一部に分布するのみであるが、前期になると鮎士山北方の魚野川左岸にも広がり、中期には地域一体にその数を飛躍的に増加させている。そして、後期から晩期にかけて遺跡数が減少するが、この傾向は信濃川流域の場合と同じであり、また中部地方の遺跡分布状況とも一致する。

3 魚沼地方の縄文中期の遺跡群

縄文時代中期に入ると遺跡数は全国的に爆発的な増大を示すが、この魚沼地方においても同様の傾向を見ることができる。ここでは、魚沼地方の縄文中期の遺跡の分布状況について簡単にふれてみたい。ただ当該地域においても発掘資料はそれほど多くなく、分布調査資料が大多数で、遺跡の規模、性格をつかめるものはほんんどない。この地域は、信濃川、魚野川の二大河があり、地形的にもよく発達した段丘、扇状地形が認められる。そして古代より現在に至るまで、「魚沼地方」として、行政的にも、経済的にも一つの地域として区分、把握されてきた地域である。

さて、中期の遺跡分布を見ると、両河川の上流域においては、一つの特徴を見いだすことができる。まず魚野川上流域においては、六日町、塩沢町の左岸に多くの遺跡を認めることができる。あまり大きな支流がないが、標高200~300mの段丘上に見事に並んでいる。また湯沢町の上流まで行くと遺跡数は極端に

3 魚沼地方の縄文中期の遺跡群

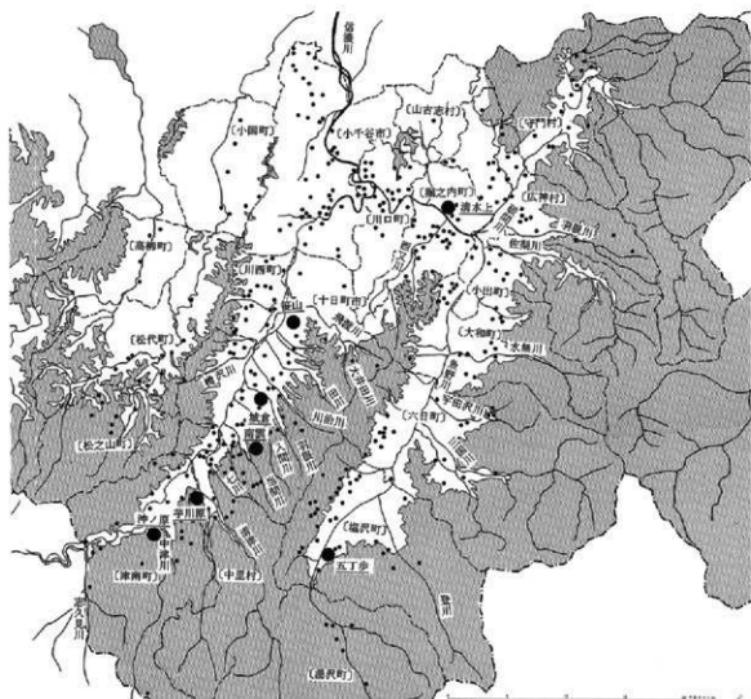
少なくなる。また右岸には五丁歩遺跡があるが、遺跡は魚野川支流流域ぞいに点在している。左岸に比べて少ないのは、分布調査の粗密によるものと思われる。魚野川中流域の大和町、小出町でも両岸にかなり認められ、特に支流の破間川流域には多くの遺跡がある。この破間川は、福島県会津方面と通するルートであり、東北大木系土器の流入には大きな役割をはたした。このことは堀之内町清水上遺跡(田海ほか1990)の土器を見れば了解されることである。魚野川下流域から信濃川合流点にかけての堀之内町、川口町にかけても、実に多くの遺跡が認められる。清水上遺跡の対岸及び、信濃川との合流点では特に多い。この魚野川流域で確認されている環状集落は、清水上遺跡と五丁歩遺跡の2遺跡であるが、おそらくまだ存在しているものと思われる。

一方信濃川流域では、右岸の各支流毎に見事に発達した段丘がある。この支流は、ほぼ4kmおきくらいに長野県境付近まで見られ、段丘を解説している。遺跡はこの右岸に多くが認められ、段丘の未発達な左岸にはあまりない。この右岸には環状集落であったと思われる遺跡がいくつか存在する。まず上流から志久見川～中津川間に冲ノ原遺跡がある。昭和48～49年に発掘調査が実施され、環状集落であることが確認された(江坂ほか1977)。縄文中期前葉～中期末までの各期の土器が出土している。住居跡は53基確認されており、そのうち3基は、長方形大形家屋等とされるもので、深い掘り込みを有しており、五丁歩遺跡の長方形住居跡とはやや異なる。また広場中央の調査は行われていない。次に中津川と清津川の間に芋川原遺跡がある。本格的な発掘調査は行われておらず、かなりが破壊されてしまっているが、旧石器時代から縄文時代の晚期までみとめられる大遺跡である。中期については、その立地、出土遺物量、内容等から、沖ノ原遺跡級の遺跡であったことは間違いない、環状集落であった可能性が高い。清津川～七川間には森上遺跡がある。昭和48年に確認調査が実施され、およそ30基の堅穴住居跡が確認された(金子ほか1974)。中期前葉～末葉にかけての遺跡が確認されている。環状集落とはならないようである。当間川～入間川間には南雲遺跡(中川ほか1976)がある。確認調査の結果、縄文中期前葉～後期前葉にかけての大規模な集落跡であることが判明した。おそらく環状集落を形成していたと考えられる。入間川～羽根川間には城倉遺跡がある。この遺跡も確認調査の結果前期後葉～後期前葉にかけての大規模な集落跡であることが判明した(中川ほか1976)。これもおそらく環状集落を形成していたものと思われる。大井田川～飛渡川間には笹山遺跡がある。部分的な発掘調査が行われ多数の住居跡が確認されている。縄文中期中葉～末葉にかけての大集落跡で、環状集落であった可能性が高い。以上現在までわかっている大集落について概説したが、おそらく各支流に挟まれた各段丘には環状集落が存在していた可能性が高い。各支流はおよそ4km前後の距離にあり、この中に拠点集落が一つ存在したことになる。前に紹介した遺跡はすべていわゆる火焔型土器を中心とした時代で同時存在したものと考えられる。そうすると各支流に挟まれた台地が一つのエリアと解されるであろうか。小林達雄は環状集落について“縄文モデル村”(小林1986)なるものを設定し、「日常生活の根拠地としてのセトメントに特別な機能を果たす一定の面積の場が結合した形態とする」としている。環状集落といえども一時期の住居数は3棟からせいぜい数棟程度とし、環状をなさない集落とほぼ同一であることを指摘している。「縄文モデル村の広場は、縄文モデル村居住の単位集団の専属なのではなく、縄文モデル村と関係を結ぶいわゆる集団領域内の単位集団群の全体にかかわる公共的広場と考えられる。」としている。この信濃川流域で、環状集落をみた場合、各台地が小林のいわゆる「集団領域」ということになる。この集団領域の意味するところは明確でないが、生業活動を中心とした領域と解されるであろうか。特に信濃川流域を考えた場合、各支流については「サケ、マス」の遡上河川である。重要な食料源であったはずで、河川管理はきちんとしたものであったと考えられる。

さて、各台地が「集団領域」であるとした場合、各台地にはどれほどの遺跡が同時存在したであろうか。図示したものは中期全般であり、必ずしも同時存在したわけではない。おそらく各台地には3~6遺跡くらいが存在していたと考えられる。

しかし、「集団領域」といってもそこだけで生業活動を行ったのでは決してなかったであろう。たとえば、食料資源の場合、各台地で獲得可能なものは各環状集落の構成員によるが、特定の場所でしか獲得できぬいものは、「集団領域」を越えて共同管理のもとに維持されていたものと考えられる。また、石器の原石採取についても同様であったと思われる。信濃川上流域の場合、近距離に環状集落が同時存在した可能性が高いことから、環状集落を単位集団とした結合性の高い集団群が存在したと予想される。

五丁歩遺跡の環状集落を考えた時、出土遺物からいくつつかの疑問点を指摘できる。先ず、土偶、石棒といった呪術的な遺物が全く存在しないことである。このことは、逆の意味で環状集落を考えるときに重要なところ。また、土器の文様を見たときに集団の規制やクセといったものがあまりなく、かなり自由に文様が付けられていることである。同じ環状集落といっても、それを構成する集団の性格にはかなりの違いがあったものと思われる。環状集落の意味するところは明確でないが、当地域において中期~後期前半以外の環状集落は明確でない。



第4図 魚沼地方における縄文中期遺跡分布図

第III章 調査の概要

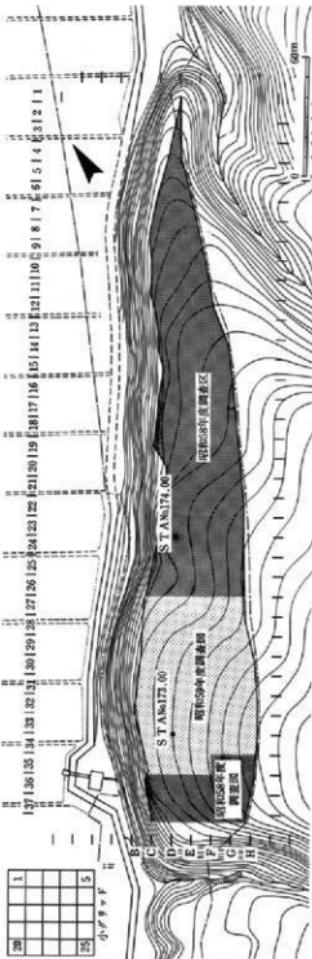
1 発掘調査

A 調査方法

グリッドの設定(第5図) 調査対象地は、飯山山脈状地を直角に切るように魚野川にそっている。グリッドは10m方眼とし、調査地全域をカバーした。グリッドの基線は道路法線のセンター杭に基づいて設定した。STANo173+00(X109136.675, Y28481.123)とSTANo174.00を結ぶラインを基線X軸とし、これに直交するラインY軸により10mメッシュを組んだ。

グリッドの呼称は、法線にそった北から南へ数字の1～37、これに直交するラインを西から東へアルファベットのA～Hとした。この1グリッド(10×10m)を大グリッドとし、この中を 2×2 mの小グリッド25個に細分した。したがって、小グリッドまでの呼称は3B-5区というように表わした。およそX軸が南北方向、Y軸が東西方向となる。グリッド杭の打設及びレベル値の測定は業者委託とした。

調査方法 調査範囲は昭和56年度の確認調査結果により、台地全域としたが、発掘調査は2ヶ月にわたった。現況が荒地で、雑木がかなりあったため、まずバッカフォードで伐根を行った(図版244)。最初に基本層序を確認するため遺跡全体のグリッドにそって東西、南北にトレーンチを設定した。南北ではCライン及びDラインの西壁(第7図)、東西では、7、12、17、25ラインの南壁をそれぞれ発掘し基本層序をとらえた。部分的に深さは異なるものの、地山まで、およそ30～100cmの深さをもっていた。その後本格的な発掘調査に入ったが、1～13列、26～37列は人力で、14～25列は、表土及び黒色土(包含層)をバッカフォード除去した。包含層発掘では、特に遺物の集中の見られる地点については、下部に遺構の存在する確立が極めて高いと思われたため、ドット及びレベル値を測定した後、遺物の取り上げを



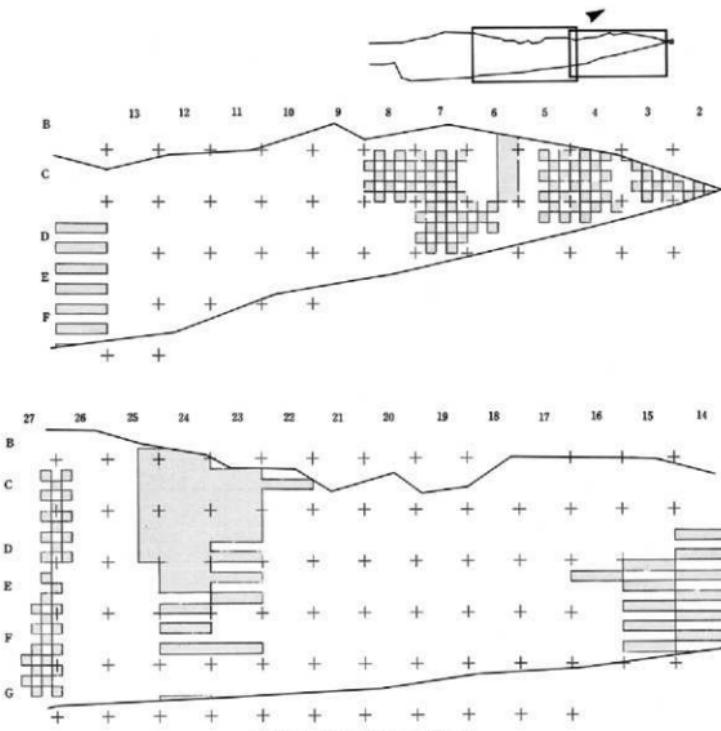
第5図 グリッド設定図

行った。またその他については、層序及び小グリッドにより遺物を取り上げた。包含層発掘の後、遺構精査を行ったが遺構発掘では遺物は地点、レベルをおさえた後取り上げた。遺構番号は遺構の種類毎に通し番号とした。遺構実測は、20分の1を原則としたが、細部については10分の1も採用した。また、2年度目にあたる昭和59年度は、工期がせまっていたため、調査期間の短縮を目的としてシン航空写真録に平面実測の委託を行った。方法は、ケーブル方式及び気球方式でステレオ写真をとりそれにより図化する方法である。詳しくは宮塚義人編『写真測量の技法』(ニューサイエンス社)を参照されたい。新潟県で本格的な写真測量を採用したのは今回が初めてである。写真はカラースライドと白黒写真の2種を用いた。時間的制約もあり、住居跡写真等は写真測量用の写真を併用した。

B 調査経過

昭和58年度（4月21日～12月8日）

昭和58年度は、4月の後半より調査を開始したが、当初は単年度で調査終了予定であった。まず調査は、



第6図 プレ試掘トレンチ設定図

1 発掘調査

伐開作業から開始した。伐開にはバックフォーを利用し、北側から南側へ向って行われた。5月に入りグリッドの設定(第5図)を行った後、法線のセンターラインにそったCラインで基本層序を確認するためトレンチを設定し、調査に入った。このメイントレンチの他Eライン、7、12、17、25の各々のラインについても、層序確認のためトレンチ発掘を実施した。このように全体についてトレンチを設定し、深度等を観察した後、北側の一ラインから順に全面発掘を開始した。5月はおよそ25ラインくらいまでの表土剥ぎ、ジョレンチかけを行った。6月もおよそ同区の精査、遺構発掘を行う。1~6号までの住居跡、Tピット多数が確認された。7月~8月には、となりの台地の十二木遺跡の調査にも着手した。また7月の後半には、発掘終了地点から、ブレの試掘調査にも着手した(第6図)。

9月に入り、ほぼ全城の表土剥ぎを完了した。27~35列では炉の発見が相次ぎ、住居跡群の存在がだいに明確になっていった。10月に入ても引き続き遺構確認、遺構発掘が行われ、環状集落の形態が明らかになっていった。後半に入ってこのような集落が確認されたことから、今年度発掘完了は不可能であると思われたため、道路公団にその旨を協議した。そして来年度の4月~5月の間に完了させることで合意した。11月も住居跡の発掘が継続されたが、12月初めに昭和58年度の調査は完了した。

昭和59年度(4年5月~6月2日)

昭和58年度の協議により、4~5月の間に調査を完了させるということだったので、公団と協議し3月12日から重機と人力により除雪を行うこととした。除雪の開始時点で積雪4.5mという状況であったが、調査開始予定の4月5日までには調査予定区のすべてを除雪することができた。

昭和59年度の調査区は27~35区のいわゆる環状集落部分である。わずか2ヶ月という短期間であったが前述のように写真撮影四化システムを導入したことにより、何とか6月2日に調査を完了することができた。

C 調査体制

確認調査 昭和56年11月

担当 戸根与八郎

発掘調査 昭和58年度(4、21~12、8)

総括 高橋 安(県教育庁文化行政課長)

管理 歌代莊平(県教育庁文化行政課長補佐)

調査指導 中島栄一(県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長)

庶務 高橋幸治(県教育庁文化行政主事)

調査担当 岡本郁栄(県教育庁文化行政課文化財主事)

調査員 折井 敦(県教育庁文化行政課学芸員)

田辺早苗(県教育庁文化行政課嘱託)

鈴木俊成(県教育庁文化行政課嘱託)

丸山謙二(県教育庁文化行政課嘱託)

肥田野弘之(県教育庁文化行政課嘱託)

調査員 細矢菊治(県文化財保護指導委員)

佐藤雅一(地元研究者)

伊藤 裕(新潟大学研究生)

発掘調査 昭和59年度（4、5～6、2）
 総括 高橋 安（県教育庁文化行政課長）
 管理 大越年夫（県教育庁文化行政課長補佐）
 調査指導 中島栄一（県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長）
 庶務 高橋幸治（県教育庁文化行政課主事）
 調査担当 折井 敦（県教育庁文化行政課学芸員）
 調査職員 北村 充（県教育庁文化行政課学芸員）
 国島 晴（県教育庁文化行政課嘱託）

2 整理作業

A 方 法

1) 遺物

出土遺物は大きく土器と石器に区分できる。

土器 土器は現場において洗浄・注記が完了し、テンパコに袋づめの状態で曾和分室に運ばれていた。ビニール袋詰めになっていた土器を遺構毎、グリッド毎に分類し、まず遺構から開封し、接合を行なった。この接合段階においては、接着剤はあまり使用せず、展開した状態でバンケースに入れた。各遺構毎、グリッド毎に接合を行った後、報告書掲載候補として土器を選別し、各々に仮番号を付し、写真をとり、各々遺構、グリッド毎にファイルとしてまとめた。この作業を行うことにより、後の整理作業において全体を把握でき、実物を見なくとも作業ができるという利点を得た。復元は半周するものくらいを目安として行つたが、重要と思われるもの、実測上復元した方がいいと思われるものについては半分以下であっても復元を行つた。実測は清水上遺跡と同様に写真から実測図を作成した。その方法は同じである。また破片については、直徑の出るものについては、なるべく反転実測を行なった。また実測図と共に拓本も併用した。

石器 土器と同様に洗浄・注記の完了した状態の石器は、まず遺構毎・グリッド毎に分けた。その際、遺構の整理状況に合わせて、所属の明確でない遺物をはっきりさせた。このようにして分けられた遺物は遺構ごと・小グリッド毎に、石器群と自然礫に分け、石器は機種分類まで行ない、石器台帳に記録した。石器台帳は、B4版の厚紙カードに出土地点、器種別出土数、自然礫類出土数（鏡石、根固め石、自然礫等）を記入し、個々の石器の写真を貼つたものである。遺物出土量が多く、複雑な遺構が多い大遺跡の整理において、遺構毎、小グリッド毎の石器の把握や全体での石器の把握が容易であった。

次に、器種分類された石器の器種内分類（細分類）を行ない、実測図を作成した。実測は清水上遺跡（田瀬ほか1990）の整理でも紹介した簡易実測器を用いた。従来の手取り方法に比べ、正確で早い実測は、整理時間の短縮につながった。実測図作成に合わせ、個々の石器の計測、観察をほぼ出土石器の全点に行ない分析の資料とした。分析はこれらの実測図、観察表をもとに行なった。

2) 遺構図面

遺構図面の大部分は写真測量であり、これについては発掘調査終了後直ちに原図の添削及びセクション図等の照合を行なった。また、遺物ドット図もレベルを合わせ、一遺構毎に一枚の原図を作成していった。

2 整理作業

委託したのはトレースまでであったため遺構平面図等のトレースは整理開始前に既に完了していた。本格的な整理作業に入り、個々の遺構について遺構個別実測図カードを作成していった。しかし、調査に携わった職員の殆どが転出てしまっていたため、整理作業に困難を経験した。したがって、遺構各説では詳細な説明が出来ず、概略を記すのみとなってしまった。

B 整理経過と体制

経過 出土遺物の洗浄・注記は発掘作業現場で実施し、その後の作業は文化行政課曾和分室で実施した。整理作業を本格的に開始したのは、昭和63年6月からである。昭和63年度は主に土器・石器の分類・接合であったが、本格的には平成元年1月以降であった。平成元年度には本格的整理作業に入ったが、発掘調査等の現場作業が優先したため、整理作業に専従できた職員は冬期を除いてほぼ一人であった。特に石器については、手がまわらず遅れぎみとなった。平成2年度は最後の整理年度であったが、上半期は専従職員一人で、下半期にようやく二人の職員を確保することができた。

体制 各年度毎の整理体制は以下のとおりである。

昭和63年度

指導 中島栄一（埋蔵文化財係長）

担当 岡本郁栄（副参事）

職員 茂田井信彦（土器）、高橋保雄（石器）、高橋 保（土器）、田海義正（石器）

作業員 （遺物の分類、接合、遺構図の修正、その他）

平成元年度

指導 中島栄一（埋蔵文化財係長）

担当 高橋 保（縦括、土器の復元、実測）

職員 茂田井信彦（図版、原稿）、亀井功（土器実測）、高橋保雄（石器分類、実測）、田海義正（遺構図版）、西村秀生（石器実測）

作業員（土器復元、実測、石器分類、実測）

平成2年度

指導 本間信昭（埋蔵文化財係第2係長）

担当 高橋 保（縦括、土器図版、写真図版、原稿、編集）

職員 藤巻正信（原稿）、高橋保雄（石器実測、トレース、写真図版、図版、原稿）、北村亮（原稿）、河合順之、小田由美子（土器実測）

第IV章 五丁歩遺跡

1 概 要

五丁歩遺跡は、縄文中期前葉を中心とした時代の遺跡で、他に縄文早期、前期、中期後葉及び後期の遺物及び遺構がある。中でも中期前葉の遺物量が圧倒的に多く、他の時期のものはわずかである。中期前葉は、いわゆる環状集落の跡で、道路法線に集落跡全体が入ったため、その全容を明らかにすることはできた。県内で縄文時代の集落全体を調査した例は、小千谷市城之腰遺跡、長岡市岩野原遺跡に次いで三例目で、大変貴重な資料を提供してくれたと言える。

この環状集落を構成している住居跡は57軒検出されている。この住居跡はタイプによって2つに分類される。一つは円形に近いか又は卵形を呈するいわゆる竪穴住居跡である。きちんとした掘り込みが確認でき、炉は地床炉である。柱穴は4~6本である。もう一つのタイプは、柱穴がいわゆる掘立柱建物状に長方形に配列されるものである。掘り込みはほとんど確認できないが、一部では柱穴にそった壁の立ち上がりが見られることから、竪穴住居跡よりも浅いものの、掘り込みがあったものと考えられる。柱穴は長軸に2~4本、短軸に2~3本である。竪穴住居跡の柱穴に比べると柱穴の大きさはやや大きい。炉は、地床炉と石畳炉の2種類が認められる。この長方形配列の住居跡は、長軸が環状の中心を向き、放射状の配置をとっているものがほとんどである。また炉は中央にあるものもあるが、環状の外側にくるものが多い。これに対して直角の配置をとるもの（小千谷市城之腰、岩手県西田遺跡例）も若干見られる。これら住居跡には多くの切り合いが認められることから、新旧関係があり、数回の集落変遷があったことがわかる。

この環状集落の内側に土坑群が、やはり環状に近い形でぐらんでいる。形状は隅丸長方形、円形で深さも一定しているが、墓の可能性の高いものが多く見られる。このように集落の内側に土坑のあるパターンは縄文時代によく見られるものである。貯蔵穴と考えられるいわゆるフ拉斯コ状土坑には、大型のものと小型のものがある。大型のものは中央にピットを有するもので集落の外側に点在する程度である。一方小型のものは、集落の外側に2ヶ所集中して認められる。使われ方の違いを反映したものと考えられる。これらの中期前葉以降と考えられる遺構にいわゆるTピットがある。遺跡の南側から西側にかけて多く分布している。また中期後半の住居跡も數基確認されているが、地点を異にして北側に分布している。

遺物では土器、石器が主体を占める。土器は平箱で約400箱で、復元土器も100個体を越えている。遺跡の地理的位置が、魚野川の上流域ということもあり、信濃川流域の土器群とはかなり異なった様相を示している。時期的にはいわゆる火焔型土器出現期と考えられる。五丁歩遺跡で特徴的な土器は、陰帯や半陰起線文による渦巻文を多用する土器で銚町土器類似のものである。清水上遺跡や信濃川流域ではあまり目立たなかった土器である。いわゆる焼町土器と共通的な面を多くもつが、多分に越後の要素を強くもっている。このほか、関東系の土器もこの越後地方に於ては目立つ存在である。いわゆる阿玉台式、勝坂式土器である。関東系といつても、北関東の群馬県方面との類似性が指摘される。これら関東系の土器は、魚沼地方では他にも出土が知られる。北陸的な土器は、清水上遺跡ほど目立たなく、ほとんどが浅鉢である。深鉢は数少ない。東北大木系土器もあまり目立たなく、多分に越後化されたものが多い。その他の時代の

2 層 序

土器としては、早期の押型文土器、田戸下、上層式土器、条痕文系土器、前期の黒浜式、興津式、有尾式、諸磯式土器等があり、中期後半ではいわゆる沖ノ原式土器、後期では三十稻場式、加曾利B式土器等が断片的に認められる。

石器は平箱で約400箱出土した。この他重すぎて持ち運びに困難なため調査区での記録のみにとどまった自然縞が約1450点あった。内訳は石器6025点、石製品15点、石核355点、剝片類13481点、自然縞類20553点、板状石器の素材566点である。これらの多くは、伴出土器との関係から縄文時代中期前葉に所属し、遺構との関係から集落跡からの出土といえる。器種別では、不定形石器2081点(34.%)、磨石類1372点(22.8%)、板状石器1034点(17.2%)、打製石斧887点(14.7%)、砥石241点(40%)が主体を占め、この5種類の石器で約93%を占める。中でも中期前葉における板状石器の大量出土と同石器の素材の出土、通常の打製石斧に代わる片刃打製石斧の大量出土、磨製石斧や玉製作との関連性のない砥石の大量出土は特筆される。この他の器種では、石錐68点(1.1%)、ビエス・エスキーネ269点(1.1%)、縞器類77点(1.3%)、石皿56点(0.9%)は比率こそ高くないものの、一定量の出土が認められる。この中では類例が少なく、しかも1遺跡出の出土数の少ない彫刻石皿が7点出土している。逆に出土の少ない器種は、石鑿22点(0.4%)、石匙21点(0.3%)、三脚石器3点(0%)、磨製石斧34点(0.6%)、台石34点(0.6%)、石錐6点(0.1%)で、他に石製品15点である。また、中期前葉に所属しないと推定される石器として尖頭器1点、三角錐形石器8点、局部磨製石斧2点が出土している。

これらの石器の石材選択を見ると、いくつかの器種群にまとめられる。基本的には採集される石材を有効に使いわけるが、磨製石斧では大半が搬入品の蛇紋岩製磨製石斧で占められる。また、小型剝片石器(石錐・石錐・不定形石器等)では比率こそ低いものの黒耀石等の搬入品が使用されている。

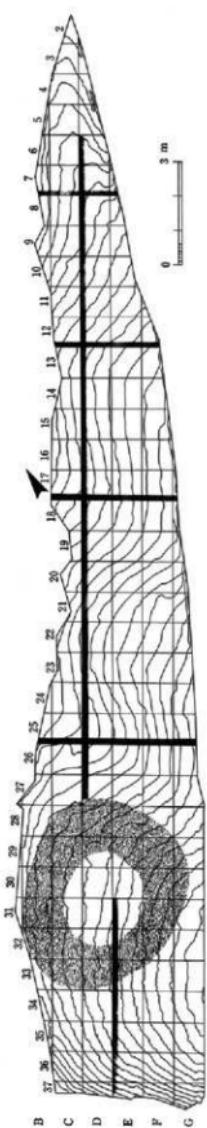
ところで石器、剝片類、石核の出土分布を見ると主に環状集落の住居跡部分及びその外側からの出土であり、広場や墓域とも考えられる環状集落の内側から極めて少ない。また、出土状況から、ほとんどが斎業されたと推定され、特殊な出土状況を示すものは皆無に近い。一方、自然縞類の出土分布を見ると環状集落の内側からもかなり出土し、しかも大礎ほどその傾向が強く、調査時には必ずしも明確ではなかったが、広場や墓域とも考えられる環状集落の内側には、自然縞でつくられた施設が存在した可能性が高い。

2 層 序

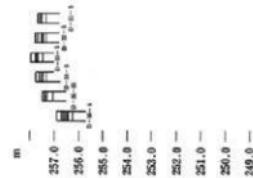
五丁歩遺跡は前述のように、飯土山の火碎流による扇状地形上に立地しており、ゆるやかな斜面上にある。この扇状裾部は魚野川により開拓され、段丘状をなしている。発掘対象区域内には、ゆるやかな起伏が見られる。

基本層序は、I層…表土層、II層…包含層、III層…漸移層、IV層…地山層に大別される。I層は、褐色～暗褐色の腐植土層でフカフカしたしまりのない土である。厚さは10～50cmである。II層は包含層で、しまり、粘性ともある。厚さは10～30cmである。III層の漸移層は黒褐色土層で、地山粒と黒色土が斑状に混在している。厚さは10～30cmである。IV層の地山は黄褐色のローム層である。

環状集落のある27～33区は尾根のもっとも張り出した鞍部になったところであるが、土の堆積はうすく地山ローム面まで約50cmで、包含層もうすくなっている。一方25列、17列の谷部では、包含層も厚く、0.8～1mの深さをもっている。



東壁 (C-D 纬)



北壁 (B-G 纬)



第7圖 土層柱狀圖

3 遺構

五丁歩遺跡で確認されている遺構は、先述のように環状にまわる住居跡群と、その内側にある土坑群及び周辺に存在するフ拉斯コ状土坑群で占められている。これらの遺構群は、ほぼ同時代に存在し集落を形成している。またこれらの遺構群とは離れて北側に中期後半の住居跡がある。いわゆるTピットと呼ばれるものは、環状集落の周辺に存在している。各遺構毎に説明を加える。

A 住居跡

1号住居跡（図版8・245）

遺跡の最も北側、環状集落とはかなりはなれた3・4-C区に位置する。南から北に向ってゆるやかに傾斜する緩斜面にあり、南西側の掘り込みは確認できたが、北東側は明確でない。ピットの位置から、直径約5m程の円形竪穴住居跡と推定される。柱穴は明確でないがピット2~3が柱穴になると考えられる。ピットの直径は30~40cm、深さ30~40cmである。ほぼ中央には、東西を軸とするいわゆる複式炉が存在する。平面形は卵型で、東端に埋甕炉(1)がある。焼土は埋甕炉の付近のみに存在する。炉は、まわりを石で組んでいるもので、外側は長さ20cm前後の細長い塊で組み、また内側底部は20~30cm大の石を横長に立てた状態で組んでいる。また、その間には小さな角礫を充填している。底面に石は敷かれていない。住居跡覆土はローム粒子を多量に含む黄褐色土で、自然堆積と考えられる。中期後半の住居跡である。

2号住居跡（図版9・245）

遺跡の最も北側にあたる1-C区に位置する。炉のみの確認で、掘り込み、柱穴等は検出されなかったが、住居跡として扱う。炉は長さ約70cm、幅50cmの石囲い炉で方形を呈する。石は長さ20~30cm大の細長い川原石を利用している。被熱のため割れている石がある。炉内には土器が埋設されていた(14・15)。中期後半のものと思われる。

3号住居跡（図版9・245）

遺跡の最も北側にあたる1-C区に位置する。2号住居跡と同様に炉のみの確認であるが、住居跡として扱った。2号住居跡の炉からは約4mはなれている。炉は円形に近い石囲い炉で径約50cmを測る。石は長さ15cmほどの川原石を6個円形にめぐらしている。炉中央には底部を欠損する土器(18)が埋設されていた。また土器の底には5個の小礫が敷きつめられている。炉の覆土には、炭、焼土粒子を含んでいる。中期後半の住居跡である。

4号住居跡（図版9・246）

遺跡の北側8-D・E区に位置する。平面形は隅丸長方形で、南北約4m、東西が中央で約3.7mで、東側がややせまくなっている。柱穴は6本で3本1列が対になっている。柱穴の直径は20~30cm、深さは26~60cmである。中央は径80cmくらいの範囲で焼けており、地床炉と考えられる。焼土は特に炉の北側に集中している。また、この地床炉の北側にも径20cmほどの範囲で焼土が検出された。床面は非常に堅くしまっており、炉の周辺の床面は、わずかに凹んでいる。壁の立上りは、南東側で地山面から40~50cmと深く、他の住居跡と比べても、最も深い掘り込みとなっている。住居跡の覆土は、黒褐色または褐色土で、自然堆積と考えられる。住居内から出土した遺物は細片で時期判定には至らないが、住居形態が他と異なることから、中期以前の可能性が高い。

5号住居跡（図版10・246）

遺跡のほぼ中央、中期の環状集落より約50m北側にはなれて存在する。西に向かってなだらかに傾斜する緩斜面に構築されており、東側の壁面がわずかに検出されたにすぎない。壁の状況及びピットの配置から、平面形は5×7mくらいの楕円形になると考えられる。住居跡内でピットは13個検出されているがA1～A6の柱穴6本が左右対称に配列されている。またB1～B5の5本は5角形に配列されており、建替えのあったことを示唆している。床面は北東部のわずかな範囲で確認されたのみで、斜面部に構築されていることから、黒色土層中に床があったものと考えられる。炉は確認されていない。壁の残っている南側において2個の土器が検出された。1個は埋甕(19)で、住居跡の北側に位置する。径50cmほどのピットの中に倒立状態で検出された。底部を欠損する。1個は(22)ピットA8の北側で検出された。深鉢の下半分である。16号TPに切られている。中期後半の住居跡である。

6号住居跡（図版10・246）

24-D区に位置し、すぐ北側には5号住居跡がある。西に向かってゆるやかに傾斜する斜面に構築されており、山側(東側)で壁面が確認された。壁の形状及びピット配列からすると、平面形は長軸約8mの楕円形になると考えられる。床面は西側約半分が残っているが、東側は黒色土中にあったと考えられる。炉は確認されていない。ピットは11個確認されているが、柱穴と考えられるのは、P1、4～10の8本である。形状、配置に規則性は認められない。直径は20～30cm、深さは20～40cmである。明確に住居跡に伴うと考えられる遺物は認められない。住居跡の時期は不明。

7号住居跡（図版12・247）

27・28-C区に位置する。北側にゆるく傾斜する斜面に構築されており、環状集落の一番北側にある。柱穴のみの確認で掘り込みはわからない。長軸2間(柱穴3個)、短軸1間(柱穴2個)の長方形を呈し、主軸はほぼ南北で環状集落の中央を主軸が通る。長軸の柱間は約7.5m、短軸は3.2mくらいである。柱穴は径40cm、深さは45～75cmである。ピットでは根固め石が確認されている。他の長方形住居跡が炉を伴っているのに対し、ここでは確認されていない。7B、7C号住と重複関係にあるが、新・旧は明確でない。

7A号住居跡（図版11・247）

27・28-B・C区に位置する。南から北側に傾斜する斜面に構築されており、環状集落の一番北側に位置している。山側(南側)のみ壁面が確認されている。壁の形状および柱穴の配列状況から、平面形は4×6mくらいの楕円形になると考えられる。柱穴配置は4本の台形状となる(P1～P4)。壁のある南側で柱間隔(P1とP2)は2.1m、反対側(P3とP4)で3mである。柱穴の大きさは、P1・P2で径30cm、深さ40cm、P3・P4で径40～50cm、深さ45～50cmである。床面は北側で不明瞭となる。中央には土器(77)を埋設した炉が見られる。径約50cm、深さ15cmの皿状の土坑に胴部のみが埋設されていた。土器及び土坑の上部で焼土、炭化物が認められた。覆土は6、7層で、遺物は主に7層に多い。7B号住居跡と重複するが、c-dラインの土層断面図から7A号住居跡の方が新しいと判断される。

7B号住居跡（図版12・247）

27・28-C区に位置する。7A号住のすぐ東側にある。山側(南側)の壁面が確認されている。壁の平面形、柱穴の配列等から住居跡のプランは、南北5～6m、東西3～3.5mの楕円形になると考えられる。柱穴配置は4本の台形状になると思われる。P1、P3、P4、については確認できるが、P2は不明である。柱穴の径は約35～45cmを測る。床面は非常にかたくしまっている。炉、焼土共に確認されていないが、風倒木によって切られている可能性が高い。住居跡覆土は、10.11層で、黒褐色土、黄褐色土である。覆土

3 遺構

中より多くの土器が出土している。7 A号住、7 C号住、7号住と切り合い関係にある。セクション図 e-f から 7 C号住が古く、7 B号住が新しいことがわかる。また 7 A号住の方が 7 B号住より新しい。したがって 3基の住居跡は古い方から 7 C→7 B→7 A号住ということになる。7号住との関係は明確でない。

7 C号住居跡（図版12・247）

28-C区に位置する。7 B号住居跡のすぐ南側に重複して存在する。長軸約3.5m、短軸約2.9mの橢円形を呈する。7 B号住と重複する部分を除いて壁が存在する。深さは南側で約40cmを測る。柱穴は4本確認され、北側に開く略台形を呈する。柱穴は径約20cm、深さ30cmで、柱穴覆土はローム混りで、しまりはない。ローム面を床としており、全城がかたくよくしまっている。中央には地床炉がある。径約30cm、深さ10cmの皿状を呈し、炭、焼土が見られる。覆土は4層において焼土を多量に含む褐色土が認められた。その上では多くの土器が出土している。また1、2層にも多くの土器がある。

7 D号住居跡（図版13）

28-C区に位置する。7 C号住居跡の西側に接して存在する。掘り込みは確認されず、炉、柱穴の存在によって住居跡と判断した。柱穴の配列状況から、住居跡の規模は、南北4.5m、東西3mくらいの橢円形になると考えられる。柱穴と思われるビットは9本確認されている。P2～P4とP5～P7が各々対になるように配列され、P1が亀甲状に突出する。またP2～P4には、周溝状の溝が見られる。溝は幅35cm、長さ2.5mくらいである。P2～P7の6本の柱穴は、P2、P7がやや太い他は径20cmくらいと比較的細い。中央には円形の地床炉が認められる。長さ46cm、幅38cm、深さ10cmの範囲に焼土、炭が認められる。かたくしまった床面は認められない。

8 A号住居跡（図版14・248）

28-29-C・D区に位置する。環状集落の北側、南向きの緩斜面にある。形状は、南北方向に細長い橢円形を呈するが、北側の掘り込みは見られない。大きさは東西で約5m、南北で推定8mくらいになると考えられる。柱穴は、P1～P4の4本できれいな台形を呈するがP5とP6についても、台形の柱穴配置に対して長軸方向に対称に配列されており、柱穴となる可能性が大きい。柱穴間の距離はP1とP4で1.5m、P2とP3で2.6mである。炉は地床炉でP2とP3を結ぶライン上の中央に位置する。径約1mの範囲に焼土が見られる。住居跡覆土は第3層、4層、6層で、覆土中より多くの遺物が出土している。特に住居の南半部に多く認められた。また床面から浮いて多量の砂利が出土している。当住居跡は1号堅穴状遺構、8 B号住居跡と重複関係にあるが、セクションc-dの観察から古い順に8 B号住居跡→8 A号住居跡、1号堅穴状遺構という関係がわかる。この1号堅穴状遺構は、南北約3.5m、東西2.5mの不整長方形で8 A号住床面からの深さは約20cmである。遺物の出土状況は明確でない。

8 B号住居跡（図版15・248）

28-D区に位置し、8 A号住居跡の東側にある。南側の壁が確認されているのみで、全体の形状は不明である。柱穴は4本確認され、台形状を呈している。柱穴間の距離はP1、P2で1.8m、P3～P4で0.8mと規模は小さい。南側の壁の高さは12cmと浅いため、確認された住居跡覆土も薄い。炉は確認されていない。第23号住居跡とも重複するが、新旧関係は不明である。遺物は明確でない。

9 A号住居跡（図版16・249）

29-D区に位置する長方形の住居跡である。P1～P6までの6本の柱で構成される。柱穴の中心間距離は、P1～P5で5.5m、P1～P6で2.2mを測る。P7、P9、P10は棟持柱と考えられる。柱穴は径20～40cm、深さ30～70cmを測る。P6では根固め石と思われる礫が認められる。炉は住居跡の中央より

北西側に設けられ、石囲い炉である。長方形の形状をとるが、石は長軸のみに存在する。長さ20cm前後の細長い川原石を長軸方向に並べている。長軸で1.2m、内法65cmを測る。炉内には深さ約10cmくらいで焼土がブロック状に認められる。9B号住と重複するが新旧関係は不明である。また、堅穴状の掘り込みが認められないため、出土遺物も明確でない。

9B号住居跡（図版16・249）

29-D区、9A号住の北側に重複して存在する。やはり長方形の住居跡である。堅穴状の掘り込みは認められず柱穴・焼土が確認された。P1～P9が柱穴になると考えられ、P1～P3とP5～P7が各々対応し、P4とP8・P9が補っている。柱穴間距離は、長軸5m、短軸2.3mである。P8・P9を除いて柱穴は布振り状の溝の中に掘り込まれている。溝の幅は25～36cmである。この溝は北東よりでは認められない。炉は石囲い炉で、中心よりやや北東側に存在する。卵形を呈するが、長軸方向の両端に炉石は存在しない。炉内の深さは約25cmで焼土をブロック状に混入している。

9C号住居跡（図版17・249）

28-D・E区に位置する。9A、9B号住のすぐ東隣にあり、北側で23号住居跡と重複する。長方形の住居跡であるが掘り込みは認められない。長軸は9A、9B号住とほぼ同じ方向で、P1～P3とP4～P6が各々対応する。柱穴間の距離はP6～P4で5.1m、P1～P6で2.7m、P3～P4で3.3mとやや北側に開く形態をとっている。柱穴の径は60～80cm、深さは30～60cmである。南西側のP7も柱穴と考えられる。炉は中央よりやや北東よりに位置し、地床炉である。径約80cmの円形に近い範囲で焼土が認められる。深さは約20cmである。23号住との新旧関係は不明である。

10A号住居跡（図版18・250）

27・28-C・D区に位置する。環状集落の最も北側の南向き斜面にあり、10B号住居跡と重複する。掘り込みの確認された住居跡で、短軸3.6m、長軸推定4.7mの椭円形を呈する。柱穴はあまり明確でないが、P1～P4が柱穴になると考えられる。形状は台形を呈する。柱穴の大きさ、深さ共にばらつきが見られる。中央には埋葬炉（235）がある。焼土は埋葬炉を中心として35～40cmの略円形の範囲に認められる。覆土は1～4層までの自然堆積で2層に多くの遺物が認められる。10B号住との新旧関係は明確でない。

10B号住居跡（図版18・250）

10A号住の北側に重複して存在する。南側の掘り込みだけが確認された。柱穴と考えられるピットはいくつかあるが、どのような配列になるか明確でない。また炉も確認されていない。住居跡覆土は60cmの堆積があり5～7層がそれである。

11号住居跡（図版19・250）

29-E区に位置する。卵形の掘り込みをもつ堅穴住居跡である。長軸5.1m、短軸3.5mを測る。柱穴は4本（P1～P4）で實際に掘られている。柱穴間距離はP2～P3で2.9m、P3～P4で2.8mとはほぼ正方形に近い。柱穴がほぼ正方形で、掘り込みの平面形とうまく一致せずP2などは掘り込みの外側にある等問題がある。むしろP5～P8の台形配置を考えた方がいいと思われる。中央には地床炉があり、長さ60cm×50cmの略円形を呈する範囲で焼土が認められる。住居跡覆土は、黒褐色土で自然堆積と考えられる。

12号住居跡（図版19・251）

30-F区、環状集落の東側の緩斜面に位置し、20号・21号住居跡と重複関係にある。P1～P5が柱穴になるとと考えられる。長軸P1～P2が3.1m、短軸P1～P5で2.6mを測る。柱穴は方形にめぐらしく60cmの布振り状の溝の中に掘られている。柱穴の径は20～30cm、深さ35～60cmくらいである。炉はほぼ中

3 造 構

央に位置する地床炉である。長軸70cm、短軸50cmの範囲で焼土が認められる。

13号住居跡（図版20・251）

29-G区に位置する。環状集落の一一番東側にあたり、斜面の上位にある。隅丸方形の掘方をもつ堅穴住居跡であるが、北側の低い方では掘り方は認められない。短軸の東西で2.9mを測る。柱穴は4本の略台形でP1～P4がそれである。柱穴間の距離はP2～P3で1.1m、P1～P4で1.68mと小規模である。柱穴の径は20～30cm、深さ30cm前後である。中央には地床炉があり、長軸60cm、短軸35cmの範囲で焼土が認められる。住居跡覆土は1・2層で、山側から流れ込んでいる様子を観察できる。20B号住と重複するが、新旧関係は不明である。

14号住居跡（図版21・251）

30-G区に位置する。環状集落の南東側最高位にある方形の住居跡で、掘り込みは認められない。柱穴の長軸は7.2m、短軸は東側で3.3m、西側で2.5mとやや開く。P1～P7が柱穴である。西側には棟持柱があり東側に炉を設ける配置となる。炉は石囲い炉で卵形を呈し、西側に開口している。長軸1.3m、短軸1mであるが、東側の石は一部抜き取られている。炉石は長さ30cm前後の細長い川原石を用いている。炉内上面には焼土がブロック状に見られる。26号住跡と重複するが、新旧関係は不明である。覆土より多くの遺物が出土している

15号住居跡（図版22・252）

30-B・C区に位置する。環状集落の北西側で一番低位にある住居跡である。ここでは一つの住居跡として扱っているが、2軒が重複している可能性がある。斜面上位の南東側のみ掘方が認められ、その他は、柱穴・炉が確認された。長軸約7.7m、短軸約3.2mの長方形で、南東側両側面に布掘り状の溝が認められる。柱穴は基本的に8本（P1～3、5、P10～P13）と考えられるが、大きさ、深さ共にばらつきが見られる。炉は北西側に石囲炉、南東側に地床炉がある。北西側の石囲炉は、方形になると考えられるが、石がかなり抜きとられており、形状は定かでない。炉石には川原石を利用しており、被熱により破損している。南東側の地床炉は長軸1.3m、短軸0.6mの不整形を呈する。この地床炉の南及び北にも焼土が認められるが、炉として利用したものは定かでない。この地床炉のある南東側には掘り込み及び布掘状の溝が認められることから隅丸方形の住居跡が重複していた可能性が大きい。南東隅には埋甕(361)が存在する。16B号住、35A号住と重複しておりP2は16B号住と切り合っており、P2の上に16B号住の炉が構築されていることから、16B号住の方が新しいことがわかる。35A号住との新旧関係は明確でない。

16A号住居跡（図版20・252）

29・30-C区に位置する長方形の住居跡である。長方形住居跡のはほとんどが長軸を環状集落の中心に向けているのに対して、この住居跡は、それに直交するような配置をとっている。南東側（山側）の長軸で掘り込みが認められる。柱穴は6本で（P1～P6）3本づつが各々対応している。柱穴間距離はP4～P6で4.8m、P3～P4で2.3mを測る。柱穴は南東側では壁ぎわに掘られており、南西側短軸には川原石が1列、並べられている。おそらく壁にそっていたものと思われる。柱穴は径30～60cm、深さ50～70cmと深い。炉は長軸の北東よりに設けられている。石囲い炉と考えられるが、石は西側の長軸のみに認められる。炉石は20～30cm大の細長い川原石である。焼土は長軸1m、短軸50cmの卵形に認められることから、炉も同等の大きさであったと考えられる。覆土は、暗、黒褐色土である。16D、16E号住居跡と重複するが、新旧関係は明確でない。

16B号住居跡（図版23・253）

29・30-B区で確認されたが、炉及び柱穴の一部の確認のみであるため、住居跡とするにはやや問題がある。柱穴はP 1～P 3である。したがって16A号住と同様、長軸が環状集落の放射軸と直角になるものである。柱穴間距離はP 1～P 3で約7.2mである。対応する柱穴は確認できない。炉は、北西よりの長軸にそって存在する。細長く焼土が認められ、南東側では、石列が認められるので、石囲炉であったと思われる。

16C号住居跡（図版23）

29-C区に位置する。柱穴と炉が確認されたが掘り込みは確認できない。環状集落の北側低位にあり、16E号住と重複関係にある。柱穴は6本（P 1～P 6）で、3本づつが対称している。柱穴間の距離は長軸のP 4～P 6で5.6m、短軸のP 3～P 4で2.8mを測る。柱穴は径60～80mと比較的大きく、深さはP 3を除いて35～80とややばらつきが見られるものの比較的深い。炉は中央よりやや南東側に認められる地床炉で、環状集落の内側に設けられている数少ない例である。径約80cmの略円形に焼土がある。16E号住との新旧関係は不明である。

16D号住居跡（図版24）

29-B・C区に位置する。環状集落の北側にある長方形の住居跡で、16A号住と重複する。掘り込みは認められず、柱穴・炉のみの確認である。柱穴は6本（P 1～P 6）で3本づつが対称している。P 1は上面に焼土が見られ、16E号住の炉として使用をされている。つまり、16D号住の後に16E号住を構築していることがわかる。柱穴間の距離は長軸のP 4～P 6が4.3m、短軸のP 3～P 4が1.9mであるが、長軸のまん中の柱は、南東により設けられている。短軸幅のせまい例である。炉は、ほぼ中央に地床炉が設けられている。径70cmくらいの略円形に焼土が見られる。

16E号住居跡（図版24）

16D、16C号住に重複する位置にある。長方形の住居跡で柱穴と炉のみが確認され掘り込みは認められない。柱穴は6本確認され、3本づつが対称している。柱穴間距離は長軸のP 1～P 3で4.6m、短軸のP 1～P 6で2.7mを測る。各柱穴は径50cm前後、深さ40～85cmと比較的深い。炉は地床炉で北西側にある。径約60cmの範囲で焼土が認められる。

17号住居跡（図版15・253）

29・30-C区に位置する。炉のみの確認で、掘り込み、柱穴等は明確でなく、住居跡とするにはやや問題がある。炉は石囲い炉であるが、かなりの石がとばされている。長軸1.1m、短軸0.7mの不整円形で、浅い掘り込みをもつ。周囲には7個の炉石が残っている。まわりにはいくつかビットが認められるが、柱穴配列を認識するには至らない。

18A号住居跡（図版25・253）

28・29-F区に位置する長方形の住居跡である。18B号・18C号住と重複する。環状集落の最も東にある。柱穴及び焼土が確認され、掘り込みは認められない。長軸に3本の柱穴が対称している。住居跡の大きさは長軸（P 1～P 3）で7.3m、短軸（P 1～P 6）で2.8mを測る。柱穴は径50cm前後、深さ40～70cmと比較的大きい。P 5の部分には布掘り状の溝が認められる。炉は北東端に設けられており、石囲炉である。住居跡の長軸にそった方向に各々3個の石が存続している。形状は卵形に近い。炉石は20～30cmの細長い川原石を利用している。長軸で約1m、短軸0.8mの範囲に焼土があり、掘り込みが認められる。

18B号住居跡（図版25・253）

18A号住とやや軸方向を変えて重複する。長方形の住居跡で柱穴列のみが認められた。長軸に4本の柱が対称している。柱穴列の大きさは、長軸（P 1～P 4）で8.5m、短軸（P 1～P 8）で2.4mを測る。柱穴は

3 遺 槽

径50cm前後、深さ30~70cmである。炉は確認されていない。18A号住の炉をそのまま利用したとすれば18B号住が新しいことになる。

18C号住居跡（図版25・253）

18A、18B号住の南西側に重複して存在する。柱穴及び炉が確認されたが、掘り込みは認められない。柱穴は4個で台形状となる（P1~P4）。柱穴間距離は、P1-P2で2.6m、P2-P3で4.5m、P1-P4で3.2mを測る。柱穴の径は40~80cmとばらつきが見られ、深さは40~90cmと比較的深い。炉はほぼ中央に位置する石畳炉である。長軸にそって炉石が認められる。石は長さ20~30cmの細長い川原石である。焼土は長軸1m、短軸0.8mの範囲で認められ、浅い掘り込みを有する。炉の軸方向と台形柱穴の軸方向がやや異なるところに問題がある。また柱穴も大きく、他の堅穴住居跡とも異っている。炉の南側には浅い掘り込みが認められ、これが住居跡の掘り込みと考えると柱穴の認識にまちがいがあることになる。炉の軸方向を考えると環状集落の放射軸に対して直交する住居跡となる。18A・18B号住共に重複しているにもかかわらず炉が残存していることから、この3つの住居跡の中では、一番新しいものと判断される。

19号住居跡（図版26・254）

28-E区に位置し、環状集落の東側に存在する堅穴住居跡で、27号住居跡と重複している。斜面の高位にあたる南側のみに掘り込みが認められた。掘り込みの形状、柱穴等から、平面形は長軸6m、短軸約4mの梢円形になると考えられる。柱穴の配列は明確でないがP1~P7が柱穴になると認められる。形状は略五角形に近い。柱穴は径30cm前後、深さ30~50cmである。炉は住居跡のやや東側に存在する地床炉である。径約80cmの範囲に焼土があり、浅い掘り込みが認められる。住居跡覆土は黒褐色土及び暗褐色土である。27号住との新旧は明確でない。

20A号住居跡（図版27・254）

30-F区に位置する堅穴住居跡で12号住、20B号住と重複する。梢円形に浅い掘り込みがあり形状のわかる数少ない例である。規模は長軸4.7m、短軸4.1mを測る。南西及び北東の壁ぎわにそって幅30~40cmの周溝が認められる。柱穴は5本（P1~P5）で五角形を呈する。柱穴規模は径40cm前後、深さは30~50cmと比較的しっかりしている。炉は柱穴群のほぼ中央、住居跡のやや北西寄りに位置する地床炉である。長さ60cmの略方形の範囲に焼土が認められる。重複住居跡との新旧関係は不明。

20B号住居跡（図版27）

29・30-F・G区に位置する長方形の住居跡で、13号住と20A号住とに挟まれ、各々と重複している。掘り込みは確認されず、柱穴と焼土が確認された。柱穴は長軸に3本が相対する配列をとるが、1本は確認できない。柱穴間距離は長軸のP1~P3で6.1m、短軸のP1~P4で2.9mを測る。柱穴の大きさは、P3・P4で径およそ60cmである。また深さは40~50cmと安定している。炉は住居跡の東隅に位置する地床炉である。径約70cmの梢円形に焼土が認められ、浅い掘り込みがある。

21号住居跡（図版28・255）

29・30-E・F区に位置する。掘り込みの明確な堅穴住居跡である。長軸6m、短軸5.1mで平面形は卵形を呈する。柱穴は平面形が五角形（P1~P5）で、各々の柱穴は径約30cm前後である。この五角形の柱穴列から内側は約10cmの段差があり、一段低くなっている。この低くなっている部分も卵形で、4×3mほどの規模をもっている。この外側のテラス上には、周囲をめぐるようにP6、P8、P9、P11がある。北側の掘り込み部には周溝状の溝がある。中央部には地床炉がある。径約70cmの範囲に焼土が認められ、掘り込みを有している。確認面からの深さは55cmと深く、覆土の5層は地山土を多く含むもので、埋没状

況に不自然さが認められる。12・22号住と一部重複しているが、12号住とは発掘当時の所見から、21号住の方が古いとされている。22号住との新旧は不明である。また土坑22号とも切り合っているが、断面図から土坑の方が新しいことがわかる。

22号住居跡（図版29・255）

29-E・F区、21号住居跡の北側に位置する。柱穴及び炉が確認されたが、掘り込みは認められない。柱穴は方形に8本並んでいる。柱穴間距離は長軸P1～P3で約3m、短軸P7～P1で2mと規模は小さい。柱穴の大きさはばらつきが著しく、細いものは径20cm、太いものは径70cmを測る。深さは30～60cmである。長軸のP6・P2がややふくらみ加減の配置をとっている。中央よりやや南側には石囲炉がある。炉は黒色土層中に認められる。柱穴の長軸にそって炉の長軸をそろえている。炉石は長軸にのみ認められ、短軸にはない。炉石は長さ20cmくらいの細長い川原石を用いている。長軸90cm、短軸60cmの範囲で焼土が認められる。

23号住居跡（図版29）

28-D区に位置する長方形の住居跡であるが、掘り込みは認められない。柱穴は長軸に3本が相対しており、短軸の南西よりに棟持柱が一個認められる。柱穴間距離は長軸のP1～P3で4.8m、短軸のP3～P4で2.5mを測る。柱穴の大きさは径30～60cm、深さ30～50cmである。炉は北東よりにある。石囲炉と思われるが、かなりの石が抜きとられている。長軸で約80cm、短軸で40cmの範囲で焼土が認められる。この炉は、遺構確認面（ローム面）から約40cm浮いていることから、床面も黒色土層中にあったものと考えられる。9C号住居跡と重複するが、新旧関係は不詳である。

24号住居跡（図版30・256）

30・31-F区に位置する。柱穴及び炉が確認されたが、掘り込みは認められない。柱穴は方形の4本柱で柱穴間距離は長軸のP1～P2で3.6m、短軸のP2～P3で2.4mを測る。このような方形4本柱の建物は少ない。柱穴は径30～60cm、深さ40cm前後である。炉は南西側に築かれた石囲炉である。ヨの字状に炉石がおかげ、北東側に開口している。長さ10～20cmの細長い川原石を用いている。長軸1m、短軸0.7mを測り、内側には焼土が認められる。炉石及び焼土は、遺構確認面（ローム面）から約15cm浮いて確認されていることから、床面も同様に黒色土層中にあったと考えられる。

25号住居跡（図版30・256）

30・31-F・G区に位置する長方形の住居跡で、掘り込みは認められない。長軸が環状集落の中心に対して直角になるもので、この集落においては數少ない。柱穴は、長軸に柱穴3本が相対している。柱穴間距離は長軸のP1～P3で6.2m、短軸のP3～P4で2mを測る。柱穴は径60cm前後、深さ30～80cmである。炉は南西側隅に築かれた石囲炉である。すでにものとの状況にはなく、炉石はかなり移動してしまったものと考えられ、石組の形態を知ることはできない。地山ローム面よりやや浮いて炉は構築されており、これから、床面も黒色土層中にあったことがわかる。26号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

26号住居跡（図版21・256）

30・31-G区に位置する長方形の住居跡で掘り込みは認められない。柱穴は、長軸に3本相対している。柱穴間距離は、長軸P1～P3で5m、短軸P3～P4で2.6mを測る。柱穴は径40cm前後、深さ30～60cmである。炉は住居跡のはば中央にある地床炉である。長方形住居跡で炉が中央にくるのは数少ない。長さ95cm、幅65cmの梢円形の範囲に焼土が認められる。地山面に焼土が認められることから、床面もほぼ地山面上にあったと考えられる。14号住・25号住と重複するが新旧関係は不明である。

27号住居跡（図版26）

環状集落の東側28-E区に位置する長方形の住居跡であるが掘り込みは認められない。長軸に3本の柱が対応している。柱穴間距離は、長軸（P1～P3）8m、短軸（P1～P6）2.4mを測る。長軸の柱間は約4mとかなり長い。柱穴は径50cm前後、深さ30～70cmを測る。炉は中央よりやや南東寄りにある地床炉である。長さ1.2m、幅0.8mの範囲で焼土が認められる。焼土は地表面よりやや浮いて認められる。床面は黒色土層中にあったものと思われる。19号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

28号住居跡（図版31・257・258）

30・31-F区に位置する長方形の建物であるが、掘り込みは認められない。環状集落の最も南側高位にあり、29号住居跡と重複している。長軸に4本の柱がきちんと対応しており、しっかりととした柱穴配列をとる。柱穴間距離は、長軸のP1～P4で8m、短軸のP4～P5で2.8mを測る。北西側短軸には外側に櫛持柱が一本設けられている。柱穴の大きさは径40～70cmである。南東側半分の長軸は柱穴列上に布振り状の溝が埋っている。溝幅約30cm、長さ4mくらいである。炉は南東隅に設けられており、石囲炉である。炉石は細長いU字状に配列されていたと考えられるが、東側の長軸に炉石は存在していない。炉石は、20～30cm大の細長い川原石を利用している。北西側に開口をしており、炉石の内側には焼土が認められる。規模は長軸1.4m、短軸60cmである。29号住居跡との新旧関係は不明。また大FP5号も住居跡内に存在するが、内部施設として伴ったものではないと判断される。

29号住居跡（図版31・257）

28号住居跡と同位置にある掘り込みをもつ堅穴住居跡で規模は小さい。掘り込みは、北西側を除く3方に認められる。長軸で約3m、短軸で2.5mを測る。柱穴は4本柱（P1～P4）で柱穴間距離はP2～P3で1.2m、P3～P4で1.5mである。柱穴の大きさは径20cmくらい、深さは23～35cmである。炉は地床炉で住居跡のほぼ中央に位置している。径30cmの範囲に焼土が認められる。

29号住居跡（図版32・258）

31-F区に位置する小型の住居跡で29号住居跡と重複する。南東側のみ浅い掘り込みが認められた。柱穴は4本柱（P1～P4）ではほぼ方形を呈する。柱穴間距離はP1～P2で2.6m、P2～P3で2.6mを測る。柱穴は径30～40cm、深さ70cmと比較的深い。P1とP2、P3とP4を結ぶライン上には、幅10～15cmの布振り状の溝が走り、柱穴を連結している。中央には地床炉がある。長軸1.2m、短軸0.7mの範囲に焼土が認められ、浅い掘り込みを有している。29号住居跡との新旧関係は不明である。

30号住居跡（図版32・258）

32・33-G区に位置する堅穴住居跡で、環状集落では一番南側、最高位にあるが、やや外側にはずれている。北側を除いて掘り込みが確認され、平面形は不整円形である。西側の掘り込み部には、幅約10cmほどの周溝が認められる。住居跡内に柱穴と思われるビットは10個程度（P1～P10）ある。どれが柱穴で、どのような配列になるかは明確でないが炉を中心としたP1～P4の4本柱となる可能性が高い。ビットは径20～40cm、深さは13～67cmとばらつきがある。住居跡のほぼ中央に地床炉がある。長軸86cm、短軸68cmの範囲で焼土が認められる。4号TPと重複するが、新旧関係は明確でない。他の例からいえば、TPの方が新しいことになる。

31A号住居跡（図版33・259）

29-D区に位置する堅穴住居跡である。掘り込みが確認され平面形は、不整方形である。長軸4m、短軸3.7mで、掘り込みの深さは確認面から約25cmである。柱穴は4本（P1～P4）で、ほぼ方形に並ぶ。柱

穴間距離はP 2 ~ P 3 で1.8m、P 3 ~ P 4 で1.7mを測る。柱穴の径は約20~40cm、深さ35~45cmである。住居跡のほぼ中央には炉がある。地床炉で、径約40cmの範囲で焼土が認められた。掘り込みにそっていくつかのピットがあるが、住居に関連するものと考えられる。住居跡覆土では、3層にロームブロックを多量に含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。土坑と重複関係にあるが、セクション図から土坑の方が新しいことがわかる。

31B号住居跡（図版33）

29-C区に位置するが、炉のみの確認で他是明確でない。ここでは一応住居跡として扱う。炉は石囲炉でP 2 の上面に置かれている。60×30cmの範囲に焼土が認められ、長軸の北西側のみ石列がある。柱穴と思われるピットは、まわりに多數認められるがどれが柱穴になるかは不明である。

32号住居跡（図版34・259）

35-D区に位置する長方形の堅穴住居跡である。環状集落とは離れて一番南西側の斜面に位置している。山側の約3分の1で掘り込みが確認されたが、谷側では掘り込みは確認されていない。長軸約6m、短軸約4mくらいになると想される。住居跡内に柱穴は多くあるが、P 2 . 3 . 8 . 10 . 6 . の5本が柱穴になるのではないかと考えられる。柱穴の大きさはP 2 を除いて径30cm前後となる。柱穴間距離はP 2 ~ P 10 で3m、P 6 ~ P 8 で約2mを測る。炉は中心部に地床炉が認められる。75×55cmの範囲で焼土がある。谷側では、周溝と思われる溝がある。掘り込みは浅く、10cm程度である。TP 39号と重複しているが、新旧はつかまない。

33号住居跡（図版34・259・260）

34-D区に位置する。掘り込みは認められず、焼土と周辺に一括土器が認められたことから、住居跡として扱った。焼土は90×60cmの範囲に認められ、地床炉と考えられる。また近くに一括土器(607)が見られる。焼土等の状況から、床は黒色土中にあったと考えられる。柱穴は特定できないが、P 1 . 4 . 6 . 10 の4本が台形状となるであろうか。

35A号住居跡（図版35・260）

30-B区に位置する長方形の住居跡である。南東側の短軸に浅い掘り込みを有する。柱穴は6本で長軸に3本づつが対応しているがP 1 は大F P 4 号と重複する位置にあるため、明確でない。柱穴間距離は長軸のP 4 ~ P 6 で5m、短軸のP 3 ~ P 4 で3.3mを測る。柱穴の規模は、径0.6~1m、深さ70~96cmと大きい。P 5 ~ P 6 、P 3 ~ P 2 にかけては、幅30cm前後、深さ10cm程度の布掘り状の溝が認められる。炉は、北西側によって設けられており、他の住居跡の炉のほとんどが住居跡の長軸中心線上にくるのとは異っている。長さ1.4m、幅0.6mの範囲で焼土が認められる。周囲に炉石と思われる石が散在していたことから、石囲炉であったと推測される。またP 5 とP 4 との間に赤変した部分があるが、炉であるかどうかは不明。35B号住、37号住、15A号住と重複するが、新旧関係は不明。

35B号住居跡（図版36・260）

30・31-B区に位置する。炉が確認されたため、一応住居跡として扱う。炉はコの字状の石囲炉で、南西側に開口している。炉の軸方向は、環状集落の放射軸線とは直角となる。開口部での幅約1m、長さ0.8mで、炉内には焼土が認められる。炉石は長さ20~30cmの扁平縁を立てた状態で配列している。炉の軸方向を考えると、P 1 ~ P 4 が柱穴と判断されるが、北東側に柱穴(P 5 , 6)が確認されず、炉が外にとび出している状況となってしまう。柱穴が浅いために確認できなかったのか、又はもともと特異な構造であったのかは判断できない。

3 造 構

36号住居跡（図版36・261）

30・31-C区に位置する。炉の存在から、ここでは住居跡として扱う。炉は方形の石囲炉で一部石が抜かれている。長軸1.1m、短軸0.75mを測る。炉石は、長さ20~30cmの細長い川原石を利用しており、炉内には焼土が認められる。柱穴は4本（P1~P4）確認されたが、長軸が長すぎるので間にもう一本入る可能性がある。柱穴はP1、P2が径50cm、P3、P4は60cm程度である。住居跡の長軸が、環状集落の放射線と直交するものである。

37A号住居跡（図版37・261）

31-B・C区に位置する長方形の住居跡である。住居跡の中では大型である。長軸に4本の柱穴が相対して、長方形の柱穴配置をとっている。P1~P8が主要な柱穴で、P4、P9、P5が柱の規模、間隔が短いことから付属的施設（例えば入口部）又は単なる拡張が考えられる。この南東側つまり内側の環状集落の中心よりの短軸には浅い掘り込みが認められる。柱穴間距離は長軸のP5~P8で7.8m、短軸のP6~P3で2.6mを測る。P6~P7、P7~P8がそれぞれ2.8m、P5~P6で1.8mである。主柱穴の規模は、径0.6~1m、深さ40~70cm、P2、P3、P8には根固め石が認められる。P4、P5、P9は径50cmとやや小さい。P2~P3~P1の間には幅50cmほどの布堀り状の溝が認められる。炉は石囲炉で長軸の北側に位置している。炉石は長さ20cm前後の細長い砾を使用している。被熱によりかなりが割れており、炉石の動いているものもある。形態は長方形で長軸の両側縁に炉石が認められる。大きさは長軸1.6m、幅0.7mを測る。また中央には、地床炉と考えられる焼土が2地点ある。この地床炉を石囲と別個に考えた時、この炉を中心としてP6は重複するものの、P10~P14で亀甲状の配列を見出しができる。この配置が内部施設としてあったのか又は、単独で存在していたのかは定かでない。またP6、P7のわりにも焼土が認められるが、炉とは考えられない。35A、35B、36号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

38A号住居跡（図版38・39・262）

31-B・C区に位置する長方形の住居跡で、当遺跡では最大規模の面積を有する。掘り込みは認められない。環状集落では一番西側にあり、すぐ3~4mで崖線である。柱穴は主柱穴が8本で長軸に4本づつが相対している。柱穴間距離は、長軸のP7~P11で8.7m、短軸のP5~P7で3.4mを測る。柱穴の規模は径0.6~1m、深さ0.3~1mである。短軸のP5とP7の間には棟持柱と考えられるP6がやや張り出して設けられる。またP4、P8も補助的な柱であろうか。P3とP8を結ぶように弧状に2重の石列がある。すでにかなりの石が抜かれている。石は炉石より大きく30~40cm大の川原石である。間仕切り的な役目をしたのであろうか。又は37A号住と同様な在り方であろうか。この弧状石列のすぐ内側には、径60cmほどの範囲で焼土が認められる。炉として使用されたであろうか。本住居跡の炉は西側のはずれにあり、石囲炉である。炉石は西側にU字状にあるだけで東側は浅い掘り込みのみである。炉石は長さ20~40cmの細長い川原石を利用している。炉の大きさは、長さ3.2m、幅0.9mと細長い。38B、38C、38D号住居跡と重複するが、新旧関係は明確でない。このように37A号住と38A号住は他とは異った構造をもった住居跡である。

38B号住居跡（図版38・39）

32-B・C区に位置する長方形の住居跡である。掘り込みは認められず、柱穴と焼土のみが確認された。柱穴は6本と考えられ長軸に3本づつが相対している。P4については確認されていない。柱穴間距離は長軸のP1~P3で5.3m、短軸P1~P6で2.6mを測る。柱穴は径60cm前後、深さ37~86cmとややばら

つきがある。炉は西側隅に地床炉がある。1.6×1.1mの精円形の範囲に焼土が認められる。38A、38C号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

38C号住居跡（図版39）

32-B・C区に位置する長方形の住居跡である。柱穴及び炉が確認されたが、掘り込みは見られない。6本の柱穴で構成され、長軸に3本づつが相対している。柱穴間距離は長軸のP1～P3で5m、短軸のP1～P6で2.8mを測る。長軸は、P1～P2が2.8m、P2～P3が2.2mと等間隔ではない。柱穴の大きさは径60cm前後、深さ54～72cmを測る。中央には地床炉がある。1.7×1.3mの不整形の範囲で焼土が認められる。38B号P5と重複するが、新旧関係は不明である。

38D号住居跡（図版40）

32-B区に位置する。焼土及び柱穴は確認されたが、掘り込みは認められない。柱穴はP1～P4の4本柱で方形を呈する。柱穴間距離は、P1～P2で2.8m、P2～P3で1.6mを測る。柱穴の大きさはP2で径60cm、深さ51cmを測る。中央には地床炉がある。地床炉の部分は少しくぼまっている。95cm×75cmの範囲に焼土が認められる。38A号住と重複するが、遺物の出土状況等から38D号住の方が38A号住より新しいとされる。なお、黒色土中で硬化した床面を確認している。その状況から言えば、円形の住居跡プランであったと思われる。

39号住居跡（図版40・262）

33-D区に位置する掘り込みを有する竪穴住居跡である。環状集落内では一番西側に位置する。北南3.85m、東西3.6mを測る隅丸方形の住居跡である。柱穴は4本で方形に近い台形を呈する。柱穴間距離は、P1～P2で1.7m、P3～P4で1.5m、P1～P4で1mを測る。柱穴の大きさは、径約20cmと細く、深さは25cm前後である。中央には炉がある。近くに長さ20～30cmの大川原石があるが、配置等から炉石とは考えられない。しかし人為的に置かれた可能性はある。したがって炉は地床炉であったと考えられる。焼土は径約60cmの範囲で認められる。掘り込みにそっては、西側を除いて幅35～40cmほどの周溝が認められるが比較的浅い。周溝にもピットや川原石が認められる。これらのピットも住居構造に関係したと考えられる。

40A号住居跡（図版41・263）

33-C区に位置する長方形建物で炉及び柱穴が確認されたが掘り込みは不明である。柱穴は長軸に3本が相対して並び、両端に棟持柱がつき、計8本となる。柱穴間距離は、長軸のP1～P3で4.2m、短軸のP3～P4で2.3m、棟持柱のP7～P8で5.2mを測る。長軸の3本柱は等間隔ではない。柱穴の大きさは、ばらつきが見られ径30～60cm、深さ22～48cmである。炉は南西側に認められる石囲炉で黒色土中に構築されている。長方形の細長い炉で長さ1.1m、幅0.75mを測る。長軸にそって炉石が両端にあるが、抜きとられた石もある。他の炉と同様の大きさの川原石を用いている。炉の下には不整形の浅い土坑がある。

40B号住居跡（図版41・263）

32-C区に位置し、40A号住居跡の内側に重複して存在する長方形の住居跡で掘り込みは認められない。長軸に3本の柱穴が相対して並ぶが、3本の柱穴間隔は等間隔ではない。柱穴間距離はP1～P3で4.2m、P3～P4で2.4mを測る。またP1～P2で2.6m、P2～P3で1.6mである。柱穴の大きさは径20～30cm、深さ20～30cmと比較的小規模である。炉は41A号住よりに石囲炉があるが、石はほとんど残っていない。長さ1.8m、幅0.5mの範囲で焼土が認められる。やはり黒色土層中に構築されている。また炉の中央にも焼土が認められる。40A号住居跡との新旧は、40A号住の方が新しい。

41A号住居跡（図版42・263）

3 造 構

33-D区に位置する長方形の住居跡で、南・東・北側に掘り込みが一部認められる。柱は6本で長軸に3本が相対している。柱穴間距離は長軸のP1～P3で約6m、P3～P4で2.9mを測る。柱穴は径60cm前後、深さは26～77cmとばらつきがある。西側の壁はほぼ垂直に立ち上がっており、そこに各ピットを結ぶように幅約20cmの溝が走っている。南側短軸の掘り込みは、東側でややふくらみをもち、掘り込み上部には大きめの礫数個が並んでいる。北側短軸にも溝があるが擾乱を受け明確ではない。住居内にも他にピットが多くあるが、住居跡に伴うものか明確でない。中央に地床炉がある。径約1mの範囲で焼土が認められ、浅い掘り込みをもっている。41B号住と重複しているが、遺物の出土状況から41A号住の方が新しいと判断される。

41B号住居跡（図版42・263）

33-D区に位置し、41A号住とはば重複している。長方形の住居跡で北東側の一部に掘り込みが認められる。長軸に4本の柱が相対して並んでいる。柱穴間距離は、長軸のP5～P8で7m、短軸のP1～P8で2.3mを測る。P1は41A号住と重複して利用されている。P2～P4も他の土坑と重複している。柱穴の大きさは、径50cm前後、深さ23～77cmとばらつきがある。炉は南側端に石圓炉がある。梢円形の石圓炉であるが、南側は11号TPにより切られており全体は不明である。長さ約1m、幅0.65mを測る。炉石は川原石を利用しておらず、長さ30cmくらいの扁平砾を横長に立てた状態で並べている。

42号住居跡（図版43）

32・33-E区に位置する長方形の建物で掘り込み等は確認されていない。柱穴は長軸に3本が相対して並んでいる。柱穴間距離は、長軸のP4～P6で5.5m、短軸のP1～P6で2.4mを測る。柱穴の大きさは径30cm前後、深さ26～42cmと比較的小規模である。P4には根固め石が見られる。炉は南側端に設けられている。石圓炉であったようであるが示してない。焼土は不整形に認められる。小型プラスコ18号の埋没後に炉は構築されている。柱穴と同等規模のピットがまわりに多く認められるが、住居跡に関連するかどうかは不明である。

43号住居跡（図版43・263）

32-E区に位置する長方形の建物である。柱穴は長軸に4本が相対して並んでいる。柱穴間距離は長軸のP1～P4で6.2m、短軸のP1～P8で2.2m、P4～P5で2.8mを測り、北側でやや拡張がりとなる。柱穴は径30cm前後、深さ30～40cmである。中央よりやや南側に地床炉がある。長軸60cm、短軸50cmの範囲に焼土が認められ、浅い掘り込みを有する。2号TPがこの炉を切っており2号TPのほうが新しいことがわかる。この炉を中心とするように方形に近い掘り込みがある。長軸は不明であるが、短軸は約2mで竪穴住居跡である。長軸の柱穴列とはうまく一致しない。あるいは、別の竪穴住居跡が重複していた可能性もある。風倒木痕の方が古い。

B 小型プラスコ状土坑（図版44～46・264）

小型プラスコ状土坑としたものは、基本的には、底面が広がりを見せプラスコ状となり、径が1m前後以下のものをさす。深さは浅いものが多く、また上面崩落のため、プラスコ状となっていないものもある。原形を留めているものは、ほとんどないと言える。プラスコ状でなくとも、現場でプラスコ状であったと判断されたものはこれに含めた。五丁歩道跡では全部で38基の小型プラスコ状土坑が確認された。分布を見ると、環状集落の近くにある（18～38号）Aグループ（図版5）と集落と100m以上はなれている（1～17号）Bグループ（図版4）の2グループに大別される。Bグループのうち1～5号は弧状に連続して1つの

グループをなし、また6~10はややはなれて1つのグループをなしている。11~15はその隅にあり、ちょうど5個づつが小グループを形成している。16、17号のみが別である。出土遺物がないため環状集落に関連するかどうかは判断できない。Aグループは、環状集落を形成する土坑と考えられる。東西2グループに分けられる。東側は18~24号で、集落の外側にあり、住居跡とは18号を除いて重複しない。西側のグループは25~33でこれも重複していない。この東西2グループは、環状集落の対面に各々が位置しており、その在り方に企画性がうかがわれる。なお、4、35、36、37、38号は、ややはなれて分布している。このように小型フラスコ状土坑は、まとまったグループを形成しているのが特長といえる。

表2 小型フラスコ状土坑一覧表

単位cm

番号	グリッド	上端		下端		深さ	出土土器	番号	グリッド	上端		下端		深さ	出土土器
		長軸	短軸	長軸	短軸					長軸	短軸	長軸	短軸		
1	9-C	78	70	68	52	20		20	29-E	82	80	86	84	50	716
2	9-C	84	70	64	56	22		21	29-F	96	80	70	62	50	
3	9-D	100	90	76	70	24		22	29-F	62	60	56	52	30	
4	9-D	106	90	126	120	48		23	29-F	60	42	72	60	52	
5	9-D	88	82	108	94	56		24	29-F	60	50	48	44	22	
6	12-C	92	70	62	60	14		25	33-C	76	72	82	74	54	
7	12-C	94	87	100	80	26		26	33-C	114	90	76	60	62	
8	12-C	82	68	70	62	20	715	27	33-C	122	88	84	64	66	
9	12-C	84	60	88	70	32		28	33-C	102	80	88	80	56	710-714
10	12-C	106	78	80	64	16		29	33-C	160	62	100	94		
11	13-D	82	74	96	84	46		30	33-C	72	64	54	47	30	
12	13-D	80	78	106	92	50		31	33-C	86	74	66	58	36	
13	13-D	102	96	120	114	40		32	33-C	102	92	96	78	40	
14	13-D	70	68	80	72	36		33	33-C	106	97	90	70	58	
15	14-D	84	76	106	94	40		34	33-E	108	94	88	72		
16	14-D	80	74	96	84	40		35	36-C	138	108	137	124	88	
17	14-D	142	118	138	114	60	717	36	36-C	100	80	88	84	70	
18	29-E	160	80	150	50	50		37	34-C	84	62	68	46	38	
19	29-E	66	56	82	80	40		38	37-F	124	84	106	76	34	

C 大型フラスコ状土坑(図版46・47)

大型フラスコ状土坑は、全部で9基確認されている。大型としたものは、下端での径1m以上、深さも

表3 大型フラスコ状土坑一覧表

単位cm

番号	グリッド	上端		下端		深さ	出土土器	番号	グリッド	上端		下端		深さ	出土土器
		長軸	短軸	長軸	短軸					長軸	短軸	長軸	短軸		
1	3-C	240	186	190	170	144		6	32-G	200	176	233	230	174	709
2	28-C	168	138	152	132	143		7	33-G	178	140	212	210	222	
3	29-F	124	69	122	110	65		8	33-G	158	144	200	192	134	
4	30-B	180	157	200	192	88	706~708	9	34-G	212	172	180	166	190	
5	31-F	176	58	160	144	218									

3 遺構

およそ1m以上のものである。形態的には中央にピットを持つもの（5号～9号）と持たないもの（1号～4号）との二つがある。大きさ的はある差は見られない。大きな違いは、ピットのある土坑の方が崩落が少なく、原型を比較的よく留めていることである。このことは、土坑の使われ方、構造に違いがあった可能性を示唆している。分布は、1号が環状集落からは遠くはなれ、中期後半の第1号住居跡の近くにある他の環状集落内及びその近くに分布する。1号は中期後半の可能性が高いが、その他は環状集落に開通した土坑と考えられる。5号～9号は、集落の外側にあり、いずれも中央にピットを有するものである。このようにこの環状集落では大型フラスコ状土坑の数は比較的小ないが、小型フラスコ状土坑と異なりグループを形成するようなことはなく、散在していたと言える。また、集落内と外では中央にピットを持つ・持たないという構造上の違いから、その使われ方に違いがあったことも想像にかたくない。

D トランプピット（図版48～51）

いわゆるTピットと呼ばれている細長い土坑である。五丁歩遺跡では48基が確認されている。他の遺構と切り合っているものもあるがすべてが他の遺構を切っており、少くとも、環状集落を形成した時期よりは新しい可能性が高い。大きさは、そのほとんどが長軸3～4m、幅50cm前後である。このタイプの土坑は通常列をなすことが多く、ここでもそのような配列を認識することができる。およそA～M列に分類できる。

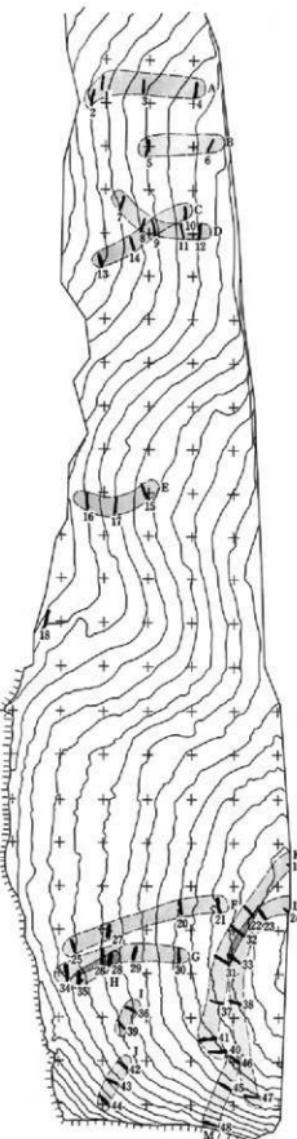
A列（1～4号）…B区に存在する。斜面にそって配列される。1、3、4号はほぼ等間隔である。

B列（5、6号）…14～15区に存在し、A列からは約12mはなれている。2基のみであるが、A列に平行して認められる。

C列（13、14、9、10号）…16～17区に存在する。谷部に向かってややカーブを描く。B列とは約15m離れる。各々は約6～8m間隔の配列である。

D列（7、8、11、12号）…16区に存在する。C列とクロスするように並ぶ。間隔にはばらつきが見られる。

E列（16、17、15号）…22～23区に存在する。A～D列



第8図 Tピット分布図

とは、はなれ独立して存在する。斜面にそってややカーブを描く、3基は約6~7mの等間隔で並ぶ。

F列(25. 27. 20. 21号)…F列以下は環状集落の南側に位置する。F列は環状集落の南側を斜面方向にそって走っている。25. 27号と20. 21号との間隔は広く、間に一基入るとおよそ等間隔となる。

G列(34. 26. 29. 30号)…F列とほぼ平行して走るが、ややカーブを描く。ほぼ等間隔で並ぶ。

H列(28. 35号)…G列にはほぼ重複する。35号は34号に近接し、28号は26号に近接する。

I列(39. 36号)…34. 35-D区にある。2基のみの配列である。

J列(42. 43. 44号)…36-D区に位置する。斜面の傾斜はややきつくなる。ほぼ等間隔で並んでいる。

K列(19. 22. 32. 31. 37. 41. 40号)…今までの配列が、傾斜にそっていたのに対して、K列は、裾をまくように、ほぼ同一センター上に並んでいる。

L列(24. 23. 33. 38. 47号)…K列とやや重複して並んでいる。最も高位にある土坑列である。

M列(45. 46. 48号)…36. 37-F区に位置する。J列と同じく、ややきつい斜面にある。

以上の列を全体的に概観すると、斜面方向に列をなすもの(A~J・M)と、センターにそらもの(KL)に大別できる。斜面方向に列をなすものでは、谷筋へ向って列をなすもの(C・E・F~J・M)が多く認められる。おそらく、土坑の性格を反映しているものと考えられる。

表4 T・P一覧表

番号	グリッド	上 端		下 端		深さ	出土土器	番号	グリッド	上 端		下 端		深さ	出土土器
		長軸	幅	長軸	幅					長軸	幅	長軸	幅		
1	13-C	334	22	314	10	96		25	33-C	352	64	318	20	116	
2	13-C	350	28	352	6	122		26	33-D	372	32	354	12	106	
3	13-D	350	36	348	12	100		27	33-D	410	74	370	20	118	
4	13-F	374	34	384	14	96		28	33-D	310	78	280	42	114	
5	14-D	318	30	284	10	116		29	33-D	376	70	340	18	136	
6	14-F	302	22	264	4	108		30	33-E	350	56	290	14	110	
7	16-D	314	32	318	10	78		31	33-F	380	26	336	5	74	
8	16-D	326	32	312	16	74		32	33-G	394	32	364	9	84	
9	16-E	392	34	400	8	110		33	33-G	390	60	328	12	124	
10	16-E	330	32	314	20	86		34	34-C	376	89	352	6	104	
11	16-E	346	24	364	10	98		35	34-C	370	68	314	22	96	
12	16-F	352	38	330	12	120		36	34-D	276	23	254	8	66	
13	17-C	322	40	310	12	90		37	34-F	370	36	304	10	98	
14	17-D	318	26	312	12	96		38	34-G	320	34	260	10	102	
15	22-D	392	54	362	10	212		39	35-D	266	78	243	8	84	
16	23-C	362	26	340	2	100		40	35-F	426	44	345	10	86	
17	23-D	376	46	354	3	132		41	35-F	436	30	408	6	100	
18	25-B	420	24	396	10	64		42	36-D	290	54	270	10	118	
19	31-H	70	26	72	10	114	722	43	36-D	318	60	234	4	112	
20	32-E	360	28	346	10	62		44	36-D	298	32	278	10	100	
21	32-F	364	42	334	26	94		45	36-F	386	94	334	18	150	
22	32-G	386	26	352	6	84	718~720	46	36-G	328	24	290	10	94	
23	32-G	314	60	278	14	106	721	47	36-G	385	50	356	8	124	
24	32-H	130	32	120	10	110		48	37-F	320	19	320	4	68	

E 土坑 (図版52~56・264)

土坑については、かなり多くが検出されているが、明確にその性格を示すことのできるものは、ほとんどない。形状により I ~ III類に分類した。

I a類 (1, 8, 10号) … 方形に近い平面形を持ち、掘り方も垂直に近く、底面が平なものである。

土坑の長軸が環状集落の放射軸と一致するものである。土坑の長軸の中心は一致しない。長軸120~150cm、深さ40~60cmである。いずれも自然堆積土ではなく、地山粒(ローム)を多く含んでいる層が見られることが特徴である。

I b類 (2~7, 9 b号) … I a類と同一規模形態をとるが、長軸が環状集落の放射軸に対して直角となるものである。深さには若干のばらつきがあり、浅いもの (8, 4, 5, 9 b号) では、25~30cm、深いもの (2, 3, 6, 7, 9 a) では50~90cmを測る。これら I b類は、6号を中心として考えた場合、他の2~5, 7, 9 b号土坑が、ほぼ同一円周上に来る。またほぼ4方向に対角線上の対応を呈している。しかし、6号土坑は環状集落の中心ではなく、やや北側に寄っている。この中で墳墓の状況を最もよく残しているのが第7号土坑である。上面は擾乱により形状に変化が見られるが、土坑下端で、長軸160cm、短軸110cm、深さはI類中最も深く92cmを測る。埋土はしまりが良く、8, 9層にはローム土があり埋戻しの状況をよく表わしている。また最下層南東側には漫鉢(725)がふせた状態で出土している。死者の顔面にふせられた可能性が高い。土層の堆積状況では、3号、6号が單一土層で埋まっている。

表5 土坑(I類)一覧表

単位cm

番号	グリッド	上 端		下 端		深さ	出土土器	番号	グリッド	上 端		下 端		深さ	出土土器
		長軸	短軸	長軸	短軸					長軸	短軸	長軸	短軸		
1	29-D	150	90	100	60	52		7	30-E	160	144	160	110	92	725~727
2	29-D	150	96	110	70	50	723	8	30-F	122	80	86	60	60	
3	29-D	124	70	104	40	64		9 a	31-D	125	108	104	75	58	732
4	29-D	136	84	104	58	26		9 b	31-D	112	82	112	68	36	
5	30-C	156	92	140	65	30		10	32-E	148	70	126	48	42	
6	30-D	138	122	100	70	86									

II類 (13, 20, 21, 25, 26, 33, 41, 44, 47, 48, 50号)

II類としたものは、I類のように方形にはないものの橢円形で、やや細長いものである。土坑の大きさ、深さ等はI類と類似する。また堆積状況も同様である。このII群は集落西側にかたよる傾向が強い。

表6 土坑(II類)一覧表

単位cm

番号	グリッド	上 端		下 端		深さ	出土土器	番号	グリッド	上 端		下 端		深さ	出土土器
		長軸	短軸	長軸	短軸					長軸	短軸	長軸	短軸		
13	30-C	144	92	102	76	42		41	32-D	128	108	100	82	34	
20	30-E	124	86	84	76	60		44	32-D	134	82	116	62	40	
21	30-F	150	122	128	98	34		47	32-D	130	88	110	78	32	736
25	31-C	132	92	120	70	30		48	32-E	124	92	106	70	32	
26	31-C	132	92	134	80	42	730	49	32-E	122	96	92	66	40	735, 737
33	31-D	118	76	100	62	20	738								

III類

その他を一括する。III類としたものの中でも円形に近く、I・II類とほぼ同じ深さにあるもの (11, 14, 27~30, 32, 34, 35, 37~39, 45, 46) と、円形に近く、深いもの (12, 15~17, 36, 40, 53~57) とか見られる。この中で15号土坑では、上面に、当初立石状態にあったのではないかと考えられる細長い石が斜立の状態で検出されている。環状集落外にある53~57号土坑は深さが1m以上と深く、56, 57号土坑は特異な堆積を示している。

表7 土坑(Ⅲ類)一覧表

単位:cm

番号	グリッド	上 端		下 端		深さ	出土土器	番号	グリッド	上 端		下 端		深さ	出土土器
		長軸	短軸	長軸	短軸					長軸	短軸	長軸	短軸		
11	29-D	130	106	104	80	32		35	31-E	80	76	54	44	50	
12	29-D	90	82	60	48	88		38	30-F	104	64	80	42	54	
14	30-C	148	106	88	78	58		39	31-F	110	102	84	76	62	
15	30-C	120	118	60	50	90		40	31-G	118	96	76	62	102	
16	30-D	172	148	132	110	76	724	42	32-D	122	80	66	50	50	
17	30-D	148	118	100	74	82		43	32-D	92	64	80	50	24	
18	30-E	95	60	70	40	22		45	32-D	116	100	96	78	46	734
19	30-E	95	68	65	48	25		46	32-D	190	78	120	62	8	
22	30-F	102	70	60	44	62		50	32-E	122	72	82	50	54	
23	30-F	90	30	70	24	20		51	32-E	78	60	68	46	20	
24	30-F	96	80	40	34	34	739	52	32-H	116	84	70	50	48	
27	31-C	112	90	76	72	50	728, 729	53	34-C	160	110	130	88	110	
28	31-C	94	90	80	72	48		54	34-E	100	78	76	44	110	
30	31-D	138	100	106	76	44		55	34-F	110	100	66	50	98	
31	31-D	104	74	72	44	56		56	34-F	180	90	140	50	120	
32	31-D	110	72	80	46	45	733	57	34-G	100	80	70	42	110	
34	31-E	98	76	58	32	30		58	29-C	94	72	70	60	20	740

F 配石(図版57・264)

遺構確認を行う前の黒色土層中で確認されたもので、ほとんどが環状集落の内周に分布している。礫は20cmから長いものは60cm~70cm大の細長く大きいものである。旧状を留めているとは考えられないが、ほぼ環状の分布を示している。山側は住居群からはなれ、谷側は住居群には接しており、配石の分布の中心は、環状集落の中心とは、ややずれていている。特に山側に多くの石、大きめの石が認められる。4号土坑とはば重なるように見られる石は、長方形の配列が認められ、4号土坑とは若干軸を異なるものの、4号土坑の上面配石であった可能性が高い。

G その他の遺構

7D区1号配石(図版57)

7D区にある配石で黒色土層で検出された。安山岩の角礫で20~40cm大の石である。コの字状に配列されている。配石の長さは約1.8m、幅0.8mを測る。石組内からの出土遺物は見られない。時期は明確でないが、縄文時代の基の可能性が高い。

4C区1号配石(図版57)

4C区にある配石である。7D区の配石のようなきれいな配石は示していない。やはり黒色土層で検出されている。およそ10×7mの範囲で散在して分布する。図示したものは礫が比較的集中している箇所である。石は、川原石及び安山岩角礫で20~60cm大の石である。人為的なものには間違いないが、配列に規則性は認められない。

6C区1号集石

6C区にある集石である。やはり黒色土中に検出された。角礫及び川原石で、20~60cm大の石である。詳細は不明。

この他に不明土坑、ピット、風倒木、木痕、近代と思われる炭窯等がある。

4 遺物

A 土器・土製品

1) 土器の概観

a) 分類

中期の土器については、その9割以上が中期前葉の土器で、中期後葉のものはほんの一端であり、時代的な連続性は見られない。ここで主体的に分類を行うのは中葉のものに限定し、後葉のものは出土量が少ないとから、文様・器形の分類は行わないこととする。

器形分類

深鉢についてはA～Jの10器形、浅鉢についてはA～Cの3器形を基本的な器形区分とした。

<深鉢>

A…ほぼ直線的に外方へ開くものでバケツ状を呈するものである。縄文のみの土器に多い。

B…胴部上半でややくびれ、口縁は外方に広がるものである。胴部上半がやや脹る。

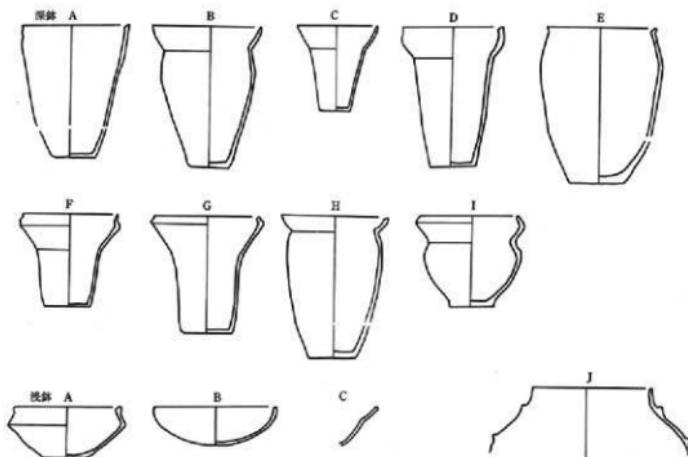
C…口縁部はBと同様であるが胴部に張りがなく、直線的なものである。

D…口縁部がカリバー状にふくらむものである。胴部は直線的に開く。

E…胴部が樽状にふくらむものである。

F…器形Cの上部がくの字状の文様構成をとり、口縁部が2文様帶に2分される。

G…Fよりも胴部のくびれが小さく口縁部まで立ち上り、上端がくの字状となるものである。



第9図 器形分類図

H…胸部にややふくらみをもち、口縁部は受け口状と外反する。器形はBに近い。

I…球体に近い胸部にくの字状の口縁部が付くものである。

J…胸部が球体に近いほど大きくふくらむものである。有孔鉢付き土器が多い。

<浅鉢>

A…口縁部が算盤玉状となるものである。

B…碗状の器形となるものである。

C…皿状に直線的に開くものである。

文様を主とした分類

当遺跡において出土している中期前半の土器は、器形、文様共に多岐にわたり非常に複雑である。北関東：信州：東北：北陸と、いろいろな要素がくみ込まれて土器が作られている。明らかに他地域の土器と認められるものについては一系とし、その他をすべて在地系に入れ、その中を系列として分類した。先ず明らかに他地域とされるものには、関東勝坂系、関東阿玉台系、北陸系がある。在地系としたものには地文に繩文を用いるもの〔繩文系列〕と繩文を用いないもの〔隆帶系列〕とに分類した。以下にその細分を記す。

・在地系

・隆帶系列—隆Ia—主に沈線や隆帶による文様で、無文部を多く残している土器である。

Ib—口縁部文様帯が狭く、以下の胸部文様帯が縦に切れ目のない構成を持つ。隆帶上及び沈線部にはほとんどキザミは付されない。また眼鏡状把手が必ずといっていいくらい付される。

Ic—口縁部上端から底部まで横の分帯が認められない土器である。文様要素は隆Ibと同じである。

隆IIa—口縁部文様帯と胸部文様帯とを区切るもので、口縁部文様帯が第1文様帯と第2文様帯とに区切られるものである。

IIb—口縁部文様帯が1つのものである。文様要素は上記に同じである。

隆III—区画内に斜行の細沈線を多用するものである。眼鏡状把手や、入字状突起を付するものが多い。

III—全体の器形を把握できるものは少ない。沈線部にキザミまたは有節沈線を用いているものである。無文部を多く残している。

隆IV—隆II系列と同様の文様構成、要素をもつが、胸部が繩文のものである。

隆V—胸部にも横帯区画をもつものである。多くは下部が無文となる。

・繩文系列—繩Ia—地文に繩文を用い、沈線部にキザミ（有節）、幅広・扁平な舌状隆帶、眼鏡状把手を用いるものである。

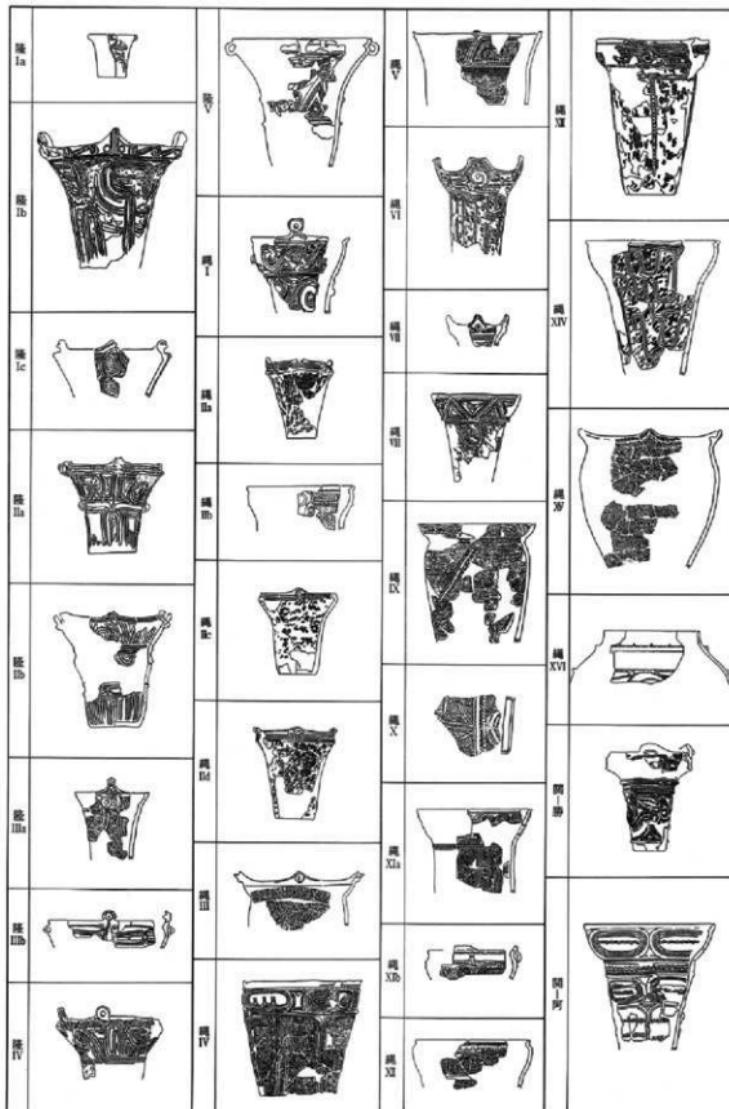
繩IIa—隆帶による橢円区画をもつものである。胸部は繩文のみである。

IIb—aと同様であるが、隆帶又は沈線部にキザミの付されるものである。

IIc—沈線のみで橢円区画を行うものである。

IId—橢円区画より縦区画に近いものである。

繩III—胸部は全面繩文で、口縁部小波状突起が付されるものである。



第10図 土器系列分類図

縄IV一眼鏡状把手は付されないが、有節沈線やキザミを多用するものである。

縄V—縁帶上に爪形文を用いるものである。いわゆる新崎式の文様区画をもつものとそうでないものがある。類例は少ない。

縄VI—大きな波状口縁で、波状部が台形様となるものである。左右対称の文様構成をとるものが多い。

縄VII—やはり波状口縁となるが、波状部が三角形のものである。中央に玉抱き三叉状に円形浮文を付するもの多く、有節沈線、キザミが多用される。

縄VIII—口縁部文様帯に連続三角形区画をもつものである。類例は少ないが、区画にそっては沈線、キザミがそう。

縄IX—領状隆帯を用いるものである。領状とはいっても刻み状となるものもある。他の系列要素と組み合わされる場合が多い。

縄X—有節沈線を用いるものである。大木系統の土器を念頭に置いたが、類例は少ない。

縄XIa—胴部縦区画を基本とするが、部分的に区画線がL字状となるものである。他の系列要素と組み合わされる場合が多い。

縄XIb—断面三角形隆帯を用いているものである。他の文様要素と組み合わされる場合が多い。

縄XII—沈線によるワラビ手状の文様を用いているものである。他の文様要素と組み合わされる場合が多い。

縄XIII—文様に細長い精円区画を用いている土器である。

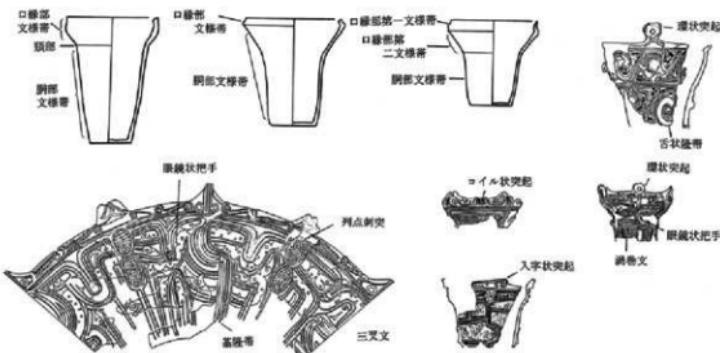
縄XIV—胴部にクランク様の文様を付けるものである。

縄XV—全面縄文のみのものである。

・関東系列……勝坂

……阿玉台

・北陸系列……新崎



第11図 各部位名称

4 遺物

以上が器形、文様に関する概略的なまとめである。

b) 部位名称

部位名称は一般的呼称にしたがったが主な名称は第11図のとおりである。

c) 実測方法及び実測図

完形品の実測については写真実測を採用した。その方法については、清水上遺跡（田海ほか1990）と同様であるので報告を参照されたい。破片については、直径の出せるものについてなるべく復元実測を行なった。繩文については実測と拓本を併用した。また隆帯系列の土器が多いことから、太い隆帯及び基隆帯については、網スクリントーンにより区別して表現することにした。

d) 観察表（P60~107）

土器の個々の説明については、観察表を用いた。観察項目は以下のとおりである。

番号—土器の通しNoである。

器種—主に深鉢、浅鉢の区別である。

系列—文様による分類である。前記系列の分類に当てはまらない土器も多くある。

器形—前記器形分類によるが、完形品が少ないと、不明のものが多い。

時期—観察表を作成したもののは中期のみである。中期後半については「中期後」、その他についてはI（前期半期）、II（後半期）の分類による。I、IIの時期決定が難しい土器が多数を占める。

出土地点—土器に注記された出土地点による。

（レベル）—住居跡出土土器については出土地点のレベルを示した。殆どが覆土出土であるため、覆土内のレベル差がわかるように示した。覆土内でも上層、下層の区別の付くものも認められる。

法量—口径、底径、高さを示したが、完形品が少ないと、三つの計測値のわかった土器は少ない。口径については復元実測値も示した。

遺存—大まかな残存率を五分割で示した。

文様—特長ある文様を箇条書きに示した。

色調—色調は「標準土色帖」（小山、竹原 1970）によった。

二次焼成—二次焼成を受けている土器について「二次焼成」と表わし、土器内面に煮沸によるオコゲと思われる黒い付着物の認められる土器について「オコゲ」と表わした。

接合関係—接合した破片の出土地点を明記した。

2) 土器各説

a) 中期

遺構出土土器（図版58~109・265~282）

1号住居跡出土土器（1~12）

中期後半の住居跡で、良好な資料が出土している。復式炉の炉として使用されていたのが3である。いわゆる沖ノ原式とされている土器である。沈線部にはキザミが充填されている。これと類似の文様をもつものが4である。2は沈線部にキザミは付されてないが同様の文様構成をもっている。1は炉内から出土

したもので、3と同時性を示す土器である。断面カマボコ状の太い隆帯により渦巻状の劍先文が見られる。隆帯の両わきは深い沈線となっている。5はほぼ床面直上の出土である。口縁部には断面三角形状の隆帯による渦巻文、胸部には綫のすり消し繩文が見られる。同様のすり消し繩文は6・7にも見られる。8・9は中期前葉の土器である。

これらのうち1～5、6は同時性の強いもので一括資料とすることができる。1は大木8b式の新又は大木9式古段階にあたるものである。また5、6は大木9式の古手又は加曾利E II式とされる土器である。また2の土器は万條寺林遺跡第36号住居跡でも類似の土器が出土しており、魚野川流域に広く分布している。3、4は沈線部に刻みがあり、沖ノ原式に共通であるが、2との時間差はないものと思われる。このように、当住居跡出土土器は、東北、関東、魚沼の3地域の並行関係をつかめる資料として意義がある。

2号住居跡出土土器 (13～17)

14・15は同一個体で方形石窯炉の中央におかれていた土器である。全面繩文でボタン状突起が付されている。16・17は炉内から出土である。17は上半に渦巻文がある(図示していない)。13は中期前半の浅鉢で爪形文が付される。住居跡とは時期が異なる。

3号住居跡出土土器 (18)

18は円形の石窯炉の中央に使用されていた土器である。口縁部は無文で2本の沈線が走る。胸部には断面三角形に近い隆帯による渦巻・劍先文が付される。沈線部は深くなぞられている。

4号住居跡出土土器

4号住居跡は、住居跡の形態から、中期以前と考えられるものである。出土した土器は細片であり、図は掲載していない。時期の判別ができなかった。

5号住居跡出土土器 (19～24)

19及び22が埋甕として用いられた土器である。19は北側隅に倒立状態で埋められていたものである。波状4単位で、口縁にそった隆帶上にはヤザミが付されている。22は北側隅に正立状態で埋められていたが、上半部を欠損している。

6号住居跡出土土器

掘り込み面が浅く、住居跡に伴うと思われる遺物は男確でない。

7号住居跡出土土器 (25～42)

ピット2から27・28・41が、ピット5から40・42が出土している他は、覆土からの出土である。隆I、II系列の土器(25・26・27等)が比較的多く目立つ。また繩III系列(40)がみられることも押えておく必要がある。隆I系列の中で波状の土器は数少ないが、ここで2個体出土していることも当住居跡の特色としてとらえることができる。

7A号住居跡出土土器 (43～96)

多くの土器が出土しているが、ほとんどが覆土からの出土である。出土土器の中では、いくつかの系列の土器がまとめて出土している。まず繩VI系列の土器(46・47・54)である。46・47は先端がはっきりしない。また54は台形となる。51は繩VII系列で明確に舌状隆帯は認められないが、口縁部には典型的な入字状突起が付されている。61は繩I系列で、舌状隆帯及び沈線による文様構成であるが、眼鏡状把手は認められない。45・50は繩VII系列で、沈線による三角区画で有筋沈線がみられる。同様の沈線・ヤザミを付すのが62である。ほぼ完形で底部を欠損する。口縁部は梢円区画を基本としている。53は繩VII系列である。口縁部には玉抱き三叉状の突起がある。胸部は斜方向の区画である。隆Ia系列では隆Ia系列の60、(48?)

4 遺 物

がある。43は系列が明確でない。胸部はやや幅広の隆帯で縦に文様区画を行っている。隆帯はU字状・逆U字状をとる。浅鉢では、くの字状の器形となる浅Aの北陸系列がほとんどである。96は輪状となるもので、口縁部玉抱き三叉状・キザミが付される。全面磨きがかけられ、無文でなめらかである。95は関東系の浅鉢と考えられる。

7 B 号住居跡出土土器 (97~120)

すべて覆土からの出土である。隆帯系の土器が比較的まとまって出土している。97は隆IIの系列の土器である。口縁部・胸部に渦巻文を用いている等は信濃川流域の火焔型土器に近いと思われる。口縁部には入字状の突起が付される。また胸部は無文部を多く残している。98・99・102は隆I系列で、胸部に横区画はみらない。98の口縁部には深いベン先状刺突がみられる。また各渦巻文にはさまれた無文部には(玉抱き)三叉文が多く充填される。99は口縁部に入字状把手が付される。胸部は基隆帯による文様区画で、胴下半は逆U字状隆帯が見られる。102では梢円区画の中に刺突文が充填される。

7 C 号住居跡出土土器 (121~139)

覆土中よりかなりまとめて出土した土器をみている。隆帯系では、121・122・123・134等がある。121では、渦巻の中心に眼鏡状把手がみられる。また胴下半部には網文の施文も認められる。口縁部の下端には爪形文がみられる。126は口縁部に入字状突起を有し、縦の沈線は有筋となっている。129は中央に縦の幅広無文帶を有している。127は関東勝坂系の土器である。色調は暗赤で、他の土器とは胎土も区別されるものである。四足脚付の深鉢である。四足は接地部でつながっており、獸足様沈線が施文されている。上は口縁部及び調節部共に球体がつぶれたような器形である。頭部に大きな眼鏡状把手及びそれに連続して口縁部に大きな透し彫状の突起が付される。胸部は円形・三角状区画のパネル文で、区画内には細い沈線が充填される。また隆帯上には爪形文もみられる。口縁部には交互刺突状の隆帯・円形竹管文等がみられる。7 C号住居から出土したのは、このうち口縁部の一部で、脚は小F P25号より、把手部は、他の小ピットより出土している。

7 D 号住居跡出土土器 (140~162)

いずれも覆土からの出土である。ここでは隆III系列の土器 (140・141) が比較的目立つ。146は網VI系列で大きな波状口縁となるものであるが全体の器形は不明である。150は隆帯のみのY字状文様。151は口縁部にS字状に近い突起を有し、他は沈線による区画文様である。157は折返し口縁である。浅鉢では関東系列と考えられるのが158、北陸系と考えられるのが159~161である。

8 A 号住居跡出土土器 (163~216)

覆土中より多くの土器が出土しており、土器捨て場的様相である。163は床直からの出土で隆Ib系列の土器である。口縁部には4個の三角形状の突起を有している。胸部は基隆帯によるモチーフで端部に眼鏡状把手が付される。また梢円区画内に列点状刺突があり、他に玉抱き三叉文・三角形の交互印刻等がある。これと同系列の土器が164・172・173等である。166は、三角形区画を基本とする文様モチーフで網III系列に分類できる。三角区画内には玉抱き三叉文・斜行細沈線がみられる。頭部には頸状隆帯がめぐる。166と同様の器形を取るのが175である。頭部から胴部にかけてY字状隆帯が垂下する。口縁部にはキザミが付される。また網II系列も3個体とまとめて出土をみている。180の口縁部文様帶は173と共通する。167・168は同器形をとるものであり、文様では隆IIIa系列に属する。188・189は網III系列で、188には頸状隆帯が付される。196は撲糸文であるが、口縁上端のみ斜方向にしている。浅鉢はすべて北陸系である。当住居跡出土土器は量もさることながら、器種・系列も多岐にわたる。

9 B号住居跡出土土器 (217~228)

すべて覆土からの出土である。出土遺物はあまり多くない。217は、陸IV系列の土器である。基隆帯による横S字文が特徴である。同様の文様構成をとるものは32-Gグリッドでも出土している。222は縄IIId系列の土器である。突起の数は3又は4個になると考えらる。223も217と同系列とした。224は、文様等に類似が見られない、2本一組の半隆起線により文様を描いている。

10 A号住居跡出土土器 (229~252)

235が埋甕として使用されていた土器である。縄VI系列の土器である。Y字状隆帯・角押文が見られる。その他の覆土からの出土である。229は関東勝坂系の土器である。色調は暗赤で他と区別される。文様はキタビラ文・爪形文・ベン先状刺突である。また沈線は角押文風となる。他に237も勝坂系列である。233・234・238・239・236等も沈線部にキザミを多用している。242は縄VII系列で隆帯及びワラビ手様の文様が特徴である。

10 B号住居跡出土土器 (253~270)

出土土器はあまり多くない。261は眼鏡状把手に半隆起線による縦区画を行っている。

11号住居跡出土土器 (271~289)

他の住居跡との切り合いもなく、単純な堅穴住居跡で、すべて覆土一括資料である。破片であるが隆帯系列 (271~276) が比較的目立つ。また277・281は縄VII系列で、クランク様の文様が特徴である。283は縄IX系列で領状隆帯が頸部にめぐっている。

12号住居跡出土土器 (290~298)

当住居跡出土土器及び20号住居跡出土土器については、取り上げ及びその後の整理過程における処理に問題があり、住居跡出土資料としては良好でない。それを前提として土器の説明を加えておく。290は胎土等勝坂系と考えられる土器である。口縁部に4個の中空半球状突起がつき、円形竹管文が付される。胴部は縦半隆起線文である。291は隆帯上にすべてキザミを付する土器である。298は北陸系の浅鉢、291は小形浅鉢で赤彩及びウルシ (?) が見られる。

13号住居跡出土土器 (299~313)

覆土からの出土である。隆帯系列では、口縁部と胴部を横帯区画する隆IIa系列の土器 (299~302) に良好品がある。299は隆帯系とは言え、隆帯にふくらみはなくすべて同じ太さ高さの扁平隆帯である。隆帯は比較的密に充填される。一方302は主要モチーフに基隆帯を用い渦巻文を基調としている。口縁部には渦巻状の環状突起が見られる。300・301は同一個体と考えられる。305は有孔鉢付土器の胴部である。中空の眼鏡状把手が付されている。また外面には赤彩が施される。304は関東阿玉台系の土器と考えられる。複列の連続刺突及びY字状隆帯が見られる。308は縄VII系列でワラビ手状の文様が見られる。

14号住居跡出土土器 (314~360)

ほとんど破片が多く、まとまった土器の出土はない。314・315は隆IIa系列である。いずれも口縁部に第一文様帶を有する。316~323は同じく隆帯系であるが破片のため詳細は不明である。322・323等は梢円区画内に円形刺突が充填される。329は縄VII系列の土器である。頭部にX字状隆帯及び隆帯による梢円区画である。区画内には波状沈線が充填される。324・325は関東勝坂系の土器でキタビラ文・ベン先状刺突が見られる。330~345は隆帯上にキザミ又は沈線部にキザミの付されている土器である。バラエティーがあり一様にはまとめることができない。345は口縁部に入字状突起が付されている。344は直線的に開くA器形である。隆帯によるクランク様の区画で、隆帯にそって有節沈線が見られる。

4 遺物

15号住居跡出土土器 (361~385)

361が埋甕、365が床直、369・375がピットからの出土である。361は頸状隆帯がY字状に垂下するもので、口縁部下には鋸齒状沈線がめぐる。362は、361と同器形となり、やはりY字状隆帯が垂下している。口縁部は橢円区画で、区画内には沈線が充填される。365は隆帯系列で胴下半部である。基隆帯による縦区画で中を逆U字状に区画している。364は関東阿玉台系の土器と考えられる。363は頸部にキザミの付される隆帯がめぐる。367・368は沈線のみによる文様区画である。浅鉢ではAタイプばかりで、数の多さが目立つ。文様はすべて北陸系である。この中では爪形文を使用しているもの(376・381・382・383・384)とそうでないものがある。

16A号住居跡出土土器 (386~398)

16号住居跡はA~Fの5基が確認されたが、住居跡に伴うと思われる遺物の確認されたのは、この16A号住居跡のみである。386・387・393・398がピットからの出土である。386・387は隆帯系列であるが、386は沈線による同心円文、387は扁平隆帯で、隆帯上にキザミが付される。その他388~392も隆帯系列である。393は縄IIb系列で橢円区画を口縁部にもつものである。区画内には鋸齒状沈線が充填される。394・395は頸状隆帯を有する縄IX系列である。394は、口縁部第一文様帶のくの字状に張り出した部分に頸状隆帯がめぐる。口縁部第二文様帶は、地文が縱撚糸文で、小波状の連弧文がめぐる。395は無文である。396は小形の深鉢で、太めの沈線による区画である。397は頸部に刺突がめぐり、口縁部は縦及び斜の沈線である。

18号住居跡出土土器 (399~428)

18号住居跡もA~Cの3つの住居跡が重複している。土器については18号住居跡として扱うが、3住居跡のうちどれに属するか明らかでなく、遺構資料としてはやや劣る。399~404・406・408が薩帯系列の土器である。399は口縁部無文帶で突起を有する。胴部は縦区画で、その中に渦巻文が充填される。400は縄V系列で、胴下半に横区画が見られる。口縁部は隆帯による橢円区画で、区画内に斜行沈線が充填される。胴部は縦に流れる渦巻文で、三叉文等も認められる。401は縄II系列である。胴部は基隆帯による縦区画で399と同じ文様構成をとる。402は器形が明確でないが、眼鏡状把手が見られる。409は縄IIa系列で、隆帯による橢円区画である。区画内は縦の細い沈線が充填される。410・411は同一個体と思われる破片で縄III系列の土器と考えられる。413は頸状隆帯をもつ縄IX系列の土器である。418は無文で輪積み痕を明確に残す。424は関東阿玉台系と考えられる。Y字状隆帯が垂下し、爪形状の刺突が見られる。

19号住居跡出土土器 (429~438)

すべて覆土からの出土である。429は縄IV系列の土器である。口縁部には渦巻文が見られる。438は浅鉢C類で関東系と考えられる。

20号住居跡出土土器 (439~466)

12号住居跡で説明したように遺物の取上げに問題があり、覆土資料としては、あまり有効でない。439~448が薩帯系列の土器である。439は縄V系列で類例は少ない、関東の勝坂式的な文様構成と言える。主要モチーフは基隆帯によっている。440は縄Ib系列の典型と言えるものである。基隆帯により渦巻文等の文様を描いているが、無文部は少なくなっている。445~447は沈線部にキザミを有するものである。縄文系列では胴部に沈線のみ用いた452・453がある。いずれも縦又はクランク様の文様区画である。456は頸状隆帯を用いている。465の浅鉢は無文でC器形である。

21号住居跡出土土器 (467~482)

いずれも覆土からの出土である。467~471が薩帯系列の土器である。467は、縄IIa系列の土器で、口縁部

には鎖状隆帯がめぐっている。また口縁部には入字状突起が見られる。口縁部及び胴部の文様は半隆起線文によるもので、胴部に縄文も見られる。468~471は隆Ic系列と考えられる。470では口縁部に眼鏡状把手がある。472・473は他に類例がなく系列不明である。波状の口縁で縦の細い隆線が並ぶ。縦隆線は蓮華文風の文様構成をもつ。476・477・480はいずれも縄文系列で沈線のみで文様を描いているものである。476はワラビ手状の文様である。478は沈線による文様を基本にしているが、口縁部に鎖状隆帯、またそこからS字隆帯が垂下している。479は隆帯による連弧文が口縁部をめぐっている。482は浅鉢Aである。

23号住居跡出土土器 (483~513)

すべて覆土の出土である。この中で499は、柱穴列群の外側で出土しているため23号住居跡出土とするにはいささか問題がある。483~488が隆帯系列の土器である。483は波状口縁で隆IIb系列の土器である。胴部は眼鏡状把手により4単位に区画され、眼鏡状把手から細い渦巻文・直線文が垂下している。三角部分には玉抱き三叉文が充填される。口縁部は4単位でやはり横渦巻文が主文様となっている。頂部・谷部には眼鏡状把手が付され、三角部分には玉抱き三叉文が充填される。484は隆Ib系列である。口縁部は開きが小さく、眼鏡状小把手が付く。口縁部文様は隆帯による楕円区画で、区画内は三角印刻による鋸歯状文である。胴部は基隆帯による縦及び三角形区画で、区画内には玉抱き三叉文等が充填される。485・486は隆II系列になると考えられる。485では無文帯を多く残しており、区画内は部分的に矢羽根状沈線が充填される。488は隆III系列の土器で、高台付になる可能性がある。口縁部には入字状突起が付され、口縁は楕状把手により楕円区画される。区画内は細沈線により充填される。胴部には眼鏡状把手が付され、そこから隆帯がのび、渦巻文を作っている。区画内には細沈線が充填される。489は縄V系列の土器である。当遺跡で爪形文の使用頻度は少ない。口縁部にはS字状に近い鋸歯状の把手が付される。口縁部上端に爪形文がめぐり、縦の沈線が付される。胴部はY字の隆帯が垂下する。493は胴部に有節沈線及び矢羽根状沈線が施される。496は典型的な縄IX系列で鎖状隆帯をもつものである。頸部一本めぐり、胴部には斜方向に2本一组のものが2単位めぐる。500は縄文のみの深鉢であるが、口縁にそってキザミがめぐるもので類例は少ない。

26号住居跡出土土器 (514~530)

破片のみでまとまった土器の出土はない。514~519が隆帯系列である。522は矢羽根状沈線が見られる。

27号住居跡出土土器 (531~538)

個体数は少ないが伊の周辺から良好な資料が出土している。531は類例のない土器である。細長い胴部にくの字状の口縁をもつ。口縁部には4単位の小波状突起が付される。口縁部は隆帯による楕円区画を基本として文様区画を行っている。区画にそって有節沈線がめぐっている。胴部は縄文のみである。532は半隆起線文による文様で口縁部は楕円区画を行っている。沈線の片側端部にはキザミがめぐっており、どちらかといえば北陸新崎式の要素をもつ土器である。533は鎖状よりはむしろキザミを付した隆帯をもつ土器である。器形は典型的なB器形である。くの字状に外反する口縁部には連続山形の隆帯がめぐり、隆帯にそり沈線には部分的に沈線端部にキザミが付される。胴部にはキザミの付された隆帯が垂下している。535は縄VII系列の土器である。4単位の波状口縁で突起部には円孔がある。口縁及び頸部にそって半隆起線文がめぐる。口縁円孔部分は玉抱き三叉状となる。口縁下半及び胴部は羽状縄文となっている。536は隆帯系列の土器である。口縁部には環状の突起が付される。口縁部文様帶は隆帯による楕円区画で区画内の沈線部には三角形の刺突が見られる。胴部は基隆帯により主要モチーフを描いている。楕円区画内には刺突が施される。537は口縁下部に有節沈線が見られる。また胴部には舌状隆帯がある。縄I系列の土器である。

28号住居跡出土土器 (539~577)

すべて覆土からの出土である。炉の周辺より多くの土器が出土している。539・546が隆II系列の土器である。539は口縁部上端に4個の突起を有するが剥落のため形状は不明である。口縁部第一文様帯は横方向の半隆起線文で環状突起により4単位に区画される。口縁部第二文様帯はやはり4単位区画で区画内にはS字状の基隆帯があり、三角部分は三叉文で充填される。頸部は無文帯で4個の環状突起が付される。胴部は逆U字状の基隆帯で4区画される。546は小ぶりで波状口縁の土器である。口縁部は有節沈線による横S字文、胴部は斜渦巻文による文様でやはり有節沈線によっている。三角部分には玉抱き三叉文が充填される。540～545は隆II系列の土器である。無文部を残すものが多く、三叉文等が充填されている。547は口縁部が無文帯となるもので類例は少ない。554・555・557は頸状隆帯を用いた土器である。554・555共に口縁部下端に頸状隆帯が一周し、口縁部は隆帯による楕円区画となっている。557は口縁部上下端に頸状隆帯が一周し、その間を隆起線文、三叉文等で充填している。331は小型の浅鉢で類例はない。沈線による渦巻文、三叉文等が見られる。

29号住居跡出土土器（578～582）

すべて覆土からの出土である。578は鉢で他に類例は認められない。基隆帯及び半隆起線文で文様を描いているが、基隆帯はあまり高くない。渦巻文を基本としているが、文様単位はあまり明確でない。579は有節沈線の土器である。582の浅鉢は口縁部楕円区画で区画にそって複列の刺突列がめぐる。

30号住居跡出土土器（583～605）

良好な覆土資料が出土している。583～586が隆II系列の土器である。いずれも基隆帯をモチーフに三角形区画、渦巻文を描いている。また空白部分にはいざれも（玉抱き）三叉文が充填されている。588・590は繩IV系列の土器である。588は口縁部に小ぶりの入字状突起が付されている。口縁は隆帯による楕円区画で胴部も横帯区画となっている。隆帯上にはキザミが多用される。590は口縁が波状で内面にも8の字状隆帯が見られる。胴部は隆帯及びそれに添った沈線による文様区画で、隆帯に沿ってキザミが付される。589は繩文の付されない隆II系列の土器である。波状口縁で環状突起が付される。胴部は沈線による横帯区画で区画内に斜行沈線が充填される。593は爪形文の付される繩V系列である。また595はワラビ手状文の付される繩III系列の土器である。

31号住居跡出土土器（606）

炉脇のピットからの出土である。ほぼ完形に近い。口縁部には小突起が付され、第一文様帯は隆帯による楕円区画、第二文様帯は頸部と波状沈線により胴部と区画されるが、口縁部から4単位に隆帯が垂下するのみである。胴部もY字状波状隆帯が垂下するのみである。繩III系列である。

33号住居跡出土土器（607～614）

いざれも覆土からの出土である。607はつぶれた状態で出土している。口縁部には低い台形様把手が付される。この把手は阿玉台Ib式の把手に形状が共通する。口縁部は隆帯による楕円区画で、区画にそって爪形文がめぐる。胴部は撲糸文である。608・609はいざれも波状部にキザミ、区画内に波状沈線を充填する等の特徴が見られる。611も隆帯上に細い沈線が見られる。

35号住居跡出土土器（615～620）

出土土器は少ない。615は隆II系列で胴部に眼鏡状把手が付される。胴部は基隆帯による横S字文である。620は北陸系浅鉢で爪形文が用いられている。

37号住居跡出土土器（621～634）

隆II系は非常に少ない。621は爪形文を有する北陸系の深鉢である。623は大きな波状口縁をもつ繩VI系

列の土器である。文様は波頂部で縦隆帯に文様区画される。隆帯上には爪形状のキザミが付される。区画内には小刺突が充填される。625も波状口縁の土器であるが縦VII系列の土器である。波頂部は玉抱き三叉文となり、隆帯上にはキザミが付される。また胴部にも玉抱き三叉文が見られる。626は他に類例の見られない土器である。口縁部はカリバー状となり突起を有するが突起の形状は不明である。口縁部は2段の隆帯による横円区画によっており、隆帯上にはキザミが付されている。区画内には鋸曲状沈線が充填され、胴部にはY字状の隆帯が垂下し、隆帯上にキザミが付される。縦VIII系列の土器である。629もカリバー状の器形をとる。文様構成上は北陸系に分類される。口縁部には円孔突起が1個付され、口縁部にそって爪形の刺突があぐる。胴部には半隆起線が垂下する。627はA器形の深鉢で撫糸地文上に半隆起線文による横帯区画が数段にわたり行われている。628も口縁部は隆帯による横円区画が行われるが、区画単位は不明である。区画内には鋸齒状沈線が充填される。632は縦IX系列で領状隆帯を用いる土器である。口縁部は無文で小突起が4個付され、頸部には領状隆帯、またはそこからY字状隆帯が垂下している。633は口縁部台形様突起が口縁部に4個付され、中央に円孔が穿たれる。また口縁にそって半隆起線文があぐる。634は浅鉢Aタイプで、文様は爪形文及び玉抱き三叉文である。

38号住居跡出土土器 (635~655)

出土遺物はあまり多くない。取り上げた遺物は、炉が確認されてから、住居跡として遺物をとり上げたためほとんどが炉の周辺のものである。したがって住居跡覆土すべてではない。635は斜格子目をもつ口縁部破片である。五領ヶ台系統であろうか。636~642が縦帯系列である。636は口縁部第一文様帶に環状渦巻状突起が付される。第2文様帶は基隆帯により4単位区画され、区画内には渦巻文、三叉文等が付されている。下部に基隆帯がまわっていることから隆II系列と考えられる。637はかなり入り組んだ文様構成になっており、隆I系列かと考えられる。

39号住居跡出土土器 (656~660)

出土遺物は少ない。656は縦VI系列の土器である。波頂部は台形様となる。隆帯上には八の字状のキザミが付される。657は隆I系列の土器であるが、無文部を多く残し、沈線のみの縱文様区画である。660は浅鉢A器形である。半隆起線文による文様である。

40号住居跡出土土器 (661~666)

住居跡は40Aと40Bの2棟が重複しているがどちらの住居跡に属しているか明確でない。縦文のみ又は無文の土器が目立つ。662・663は縦の撫糸を用いている。666は勝坂系の土器でキャタピラ文である。668の浅鉢では爪形文が用いられている。

41号住居跡出土土器 (669~687)

41A・B住居跡がほぼ重なるように検出されたため、どちらかの住居跡に属するか定かでない。遺物は石圓炉のある南側で圧倒的に多く出土しており、ほとんどが覆土からの出土である。669~673が縦帯系の土器である。669は縦Ic系列の土器で口縁部には入字状の突起が付される。口縁部は基隆帯による渦巻文等で眼鏡状把手が付される。670は半隆起線文による文様で矢羽根状沈線等が認められる。672も類似するもので同一個体の可能性がある。673は縦帯にそってベン先状刺突があぐっている。679は口縁部が弧状に抉れているもので、頸部及び口縁部に領状隆帯があぐる。口縁部下半には縦沈線が入る。また無文土器(678・680~683)が比較的目立つ。浅鉢ではB器形も見られる。

43号住居跡出土土器 (688~705)

ほとんどが堅穴状掘り込み部からの出土で、多くの土器が出土している。688・691が縦帯系列の土器で

ある。688は口縁部に眼鏡状の把手を有するもので、口縁部は基隆帯の渦巻文及び玉抱き三叉文である。691は大形の土器である。隆Ib系列に属する。口縁部第1文様帶は大きな環状突起により大きく4単位区画され、各々の把手間は横陸起線文である。胴部は斜に流れる基隆帯が端部で渦を巻く。三角部分には玉抱き三叉文が多く充填される。また下半部には網文が付されている。689は胴の張る器形で東北地方に見られる文様構成である。口縁部には大きな円孔把手が付される。頭部には断面三角形状の隆帯による細長い精内区画が2段見られる。また胴部には逆U字状の連弧文が一周している。690は鎖状隆帯をもつ縄IX系列の土器である。口縁部は無文で、連續山形の鎖状隆帯がめぐる。また頭部にも鎖状隆帯が用いられる。692・693は、キザミを多用する土器である。450は一応縄IV系列の土器とした。口縁部は隆帯による三角区画で区画内には玉抱き三叉文が充填される。697はワラビ手状文を用いた縄III系列の土器である。700は扁平隆帯上に細かいキザミが付される。699は口縁部が鋸齒状となっている。702は沈線端部にキザミの付される土器である。703~705は浅鉢で、いずれも爪形文を用いている。

大FP4号出土土器 (706~708)

707は沈線による縦区画であるが、部分的に有峰沈線を用いている。708は隆帯系の土器で基隆帯を用いており、三叉文が見られる。

大FP6号出土土器 (709)

台付土器である。頭部に2本沈線が見られる。

小FP28号出土土器 (710~714)

土坑内に投棄された状態で出土している。710は倒立の状態での出土で、ほぼ完形である。隆帯IIb系列の土器である。口縁部には円孔のある入字状突起が4個付される。口縁部は基隆帯による7個の渦巻文で空白部分には三叉文が充填される。頭部には眼鏡状把手が4個付される。胴部上半も渦巻文を基本とした文様がくりかえされ、下半部は半陸起線文による逆U字状文で無文部を残している。711はカリバー状の器形で、口縁部にのみ文様帶を有する土器である。口縁部には円孔の把手、コイル状の突起が付され、各突起を横の陸帯線文がつないでいる。胴部は無文である。712は口縁部が鋸齒状となる。

小FP8号出土土器 (715)

715は隆帯系の土器である。胴下半部不明のためI・II系列の別は不明である。基隆帯及び沈線の文様によっている。

小FP20号出土土器 (716)

口縁部破片で口縁端部にキザミが付される。沈線による方形区画である。

小FP17号出土土器 (717)

深鉢下半部である。

TP22号出土土器 (718~720)

TPにおいて確認されている土器は、いずれも流れ込みによるものと考えられ、TP構築時期を反映しているとは考えられない。718は口縁部破片である。キザミの付された隆帯による三角区画で、区画にそって沈線が充填される。720ははりつけ隆帯による文様で、玉抱き三叉文が見られる。

TP23号 (721)・TP19号 (722) 出土土器

いずれも網文のみの土器である。

土坑出土土器**土坑5号出土土器 (723・724)**

深鉢底部(723)及び浅鉢(724)が出土している。浅鉢は口縁部下に棱を有し、口唇部には沈線がめぐる。

土坑7号出土土器 (725~727)

やはり深鉢(726・727)及び浅鉢(725)が出土している。725は北陸系A器形の浅鉢である。爪形文及び玉抱き三叉文が見られる。縦半隆起線束により4単位に区画される。土坑東側隅に伏せた状態で出土している。726は波状4単位の深鉢で波状部に円孔がある。727は口縁部に円孔の突起が見られる。

土坑27号出土土器 (728・729)

いずれも深鉢である。728は深鉢胴下半の土器でU字状の隆帯により文様区画され、隆帯にそっては有節沈線がめぐっている。729の深鉢は内面頸部に棱が見られる。

土坑26号出土土器 (730)

爪形文を有する縄V系列の土器である。爪形を用いるものの北陸系の土器とその様相を全く異なる。口縁上部には小突起が付される。口縁部には基隆帯により主文様を付し、基隆帯にそって爪形文・半隆起線文を施している。胴部も同様の文様を用いているが爪形文は見られない。

土坑29号出土土器 (731)

小形の縄文深鉢である。口縁部には小突起が用いられ、727と共通する。

土坑9a号出土土器 (732)

やはり小形の深鉢である。口縁部を欠損する。

土坑32号出土土器 (733)

胴部のふくらむ小形深鉢である。隆帯及び有節沈線を多く用いている。また眼鏡状把手風の把手も見られる。地文には一部縄文が見られる。

土坑45号出土土器 (734)

やはり胴部のふくらむ小形深鉢である。口縁部無文帶で小波状となる。胴部は縦半隆起線文で4単位区画される。

土坑47号出土土器 (736)

やはり小形の深鉢である。全面縄文である。

土坑49号出土土器 (735・737)

735は基隆帯及び半隆起線文による渦巻文と考えられる。737は全面縄文で口縁部を欠損する。

その他のピット出土土器 (741~756)

その他のピットから出土した土器を一括する。各々が1個づつの出土のため、土器説明は通じて行う。詳細は一覧表を参照されたい。741は口縁の張り出し部分が突帯となり、その脇に有節沈線がめぐる。口縁部隆帯にそつては交互列点刺突がめぐっている。頸部には鋸齒状の沈線がめぐり、胴部にも鋸齒状の沈線による縦横の区画が見られる。742には口縁部に横沈線が数条めぐる。743は隆帯による三角形区画である。744は口縁部に入字状の突起が付され、有節沈線が用いられる。746は関東勝坂系の土器でキャタピラ文、三角形刺突が見られる。749は北陸A器形の浅鉢である。爪形文及び三角印刻が認められる。751は底部を欠損する。口縁部は隆帯による三角形区画で区画内には玉抱き三叉文が見られる。また隆帯にそつて有節沈線がめぐっている。胴部には逆U字状の隆帯及び蛇頭状の隆帯が交互に見られる。752は隆I系列の土器で斜方向の文様区画を行っている。753は胴部の張る小形の深鉢である。口縁部に台形様でややひねった突

4 遺物

起を有する。胴部は隆帯による逆U字状区画で、三叉文等が見られる。

グリッド出土土器 (図版110~146・282~295)

26-C区出土土器 (757~763)

757~759はいずれも頸状隆帯を用いた縄IX系列の土器である。757では沈線部に刺突が見られる。758では頸状隆帯の他に幅広の波状隆帯が垂下している。750~762では隆帯上にキザミが付される。763は口縁部に付く把手で沈線部にキザミが付される。

26-D区出土土器 (764~789)

764~768が関東勝坂系の土器である。キャタピラ文及び三角形刺突が用いられている。765はすべてがベン先状刺突によっている。769~772・774~777は縄Ⅷ系列の土器で有節沈線やキザミを多用する土器である。この系列では眼鏡状把手が用いられる場合が多い(771, 772)。779は口縁部に横円区画が見られ、区画内に波状沈線が充填され、有節沈線も見られる。780は縄I系列の土器である。幅広隆帯にそっては有節沈線がめぐっている。781は口縁部隆帯による三角形区画である。縄VII系列と関係があろうか。

26-E区出土土器 (790~826)

791は関東勝坂系の土器で、ベン先状刺突が見られる。790~792は有節沈線を用いているが、文様構成が明確でない。793~795・797~800が隆帯系列の土器で、795が隆IIa系列の可能性がある他はすべて隆I系列である。796は、778に共通する文様構成をもっている。800では横円区画内に刺突が見られる。801は口縁部突起である。802は隆帯にそってキザミがめぐる。また805も同様である。806は波状の幅広隆帯が垂下している。807は大木系の土器で、はり付け隆帯による文様である。808は沈線のみによる文様でクランク様区画である。浅鉢では819・820・822~824がA器形、821がB器形、825がC器形である。

26-F区出土土器 (827~829)

828~829は浅鉢A器形で北陸系の土器である。

27-B区出土土器 (830~843)

830は関東の雲田気をもつ土器である。口縁部は半隆起線文による方形区画で、区画内に半隆起線による沈線が充填される。また胴部は基隆帯による縱区画で、区画内にはやはり半隆起線による横又は斜の沈線が充填される。基隆帶上には爪形文が付される。831~832は同一個体と考えられる関東勝坂系の土器である。831は口縁部に、橋状把手が付される。また円形に近い区画内にキャタピラ文、ベン先状刺突がめぐる。胴部には横沈線及びベン先状刺突がめぐる。833は小波状口縁で、口縁部は隆帯による横円区画のある縄II系列の土器である。区画にそっては有節沈線がめぐる。838はY字状の隆帯である。841には交互指揮えによる小波状隆帯が垂下する。

27-C区出土土器 (844~857)

844は隆I系列の土器である。基隆帶による曲隆線で眼鏡状把手を有する。幅広の縦無文帯を残している。空白部には三叉文等が充填される。846は縄V系列の土器である。口縁部は半隆起線束が一周し、胴上半には三角形区画が見られる。区画内には玉抱き三叉が充填される。848は、隆Ⅴ系列の土器である。口縁上部には三角形状の突起があり、口縁にはX字状突起及び眼鏡状把手が見られる。口縁部は基隆帶による横円区画で、区画にそっては有節沈線がめぐる。胴部も基隆帶による縦・斜区画で、区画にそっては有節沈線が走る。区画内には波状の細沈線が充填される。845~847は同一個体と考えられる。845は口縁部破片で縄II系列に近い。キザミの付された沈線が2本一周する。847は胴部で有節沈線がめぐっている。849は頸状

隆帯を用いる縄IX系列の土器である。口縁沈線部にはキザミが付される。胴部は沈線による縦区画である。854は無文である。856の浅鉢は椭円区画で区画にそって沈線またその中を横方向刺突で充填している。

857は、三角形印刻を交互に連続させている。

27-D区出土土器 (858~865)

858は全面縄文であるが、口縁部に頸状隆帯が縦に走る。859は胎土・文様に関東勝板的な雰囲気がうかがえる。口縁部は無文で、隆帯上には爪形文が付される。下半部には弧状の隆帯が見られ、隆帯にそってキヤビラ文がめぐる。860~863は同一個体と思われる。刻みのある隆帯及び兩垂状の刺突である。864は縄II系列の土器である。隆帯による椭円区画の中を斜行沈線で充填し、部分的に三叉文が見られる。865はB器形の浅鉢と思われる。

27-E区出土土器 (866~855)

866は爪形文をもつ波状口縁の深鉢で北陸系の土器である。このような北陸系の爪形文を有する土器は少ない。867~869・870・878・871・900は隆帯状に爪形文の刺突をもつ縄V系列の土器である。870・878・871は刺突に近い。895は大きな波状口縁となるもので866に近い。中央には玉抱き三叉文が見られる。900は口縁部破片で隆帯による三角形区画である。871~873は口縁部にのみ文様帯をもつ土器で縄II系列である。873は頸状隆帯をもつものである。880は波状口縁の土器で、沈線部にキザミを有する。881~884は胴部に頸状隆帯をもつものである。896~899は隆帯系列の土器である。いずれも基隆帯により主要モチーフを描いている。901は類例のない土器である。口縁部を欠損する。胴部は細い沈線又は有節沈線ではば等間隔に斜方向に引かれている。903は隆帯による椭円区画で、区画にそって有節沈線がめぐる。区画内には複列の刺突が入る。904は隆皿系列の土器と思われるが、むしろ勝板的であろうか。908は高台である。914は関東阿玉台系の土器である。隆帯にそって複列の有節沈線がめぐる。912はいわゆる有孔飼付土器である。隆帯による文様である。944は隆帯系列であるが胴張りの器形で類例は少ない。口縁部には八字状の突起が2個付される。また胴部は隆帯による文様で、隆帯上には爪形文が付される。945は縄文地に沈線のみの文様構成で隆帯は用いていない。口縁部に突起が付されるが形状は明らかでない。口縁部は、コの字状の沈線を向かい合わせに交互に連続させている。また胴部も縱横の構成である。縄X系列の土器である。946は隆Ib系列の典型である。胴部は縦区画を基本とするが、区画内は斜方向の渦巻である。また三角部分に玉抱き三叉文が充填される。947は口縁部を欠損する。文様技法自体は関東勝板的系に近い。頭部は無文帯で沈線端部に爪形文を連続に刺突している。胴部は沈線による相対する弧文で4単位としている。三角部分には玉抱き三叉文が充填される。やはり沈線端部にそって爪形文の刺突が施される。948は関東阿玉台系の土器である。口縁部大きな隆帯による椭円区画で、区画にそって複列の連続刺突がめぐり、同一工具による波状文が充填される。頭部は沈線による鋸歯状文、胴上半は口縁部と同じ椭円区画で、それ以下にはY字状隆帯が垂下する。953は口縁部に入字状突起が見られ、また眼鏡状把手が付される。955は、頭部に頸状隆帯が付される。928~943が浅鉢である。928~936がA器形の土器で爪形文を主文様としている。また937~941がB器形で横沈線が多い。

27-F区出土土器 (956~996)

956~958は隆帯系列の土器である。959は半隆起縞文による弧線文で沈線端部にキザミが付される。また玉抱き三叉文も見られる。960も類例は少ない。口縁部には八字状の変形した突起が付され、口縁部にそっては連続のキザミが付される。962は関東阿玉台系の土器である。胎土も明確に区別される。幅広の太い沈線が逆U字状に垂下し、区画にそって複列の沈線が走っている。965は隆皿系列の土器である。口縁部には

4 遺 物

キザミのある弧状の突起が付され、口縁部、胴部には眼鏡状の把手が見られる。文様区画は沈線によっており、区画内には斜行沈線が充填される。966は地文に纏文をもつもので纏I系列の土器と考えられる。文様区画は幅広の隆帯によっており、区画にそって有節沈線がめぐらっている。また眼鏡状把手も付されている。977は関東阿玉台系の土器で、波状口縁の突起部である。隆帯にそって複列の連続のキザミが走る。978は北陸系波状口縁の土器である。口縁にそって爪形文がめぐらす。979は口縁部に環状と思われる突起が付され、口縁部は隆帯による梢円区画である。区画にそって有節沈線がめぐらす。区画内には波状沈線が走る。胴部にはY字状隆帯が垂下する。980は口縁部沈線による梢円区画で、頸部に鎖状隆帯がめぐらす。984は爪形状の刺突である。

27-G区出土土器 (997~1000)

997は纏I系列の土器である。舌状の隆帯及び眼鏡状把手が付される。隆帯にそって有節沈線が見られる。999は台形様の把手で複列の刺突列が見られる。

28-C区出土土器 (1001~1002)

1001は口縁部に細い鋸歯状の隆帯が見られる。また1002は、半隆起線文による口縁部縦区画である。

28-D区出土土器 (1003)

底部を欠損するが、ほぼ完形に近い土器である。口縁は台形状の波状4単位となる。把手の端部には鎖状の抉りが認められる。口縁部には幅広隆帯による渦巻文、X字状隆帯が付され、また隆帯にそっては刻みや沈線が付される。胴部には隆帯・沈線が垂下する。地文は燃糸しである。纏VI系列の土器である。

28-E区出土土器 (1004~1015)

1004は口縁部破片で鎖状隆帯及び隆帯による梢円区画をもつ土器である。区画内には縦に有節沈線が充填される。1004は纏I系列である。1008は鎖状隆帯をもつ纏IX系列の土器である。

28-F区出土土器 (1016~1026)

1016~1018は隆帯系列の土器である。1016は纏I系列と考えられる。胴上部に眼鏡状把手が付される。無文帯を比較的多く残す。1017は隆帯上にキザミが付される。1026は鎖状隆帯をもつ纏IX系列の土器である。

28-G区出土土器 (1027~1042)

1027は大形波状口縁の土器で纏VI系列の土器である。口縁上端部には波状のはり付け隆帯が付される。口縁部は隆帯による三角区画で、区画にそってキザミのある沈線が走っている。区画内には三叉文が充填される。1032は阿玉台系の影響を受けた土器と考えられる。隆帯による梢円区画で、区画にそって爪形状の刺突がめぐらす。1033も同様と考えられ、隆帯状にキザミ、隆帯にそって複列のキザミがめぐらしている。1036・1037は纏II系列の土器である。1036は平口縁で、隆帯及び半隆起線文による文様である。はっきりした梢円区画ではない。1037は口縁部に渦巻状の突起を有する。隆帯による梢円区画で、区画内には縦沈線が密に充填される。

29-B区出土土器 (1043~1052)

1043は口縁部隆帯による三角形区画をもつ纏VIII系列の土器である。隆帯上にはキザミが付され、隆帯にそって有節沈線がめぐらす。1044は口縁部に大きなX字状の樹状把手が付く。1047は纏IX系列の土器で鎖状隆帯による三角形区画である。浅鉢(1050・1052)はいずれもA器形で文様は半隆起線文、爪形文によっている。

29-C区出土土器 (1053~1063)

1053は縄II系列の土器で梢円区画をもつ。口縁部に突起が見られる。1056は隆帯及び半隆起線文による縦区画で、隆帯上には爪形文が付される。1059は口縁部破片で隆帯によるX字状文様である。1062・1063共に沈線のみによる文様で縄III系列の土器である。1063では沈線による横S字文が見られる。

29-D区出土土器 (1064~1066)

1064は口縁部破片で、口縁にそっては刺突状爪形文が付される。1065は縄IIa系列の土器で渦巻文・三叉文が見られる。

29-E区出土土器 (1067~1069)

1067は波状口縁の土器で頸状隆帯をもつ縄IX系列の土器である。

29-G区出土土器 (1070~1094)

1070~1075が縄帯系列の土器である。1070は縄Ib系列の土器で口縁部には円環状突起が付される。この円環状突起下に環状突起があり、そこから弧状に隆帯がのびている。胸部は基隆帯による弧線文及び渦巻文で胴下半部まで文様帯が下りている。1071も縄I系列の土器で半隆起線文、三叉文等によっているが、無文部を多く残している。1072・1074・1075は有筋沈線、ハケ状沈線、キザミをそれぞれ有する土器である。1076は爪形文を有する土器であるが北陸系のものとは大きく文様構成が異なる。1081~1086は関東勝坂系の土器である。キャタピラ文・ベン先状刺突が特徴である。1087・1088は口縁部に頸状隆帯をもつ縄IX系列の土器である。1089も縄IX系列で縦区画となる。1092~1094は浅鉢でありA器形で爪形文、半隆起線文が用いられる。

29-H区出土土器 (1095~1098)

1097は口縁部梢円区画の縄II系列の土器である。1098はA器形の浅鉢で口縁部に入字状の突起がある。

30-B区出土土器 (1099~1100)

1099は胸部の張る深鉢である。頸部無文帯で数本の微隆起線文がまわっている。1100は底部近くの破片で有筋沈線による渦巻文等である。

30-C区出土土器 (1101)

1101は縄帯系の土器である。口縁部隆帯による梢円区画、胸部は三角形区画で、区画内には玉抱き三叉文が充填される。隆帯上及び沈線端部にはキザミが付される。

30-G区出土土器 (1102~1117)

1102~1107が縄帯系の土器である。1102は口縁部に入字状の突起が付され、そこから太い隆帯が垂下する。隆帯による渦巻文を主とするが、無文部も多く残している。1104は縦区画で無文部が多く、三角印刻による鉛垂文が見られる。1105は口縁部に近い破片である。基隆帯による縦S字文を中心に両脇は半隆起線文である。また無文部を多く残している。1107は縄V系列の土器である。3段の横帯区画をもっている。口縁上部には弧状の把手が付され、口縁にそっては3列の有筋沈線がめぐる。その下には沈線による連続山形文が施される。2段目は、沈線によるU字状文又は渦巻文が連続し、最下段は横沈線等が見られるが、はっきりしない。1109・1110は有筋沈線、キャタピラ文等が見られるもので関東系の文様技法をもっている。1111は縄VII系列の土器である。波状口縁の頂部からはキザミの付されたJ字状の隆帯が垂下している。また口縁部にも同様の幅広隆帯が見られ、やはりキザミが付されている。沈線端部にもキザミが付される。1114の深鉢は口縁部が肥厚している。1115~1117は浅鉢である。

30-H区出土土器 (1118~1120)

1118は口縁部に梢円区画をもつ縄II系列の土器である。口縁部には三角形状の突起があり縄VII系列の土

4 遺物

器と共通する。口縁部は隆帯による楕円区画で、区画にそって隆帯がめぐる。また区画内には渦巻文が見られる。1119は関東系の文様技法をもつ土器で逆U字状爪形文が見られる。1120はC器形の浅鉢である。

31-C区出土土器 (1121)

1121はほぼ直線的に開く深鉢で隆Ib系列の土器である。波状口縁の土器で中央に玉抱き三叉文が見られる。波状部に環状又は眼鏡状把手が見られる。胴部文様は隆帯、半隆起線文による。また胴部にも環状突起が付される。

31-E区出土土器 (1122~1124)

1123は隆皿系列の土器である。半隆起線文による逆U字区画で、区画内に細沈線による綾衫文が見られる。1124は隆帯及び沈線による綾区画である。

31-F区出土土器 (1125)

1125は沈線部に連続刺突をもつ深鉢で隆皿系列の土器と考えられる。

31-G区出土土器 (1126~1134)

1126の波状部は玉抱き三叉文状となる。沈線部にはキザミが付される。1127も刺突状沈線が用いられている。1128は口縁部破片で、口縁部に渦巻状突起があり、隆帯による区画があるが、口縁部にはキザミが付される。1129は関東勝坂系の土器でキャタピラ文、ベン先状刺突が見られる。1130はほぼ直線的に開く深鉢である。口縁下部には隆帯及びキザミのある沈線がめぐる。また口縁部は沈線による楕円区画で、区画内にはキザミが充填される。1131は口縁部が鋸齒状となり、上半は無文帶である。胴部は細い沈線による文様で綾皿系列になると考えられる。口縁部は隆帯による楕円区画で区画にそって刺突のある沈線がめぐっている。区画内には細い沈線が見られる。口縁部文様帶の下には無文帶があり、そこに環状突起が付される。1133は小形の鉢で胎土、文様等から関東系の土器と考えられる。1134の浅鉢は爪形文及び玉抱き三叉文が見られる。

31-H区出土土器 (1135~1137)

1135~1136は関東勝坂系の土器で、ベン先状刺突及び三叉文が見られる。1137は口縁部下に突帯がめぐっている。

32-B区出土土器 (1138)

波状口縁の土器と考えられる。隆帯による文様区画で、隆帯にそっては刺突状の有節沈線がめぐっている。また区画内には2本沈線による山形文が見られる。一応隆皿系列とした。

32-D区出土土器 (1139~1141)

1139は口縁がくの字状に内折する浅鉢と考えられる。無文である。1140は逆にくの字状に外反する口縁で、口縁部は無文となっている。胴部は縄文である。1141も口縁部が外反し、1140と同様の文様構成をとる。

32-E区出土土器 (1142~1150)

1142・1145が隆皿系列の土器である。有節沈線、眼鏡状把手が付される。两者には胎土に違いが認められ、1145の方が赤褐色で関東地方の胎土に近い。1143は隆帯楕円区画で、区画にそって沈線がめぐりその沈線にはキザミが付される。1144・1148は隆帯上に細いキザミの付される土器で、1144は綾VII系列となる土器である。1147は大きな波状口縁となる土器である。波状部は三角形区画で、区画内には矢羽根状沈線が充填される。胴部は縄文である。1146は胴部に横区画をもつ隆V系列の土器である。横無文帶を有する。1149は小形深鉢である。沈線による文様区画で、口縁部には細長い楕円区画、胴上半には連続の逆進弧文

が見られる。

32-F区出土土器 (1151~1182)

このグリッドからは多くの土器が出土している。1151・1158は眼鏡状把手、有節沈線、舌状隆帯等を用いる縄I系列の土器である。1152は口縁部に入字状突起が用いられる。1153は口縁部三角形状の波状口縁で、口縁にそって爪形文の刺突がめぐっている。胸部は隆帯及び半隆起線文による文様で、眼鏡状把手が付される。1154は口縁部破片で縄II系列の土器である。口縁部には眼鏡状把手が付され、キザミの付された隆帯による三角形区画で、区画内は沈線による三角文等である。1155は文様構成、文様表現等から、関東勝板系との関連が深い土器である。縦の連続窓円区画により大きく2単位に分けられ、各単位内は縦方形区画である。区画内には矢羽根状沈線が充填される。1157は口縁部に入字状突起をもち、頸部に領状隆帯のある縄IX系列の土器である。1160・1162は口縁部に隆帯による窓円区画をもつ縄II系列の土器。1156は胸部に木目状捺糸文を付している。この木目状捺糸文は、当遺跡ではこれ一例のみである。1163は口縁部隆帯による窓円区画で、区画にそっては沈線がめぐる。胸部は対応するU字状沈線である。また横の鋸歯状沈線も見られる。1165・1168は同一個体と考えられる。全面に雨滴状刺突が施される。またキザミの付された隆帯が垂下している。1171は類例にとぼしく、系統のつかない土器である。口縁部には小さな眼鏡状把手を付けた把手が2対付される。頸部には幅広の隆帯がめぐる。口縁部には把手部から隆帯が垂下し、端部が渦巻文になる。胸部にも同様の隆帯が見られる。全面には捺糸文が見られるが、隆帯施文の後に施されている。1175~1179がA器形の浅鉢である。爪形文・三叉文・半隆起線文の組み合せである。1180はB器形で口縁部は無文となる。1181はC器形で、口縁部にはキザミ及び有節沈線が見られる。

32-G区出土土器 (1183~1213)

このグリッドにおいても多くの土器の出土がある。1183は隆帯系列の土器であるが、無文部を多く残している。基隆帯及び半隆起線文による渦巻文である。1184は口縁部に入字状の突起が付される。1185・1186共に口縁部隆帯による窓円区画と思われる。1185は区画内縦棒状沈線が密に施文されるのに対し、1186は半隆起線文によっている。1187は縄II系列で、隆帯上にハの字状沈線が施されている。1191は口縁部隆帯三角形区画で、区画にそって有節沈線がめぐる。区画内には玉抱き三叉文が充填される。1188~1190は同一個体と考えられる。関東勝板系の土器である。キャタピラ文・ベン先状文である。1192は縄IV系列で胸部が縄文となるものである。口縁部上端には環状の突起が2個付される。口縁部第一文様帶には眼鏡状把手が付され、各々を2~3本の深い沈線がつないでいる。口縁部第二文様帶は、逆U字状基隆帯及び渦巻文で、空間部を三叉文等で充填している。頸部には3本の隆起線がめぐる。1193も類例に乏しい、波状4単位で、眼鏡状把手が付され、それを結ぶように隆起線文が横走している。一応縄I系列とした。1194~1196は口縁部に窓円区画をもつ縄II系列の土器である。1194・1195は区画内無文、1196は区画内に斜行の沈線が認められる。1199は沈線による文様で、同様のものとしては1201・1203・1205があり、1205ではワラビ手状文が見られ、縄III系列に入ると考えられる。1202は大形の土器でクラシタ割付けをもつ縄III系列の土器である。1204は無文で、隆帯による細い窓円区画が認められる。縄III系列に入ると考えられる。1208は波状口縁で隆帯による山形文が見られる。1209は有孔鉢付土器と考えられる。1210~1212は浅鉢A器形で爪形文が付される。

32-H区出土土器 (1214~1218)

1214は口縁部に蛇頭状の大きな把手が付され、そこから波状隆帯が垂下している。1215には領状隆帯が見られる。1216は、27-E区出土の945に文様構成が一致している。1217には舌状隆帯が見られる。

4 遺 物

33-B 区出土土器 (1219)

A器形の浅鉢で、半隆起線文、三叉文が見られる。

33-C 区出土土器 (1220)

やはりA器形の浅鉢で、半隆起線文、爪形文が見られる。

33-D 区出土土器 (1221~1222)

1221は波状口縁で、口縁にX字状の把手が付く。1222は隆帯II系列である。

33-E 区出土土器 (1223~1242)

1223は口縁部に入字状突起が付され、細狭の口縁部文様帶をもつものである。口縁部文様帶は扁平な隆帯による連續山形文で、隆帯上にはキザミが付される。胴部は半隆起線文による方形(タランク)区画である。1224・1225は関東勝坂系の土器でキャタピラ文、ベン先状刺突が施される。1226は隆帯系列にあたると考えられる。1234は全面燃糸による縦条線文であるが、口縁部のみ方向を変えて施文している。また1235も口縁部は折返し口縁である。1238は縄II系列の典型である。口縁部に4個の小突起を付しそこで口縁部の文様帶を縦半隆基線により4等分している。各区画間を結ぶように横に半隆起線がのびている。口縁部下端には縦キザミが連続している。胴部は全面縄文である。1239~1242はすべてA器形の浅鉢で爪形文を多用している。

33-F 区出土土器 (1243~1305)

グリッドでは最も多くの土器が出土している。1243~1258が隆帯系列の土器である。1243・1247は口縁部文様帶がなく、胴部まで流れるもので隆Ic系列の土器である。いずれも口縁部に小突起を有し、眼鏡状把手、三叉文が見られる。1243では2列の梢円区画があり、区画内に刺突が充填される。1246は隆II系列で胴部に無文帶をもつ。1244は隆V系列になると考えられる。1249は隆I系列と考えられ、口縁部に眼鏡状把手が見られる。1251は隆縫一本により文様帶を区切っている。1250は口縁部第一文様帶下端の隆帯上にへの字状の沈線を施している。また第二文様帶の弧状区画の中には、玉抱き三叉文が充填される。1254は隆帯上に爪形状の刺突が見られる。1255~1257は隆III系列になるとと考えられる。いずれも口縁部に突起を有している。1256は台形様の扇状把手である。幅広の隆帯による区画で区画にそって沈線部にはキザミが付される。1258は文様区画からみると在地の土器とは思われないが、逆に関東系とも言いがたい土器である。口縁部から胴部まですべて横帯区画で、区画内には矢羽根状沈線が充填される。1259は口縁部文様帶に幅広、舌状の隆帯が連續S字状に付され、そのわきに沈線が走る。S字状の端部には眼鏡状把手が付される。胴部も同様の文様帶で地文に縄文が付される。縄I系列の典型である。1260~1264は関東勝坂系の土器である。1261・1262は三角形区画をもっている。1265は類例のない土器である。縄文を施文の後、隆帯をY字状に垂下させている。隆帯上にはキザミが付される。1267は大きな波状口縁となる土器で、波頂部より隆帯が垂下し、隆帯上にはキザミが付される。隆帯にそって複列の有節沈線が走っている。1268は口縁部に橋状把手が付されると考えられる。口縁部は隆帯による梢円区画文をもつ縄文II系列の土器である。区画にそっては連續のキザミが付される。1269は縄III系列の土器で沈線部に玉抱き三叉文が付されるものである。1272は口縁部無文で橋状把手が付され、梢円区画となる。胴部にはY字状隆帯が垂下する。縄凸系列である。1273・1275は、いずれも円区画を基本とする縄II系列の土器である。1273は梢円区画内に斜行沈線が充填される。いずれも口縁部は突起により4単位となる。1276は全面タランク様の区画であるが各々は連結しない。1278は縄凸系列の土器である。1279・1280はいずれも頸部に領状隆帯をもつ土器である。1280の場合口縁は折返し口縁となる。1283・1285・1289はいずれも胴部にワラビ手状沈線を有す

るものである。1297～1305が浅鉢と考えられる。1298については浅鉢かどうか明確でない。基隆帯及び半隆起線文による渦巻文である。1297は、深鉢1296と同じ文様構成をとる。1299～1305はすべてA器形となる土器である。爪形文の付される土器(1300～1304)、椭円区画の沈線端部にキザミを有する土器(1304)、渦巻上にキザミの付される土器がある。

33-H区出土土器(1306～1309)

1306は斜格子目文をもつ土器である。1308は橋状把手をもち、口縁部沈線による椭円区画である。区画にそっては有節沈線がめぐる。

34-B区出土土器(1310～1311)

1310はA器形で爪形文を有する浅鉢である。

34-C区出土土器(1312～1316)

1312は渦巻状の隆帯にそってキザミ沈線が付される。1313は隆II系列と考えられる土器である。口縁部には突起が付され、橋状把手がつく。隆帯による椭円区画で、区画にそっては、連続刺突がめぐっている。1314は隆II系列の土器と考えられる。口縁部に三角形状の小刺突があり、玉抱き三叉足となる。第一文様帶は隆帯上にへの字状沈線がめぐる。また第二文様帶は基隆帯による三角形区画である。1315は隆II系列の土器で、隆帯による椭円区画をもつ。区画内には矢羽根状沈線が充填される。

34-D区出土土器(1317～1341)

1317は隆II系列の土器と考えられる。眼鏡状把手及び基隆帯による渦巻文が見られる。1318は類例のつかない土器である。口縁下部には幅広の波状隆帯がめぐり、口縁上部には縦沈線がめぐる。また大きな眼鏡状把手が付される。下部も縦に沈線が垂下する。1319の口縁部はキザミの付された隆帯による円形、椭円区画で、玉抱き三叉文等も見られる。胴部は縦区画である。1320も口縁に突起を有する。橋状把手がY字状となっている。1322は、隆Ib系列の土器であるが、赤褐色で他のものとは色調を異なる。口縁上部には4個の眼鏡状把手が見られる。その間には横8字状隆帯が充填される。この隆帯にそっては連続のキザミが施される。胴部は基隆帯による横S字文、渦巻文で、無文部を多く残している。1323は隆V系列で、胴部にも横帯区画をもち、胴下半部は無文となる。口縁部は無文帯で橋状把手が付される。胴上半は基隆帯及び半隆起線文で眼鏡状把手及び玉抱き三叉文が認められる。1324は小形の深鉢で関東勝坂系の土器である。キャビラ文、ベン先状刺突による縦区画である。1325・1326は関東阿王台系の土器である。1325は口縁部大きな椭円区画で、区画の内側にそってへの字状複列の刺突がめぐる。胴上半は無文で下半部は隆帯による横区画である。1326は波状口縁になると考えられる。地文は無文で、口縁部にはY字状隆帯が付され、頭部及び波状部からは縦状隆帯が垂下している。1327は縄翼系列の土器で、口縁部に椭円区画をもつものである。波状口縁で、波頂部には円形強文が施される。口縁部は橋状把手により椭円区画され、区画内には横、縦の沈線が充填される。胴部は半隆起線文による縦区画を基本とし、区画内は三角形区画となる。眼鏡状把手も付される。1329は口唇部に縦状隆帯をもっている。1331は断面三角形隆帯による方形の区画である。1333は波状口縁で、口縁にそって爪形文がめぐる。1338～1341が浅鉢である。1338は厚手で連弧状の隆帯がめぐる。1339～1341は浅鉢A器形で爪形文を有する土器である。

34-E区出土土器(1342～1358)

1342は連続山形の鎖状隆帯をもつ縄IX系列の土器である。隆帯上の鎖はキザミ風である。1343は口縁部無文帯で頭部には爪形刺突のある隆帯がめぐる。また胴部にも渦巻状の隆帯があり、隆帯上にはキザミが付される。隆帯にそっては沈線及び有節沈線が走る。1344は器形及び文様構成が明確でない。把手及び円

4 遺 物

形刺突が認められる。1345は横鋸齒状沈線をもつものである。1346は鎖状隆帯をもつ縄IX系列の土器である。沈線にはキザミが付される。1347は眼鏡状把手を中心とした基隆帯による渦巻文が見られる。基隆帯にそっては沈線、有節沈線が見られる。縄I系列である。1354～1358が浅鉢である。1354・1355はB器形、1356～1358がA器形となる。

34-F区出土土器（1359～1360）

1359は縄文系で調部に渦巻文を有する。1360は太い隆帯及び連続のキザミが認められる。

34-G区出土土器（1361～1363）

1361は口縁部隆帯横円区画で、区画にそって刺突の付される沈線がめぐる。

35-D区出土土器（1364～1367）

1364は隆Ib系列の土器である。口縁部文様帶は横半隆起線で、眼鏡状把手を有する。胴部は基隆帯による渦巻文で、玉抱き三叉文が充填される。1365は縄II系列と思われる。橋状把手をもち、横円区画内にキザミが付される。1366は刺突沈線及び山形状の沈線が見られる。

36-E区出土土器（1368）

A器形の浅鉢で、半隆起線文による。

36-G区出土土器（1369）

A器形の浅鉢で爪形文が見られる。

37-F区出土土器（1370）

縄I系列の深鉢で、太い隆帯がクランク状に垂下する。また渦巻文も見られ、沈線文等が充填される。

b) その他の土器（図版147・148・295～297）

早期の土器（1371～1399）

1371はやや縱長の横円押型文を密接施文すると思われるもので、内面と外面では胎土・色調に際立った違いが観察される。内面は石英・長石など微細砂粒を含み暗灰褐色を呈するが、外面は褐色粘土粒を多く含み緻密で淡黄橙色である。これは器形を整形した後に、異質な粘土を外面に塗り付け施文した可能性が考えられる。

1372はいわゆる「天狗の鼻状」の尖底部で、胎土には石英・長石・褐色粒などの砂粒を多く含む。内面は淡黄色橙色、外面は灰橙色を呈する。外面は底部先端に至るまで、比較的に丁寧なナデが施されている。形態の特徴から田戸下層式土器の底部と思われる。

1373は平行沈線文と貝殻腹縁による刺突文を併用するもので、胎土には石英・長石・褐色粒などの砂粒を多く含み、焼成は比較的に堅硬である。文様は横位平行沈線間に貝殻腹縁による斜位の刺突文を充填するもので、田戸上層式併行期もしくは直後段階に位置付けられる。

1374～1379は太い沈線によって文様を構成するもので、野鳥式土器に比定される。1374・1375は同一個体で、調部に一段のくびれを有する平縁の深鉢である。口唇部は内削ぎ状である。胎土には微細な石英・長石粒・鐵錐を多く含み、焼成は堅硬である。くびれから口縁にかけて太い沈線により幾何学的な区画文を描き、区画内には同じ沈線を縦位平行に充填する。また、文様帶を縦に分割すると思われる、刻みを付けた隆帯がわずかに認められる。くびれから下の調部には条痕が横走するが、内面には条痕は認められない。1376～1379は胎土・色調などから同一個体と思われるが、文様構成は不明である。器形は調部で屈曲して

外反するものと思われ、口縁は波状を呈する。半截竹管状工具による刺突列を屈曲部に一列巡らし、太い沈線による平行斜線文を施す。また、口縁に沿って同一工具によると思われる短沈線を加える。内外面には条痕が施文されるが、内面には炭化物の付着が顕著である。いずれも、野島式の最終段階であろう。

1380～1383は細隆起線および細沈線によって幾何学的な区画文を描き交点に刺突文を加えるもので、耦ヶ島台式土器に比定される。1380は細隆起線の交点及び細隆起線上に半截竹管状工具による刺突文が加えられるが、細隆起線によって区画された内部には沈線文などの充填ではなく、弱いナゾリが認められる。胎土には石英・長石を多く含み、繊維の混入もわずかに認められる。焼成はもろく、外面には炭化物の付着が認められる。1381～1383は同一個体で、基本的な文様構成は1374・1375と同じである。ヘラ状工具による細沈線で幾何学的な区画文を描き、交点には半截竹管状工具による刺突文を施す。区画内は地文の条痕をそのまま残す部分と、平行太沈線を充填する部分が見られる。内面には条痕が明瞭に残り、炭化物の付着が著しい。

1384～1390はいずれも条痕のみを施文するもので、胎土には繊維を多く混入する。1385・1386は口縁部片で、それぞれ外反気味の丸頭状と直線的に立ち上る角頭状を呈する。1385～1388・1390は褐色を呈し、焼成も比較的堅密で、内面に条痕は認められない。1384・1389は胎土は堅密であるが焼成はもろく、外面の条痕は不明瞭である。条痕文系の粗製土器と思われる。

1391～1393は同一個体で、絡条体圧痕文によって文様を構成する土器である。胎土には微細～中粒の砂粒及び繊維を多量に含み、焼成は良好である。色調は内・外面とも灰褐色を呈し、外面には炭化物の付着が著しい。絡条体原体は器面に現われた圧痕を観察すると幅4mm前後で、直線圧痕と曲線圧痕の組み合せによって文様が構成されている。このような特徴を有する絡条体圧痕文は、県内の早期終末に位置付けられている〔小熊1989〕。

1394～1399はいずれも縄文のみを施文するもので、胎土には砂粒・繊維を多く混入する。1394～1399は同一個体で、縄文(LR)を不規則に施文する。1394は底部付近の破片であるが、底部付近の形態から丸底を呈するものであろう。外面は明褐色、内面は暗褐色を呈する。1398は前々段反燃の羽状縄文を施文するものである。早期末から前期初頭に位置付けられよう。

前期の土器(1400～1420)

1400は胴部からやや内湾しながら口縁部に至る深鉢で、口唇の一端にU字状の注ぎ口を持つ、いわゆる片口土器である。口縁部形態は平縁で、端部は丸みを帯びる。胎土には細砂粒・繊維を多量に含み、焼成は比較的良好である。外面は黒色から褐色で、内面は褐色を呈する。地文には複節斜縄文(正反の合)を施し、口縁部直下と胴部にはコンバス文をそれぞれ一条巡らす。関山II式に比定されるものである。

1401～1406は諸磯a式土器で、いずれも胎土には石英・長石粒を中量含み、焼成は比較的に良好である。内外面とも赤褐色を呈するものが多く、内面は比較的丁寧なナデが施されている。器厚は7～9mmである。1401はやや内湾しながら開く深鉢の口縁部で、端部は丸く納まる。口唇部直下には無文帶を挟んで平行する幅の狭い爪形文と、刻みの加えられた太い隆起線を巡らす。以下には半截竹管をまとめた柳状工具による平行線文・波状文が施文される。1402～1404は平行沈線・波状文を施文した後に、竹管状工具による円形刺突文を施文したものである。1402は地文に無節縄文(L)が施文されている。1403は口縁部で1404と共に、胎土・色調などから1401と同一個体の可能性が考えられる。1405・1406は平行線文・波状文のみの胴部である。

1407～1412は諸磯b式土器である。1407・1408は同一個体で、半截竹管状工具による連続爪形文を文様

の主要素とする。胎土には微細砂粒を多量に含み、暗褐色を呈する。諸磕b式の古段階に比定される。1409~1412は口縁部が「く」の字状に内折する深鉢の口縁部片である。胎土には細砂粒を多量に含み、やや緻密さに欠けるが施成は比較的良好である。1409が波状を呈するほかは平口縁で、いずれも地文には網文を施文しているようであるが、半截竹管状工具による集合沈線を施文することによって消されており不明瞭である。諸磕c式の新段階に比定されよう。1413は外反しながら開く口縁部片で、胎土には砂粒を多く含みもろい。ヘラ状工具による斜位の平行沈線文を施し、口唇部直下には磨滅のため不明瞭であるが、幅の狭い爪形文が施文されていた可能性が強く、諸磕a式と考えた方が良いのかもしれない。

1414~1418は同一個体で、頸部から外反しながら開く口縁部を有し、胴部でやや張りをもたせて底部に至ってしまう深鉢と思われる。口唇部はやや肥厚しており、鋸齒状縫帶の貼り付けが見られる。胎土には砂粒を多量に含み、施成もややもろい。色調は外面が暗褐色で、内面は明褐色を呈する。文様は口縁直下から貝殻腹縁による波状貝殻文と平行線文を交互に施文し、口唇部にも貝殻腹縁によると思われる刺文を施文する。内面は比較的丁寧なナナガが施されている。文様や器形の特徴から、関東地方の霞ヶ浦周辺を中心に分布する浮島式・興津式に対比されるものと思われるが、新潟県内の出土例は現時点では確認されていない。

1419・1420は表面は磨滅のため不明瞭であるが、結節状浮線文によって文様を描くと思われ、鍋屋町式土器の範囲で捉えられるものである。いずれも胎土には石英・長石などの細砂粒を多く含み、赤褐色を呈するもろい土器である。

前期終末から中期初頭の土器（1421~1427）

1421・1422は半截竹管状工具とヘラ状工具による斜格子目文を施文するもので、同一個体である。

1423は胴部でやや張りも直線的に立ち上る平縁の深鉢形土器である。地文に網文(RL)を施文した後、口唇部直下から半截竹管状工具による半隆起線で横位区画文を描き、区画内には波状文を施文する。また口唇部直下と胴部には磨消しの無文帯を有する。胎土には石英・長石・褐色粒を含み、淡橙色を呈する。

1424~1426は比較的細い半隆起線で、横位及び山形の文様を構成するものである。1426は他に比べてやや太い半隆起線で、三角形印刻文を有する。1424・1425の内面には炭化物の付着が顕著に認められ、同一個体の可能性が高い。

1427は外反気味の口縁部の上端が内湾するもので、胴部は直線的にぼぼまる深鉢である。図示はしていないが同一個体と考えられる破片から、「の」の字状と小さな山形の突起が口縁部に付けられていたものと思われる。文様は半隆起線を密に引き並べた集合沈線で構成するもので、頸部の無文帯を挟んで大きいくは口縁部文様帯と胴部文様帯とに分けられる。口縁部文様帯は口縁直下と頸部に二条の半隆起線を巡らし、その間に半隆起線を羽状に充填する。胴部文様帯は上下に二分され、地文には網文(LR)を施文する。上半には細い半隆起線による直曲線文で区画した内部に斜格子目文を充填する。下半には継位や羽状に器面全体を覆う。北陸地方の朝日下層式から新保式に対比されるものであるが、真駒遺跡〔小島1986〕での分類によれば粘土紐の貼り付けの有無によって前記2型式を区別している。これによれば粘土紐の貼り付けが認められない土器は、新保式の古段階に比定されることになるが、中部高地の築場式土器との関連も考慮しなければならないであろう。

後期の土器（1428~1435）

1428・1429は花弁状の刺文を器面全体に施文する、三十糞場式の土器片である。胎土には白色粘土粒を含み、焼成は良好である。色調は内外面とも赤褐色を呈し、外面には炭化物の付着が著しい。

1430は直線的に立ち上る口縁部から胴部でやや膨らみ底部に向けてそぼむ深鉢で、底部は端部が丸味を帯びて厚底がある。口唇部内側には太い沈線が一条巡る。胎土には石英・長石などの砂粒を多く含み、焼成は良好である。外面は明褐色、内面は暗褐色を呈し、胴部下半から底部にかけて二次焼成を受けて赤褐色に変色している。文様は地文に繩文(LR)を施文した後、胴部上半に2条の沈線を巡らし沈線間以外の部分の繩文を磨り消している。ただ、一部磨り消しが不十分で、繩文の残る部分が見られる。底部には網代編みの圧痕が認められる。掘之内2式から加曾利B1式あたりに対比されよう。

1431～1435はいずれも三仏生式の土器片である。1431・1432は繩文(LR)地文上に平行沈線文を横位に数段配した後に、繩文を磨り消す段が見られる。1433・1434は同一個体で、頸部から上で開く大きな波状口縁の深鉢である。波状の頂部には刻みを有する突起が付く。文様は曲線的な沈線区画文内に細かい繩文(LR)を羽状に充填する。胎土には石英・長石などの細砂粒を多量に含み、焼成は堅緻である。1435は1433と同様な器形を呈すると思われるもので、口唇部端で内折する口縁部片である。口縁部直下は磨いた無文帶で、以下には沈線による斜線文を施文する。外面は黒褐色、内面は明褐色を呈し、外面には炭化物の付着が著しい。

c) 土製品 (図版149・297)

ミニチュア土器 (1436～1439)

1436は推定口径9.2cm、高さ3.7cmを測る。胴部中央がやや湾曲して張り出す。無文。1437は口径5cm、高さ4cmで丸底である。半球状の形である。2本沈線による連弧文が4単位にめぐる。1438は推定口径6.8cm、高さ3cmで直線上に開く。無文。1439は推定口径6cm、高さ3.9cmを測る。直線上に開く。無文。

異形土製品 (1440)

細長い柱状の土器に沈線で文様を描いたものである。長さ6cm、幅1.6cmを測る。動物を模したものと思われるが、具体的に何なのかは明確でない。実測図上部が頭部、下部が尾部ではないかと思われる。尾部は跳ね上がっている。頭部正面には小円孔がある。

三角形土版 (1441)

一応三角形土版という名称を使用したが、むしろ形状的には三脚状である。三脚はほぼ対称で長さ約6cmを測る。厚さ約1.5cm、脚部は三つ共にふんばる形で、中央腹部がへこんでいる。文様は沈線及び刺突によっている。

耳栓 (1442、1443)

1442は口径2cm、厚さ1.4cm、中央内径0.5cmの無文の耳栓である。外周中央はくぼんでおり滑車状である。外面赤彩が施される。1443は口径2.6cm、厚さ1.6cm、中央内径約1.5cmを測る無文の耳栓である。外周中央はくぼんでおり、全面に赤彩が施される。

土器片利用土製品 (1444～1448)

1444は小形土器の底部近くを利用している。四角形で一辺約4cmである。4面が面取りされている。1445～1448は、いわゆる土器製円盤と呼ばれているものである。1445～1447は円板状に打ち欠いただけのものである。1448は前記3点と異なり、内面がよく擦れています。また外面も擦れている可能性がある。

4 遺物

〈出土土器観察表〉

1 住

番号	器種	分類		出土地点 (レベル) (m)	底 深	底 厚	遺存	文 様	色調・二次焼成・他 接合関係
		系 列	形 式						
1	深鉢		中期後	1住-伊内	口/ 底 9.0	1/2	断面カマボコ状縁帶、深いなぞり、刻先文、 縄文L R	にぶい緑 二次焼成 伊に使用	
2	深鉢		中期後	1住-覆土	口 27.0	1/2	沈痕、薩摩部: ガキ、縄文R L 脚部縫区画	にぶい緑	
3	深鉢		中期後	1住-炉埋設	口 21.4		断面カマボコ状縁線、沈縁部キザミ、縄文L R、脚部縫区画	にぶい黄緑 二次焼成	
4	深鉢		中期後				断面三角形隆起済巻、断面カマボコ状縁線、 沈縁部キザミ、縄文R L	黄緑 二次焼成	
5	深鉢		中期後	1住-78	口 18.6	1/2	口部断面三角形縁帶による済巻、円形剝突、 脚部縫すり消し縄文、縄文R L	にぶい緑 二次焼成 オコゲ	
6	深鉢		中期後	1住-35			縫すり消し縄文、縄文R L	にぶい緑 二次焼成 オコゲ	
7	深鉢		中期後	9-E-11-7			縫すり消し縄文	にぶい緑 二次焼成	
8	深鉢	F		3-C-18			肥厚、半縫起縁文	にぶい緑 二次焼成	
9	深鉢			1住-79	底 5.9		坂沈縫	にぶい緑 二次焼成	
10	深鉢			33-F-2①			縄文R L	にぶい緑 二次焼成	
11	深鉢			1住-107			熱糸L	にぶい緑	
12	深鉢			3-C-18			縄文R L?	にぶい緑	

2 住

13	浅鉢	A		6-B-81			爪印文、縄文R L	緑	
14	深鉢			2住-伊			ボタン状突起、縄文R L	赤褐 二次焼成	
15								下半部黒いオコゲ	
16	深鉢			2住-伊内			矢羽根状沈縫	男褐	
17	深鉢			2住-伊内			半縫起縁-沈縫部なぞり、キザミ	緑	

3 住

18	深鉢		中期後	3住-埋設	口 17.6	1/2	断面三角形に近い縁帶による済巻、刻先文、 沈縫部なぞり、縄文R L	にぶい緑	
----	----	--	-----	-------	--------	-----	--------------------------------------	------	--

5 住

19	深鉢		中期後	5住-2	口 19.4	2/3	波状4単位、口縁部にそって縫帶があぐる。 縫帶上にヘラの工具によるキザミ	にぶい緑 二次焼成 オコゲ	
20	圓鉢		中期後	5住-2-A			縄文L	緑 二次焼成	
21	深鉢		中期後	5住-43			縄文L	緑 二次焼成	
22	深鉢		中期後	5住 一括	口/ 底 16.0		縄文L R、網代底	赤褐 二次焼成-オコゲ	
23	深鉢		中期後	5住-82			縄文L R	赤褐 二次焼成	
24	圓鉢		中期後	5住-39			底部	青 二次焼成	

7 住

25	深鉢	薩-I b	G	H	7住-2915-C (256.66)	口 38.2	基縫帶、半縫起縁、鏡状把手、沈縫部なぞ り	青 二次焼成	
26	圓鉢	薩-I c	G-b	H	7住-78 (257.00)	口 14.6	波状4単位、基縫帶済巻、半縫起縁-沈縫部 なぞり三叉文	明赤褐 二次焼成 オコゲ	
27	深鉢	薩-I b	G-b		7住-P 1-71 (256.99)	口 26.5	波状4単位、波状鏡状把手、基縫帶によ る済巻文、三叉文、下部無文	にぶい赤褐 二次焼成 27C-11	
28	圓鉢	薩-			7住-P 2-4 (256.86)		半縫起縁文、沈縫片側面にキザミ、三叉文(王 字)	淡黄緑 二次焼成	
29	深鉢	薩-I ?	G-a		7住-691 (257.00)		小突起、半縫起縁文	にぶい赤褐 二次焼成	
30	深鉢	薩-I ?	I		7住-360 (256.94)		基縫帶済巻、半縫起縁、沈縫部キザミ	男赤褐 二次焼成	

番号	器種	分類類			出土地点 (レベル) (m)	法量 (cm)	遺存	文 様	色調・二次焼成・地 盤合併区
		系 列	形	時 期					
31	深鉢	縦一			7往-3964 (256.67)			基盤帶、半縫起縫、沈縫部など	明赤褐 二次焼成
32	深鉢				7往-P2-50			沈縫	明赤褐 二次焼成 オニゲ
33	浅鉢				7往-488 (256.62)	口 29.0	口縫部彫刻による商円区画、縄文RL	にじい縫 二次焼成 7C住	
34	深鉢	圓			7往-3897 (256.55)			造U字状区画、半縫起縫、沈縫部など 縄文RL	縫 二次焼成
35	深鉢	縦一			7往-3899 (256.64)	底 10.8		基盤帶、半縫起縫文	黄褐 二次焼成(粘土) 7C住
36	深鉢	圓-IV	G-a		7往-2560 (256.40)			口縫部環状突起、縄文	にじい縫 二次焼成
37	深鉢	圓-IV	A		7往-1290 (256.71)			口唇部圧痕波状、縄文LR	明赤褐
38	深鉢	圓			7往-2668 不明			縫帯、縄文RL	縫 二次焼成
39	深鉢	圓	E?		7往-3896 (256.51)			縄文LR	にじい縫 二次焼成
40	浅鉢		G-a		7往-P5-3 他 (256.30)	口 28.8		突起、口縫部無文、縄文RL	にじい縫 27C-24、7B住
41	深鉢	圓-IV	B-a		7往-P2-70	口 26.2	1/5	側面状口唇、縄文LR	縫 二次焼成 27C-20、28C-14、7 C住、7D住
42	深鉢	圓-IV	H-a		7往-P5-1	口 34.0		縄文RL	縫 二次焼成 7C住、7B住

7 A 住

43	深鉢	縦一	C-a	I	7往-3900 (256.13)	口 34.0 底 14.8 高 41.2	2/3	基盤帶、沈縫部など、基盤帶部分的にヤヂ L、L字及び波状沈縫文様は3単位構成	暗赤褐 二次焼成
44	深鉢	圓-IV	A	I	7往-115B	口 34.0	4/5	口縫部彫起による5単位商円区画、沈縫部突 起、下半部沈縫による縫区画、ハメ状ヤヂ L、縄文L	にじい縫 二次焼成
45	深鉢	圓-VI	C	I	7往-3207他 (256.03)	口 21.4	2/3	口縫部沈縫による三角形区画、沈縫部ヤヂL、 側部L、半縫部による横区画、縄文RL	暗赤褐 二次焼成 下オヨコ
46	深鉢	圓-VI	C-b	I	7往-1921 (256.13)		1/3	波状4単位、口縫にそって花縫(斜込み)がめ ぐらの腹面には波縫(斜込み)がめぐらり突起が付 される。側部は横区画、縄文RL	にじい縫 二次焼成 10B住、13B住、8A住、 27C-15-20、27C-P 1、27B-20
47	深鉢	圓-VI	C-b	I	7往-3282 (255.98)	口 29.8		波状4単位、新面三角形彫帶による渦巻、沈 縫部など、三叉文、波縫部小円孔、縄文RL	縫 二次焼成 26B-2
48	深鉢	縦-I b	G	II	7往-3892 (256.87)	口 15.4		入字状突起(内面)、縫状状把手、基盤帶(ハ の字状沈縫)、沈縫部部分的なぞり、縄 文RL	にじい縫 二次焼成 27C-15-22+23、29B -P7
49	深鉢	縦-II b	D-a		7往-3884 (256.14)	口 15.0		沈縫部斜形刺突、側縫状把手	赤褐 二次焼成 7住
50	深鉢	縦一	D-b		7往-2055 (256.08)	口 17.6		有筋沈縫、縫状把手棒状工具によるなぞり、縄 文RL	縫 二次焼成 7住
51	深鉢	縦-II a	D-a	I	7往-3282 (256.09)	口 24.6		円孔のある入字状突起、沈縫部爪形、縫状 把手棒状工具	明赤褐 二次焼成 7住、7C住、27C-16, 27B-18
52	深鉢	縦-II a	H		7往-1625 (256.29)	口 15.4		縫状把手、帯帝商円区画、有筋沈縫、縄文 RL	にじい赤褐 二次焼成
53	深鉢	縦-IV ?	G-a	II	7往-1871 (256.15)	口 35.0		口縫部玉縫き三叉文状突起、輪状把手、基盤 帶、半縫起縫商円、文縫帶は斜方向に流れる 縄文LR	にじい縫 二次焼成 7B住、7C住、27C- 15+20.1、27B-20、27 D-10
54	深鉢	圓-VI		I	7往-3796 (256.13)			合形移波状口唇、沈縫部に刺突、区画内細沈 縫	にじい赤褐 7A住一帯、7B住、28 B-20

4 遺 物

番号	器種	分類			出土地点 (レベル) (m)	表 量 (cm)	遺存	文 様	色調・二次焼成・他 接合關係
		系 列	器 形	時 期					
55	深鉢	縦-?			7住-1830 (256.24)		基盤帯、半隆起線	橙	
56	深鉢	縦-			7住-2194 (256.31)		基盤帯調査、半隆起線、次輪部なぞり、縦帯 上中サザイ	にぶい赤褐 二次焼成	
57	圓鉢	縦-			7住-2426 (256.09)		基盤帯調査、半隆起線、沈縫部なぞり、基盤 帶上に瓜形文、サザイ、三叉文	にぶい赤褐 二次焼成	
58	深鉢	縦-I a	A-b		7住-3886 (256.09)		波状4単位、波線による区画、沈縫片側面に キサツ	にぶい橙 二次焼成	
59	深鉢	縦	G	H	7住-3848 (256.25)		基盤帯調査、半隆起線、沈縫部なぞり、玉挽 キ三叉文	橙 二次焼成 27C-20, 28C-20	
60	深鉢	縦-II a	F-a	H	7A住-1539 (256.22)	□ 20.2	眼鏡状把手、基盤帶による三角形区画 半隆起線→沈縫部部分的なぞり、三叉文	にぶい赤褐 二次焼成	
61	深鉢	縦-I	D	I	7A住-3594 (256.09)	□ 38.7 底 8.8 高 [26.3]	口 1/3 基盤帯、基盤協沈縫、舌状垂帯、細縫状沈縫、 縄文L	にぶい赤褐 二次焼成 オコゲ	
62	深鉢	縦-	G		7A住-1890 (256.17)		眼鏡状把手、半隆起線文	にぶい橙 二次焼成	
63	深鉢	縦-			7A住-1523 (256.29)	底 15.4	半隆起線、沈縫部なぞり	にぶい赤褐 二次焼成 オコゲ	
64	深鉢	縦-II b?			7A住-1868 他 (256.17)		縦帯、沈縫部斜突、縄文RL	橙 二次焼成-オコゲ 7住, 27B-15	
65	深鉢	縦-II	G		7A住-1954 (256.16)	□ 43.4	はり付け縦帯、縄文RL	橙 二次焼成 7住-P 2-33	
66	深鉢		D?		7A住-1871 (256.25)	□ 36.9	半隆起線文、三叉文	橙 二次焼成 補修孔 27C-20	
67	深鉢	縦-I	H		7A住-1792 (256.14)	□ 35.4	縄文RL	にぶい橙 二次焼成 28B-9・19, 28C-P 63	
68	深鉢	縦-I	H		7A住-3848 他 (256.98)	□ 17.8	2/5 小突起、口縫部無文帯、縄文RL継続くり文	暗赤褐 二次焼成 オコゲ	
69	深鉢	縦-I	A		7A住-—括 A (257.17)		小突起、縄文L	にぶい橙 二次焼成	
70	深鉢	縦-I	A		7A住-3762 (256.24)		沈縫、縄文RL	にぶい橙 二次焼成	
71	深鉢	縦-I	A		7A住-3633 (256.12)		縄文RL	橙	
72	深鉢	縦-I			7住-1753他 (256.21)	□ 18.4	縄文RL	橙 二次焼成-オコゲ	
73	深鉢	縦-I	E		7A住-—括 A (257.17)	□ 34.0	1/4 小突起、縄文RL	にぶい橙 二次焼成	
74	深鉢	縦-I	D		7A住-—括 A (257.17)	□ 28.2	縄文RL、口縫部に沈縫	にぶい赤褐 二次焼成 7住, 7A住, 7C住	
75	深鉢	縦-I			7A住-3257 (256.02)		燃糸R	にぶい橙 二次焼成 27C-21・22	
76	深鉢	縦-I			7A住-P 7 -1		残帯 (波状)、縄文RL	暗赤褐 二次焼成 7住, 7C住P 7-3・ 6・2	
77	深鉢	縦-II a			7A住-伊		織はり付け縦帯、縄文RL	にぶい赤褐 二次焼成 オコゲ	
78	深鉢	縦-			7A住-—括 B 1 底	14.4	燃糸R、網代底	橙	
79	深鉢	縦-			7A住-2438 他 (256.02)	底 14.6	縄文RL	にぶい赤褐 二次焼成 7住	
80	深鉢	縦-I			7A住-3319 他 (256.15)		有焰沈縫、縄文RL	橙	

番号	器種	分類			出土地点 (レベッル) (m)	測量 (cm)	遺存	文様	色調・二次焼成・施 錆合関係
		系 列	器 形	時 期					
81	深鉢	縦一Ⅱ			7A住-3269 (256.26)			織文R L	にぶい桜 二次焼成
82	深鉢	縦一Ⅱ			7A住-1848 他 (256.20)			織文R L	にぶい桜 二次焼成
83	深鉢							竹管円形刺突	にぶい桜
84	浅鉢	北	A		7A住-3860 他 (255.95)	口 34.6		平陸起線文、沈線片側面キザイ	浅黄桜 7住、7D住、28C-P 1-6・52・54・26・62、 28B-20
85	浅鉢	北	A		7A住-1762 (256.11)	口 33.4		平陸起線文、爪形文	桜 7住
86	浅鉢	北	A		7A住-2064 (256.10)	口 43.8		平陸起線文、爪形文、三叉文	桜 7C住、7D住、27C- 29・14、27D-23
87	浅鉢	北	A		7A住-2031 (256.13)	口 49.0		平陸起線文、爪形文、三角印刺	浅黄桜
88	浅鉢	北	A		7A住-1588 (256.51)			爪形文、平陸起線文、玉抱き三叉文	浅黄桜
89	浅鉢	北	A		7A住-1804 (256.16)			爪形文、平陸起線文、三叉文	にぶい桜 27D-16
90	浅鉢	北			7A住-3566 (256.27)			平陸起線文、爪形文、三叉文	浅黄桜
91	浅鉢	北	A		7A住-3676 (256.10)			平陸起線文、爪形文	桜
92	浅鉢	北	A		7A住-1458 (256.40)			平陸起線文(沈線部なぞり)	赤桜
93	浅鉢	北	A		27-C-3②			平陸起線文	にぶい赤桜
94	浅鉢	北	A		7A住-3858 (256.09)			平陸起線文	浅黄桜
95	浅鉢	南	C		7A住-3835 (256.07)	口 22.8		無文	明赤桜
96	浅鉢		B		7A住-2448 (255.88)	口 54.6		無文、口等部玉抱き三叉文、縦・平陸起線文、 口縁部赤色塗彩	仄白 28B-5

7 B 住

97	深鉢	縦-II b	G-a	II	7B住-1848 A-6 (256.53)	口 28.0 底 14.0	2/5	八字状突起、口等部基底部凸出部、三叉文、網 部基部隆起、平陸起線、無文面あり、窓冠状把 手	赤桜 二次焼成-オコゲ 27B-23、28B-15+24、 27C-3+15+22、26C -8+10、28C-8、7 住、7D住、7A住、7 C住、10B住
98	深鉢	縦-I b	G-a	II	7B住-3968 (256.74)	口 32.4		口縁沈線部ペルナ状突起統制突、頭錐状把手、 基底帶渦巻、平陸起線、沈線部なぞり、玉抱 き三叉文	桜 二次焼成 7C住、28C-15
99	深鉢	縦-I b	G-a	II	27-C-14②	口 23.2	1/5	八字状突起、基底帶、沈線部やや弱いなぞり、 玉抱き三叉文、(逆U字状基底巻)	にぶい桜 二次焼成 オコゲ
100	深鉢	縦-I b	F-	II	7B住-2294 (256.34)	口 18.4		基底帶、平陸起線、沈線部なぞり	明赤桜 二次焼成 オコゲ
101	深鉢	縦-		II	7B住-2252 (256.61)			玉抱き三叉文、平陸起線文、沈線部なぞり	桜
102	深鉢	縦-I c	C	II	7B住-2501 (256.42)	口 14.6		基底帶渦巻、比摩、指円区内網突列点文	明赤桜 二次焼成 オコゲ
103	深鉢	縦-II b	C-b	II	7B住-2095 (256.39)	口 18.0		小穴突起、基底帶渦巻、平陸起線、沈線部なぞ り	桜 二次焼成-オコゲ
104	深鉢	縦		II	7B住-2261 (256.59)			基底帶、平陸起線、沈線部なぞり	淡粉 28D-1、27C-20、27 D-17、7B住、7C住
105	深鉢				7B住-2536 (256.51)			環状突起、沈線	浅黄桜
106	深鉢	南-X			7B住-2119 (256.55)			藍青、有筋沈線(網状)、織文R L	にぶい桜

4 遺 物

番号	形 様	類 別			出土地点 (レベル) (m)	法 量 (cm)	遺 産	文 標	色調・二次焼成・施 合板関係
		系 列	器 形	時 期					
107	深鉢	圓一	F	II	7B住——括 A—5 (256.56)	口 18.8		小突起、半隆起線文による消色、竹管による 網目、織文RL	黒 二次焼成
108	深鉢	圓一II a	D—a	I?	7B住——括 A—8	口 30.8		口縁部陰帯による商円区画、区画内斜状文、 織文RL	黒 二次焼成
109	深鉢	圓一II a			7B住—2502 (256.32)			椭円区画、網目沈線文、蒸糸L	黒 二次焼成
110	深鉢	圓一IV A			7B住—3468 (256.49)	口 13.4		口縁部無文帶、織文L	黄橙
111	深鉢	圓一IV B		27—B—19		口 25.0		織文RL	にぶい緑 二次焼成
112	深鉢	圓一			7B住——括 A—22 (256.43)	底 12.0		織文RL、網代底	明赤褐 二次焼成
113	深鉢	圓一IV G			7B住—2664 (256.47)	口 23.8		織文L	にぶい緑 二次焼成 7住
114	深鉢	圓一			7B住—559 (256.80)			織文L	橙 8A住、7C住、7A住
115	深鉢	圓一IV C—n			7B住——括 A—10 底 13.5 高 25.0 (256.52)	口 23.5 4/5		織文RL、網代底	橙
116	深鉢	圓一IV A—a			7B住—2117 (256.57)	口 30.0		口縁上部小突起、織文L	にぶい緑 二次焼成 7C住に多くの破片あり
117	深鉢	圓一	A		7B住——括 A他	口 18.4 底 8.6	1/4	口縁部無文、腰半隆起線、蒸糸L	にぶい緑 二次焼成
118	深鉢	圓一			7B住—2565 (256.38)			織文RL	にぶい緑 二次焼成 オコゲ
119	浅鉢	北	A		7B住—4005 (256.13)			半隆起線、深い沈線、ヤザミ三叉文	黒
120	浅鉢		B		7B住—2209 (256.64)	口 32.8		無文、ミガキ	橙

7 C 住

121	深鉢	階—I b	G—a	II	7C住——括 A—3 (256.69)	口 32.4 3/5		口縁部縦集合沈線、垂直状把手、口縁部溝陰 帯による爪形状斜刻文、基底帶、不定定しない沈線、 尚部の中心に横眼状把手、下半部織文(?)	にぶい緑 二次焼成 8A住
122	深鉢	階—I b	F—a		7C住—3380 (256.72)	口 13.1		小突起、基底帶、半隆起線文、沈線部などり	にぶい緑 二次焼成
123	深鉢	階—I b	G		7C住—249 (256.79)	口 21.6		口縁部陰帯横門区画、基底帶、半隆起線、沈 線部などり	にぶい緑 二次焼成
124	深鉢				7C住—3417 (257.00)	口 20.6		小突起、織文による商円区画	橙 二次焼成
125	深鉢	階—IIB b I			7C住—2897 (256.83)	口 31.1		円孔把手、半隆起線文、交叉印刻	武陽 二次焼成 7B住—5A—12
126	深鉢	圓	I?		7C住—22 (256.92)	口 25.4		八字状突起、縫帶による横門区画、区画内底 有孔沈線、織文RL	武陽 二次焼成 7D住、26C—10、28D —15、28C—P 1
127	深鉢	圓—普		II?	7C住—424 (256.63)	口 16.4 高 30.4	2/5	大型把手、半隆起線文、爪形文、円形竹管に よる刻痕、ハト状沈線、ハの字沈線、4脚、 半隆起線文による足心表現	暗赤 二次焼成 29C—P 12、32C—P 19, 32B—P 4
128	深鉢	圓	F—a		7C住—3353 (256.76)	口 17.2		小突起、織文RL	にぶい緑 二次焼成 オコゲ
129	深鉢	圓—薄		II?	7C住——括 A—1 (256.77)			断面三角形陰帯、半隆起線文、継無文帶、織 文LR	橙 二次焼成 7B住、7D住、7住
130	深鉢	圓—薄			7C住—2905 (256.43)			ワラビ手状沈線、織文RL	にぶい緑 7B住、7D住、27D—1
131	深鉢	圓			7C住——括 A—20 (256.77)	高 9.4		断面半隆起線、織文RL	暗赤褐 二次焼成 オコゲ
132	深鉢	圓	G		7C住——括 A—12 (256.74)	口 22.0		断面状沈線、織文RL	にぶい緑

番号	器種	分類			出土地点 (レベル) 系別	地 (m)	法 (cm)	遺存	文様	色調・二次焼成・他 接合関係
		形	時	期						
133	深鉢	縹-II C	G	II	7C住—1活 —A	口 15.0 底 7.0 高 16.6	4/5	小突起、口縁部横円区、縄文L	根 二次焼成—オコゲ	
134	深鉢	縹-I	G		7C住—3401 (256.79)			半輪起縁文、沈縁部なぞり、玉蹴き三叉文	にぶい根	
135	深鉢		H		7C住—3240 他 (256.76)	口 36.5 底 16.0 高 35.5	1/4	無文	にぶい赤褐色 二次焼成 28C-13、28C-8	
136	深鉢	縹-I	B		7C住—3387 (256.61)	口 24.3		縄文R L	根 二次焼成	
137	深鉢	縹-II a			7C住—1活 A-26 (256.53)			半輪起縁、比較	根 7D住	
138	深鉢	縹-I			7C住—3405 他 (256.78)			はり付け縁帯、縄文L R	黒褐 二次焼成	
139	浅鉢	北	A		7C住—99 (256.66)			半輪起縁文、爪形文、三叉文	褐灰	

7 D 住

140	深鉢	縹-I a	I		7D住—3119			舌状縁帶、基縁帯、沈縁部なぞり、三叉文、 細沈縁	根 二次焼成	
141	深鉢	縹-I ?	G-a	II?	7D住—782 (257.02)	口 23.0		口縁部小突起、基縁帯、縁帯上への字状キ ザミ、三叉文、沈縁部なぞり	にぶい根 二次焼成 オコゲ 7A住、27C-10	
142	深鉢				7D住—740 (257.19)			口縁部眼状小把手から縁帯底下、無文	にぶい根	
143	深鉢	縹-I F			7D住—2323 (256.33)	口 21.3		突起刺実刻文、鏡状縁帶、沈縁区画、縄文 R L	にぶい赤褐色 二次焼成 オコゲ 26E-17	
144	深鉢	縹—I b?	G		7D住—2425 (256.30)	口 23.6		口縁部横状突起、深い沈縁、三叉文	にぶい根 二次焼成	
145	深鉢	縹			7D住—3552 (256.55)			口縁部横状突起手平、基縁帯、半縁起縁、沈縁 部なぞり	明赤褐色 二次焼成 オコゲ	
146	深鉢	縹-VI			7D住—2610 (256.53)			台形横状口縁、沈縁部キザミ、三叉文	灰褐色 二次焼成	
147	深鉢	縹-			7D住—2993 (256.40)			小突起、断面三角形縁帯、縄文?	根	
148	深鉢	縹			7D住—3828 (256.32)			沈縁部キザミ、細沈縁	根 二次焼成	
149	深鉢				7D住—987 (256.73)			縁带上爪形状突起、沈縁、小突起	灰褐色 二次焼成—オコゲ	
150	深鉢		B	I?	7D住—2272 (256.53)	口 33.2		頭部縁帯、網目Y字状縁帶、縄文L	根 二次焼成 7住、7A住、10A住、 8A住、7C住、28D —8・13・14、27C—28— 26	
151	深鉢	縹-II ?	D-a		7D住—2977 (256.45)	口 26.4 底 13.4 高 [35.0]		波状口縁、S字状突起、沈縁による文様区画 羽状縊文R L、L R	根 二次焼成 7A住、27B—15・20、 26D—16、27C—10・11・ 15・16・21、20C—16、 26C—16・24	
152	深鉢	縹-I	A		7D住—2905 他 (256.45)	口 34.8	2/5	縄文R L	にぶい根 二次焼成 オコゲ 7C住、28C-8	
153	深鉢	縹-I			7D住—846 (256.74)			粗沈縁、縄文L、R L	にぶい根 二次焼成 7A住、7B住	
154	深鉢	縹-I			7C住—3990 (256.00)			縄文L	にぶい根 二次焼成 7A住	
155	深鉢	縹-I			7D住—1206 (256.51)			縁帯縦斜南文、縄文R L	にぶい根 二次焼成	
156	深鉢	縹-I	A		7D住—3550 (256.47)	口 16.8		縄文L	暗赤褐色 二次焼成	

4 造 物

番号	器 様	期			出土地點 (レバーリ) (m)	法 量 (cm)	遺存	文 種	色調・二次焼成・施 接合関係
		系 列	器 形	時 期					
157	深鉢	縦一Ⅳ			7 D住-2389 (256.46)	口 36.3	折返し縁、縄文 R L	にぶい緑 二次焼成 オカゲ	
158	浅鉢	圓 C		7 D住-856 他 (256.65)		口 36.8	無文		灰褐色 2 C. 26 D. 27 D-15
159	浅鉢	北 A		7 D住-1243 (256.69)			半隆起縁、沈縫などり、爪形文、三叉文		緑
160	浅鉢	北 A		7 D住-819 (256.89)			半隆起縁、深い沈縫、三叉文		弱赤褐
161	浅鉢	北 A		7 D住-1242 (256.54)			半隆起縁、沈縫などり		緑
162	浅鉢			7 D住-2979 (256.55)			半隆起縁文		にぶい緑

8 A 住

163	深鉢	縦-I b	G-a	II	8 A住-1直底 (256.88)	口 38.0	4/5	4 単位模様焼、基盤帶、沈縫などり、爪 状把手、玉焼き三叉文、横内区画内列点刺 突、沈縫印刻、帶状施文部交叉印刻	にぶい赤褐 二次焼成 オカゲ 28 C-20
164	深鉢	縦-I b	G	II	8 A住-1809 一柄 (257.12)	口 32.6	1/3	墨縁带、半隆起縁、沈縫などり、三叉文、 区画内への字状沈縫。帯状施文部交叉印刻	赤褐 二次焼成
165	深鉢	縦			8 A住	底 14.0		能帶、細沈縫、三角印刻、環縫状把手	弱赤褐
166	深鉢	縦一Ⅲ	B-a	II?	8 A住-1807 一柄 (257.15)	口 35.4 底 18.0 高 48.8	4/5	口縁部突起、環縫状把手、沈縫束による連 続三角形区画、区画内への字状沈縫、縄文 R L	にぶい緑 ? A住
167	深鉢	縦-III a	I-a	II?	8 A住-1808 一柄 (257.22)	口 34.0		口縁部突起、環縫状把手、墨縁带、沈縫など り、玉焼き三叉文。ハニ状沈縫	にぶい赤褐 二次焼成
168	深鉢	縦	I	II?	8 A住-1789 (257.18)	口 28.2		玉焼き三叉文、墨縁带、半隆起縁文、橋状把 手	赤褐 二次焼成
169	深鉢	縦-IV		I?	8 A住-1797 (257.22)			三角形印刻、横片側面にキザミ	弱赤褐 二次焼成
170	深鉢	縦-			8 A住-1873 (256.92)	底 18.0		墨縁带、半隆起縁、沈縫などり	にぶい緑 二次焼成 オカゲ 16B住
171	深鉢	縦			8 A住-645 (257.31)			墨縁带、縦沈縫	緑 27 E-2
172	深鉢	縦-I b?			8 A住-1132 (257.19)			墨縁带、沈縫などり、玉焼き三叉文、横内区 画内斜突	灰褐 二次焼成
173	深鉢	縦-I b	G-a	II	8 A住-618 1802-底 (257.29)	口 15.0	1/2	口縁部小突起、口縁部墨縁帶横内区画、墨縁带、 沈縫などり、三叉文	にぶい緑 二次焼成 オカゲ
174	深鉢	縦-			8 A住-187 (257.12)	底 12.0		半隆起縁文、沈縫などり	にぶい緑 28 B-22
175	深鉢	縦-	B-a		8 A住-1814 (257.21)	口 34.0	1/2	口縁部突起、環縫墨縁帶、脚部Y字状隆起 口縁部墨縁帶上キザミ、縄文 R L	にぶい緑 二次焼成
176	深鉢	縦-	H	I?	8 A住-1794 一柄 (257.06)	口 37.6		波状口縁、断面三角隆起、沈縫照刻突。縄文 R L	
177	深鉢	縦-II a	G-a	II	8 A住-1111 (257.25)	口 19.0	1/4	4 単位突起、墨縁帶内区画、区画内三叉文、 縄文 R L	灰褐色 10A住、23住
178	深鉢	縦	F	II	8 A住-1766 (256.98)	口 19.0	3/5	口縁部墨縁帶による5単位区画、頭部墨縁帶、脚 部半隆起縁による5単位区画、縄文 R L	弱赤褐 二次焼成 オカゲ
179	深鉢	縦-II b	G-a	II?	8 A住-897 (256.96)	口 21.3 底 19.2 高 21.2	1/4	口縁部突起、断面三角形墨縁帶、縫帶上キザミ、 縄文 R L	にぶい緑 二次焼成 オカゲ
180	深鉢	縦-II a	G-a	II	8 A住-1820 一柄 (256.88)	口 18.4 底 8.4 高 21.8	3/5	口縁部4単位突起、頭部墨縁帶、縫帶上把手、隠 帶による横内区画、区画内斜突は横沈縫、縄 文 R L	にぶい緑 二次焼成 オカゲ
181	深鉢	縦-II a	F		8 A住-1084 (257.16)	口 16.8		縫帶横内区画、縫帶上キザミ、縄文 R L	灰白
182	深鉢	縦-			8 A住-387 (257.34)			縫・横沈縫、縄文 L	灰褐

番号	器種	分類		出土地點 (<i>くわん</i>) (m)	出 量 (cm)	遺存	文 様	色調・二次焼成・他 接合関係
		系 列	器形 時 期					
183	深鉢	鍋- I		8 A住-334 (257.15)			縞帶、沈線、圓文 L R	明赤褐
184	深鉢			8 A住-270 (257.49)	口 31.4		半径起線、沈線など	にぶい程 二次焼成
185	深鉢	鍋- II ?		28-D- 6			縞状突起、横円区画、陰带上にキザミ	褐灰 二次焼成
186	深鉢	鍋- II ?		8 A住-103 (257.18)			小突起、X字状縞帶、網状縞帶	にぶい赤褐
187	深鉢	鍋- I	D	8 A住-1806 -逝 (257.25)	口 29.8		沈線区画、点判剖尖、圓文 L R	にぶい程 二次焼成
188	深鉢	鍋- III	F-a	8 A住-1101 (257.07)	口 34.8		波状突起、円形厚浮、網状縞帶、圓文 L R	にぶい赤褐 二次焼成 10A住
189	深鉢	鍋- II	F	8 A住-694 (257.34)	口 16.8		小突起、X字状把手、縞集合沈線	にぶい程 二次焼成
190	深鉢			8 A住-839 (257.12)	口 25.6		無文、縞状口縁	程 10B住
191	深鉢	鍋- IV	H-a	8 A住-1820 -逝 (256.88)	口 34.4	4/5	口縁部 4 単位突起、圓文 R L	にぶい程 二次焼成 オコゲ 7住、7C住、27C-20
192	浅鉢		B	8 A住-1817 (257.09)	口 42.0		小突起、口縁部無文帯、圓文 R L	明赤褐
193	深鉢	鍋- V	G-a	8 A住-805 (257.13)	口 16.5		小突起、圓文 R L	灰褐 二次焼成
194	深鉢	鍋- V	C-a	8 A住-231 (257.10)	口 26.0		4 単位小突起、圓文 R	にぶい程 二次焼成 28D-11
195	深鉢	鍋- V	H-a	8 A住-1794 -逝 (257.08)	口 29.0	2/5	口縁部入字状突起 4 個、圓文 L	にぶい程 二次焼成
196	深鉢	鍋- VI	H	8 A住-1804 -逝 (257.23)	口 30.8 底 14.0 高 38.4	3/5	網狀糸 L	にぶい赤褐 二次焼成 オコゲ 1800-逝、1801-逝 28B-20
197	深鉢		A	8 A住-1803 -逝 (257.21)	口 20.0 底 12.2 高 24.5	4/5	無文、いびつ	にぶい程
198	深鉢	鍋- VII		8 A住-575 (257.35)	口 28.8		圓文 R L	黒褐 28D-22
199	深鉢	鍋- VII	A	8 A住-1811 -逝 (257.28)	口 17.0		圓文 L	にぶい程 二次焼成
200	深鉢	鍋- I		8 A住-619 (257.23)			圓文 R L	にぶい程 二次焼成
201	深鉢	鍋- I		8 A住-1814 -1815 (257.22)			圓文 L	程 二次焼成-オコゲ
202	深鉢	鍋- I		8 A住-1800 -逝 (257.33)			圓文 R L	灰褐 二次焼成
203	深鉢	鍋- I		8 A住-1815 -逝 (257.22)			糸 L	にぶい程
204	深鉢	鍋- I		8 A住-1811 -逝 (257.28)	底 8.2		圓文 L	明赤褐
205	深鉢	鍋- I		8 A住-650 (257.27)	底 12.0		糸 L	にぶい程 28D-6-17
206	深鉢	鍋- I		8 A住-1800 -底 (257.27)	底 11.0		圓文 L	にぶい程 二次焼成
207	深鉢	鍋- I		8 A住-1812 -逝 (257.24)	底 8.5		圓文 L R	赤褐 二次焼成-オコゲ
208	深鉢	鍋- I	A	8 A住-1793 -逝 (257.27)	口 20.0 底 10.7 高 24.8	1/1	圓文 L	にぶい程 二次焼成 オコゲ

4 遺物

番号	器種	分 系 列	形 式 時 期	出土地点 (<i>m</i>)	法 量 (cm)	遺存	文 様	色調 ・二次焼成・伝 接合部
209	深鉢	縄一	A	8A住-1854 (257.17)	口 13.2 底 7.6 高 12.7	4/5	縄文L、網代底	にぶい赤褐 二次焼成 オコゲ 28D-2・10
210	浅鉢	北	A	8A住-1814 一括 (257.23)	底 15.4		半隆起縁、キザシ、縄文RL	明赤褐
211	浅鉢	北	A	8A住-1814 一括 (257.23)	口 34.0		半隆起縁、三角印刻、縄文RL	縁 7D住
212	浅鉢		A	8A住-563 (257.27)	底 14.0		無文、網代底	にぶい赤褐 28D-16
213	浅鉢	北	A	8A住-594 (257.16)	口 33.6		半隆起縁文	にぶい褐
214	浅鉢	北	A	8A住-1036 (257.07)			半隆起縁文、縄文	にぶい赤褐
215	浅鉢	北	A	8A住-1083 (257.03)			半隆起縁文、刺突状爪形文	にぶい褐
216	台付			8A住-977 (257.14)	底 3.7		細い沈線	にぶい褐

9 B 住

217	深鉢	縄-IV	F-a II	9B住-79 (257.68)	口 29.4 底 7.4	1/2	口縁部横状突起、半隆起縁東、溝跡帯S字状 底部、半隆起縁北縫部などり、玉抱き三叉文、 網文RL	明赤褐 二次焼成 29D-4
218	深鉢	縄-I e?	D-a II?	9B住-488 (257.70)	口 26.0		溝跡帯丸凸、三叉文縫状把手	にぶい橙 二次焼成 9A住、29D-10
219	深鉢	縄		9B住-119 (257.70)			半隆起縁	縁
220	深鉢	縄		9B住-288 (257.77)	底 7.4		麻半隆起縁東	赤褐 二次焼成
221	深鉢	縄		9B住-443 (257.76)			縄沈底東	縁
222	深鉢	縄-II e	G-n II?	9B住-450 (257.94)	口 21.0 底 10.4 高 23.6	4/5	口縁部横状突起、沈線による西円区縁、網文 LR	にぶい橙 二次焼成
223	深鉢	縄-IV	D	9B住-186 (257.70)	口 27.8	2/5	基礎部、半隆起縁による沈置窓、遮張内瓶文、 網文RL	明赤褐 二次焼成 21E、29D-4・16・21
224	深鉢	縄-II a	B	9B住-425 (257.74)	口 34.4 底 11.6 高 43.5	2/5	半隆起縁による文様区隔、部分的なぞり 網文RL	にぶい赤褐 二次焼成 9A住、29D-4・14、 30D-8
225	深鉢			9B住-45 (257.75)			無文、底位ケズ	赤褐 二次焼成 29D-8
226	深鉢	縄一		9B住-536 不明			沈底	にぶい橙 二次焼成
227	深鉢	縄-I	D	9B住-432 (257.82)			縦衝状沈縁、網文RL	縁
228	深鉢	縄-I		29-D-40			タラビ手状沈縁、網文RL	にぶい橙 二次焼成

10 A 住

229	深鉢	縄一勝	D-a I	10A住-191 (256.86)	口 24.8 底 9.0	3/5	口縁部横縁三角形区隔、キタタビラ文、ベン 先状刺突、脣部縁帶に刺突状形文	赤褐 二次焼成-オコゲ 8A住、29E、27E-13・ 22、27D-22、28D-5・ 6、28E-21、33F-3
230	深鉢		I?	10A住-282	口 21.0		沈状4単位。口縁部にそってキザシ、半隆起 縁文	明赤褐 二次焼成 オコゲ
231	深鉢		I	10A住-192 (256.80)			脣部横縁区隔、区隔内小沈状沈縁、縁帶にそっ て沈底刺突	縁 二次焼成
232	深鉢	縄一	A	I?	10A住-246 (256.59)		口縁部突起2個、爪形刺突の隆起が一列する。 脣部にも同様の隆起が2本並下。半隆起縁に よる縁・横区隔	にぶい橙 二次焼成
233	深鉢	縄一		10A住-覆土			脣部縁、脣部上にキザシ、脣部縁に半隆起縁 (比較などり)、区隔内網文RL	縁 二次焼成-オコゲ

番号	器種	分類			出土地点 (レバム) (m)	深さ (cm)	遺存	文様	色調・二次焼成・施 錆側面
		系列	器形	時期					
234	深鉢				10A住-67 (256.88)			縁帯、沈縁、沈縁内刺突	淡黄褐 二次焼成
235	深鉢	圓-VI	C-b	I	10A住-10	口 25.4		波状4单位、口縁部隕帯による瀬綱山形文、 沈縁、角鉢文、副鉢Y字状縁帯、沈縁、圓文 RL	灰褐 二次焼成 8A住、8B住、28D- 6・7、27C-10、28D- 20
236	深鉢	圓-I b		I	10A住-399 (256.62)			4個の輪状把手、縁上キザイ、有筋沈縁、 圓文RL	明赤褐 二次焼成 オコゲ 27D-7
237	深鉢	圓-I		I	10A住-271 (256.82)			把手、キサタビツ文、三角形刺突	橙
238	深鉢	圓-I			10A住-337 (256.77)			手縫起縫、沈縁部キザイ、ロ呂唐三叉文	淡黄褐 二次焼成
239	深鉢	圓-I	G	II	10A住-17土			横円区画、区画内刺突	灰白 28D
240	深鉢				10A住-202 (256.86)			折綱三内筋帯、二本一组の複列刺突	にじい模
241	深鉢				28-D-10			縁縫帯、無文	にじい模
242	深鉢	圓-II	D	I	27-D-17①	口 32.0		縦曲隆縫、弧状隆縫、沈縁ラビ手状文、 圓文RL	橙 二次焼成 27D-17・18・20・21、 27C-15・20
243	深鉢				10A住-330 (256.86)			口縫部把耳、口唇部燕糸L、全面原余	黒褐 二次焼成
244	深鉢	圓-II a	G-a		10A住-441 (256.88)	3/5		口縫部ヨタシ状厚文起突、縁帯による横内区 画、副縫鉢文L	にじい模 二次焼成 オコゲ 8A住、28D
245	深鉢	圓-II A			10A住-294 (256.55)	3/5		3ヶ月状突起2個、圓文RL	にじい模 二次焼成 7A住、7B住、8A住 27C-19、28B-5
246	深鉢	圓-II E			10A住-391 (256.71)	1/4		口縫部変形入字状突起、圓文RL	橙 二次焼成 8A住燕糸L、26D-22、 27B-20、26C-25
247	深鉢	圓-II H			10A住-25 (256.66)	口 25.1		圓文L	にじい模 二次焼成 10A住、10B住、7住、 27B-23、27C-24、28 C-10、28D
248	深鉢	圓-I			10A住-241 (256.59)			沈縁キザイ、圓文RL	赤褐 二次焼成-オコゲ 28D-9、29D-22
249	深鉢	圓-II E			10A住-312 (256.63)	口 28.0		圓文L R	にじい模 二次焼成
250	深鉢	圓-II A-s			10A住-379 (256.63)	口 19.0		口縫部小突起、圓文L	淡橙 二次焼成
251	深鉢	圓-II A			10A住-145 (256.91)			圓文L R、補修孔	橙
252	浅鉢	北	A		10A住-17土 (257.00)	底 14.0		手縫起縫、玉指き三叉文、燕糸L	褐色 7住、7D住、28D、26 E-22、27B-25・15

10 B 住

253	深鉢	圓-I			10B住-225 (256.16)			手縫起縫文、沈縁部なぞり	黒褐
254	深鉢	圓-I			10B住-313 (256.26)			手縫起縫、沈縁部なぞり	にじい模
255	深鉢	圓-I			10B住-312 (256.22)	口 33.4		小突起、手縫起縫文、三叉文	にじい模 二次焼成
256	深鉢	圓-I	G		10B住-274 (256.42)	口 12.3		縫状突起、口縫部横内区画	淡褐 二次焼成 27B-15、27C-20
257	深鉢	圓-I b?	G	II	10B住-143 (256.24)	口 12.4		縁帯、沈縁部なぞり、三叉文	橙 二次焼成
258	深鉢	圓-I			10B住-156 (256.64)			基縫帯、手縫起縫	明赤褐 二次焼成 8A住
259	深鉢	圓-II b			10B住-74 (256.26)			縫帶横内区画、有筋沈縁	明赤褐

4 遺 物

番号	器種	分類		出土地点 (ゾーン) (m)	法量 (cm)	遺存	文様	色調・二次施成・施 接合関係
		系 列	器 形					
260	深鉢			10B住-169 (256.12)		縦半隆起線文	明褐色	
261	深鉢	周一		11B住-175 (256.00)		環状波状把手、基座帯、縦半隆起線、縄文R L	根 二次施成 7住、7A住、27C-15- 26、26E-25	
262	深鉢	周一	A	10B住-164 (256.06)	口 20.0	口縁部にそってキザシのある縦帯、口縁部無 文帯、縄文しR	にぶい根 二次施成 オコゲ	浅黄緑
263	深鉢	周一		10B住-2 (256.65)		入字状突起、縄文しR		
264	深鉢			10B住-147 (256.36)		小突起、無文		にぶい根
265	深鉢	周-IV		10B住-137 (256.34)	口 27.0	縄文R L		にぶい根 二次施成
266	深鉢	周-IV	B	10B住-149 (256.19)	口 20.2 1/3	無余L		にぶい根 二次施成
267	深鉢	周一		10B住-364 (256.21)	底 7.6	半隆起線文網区画、縄文R L、底部木葉痕	にぶい赤褐色 二次施成 27C-15	
268	深鉢	周一		10B住-127 (256.25)	底 10.4	縄文L R、網代底		根
269	浅鉢	北一	A	10B住-259 (256.33)		半隆起線文、爪形文、齊形		にぶい根
270	浅鉢	北	A	10B住-348 (256.25)		半隆起線文、爪形文		にぶい根

11 住

271	深鉢	陸一		II	11住-117 (258.27)		基座帯、半隆起線文	灰根
272	深鉢	陸一		II	11住-26 (258.30)		半隆起線文、沈縫部なぞり、三叉文	にぶい根 二次施成 オコゲ
273	深鉢	陸一		II	11住-111 (258.34)		基座帯、半隆起線、沈縫部なぞり	にぶい赤褐色
274	深鉢	陸- I		II	11住-55 (258.33)		半隆起線東、三叉文	にぶい根
275	深鉢	陸		II	11住-53 (258.27)		半隆起線文、三叉文、沈縫なぞり	根
276	深鉢	陸			11住-66 (258.20)		半隆起線文、交叉三角形印附	明赤褐色
277	深鉢	周-IV	A	II	11住-99 (258.25)	口 19.5	沈縫によるクランク桟区画、縄文R L	明赤褐色 27E-12, 29E-8, 30 E-3, 30F-3-P
278	深鉢	周-IV			11住-75 (258.33)	口 20.3	口縁部継連続波状線、口縁下に網曲状沈縫、 縄文?	にぶい根
279	深鉢	陸			11住-105 (258.41)		ツバ状小波状突起、キザシ	にぶい根 二次施成 オコゲ
280	深鉢				11住-38 (258.32)		縦帯、有筋波状	根 二次施成
281	深鉢	周-IV		II	11住-140 (258.68)		沈縫による縱横区画、縄文R L	にぶい根
282	深鉢				11住-12 (258.33)		半隆起線文、玉泡き三叉文	にぶい根 二次施成 オコゲ
283	深鉢				11住-115 (258.14)		頭部圧痕帯、網曲状沈縫、縄文R L	にぶい根 二次施成
284	深鉢				11住-84 (258.30)		突起部(渦巻)	灰白
285	深鉢	周一			11住-151 (258.20)		半隆起線、縄文R L	灰褐色 二次施成
286	深鉢	周一			11住-34 (258.21)		沈縫、縄文R L	にぶい根 二次施成 29G-21, 30G-1
289								

12 住

番号	器種	分類 系 列	形 式 期	出土地点 (レーザー) (m)	法 量 (m)	遺存	文 様	色調 ・二次焼成・他 機会関係
290	深鉢		D	12往-72	口 15.2	1/4	縦状突起4個、円形竹管刺穴、側部網平施起 縫文	赤褐 二次焼成
291	深鉢	開一勝		12往-159			口縦部突起、階面下キャラビラ状キャラミ	灰褐 二次焼成
292	深鉢		I	12往-98			2本直縫、縫文R L	褐 二次焼成
293	深鉢	縫一		12往-73			縫け付付縫密、縫文L R	明赤褐
294	深鉢			12往-190			平縫縫密文	明赤褐
295	深鉢			12往-156			縫文L R	にぶい褐
296	深鉢			12往-139			無文、小波状突起	褐
297	浅鉢			12往-157	口 13.7 底 6.5 高 4.9		無文、赤形、ウルシ? (内面)	にぶい褐
298	浅鉢	北一	A	12往-125	口 39.0		半縫起縫、沈縫部なぞり、爪形状キャラミ、底 部網平底、縫文R L	淡黄褐

13 住

299	深鉢	縫-II a	F	II	13往-69	口 14.8	半縫縫密文、沈縫部なぞり、淡色、玉施き三 文文	にぶい赤褐 二次焼成 オコゲ
300	深鉢	縫		II	13往-172		基縫帶背巻、半縫縫密文、網状把手	褐 二次焼成
301								
302	圓鉢	縫-II a	F-a	II	13往-100	口 19.0	口縫部突起4単位、基縫帶背巻、半縫縫密文、 沈縫部なぞり、頭部縫密、三文文、補修孔	暗赤褐 二次焼成 オコゲ
303	深鉢	縫			13往-174	底 6.8	基縫帶、沈縫	明赤褐
304	圓鉢	開一阿		II	13往-252	口 37.0	通軸孔点刺突、無文	にぶい褐 二次焼成
305	深鉢				13往-16		有孔網付土器、中空網状把手、縫密による 文織、赤形	褐
306	深鉢				13往-44		口縫部無文、縫帶密に通軸刺突	褐
307	深鉢	縫一汎	B	I?	13往-59	2/5	基縫帶円区巻、縫文R L	明赤褐 二次焼成 オコゲ
308	深鉢	縫一四			13往-23		縫文L、ワラビ手状文様	褐
309	深鉢	縫	F		13往-114		口縫部突起、無文R	灰褐 二次焼成
310	深鉢	縫			13往-117		無文R	淡黄褐
311	深鉢	縫			13往-216		縫文R L	灰褐 二次焼成
312	浅鉢		B		29-G-17②	口 41.4	無文	にぶい褐 二次焼成
313	深鉢				13往-168		縫文R L	にぶい褐

14 住

314	深鉢	縫-II a	H	II	14往-58 (261.26)	口 30.0	基縫帶渦巻、半縫縫密、沈縫部なぞり、玉施 き三文文	灰褐 二次焼成
315	深鉢	縫一	G-B	II	14往-296 (261.14)	口 22.8	沈縫部に通軸キャラミ、第3文様帶基縫帶によ る渦巻、沈縫	にぶい褐 二次焼成
316	深鉢	縫		II	14往-136 (261.32)		小突起、2本沈縫	にぶい褐
317	浅鉢		A		14往-465 (261.28)		半縫縫密文、沈縫部なぞり	明褐
318	深鉢				14往-179 31-G-25② (261.29)		基縫帶、半縫縫密文、沈縫部なぞり、沈縫部に 通軸のキャラミ、三文文	にぶい褐
321					14往-2111 14往-467 (261.43) (261.26)			
322	深鉢				14往-103 (261.27)		基縫帶、半縫縫密文、沈縫部なぞり	にぶい赤褐 二次焼成 オコゲ
323	深鉢	縫一		II	14往-39-G 2-B		基縫帶円区巻、区巻内刺突、三角印刺	にぶい褐

4 造 物

番号	器種	分類		出土地点 (ヤベタ) (m)	法量 (cm)	遺存	文様	色調・二次焼成・施 接合関係
		序列	器形					
323	深鉢	縁一		II 14往—53 (261, 40)			高絶帶横円区画、区画内刺突	赤黄褐 二次焼成
324	深鉢	周一期	I	14往—535 (261, 20)			キャラビラ文、ベン先状刺突	にぶい赤褐 二次焼成
325	深鉢	周一期	I	14往—229 (261, 36)			縦帯の両脇に瓦形状刺突	にぶい赤褐
326	深鉢			14往—45 (261, 40)			横線文。刺突	にぶい橙
327	深鉢	縁(?)		29—G—18②			高絶帶、半旋起線文、沈線済巻	明赤褐 二次焼成
329	深鉢	縁一Ⅲ		14往—528 (261, 30)			縦帯による横円区画、区画内波状沈線 (人字状突起)	暗褐
330	深鉢	縁		14往—118 (261, 26)			はり付け縦帯、縦帯上にキャラビラ文、半旋起線文	暗赤褐 二次焼成 29F—1
331	深鉢			14往—13 (261, 32)			口唇部横状突起、縦帯上化粧刷込み	橙 二次焼成
333	深鉢	縁一		14往—92 (261, 34)			高絶帶、区画内刺突、縫文L R	橙 二次焼成
335	深鉢			14往—99 (261, 38)			無文	明赤褐
336	深鉢			14往—75 (261, 37)			鋸齿状沈線、曲絶起線文	橙 二次焼成 30G—20
337	深鉢	縁		14往—488 (261, 27)			三角形刺突	赤褐 二次焼成 30G—4
338	深鉢	周一期		14往—487 (261, 27)			縦帯、有筋沈線(複判)	明赤褐 二次焼成 キャラビラ
340	深鉢			14往—487 (261, 27)				26往、27F—7 + 13
339	深鉢	(?)	A	14往—405 (261, 06)			無文	にぶい橙
343	深鉢	縁一Ⅲ b	I	14往—183 (261, 32)			三角形波状口縁、縦帯、有筋沈線(複判)	明赤褐 二次焼成 キャラビラ
344	深鉢	周一期	A	I 14往—52② (261, 24)	口 13.6 底 [7.0] 高 [17.4]		縦帯による縦・横円区画、縦帯にそった有筋 沈線、縫文L R	横葉模 二次焼成 30G—14, 31G—11+17, 32G—1, 31H—21
345	深鉢	縁一Ⅲ b	I	14往—44 (261, 35)			入字状突起、沈線横円区画、沈線部キャラビラ、 有筋沈線	にぶい赤褐 二次焼成
346	深鉢	周一期	B	14往—527 (261, 17)			鋸齿状沈線、縫文L R	明褐 二次焼成 28E, 30G—10 + 21 + 2 5, 31G—2, 5 A—81
347	深鉢	周一期	II	14往—561 (261, 06)	底 12.0		半旋起線による逆U字区画、縫文L R	橙 二次焼成—キャラビラ
348	深鉢			14往—456 (261, 14)			口唇部キャラビラ、縫文?	橙 二次焼成
349	深鉢	周一期	C—b	30—G—24	口 20.0 底 6.4		波状口縁、沈線による横円区画、縫文R L	橙 二次焼成
350	深鉢	周一期	C—b	31—G—P 1 ①	口 21.2		波状口縁、縫文L	橙灰 二次焼成
351	深鉢	周一期	H	30—G—14	口 30.0		口唇部にそって沈線、縫文L	にぶい赤褐 二次焼成 キャラビラ
352	深鉢	周一期		13往—249 (261, 23)				黒褐 二次焼成—キャラビラ
353	深鉢			14往—124 (261, 26)			蒸券?	にぶい褐 二次焼成
354	深鉢	縁一	II	30—G—2			半旋起線文、沈線部をナギ、玉泡き三叉文	橙
355	深鉢	周一期		14往—39 (261, 41)			然糸L	橙 二次焼成
356	深鉢	周一期		14往—48 (261, 33)			縫文R L	赤褐 31—1風
357	深鉢	周一期		14往—144 (261, 41)			羽状縫文R L	明褐
358	深鉢	周一期		14往—546 (261, 19)			縫文L R	橙 二次焼成

番号	器種	分類			出土地点 (\times m)	法量 (cm)	遺存	文様	標	色調・二次焼成・他 接合関係
		系別	器形	時期						
359	深鉢	圓一			14E-468 (261.36)			小突起、圓文RL		褐灰 二次焼成
360	深鉢	圓一			14E-236 (261.25)	底 4.8		圓文RL		にぶい緑 二次焼成

15 住

361	深鉢	圓一IX	G?		堀縁	口 19.4	3/4	口縁部下半に横状隆脊、その後者が網文Y字状に垂下(4单位)、口縁文網格状模様。圓文RL		赤褐 二次焼成-オコゲ
362	深鉢	圓一	D?		15E-106 (256.46)			Y字状隆脊、口縁部内凹区画、区画内細化線 圓文商文しR		にぶい緑 二次焼成
363	深鉢	圓一II	D		15E-222 (256.28)	口 28.0		口縁下部に隆脊が一周する。隆脊上にキザミ、 口縁部腹沈線区画、区画内斜方向網状模様。圓 文商文		明赤褐 二次焼成
364	深鉢	圓一門			15E-144 (256.58)			隆脊奇輪円区画、隆脊上にキザミ		褐 二次焼成
365	深鉢	圓一II	II		15E-382厚 直 (256.44)	底 9.0		波浪隆脊、半隆起線、沈線部なぞり、三叉文		にぶい緑 二次焼成
366	深鉢	圓			15E-200 (256.30)			隆脊上にキザミ、腰平隆起線束		淡褐 二次焼成
367	深鉢		A		15E-314 (256.12)	口 13.4		無い斜格子目文		にぶい緑
368	深鉢	圓一			15E-227 (256.31)			沈線方形区画、区画内無開L		にぶい緑 30B-9-10, 30C-11-風
369	深鉢	圓一			30-B-P 6 -15			圓文LR?		にぶい緑 二次焼成
370	深鉢	圓一W	G		15E-36 (256.43)	口 25.6		圓文RL		浅黄緑 二次焼成
371	深鉢	圓一W	H		15E-147 (256.50)	口 35.6		圓文L		浅黄緑 二次焼成
372	深鉢	圓一W	G		15E-246 (256.39)	口 36.6		圓文L		浅黄緑
373	深鉢	圓一			15E-43 (256.51)			沈線、圓文LR		明赤褐 二次焼成
374	小深鉢		A		15C住-429 (256.15)	口 6.5 底 4.0 高 7.8		無文		浅黄緑 15C住, 15B住, 30B-P 17
375	深鉢				30-B-P 8 -1	底 9.4		底部		褐 二次焼成
376	浅鉢	北	A		15E-282 (256.25)	口 39.4 底 14.0		隆脊奇輪円区画、半隆起線、沈線部なぞり、刺 突、隆脊上にキザミ		灰褐 二次焼成-オコゲ 30B-風1-36
377	浅鉢	北	A		15E-97 (256.51)	口 38.8		半隆起線文、沈線部なぞり、三叉文、圓文R L		灰黄緑
378	浅鉢	北	A		15E-122 (256.32)	口 34.0		半隆起線文		灰黄緑
379	浅鉢		A		30-B-7①	口 38.8		半隆起線文、三叉文、圓文RL		褐
380	浅鉢	北	A		15E-96 (256.33)	口 39.2		半隆起線文、沈線文なぞり、三叉文、圓文RL 内面あれ		褐 30C-11, 30B-12・15
381	浅鉢	北	A		15E-242 (256.41)			半隆起線文、爪形文		明褐灰
382	浅鉢	北	A		15E-68 (256.47)			半隆起線文、爪形文		にぶい赤褐
383	浅鉢	北	A		15E-35 (256.52)	口 36.0		半隆起線文、三叉文、爪形文		褐
384	浅鉢	北	A		15E-284 (256.27)			半隆起線文、キザミ		にぶい赤褐
385	浅鉢				15E-265 (256.38)	底 14.8		圓文LR?		浅黄緑

4 遺物

16 住

番号	器種	分類	類	出土地点 (レベル) (m)	法 益 (cm)	遺存	文 様	色調・二次焼成・地 接合関係
		系 列	器 形	時 期				
386	深鉢	盤一		29-C-P15 ④			沈縁による同心円文	にぶい赤褐色 二次焼成
387	深鉢	盤一		29-C-P15 ①			高平縁唇淡墨、縁帶上キザ	橙
388	深鉢	盤一		16住-70 (256.55)			淡沈縁	橙 二次焼成
389	深鉢	盤一		16住-199 (256.46)			口縁部横沈縁	灰白
390	深鉢	盤一		16住-200 (256.79)			口縁部小突起、腹半縁起縁	明赤褐色
391	深鉢	盤一	II	16住-106 (256.79)			基底等身也、比縁部に細かいキザ	明赤褐色 二次焼成
392	深鉢	盤一	II	16住-116 (256.55)			胴部大・横沈縁、胴部基部による横円区画、 区画内純文R L	橙 二次焼成-オコゲ
393	深鉢	盤-II G		29-C-11④	□ 28.5		口縁部小突起、縁帶による横円区画、区画内 圓渦状沈縁、純文R L	灰褐色 二次焼成
394	深鉢	盤一 G		16住-261 (256.65)	□ 22.0		口縁部小突起、口縁部基部沈縁-第2文様帶 弧狀小突起沈縁、無系L	灰褐色 二次焼成-オコゲ
395	深鉢			16住-125 (256.82)	□ 21.5		無文、楕状沈縁	にぶい橙 二次焼成
396	深鉢	A		16住-1 (256.79)	□ 14.2 底 8.8 高 17.2	1/2	中や深い沈縁による文様	にぶい橙 二次焼成 30B-P 1-1, 6 C -2
397	深鉢		I?	16住-19 (256.65)	□ 13.4 底 7.2 高 [1.2]		口縁部にキザ、口縁部横沈縁、頭部に刺突 が一貫する。明細縫状沈縁および横沈縁 文L R	明赤褐色 二次焼成 オコゲ 29C-22
398	深鉢	A		29-C-P18	□ 22.0		圓文L	にぶい橙 二次焼成

18 住

399	深鉢	盤-I	C-a	II	18C住-21 (258.67)	□ 16.4	1/3	口縁部三角突起、胴部基部による4単位縁 区画、区画内沈縁による渦巻、三叉文	明赤褐色 二次焼成
400	深鉢	盤-V	G	II	18A住-476 (258.75)	□ 19.4	1/4	口縁部突起、円孔、荷円区画内斜方向へラ状 沈縁、頭部半縁起縁による渦巻、三叉文、下 半部渦巻區画、下半部純文	灰褐色 二次焼成
401	深鉢	盤-II		II	18B住-39 (258.66)	底 8.6	1/3	頭部基部による渦巻、胴部基部縁、三叉文、 無文帯を残す。口縁部下半-半縁起縁、沈縁 部などり、底部網代底	にぶい橙 二次焼成 オコゲ
402	深鉢	盤一		II	18A住-539 (258.66)	底 6.2		頭部状突起、基盤部、半縁起縁部などり	明赤褐色 二次焼成
403	深鉢	盤一	G	II	28-F-P 1 ④			基底帯、半縁起縁、沈縁部などり、三叉文、 補修孔	明赤褐色 二次焼成 オコゲ
404	深鉢	盤一			18A住-430 (258.70)			底半縁起縁文、無文帯を多く残す。	明褐色 二次焼成-オコゲ
405	深鉢	盤一			18A住-206 (258.65)			太い縫縫による横区画、縫縫にそってキタ ビリ文、有筋沈縁	明赤褐色 二次焼成 オコゲ
406	深鉢	盤一			29-F-P20			太いV字状沈縁帯、縁帶にそって数条の沈縁、 口縁部小突起	明赤褐色 二次焼成
407	深鉢	盤一	C-b		18A住-208 (258.69)	□ 15.5		頭部太い沈縁、口縁部も太い沈縁による三角 形区画、縁帶上には深いキザ、無系R	にぶい橙 二次焼成 オコゲ 12住
408	深鉢	盤一			18C住-7 (258.77)			基底帯上にキザ、半縁起縁文、沈縁部など り	明赤褐色 二次焼成
409	深鉢	盤-II	G		29-E-P14	□ 32.0		口縁部基部区画、縁帶上にキザ、区画 内横沈縁、有筋沈縁、純文R L	灰褐色 二次焼成
410	深鉢	盤一			18A住-635 (258.78)			頭部状沈縁、羽状純文(L R + R L)	にぶい橙 二次焼成 27G-23
411	深鉢	盤-IV	C		18C住-16 (258.67)	□ 18.4	1/2	4個の突起、無系L	にぶい赤褐色 二次焼成 18S住
412	深鉢	盤-IX	H		29-F-P14	□ 29.4		無系L、頭部及び胴部に頭部状沈縁	にぶい橙 二次焼成

番号	器種	分類			出土地点 (レベル) (m)	法量 (cm)	遺存	文様	色調・二次焼成・他 混合関係
		系列	器形	時期					
414	深鉢	縄一			18A住-644 (258.55)			頭部にそって斜生の沈線、縄文RL	にぶい褐色 二次焼成 オコゲ 18B住
415	深鉢	縄一	C		18A住-333 (258.62)	口 13.0 底 4.6 高 9.8	1/3	4単位波状口縁、頭部に隆起及び環状把手 縄文RL	にぶい赤褐色 二次焼成 オコゲ
416	深鉢	縄一	G		18B住-289 (258.67)	口 11.0 底 6.6 高 11.1	1/1	口部小突起、沈線一周、頭部撫糸R	にぶい褐色 二次焼成 18A住
417	深鉢	縄一			18B住-215 (258.69)			口縁部波状突起、縄文L	橙
418	深鉢		D-b		29-F-P14	口 27.4		無文、輪横模様	橙 二次焼成-オコゲ
419	深鉢	縄一			28-F-P1 ②	口 20.4		4単位波状口縁、口縁にそって太い沈線、周 灰褐色 二次焼成-オコゲ 縄文RL	にぶい褐色 二次焼成 12住、30F-10A
420	浅鉢				18A住-313 (258.71)			無文、	褐色 二次焼成
421	深鉢				18A住-580 (258.60)	底 15.0		縄文LR、底部近くケズリ	にぶい褐色 二次焼成 12住、30F-10A
422	台付				18A住-342 (258.68)	底 5.4		無文、	赤褐色 二次焼成
423	深鉢				18A住-110 (258.66)	底 7.7		沈線、隆起、底部撫糸庄底	にぶい褐色 二次焼成
424	深鉢	開一河		II?	28-F-P3	口 25.0		頭部、ヘラ状刺突	黒褐色 二次焼成、金雲母 27F-9、28F-13+19, 26B-23
425	浅鉢				28-F-P3	底 15.0		縄文LR、底部瘤状庄底	明褐色
426	浅鉢		A		18A住-270 (258.65)			沈線のみ	橙
427	浅鉢	北	A		18B住-7 (258.79)			半體起線、沈線部深いなぞり	にぶい褐色
428	浅鉢	北	A		18B住-30 (258.79)			半體起線文、沈線部なぞり、爪形文	にぶい褐色

19 住

429	深鉢	縄一IV	D	II	19住-60 (258.02)	口 30.4		茎部密巻、沈線、頭部隆起、胴部縄文LR	褐 二次焼成
430	深鉢?				19住-26			微細起線による精円区画	始赤褐色 二次焼成
431	深鉢	縄一			19住-29 (258.20)			隆起、沈線にそった爪形刺突	灰白
432	深鉢	縄一			19住-60 (258.02)			胴上部撫糸帶、縄文LR	にぶい褐色 二次焼成 オコゲ
433	深鉢	縄一W A			19住-11 (258.19)	口 10.4		口唇部にキザシ、縄文RL	褐 二次焼成-オコゲ
434	深鉢	縄一W			19住			縄文RL	明褐色
435	深鉢				19住			波状口縁、沈線部にキザシ	黒褐色 二次焼成
436	深鉢	開			19住-60 (258.02)	底 9.0		無文	にぶい褐色
437	深鉢	縄一刃 a?			19住-7 (258.24)			数条の継沈線、縄文LR	褐 二次焼成-オコゲ
438	浅鉢		D		19住-60 (258.02)	口 32.0		波状口縁、無文	黒褐色

20 住

439	深鉢	縄一V	C-b	II	20住-31	口 19.6 3/4		4単位波状口縁、口縁部基部帶三角形区画、 鋸歯は横帯区画、半體起線、沈線部なぞり、 三叉文、S字文、内面撫糸に刺突あり	明褐色 二次焼成
440	深鉢	縄一I b	G-n	II	20住-200	口 22.8		口唇部入字状起線、胴部基部帶による網目文、 玉抱き三叉文、半體起線文、沈線部深いなぞり	にぶい褐色 二次焼成

4 遺 物

番号	器種	分類			出土地点 (レバーベル) (m)	法量 (cm)	遺存	文様	色調・二次焼成・施合關係
		系列	形	時期					
441	深鉢	薩-V ?		II	20往-39			半縫起線文、沈縫部なぞり、玉抱き三叉文	にぶい緑 二次焼成
442	深鉢	薩-I			30-F-13①			半縫起縁、沈縫、三角形刺突	灰褐 二次焼成
443	深鉢	薩-I			20往-30-F 9-A			基縫帯、玉抱き三叉文、半縫起縁文	にぶい緑
444	深鉢	薩-I		II	20往-17			基縫帯、沈縫	にぶい緑 二次焼成
445	深鉢		I?		20往-166			縫帶、有筋沈縫	にぶい黄緑
446	深鉢				20往-114			縫帶上にキザイ、沈縫部三角形刺突	にぶい緑
447	深鉢	薩-II b	I		20往-3			縫帶による縫区画、通縫縁にそって有筋沈縫	にぶい緑 二次焼成 オログ
448	浅鉢?	北	A		20往-16			基縫帯渦巻、半縫起縁文、基縫帯上にキザイ 口沿部玉抱き三叉文	灰褐
449	深鉢?	萬-I			20往-30-F			縫かい萬文(R L)、有筋沈縫	にぶい萬
450	深鉢	萬-I		I?	20往-65			半縫起縁文、沈縫部なぞり、沈縫片端部キザイ +玉抱き三叉文	にぶい緑 二次焼成 オログ
451	浅鉢?	萬-I			20往-82	□ 39.0		口縫部肥厚、無赤L	赤褐 二次焼成
452	深鉢	萬-I		I	20往-102	底 12.0		數条の縫比縁、縫文R L	にぶい赤褐 二次焼成
453	深鉢	萬-I		II	20往-201	2/5		縫6 単位区画。(半縫起縁、沈縫部なぞり)萬文(R L)	にぶい赤褐 二次焼成 オログ
454	深鉢	萬-I			20往-15	□ 21.6		口縫部横伏把手、口縫区画内縫比縁沈縫、萬文L R	淡綠 二次焼成
455	深鉢	萬-I			20往-162			横縫状沈縫、羽状縫文	緑 二次焼成
456	深鉢	萬-IX			20往-133	□ 18.4		口縫縫状沈縫、2本沈縫による三角形区画、明赤褐	二次焼成
457	深鉢	萬-I			20往-98	□ 20.1		無文、輪筋み縫を横縫に残す。	にぶい緑 二次焼成
458	深鉢	萬-I			20往-10	□ 21.8		無赤L	灰褐 二次焼成
459	深鉢	萬-I			29-F-20②			縫文L R、縫曲状沈縫、弧状沈縫	緑
460	深鉢	萬-I			20往-180			無文	にぶい緑 二次焼成
461	深鉢	萬-I			20往-30-F -5-C			縫文R L	萬 二次焼成
462	深鉢	萬-I			20往-120	底 7.9		縫文R L	にぶい萬 二次焼成
463	深鉢	萬-I			20往-10	底 10.0		無赤L、低窓側代底	にぶい緑 二次焼成
464	深鉢	萬-I			20往-29	底 13.0		縫文R L	緑 二次焼成+オログ
465	浅鉢		B		30-G-1 -B	□ 38.4		無文	明赤褐
466	小鉢				20往-30-F -10-A	□ 8.0		無文	明赤褐 二次焼成 オログ

21 住

467	深鉢	薩-II a		II	21往-17 (259.13)	□ 18.0 底 9.6 高 21.0	3/5	入字状突起、口縫第1文縫帯に縫状縫帯、口縫第2文縫帯半縫起縁文による楕円区画、胴部半縫起縁文、縫文R L	明赤褐 二次焼成 オログ
468	深鉢	薩-I		II	21往-104 (259.34)			半縫起縫文	緑
469	深鉢	薩-I		II	21往-329 (259.06)			基縫帯、沈縫、三叉文	にぶい緑 二次焼成
470	深鉢	薩-I C?	G	II	21往-3 (259.15)	□ 31.8		縫狀把手、基縫帯渦巻、半縫起縁文	にぶい緑 二次焼成 オログ 28G-21, 29E-10
471	深鉢	薩-I			21往-269 (259.96)	底 10.0		半縫起縫文、沈縫部なぞり、三叉文、無文部 を残す	明赤褐 二次焼成
472	深鉢			I	21往-344 (259.47)			縫かい進華文次半縫起縁文、入字状突起、円孔	にぶい緑 二次焼成 オログ 31G-13-22
473	深鉢				21往-168 (259.49)			口縫突起部分、縫統状把手	明褐色 二次焼成
474	深鉢				21往-207 (259.48)			口縫突起部分	褐

番号	器種	分類			出土地点 (レベル) (m)	法 (cm)	遺存	文 様	色調・二次焼成・地 質接合関係
		系 列	器 形	時 期					
476	深鉢	縁-II b	D	I	29-F-P10	口 13.6	口縁部沈線、沈線部追続刺突、頭部沈窓によ る直線文、波状文、頭部窓区画	褐 二次焼成オコゲ 8 A 住、7 C 住、27 E -23、27 D-4、28 E -25、26 G-P1	
477	深鉢	縁-I			21住-64 (259.24)	底 11.0		波状による縫接状文、網代文	褐 二次焼成 29E-25
478	深鉢	縁-I	G		21住-273 (259.12)	口 21.8 底 12.0 高 31.4	口縁部に波状彫刻、S字状彫刻。半截竹管 2 本、波線による指円区画。網代文には半截竹管 2本が縫合する。腹部窓代底	にぶい 棕 二次焼成	
479	深鉢	縁-I	F	II	21住-86 (259.30)	口 19.8	口縁部1文字帯-半縫起縫、波状部窓になぞ り、口縁部2文字帯はり付け縫窓による連弧 文、圓文LR	明赤褐 二次焼成 オコゲ 29E-3-10-29	
480	深鉢	縁-I	A		30-F-P39	口 32.0	口縫接状文、圓文RL	にぶい 棕 二次焼成 30G-13-b、14住	
481	深鉢	縁-I	G		21住-222 (259.12)		口縫接縫帶、浅い半縫起縫	明赤褐 二次焼成	
482	深鉢	北-I	A		21住-344 (259.14)	口 46.4	半縫起縫文、刺突吹形文、圓文LR	明褐 30E-10、29 F-P14	

23 住

483	深鉢	縁-II b	G	II	23E-271 (257.13)	口 21.0	4単位波状口縫、頭部基盤帯、縫接状把手、 口縫接基盤帯による渦巻、半縫接縫文、三叉 文、頭部基盤帯による縫4単位区画、玉括き 三叉文	褐 二次焼成 8 A 住
484	深鉢	縁-I b	D	II	23住-59 (257.21)	口 22.4	1/3 口縫接状把手4個、口縫接状把手による横 円区画、区画内波状沈線、区画内三叉文、頭部基盤帯によ る縫区画、区画内半縫起縫による渦巻文、玉 括き三叉文	褐灰 二次焼成
485	深鉢	縁-I			23住-399 (257.68)		縫基盤帯、三叉文、無文帯、区画内に矢羽根 状沈線	浅黄褐 二次焼成 7住
486	深鉢	縁-I			23住-192 (257.14)		縫縫帶、沈縫(部分的に有筋)	にぶい 棕
487	深鉢	縁-I			23住-299 (257.63)		基盤帯、沈縫、三叉文	暗赤褐 二次焼成
488	深鉢 (台付?)	縁-III a	I-a	II	23住-121 (257.10)	口 20.0	口縫接入字状突起、口縫接状把手による横 円区画、区画内波状沈線、頭部縫接把手 及び縫縫による渦巻、区画内ハサウエ状沈線	淡赤褐 二次焼成 オコゲ 8 A 住土、28D-9 -10-12
489	深鉢	縁-V	G	I?	23住-345 (257.28)	口 35.3	口縫接S字状縫合把手、肩形文、口縫接へ ラ文字具による波状渦巻、頭部Y字状縫帶 及び縫縫、圓文RL	褐 二次焼成 28D-26
490	深鉢	縁-I			23住-88 (257.31)		縫帶上に刺突、爪形状刺突	棕
491	深鉢	縁-I			23住-112 (257.26)		縫帶、縫縫部深いキザミ、頭部圓文L	暗赤褐
492	深鉢	縁-I			23住-351 (257.61)		頭部供給窓縫、沈縫部深いなぞり、頭部縫 半縫接縫文、圓文L?	棕
493	深鉢	縁-I			23住-31 (257.17)	底 11.4	有筋沈縫、ハの字状沈縫、圓文RL	にぶい 棕
494	深鉢	縁-I			23住-47 (257.18)		口縫突起部、圓文RL	にぶい 棕
495	深鉢	縁-I			23住-181 (257.25)		口縫突起部、円形はり付け浮文、圓文L	にぶい 棕
496	深鉢	縁-IX	H	I	23E-38 (257.26)	口 34.0	1/3 頭部縫接縫帶、頭部斜方向縫接縫帶、圓文R L	にぶい 棕 二次焼成 7 A E、7 B 住、28D -21、27 E-17-18-19
497	深鉢	縁-XV			23住-45 (257.26)		有孔鉢土器、太い縫縫、赤影	暗赤褐 二次焼成 28D-15
498	深鉢	縁-XV	D		23住-170 (257.25)	口 34.8	2/5 圓文RL	にぶい 棕 二次焼成 10 A 住、28 D-P13-2 -7、27 E-23
500	深鉢	縁-XV	A		23住-427 (257.79)	口 35.0	口縫部にそってキザミ、圓文L	淡黄褐

4 遺物

番号	器種	分類			出土地点 (レベル) (m)	法量 (m)	遺存	文様	色調・二次焼成・他 接合関係
		年代	器形	時期					
501	深鉢	周一	H-a	23世-47 (257.12)	口 28.0	2/5	口縁4単位波突起、縄文RL	にぶい模 二次焼成	
502	深鉢	周-IV	A	23世-118 (257.26)	口 20.0		口縁部外反、縄文RL	黒褐 二次焼成	
503	深鉢	周-IV		23世-338 (257.63)			縄文RL	にぶい模	
504	深鉢			23世-87 (257.35)			把手?、網突	黒褐 二次焼成	
505	深鉢	周一		23世-122 (257.08)			胴上半輪波状沈線、胴中央部に2本沈線が一 周、縄文RL	明赤褐 二次焼成 オヨゲ B住-1810-活	
506	深鉢	周一		23世-111 (257.24)			胴形紙縁帯、縄文LR	黒褐	
507	深鉢	周一		23世-190 (257.07)			縄文L	にぶい赤褐 二次焼成	
508	深鉢	周一		23世-273 (257.18)			縄文L、下部横ケヅタ	模 二次焼成	
509	深鉢	周-IV	A	23世-13 (257.07)	口 14.7	2/5	縄文L	にぶい模 二次焼成	
510	深鉢	周一		23世-416 (257.55)	底 5.4		施糸、網代底	にぶい模	
511	深鉢	周-IV		23世-391 (257.48)			断面三角形の高い壁、斜列の沈線及び角押 文	にぶい模 28G-3	
512	深鉢			23世-42 (257.23)			網縁帯、無文	接合模	

26 住

514	深鉢	周一		II	26世-28 (261.19)		半縁起縁文、沈線部なぞり、無文部を残す	明赤褐 二次焼成 オヨゲ
515	深鉢	周一		II	26世-86 (261.00)		斜方向半縁起縁東、無文部を残す	にぶい模
516	深鉢	周一		26世-69 (261.05)			施糸による三角区画、斜方向沈線	にぶい模
517	深鉢	周一		26世-18 (261.17)			施糸、太い沈線、縁帯上にキザミ	にぶい模 二次焼成
518	深鉢	周一		26世			半縁起縁尚凸、沈線部キザミ	黒褐
519	深鉢	周一		30-G-P 8			施糸、縁沈線(半縁起縁-沈線部なぞり)	にぶい模
520	深鉢	周一		26世-120 (261.06)			縁帶、沈線、縄文RL	次実模
521	深鉢			30-G-P 15			断面三角形壁、縁下にキザミ	明赤褐 二次焼成
522	深鉢			26世-24 (261.08)			半縁起縁、矢羽根状沈線	黒赤
523	深鉢	周-IV		26世-56 (260.97)			縄文RL	明褐
524	深鉢	周-IV		31-G-P 4 ①			底沈線、施糸L	黒褐 二次焼成
525	深鉢	周一					半縁起縁文による縁区帯、縄文RL	明赤褐 二次焼成
526	深鉢	周-IV		26世-13 (261.06)			縄文RL	明褐 二次焼成
527	浅鉢			30-G-P 6	底 13.6		下部無文、底部網代底	模 二次焼成
528	浅鉢			25世-4 (261.16)			半縁起縁、沈線部窓いなぞり、縄文RL	にぶい模 二次焼成
529	浅鉢	北	A	30-G-P 6			半縁起縁文、爪形文	にぶい模
530	浅鉢		A	30-G-P 15	口 35.2		半縁起縁文、沈線部なぞり、玉胞き三叉文、 口縁部小突起	にぶい赤褐 二次焼成

27 住

531	深鉢	周-IV	D	I	27世-28 (257.76)	口 21.2	4/5	口縁部4単位突起、有筋沈線による構造区画、 区画内ヶヶ状縁、縄文RL	灰赤 二次焼成-オヨゲ
-----	----	------	---	---	--------------------	--------	-----	---------------------------------------	-------------

番号	器種	分類			出土地点 (レベル) (m)	法 長 (cm)	連存	文 様	色調・二次焼成・他 接合関係
		承 列	器 形	時 期					
532	深鉢	圓-V	C	I	27往-51 28-E-4 (2) (258.19)	口 17.8	2/5	口縁上半及び頭部に半隆起線文がめぐる。口 縁部斜面区画あるが全周の3分の1のみしか 区画されていない。	灰褐色 二次焼成-オコゲ 22E-4
533	深鉢	圓-IX	B(H)	I	27往-49 28-E-14 (2)他 (258.19)	口 36.4	1/2	口縁部斜面による三角形区画(部分的に器身 わりにキザイ)、頭部にキザイの付された隆起 部-周する。そこから周辺の横帯が垂下、縦 文L	にぶい橙 二次焼成
534	深鉢				27往-32 (258.21)	口 17.4		無文	明赤褐 二次焼成
535	深鉢	縦-	F	I	27往-55 28-E-9 (258.20)	口 34.8		波状4単位。尖端部円孔。口縁部にそって半 隆起線文、頭部に三条の半隆起線文。羽状圖 文(R+L)	橙 二次焼成-オコゲ
536	深鉢	縦-		II	27往-54 27-E-18 (2) (258.31)			口縁部斜面突起、基底帯、半隆起線文、三 叉文、構内区画、区画内小突起。	にぶい橙 二次焼成 28E-9+14,
537	深鉢	縦-I		I	27往-28 28-E-8 (2) (258.22)			口縁下半部隆起、有輪花線、頭部舌状に近い 隆起、萬文R+L、沈線。内面にも萬文あり	にぶい赤褐 二次焼成 オコゲ 19往、27-E-13
538	浅鉢		A		27往-87 (258.16)			半隆起線文間に2列のキザイ、萬文L R	橙

28 住

539	深鉢	圓-II B	F-a	II	28往-674他 (260.77)	口 28.0 底 13.3 高 25.0	4/5	口縁部4単位突起、口縁上半横半隆起線文、 口縁下部4単位基底帯捺書き、三叉文、三角印 記、頭部逆S字状底縫帶による4単位区画、 三角彎曲	にぶい橙 二次焼成
540	深鉢	圓-I B	A	I?	28往-847他 (260.69)	口 14.0 底 8.8 高 15.0	2/5	頭部面部三角形区画、頭部半隆起線文による 溝巻、無文部を多く残す	にぶい赤褐 二次焼成
541	深鉢	縦-	G	II	28往-27 (260.86)	口 28.6		基底帯弧状区画、半隆起線、沈線部なぞり、 玉筋拘三叉文	明赤褐 二次焼成
542	深鉢	縦-			28往-182 (260.78)	口 20.4		口縁部横状突起、弧状沈線	明赤褐 二次焼成 オコゲ
543	深鉢	縦-			28往-256 (260.67)	口 13.8		半隆起線文、沈線部窪いなぞり	にぶい橙 二次焼成 オコゲ 29往
544	深鉢	縦-	C	II	28往-401 (260.65)	口 19.8		半隆起線文、渦巻文	明赤褐 二次焼成 オコゲ
545	深鉢	縦-II a	G	II	28往-619 138 (260.72)	口 23.8		口縁上半基底帯、半隆起線文、口縁部半隆起 線文及び基底帯による渦巻文、三叉文	にぶい赤褐 二次焼成 32C-19, 32E-9+19
546	深鉢	縦-II b	F-b	II	28往-871 175	底 5.4	3/5	有輪沈巻による渦巻文、三叉文、(口縁部)頭 部4単位区画、有輪沈巻による渦巻文、玉筋 拘三叉文	明赤褐 二次焼成 オコゲ
547	深鉢	縦-I a	D	II?	28往-890他 (260.81)	口 20.5		口縁部渦巻文による三叉文、頭部把手、頭部窪 い基底帯、半隆起線文	明赤褐 二次焼成 オコゲ
548	深鉢	縦-		II?	28往-189 (260.79)			基底帯、半隆起線文、三叉文、無文部	橙 二次焼成-オコゲ
549	深鉢				28往-82 (260.92)			ボタン状突起部、隆起部にキザイ、区画内細粒 線	にぶい橙 二次焼成
550	深鉢				28往-490 (261.22)				
551	深鉢	縦-		II?	28往-833 (260.82)			幅広窪部による渦巻、区画内円形小刺突光軸	橙 二次焼成
552	深鉢	縦-			28往-108 (260.84)			筒円底帯、沈線、沈線部にキザイ	橙 二次焼成-オコゲ
553	深鉢	縦-			28往-891 (260.96)			突起状底帯、口縁下半分無文	にぶい橙 二次焼成 オコゲ
554	深鉢	圓-II	D-a		28往-829他 (260.65)	口 26.2		口縁部小突起、4単位指円区画(沈線による) 波状沈線、交叉三叉文、口縁下半分横底縫帶 頭部窪部及び沈線による窪部区画、萬文R+L	にぶい橙 二次焼成
555	深鉢	圓-II	G		28往-529 (260.92)	口 19.8		口縁部斜面による区画内区画、波状沈線、口縁 部小突起、区画内半隆起線、萬文L R	にぶい橙 二次焼成

4 造 物

番号	器種	分類			出土地点 (レベッル) (m)	法 長 (cm)	遺存	文 様	色調・二次焼成・他 統合関係
		系 列	器 形	時 期					
556	深鉢	周-X			28E-280 (260.98)			有筋状縁、周文L R	にぶい橙 二次焼成
557	深鉢	周-IX			28E-839 32-E-9 (260.92)	口 34.8		口縁部突起?, 口縁上平及び颈部に網状模様。 口縁部半纏起線文及び化粧による腹・側面区画、 三叉文	にぶい赤褐 二次焼成 32F-8+9+13+19, 30B-P14
558	深鉢	周-I	B-b		28E-272 (260.76)	口 21.2		網状状況口縁、頭部横沈線4本、周文R L	橙 二次焼成-オコゲ
559	深鉢				28E-118 (260.03)			口縁部に深い折模、周文	橙
560	浅鉢	周-I	B		28E-588 (260.60)			口縁深窪い2本沈線、周文L R、内面赤彩	橙 二次焼成
561	深鉢	周-I			28E-676 (261.23)			口縁部突起、周文L	にぶい橙 二次焼成
562	深鉢	周-I			28E-456 (260.92)	口 11.0		口縁部暗窪、半纏起線、沈線部なぞり、周文 L?	にぶい橙 二次焼成
563	深鉢	周-W	B		28E-39 11堆 (260.76)	口 26.4 底 15.4 高 43.0	1/3	周文R L、口縁部無文	にぶい橙 二次焼成 オコゲ 32F-5+9
564	深鉢	周-I			28E-839堆 (260.99)			周文R L	にぶい橙 二次焼成
565	浅鉢		B		28E-126 (261.07)			口縁部無文、周文R L	淡黄橙
566	深鉢	周-I			28E-805 (260.56)	口 35.0		口縁部内面網状压痕、周文L R	橙 二次焼成-オコゲ 32F-21
567	深鉢	周-I			28E-438 (260.63)	底 8.0		周文L、底部卷豪圧痕	橙 二次焼成
568	深鉢	周-勝	I		28E-404 (261.06)			キャラビラ文、ベン先状剥突、側面区画	赤褐 二次焼成
569	深鉢	周-勝	I		28E-962			キャラビラ文、ベン先状剥突	赤赤褐 二次焼成
570	深鉢	周-勝	I		28E-440 28E-317 (260.70) (260.98)			羅文、キャラビラ文	男赤褐 二次焼成
571	深鉢	周-I			28E-827堆 (260.72)	底 13.6		周文R L、底部網代底	にぶい橙 二次焼成
572	深鉢	周-I			28E-869堆 (260.30)			周文R L	にぶい橙 二次焼成
573	深鉢	周-I			28E-840 (260.75)	底 14.0		周文L	にぶい褐 二次焼成
574	浅鉢		A		28E-838 (260.82)	口 12.0 底 6.6 高 6.5	1/1	口縁部小突起、沈線片側端部にキャラミ、頭部 玉造き三叉文、渦巻文、三角形印刻、区画内 網状模	灰白
575	浅鉢	北	A		28E-26 (260.86)			半纏起線、沈線部深いなぞり	橙
576	浅鉢				28E-427 (260.72)	口 41.5		半纏起線文、三叉文	橙

29 住

578	鉢	種-I		II	29E-63 (260.66)	口 19.2 底 12.2 高 10.0	4/5	基座部渦巻(S字状)、半纏起線、沈線部なぞ り無文部に既す。	灰褐 二次焼成
579	深鉢	周-X		I	29E-3-3 (260.99)			新基座部、渦巻、底部にそって有筋沈線、周 文L R	にぶい赤褐 二次焼成 オコゲ
580	深鉢	周-I			29E-33 (260.05)			口縁部小突起、周文R L	にぶい橙 二次焼成
581	深鉢	周-I			29E-21 (260.05)			周文?	にぶい褐
582	浅鉢	周-河	B	I	29E-往-5 30往-152 (260.91)	口 36.8		口縁部横円区画、区画にそって複列有筋沈線、 横円区画の接点部に盤唇渦巻、下部無文	灰褐 31H-15, 31F-12, 32 F-18, 26E-25

30 住

番号	形	基	分類		出土地点 (レベル) (m)	法 (m)	遺存	文 様	色調 ・二次焼成・他 混合陶器
			系 列	形 式					
583	深鉢	隆一		II	30E-249 (261.83)			基底帯・半隆起縁、沈縫部なぞり、三叉文、 圓錐状小把手、	褐、二次焼成-オコゲ 32G-5、31G-14
584	深鉢	隆一	D	II	30E-247 (261.76)	□ 18.2		基底帯による捲曲文及び横区画、半隆起縁文、 沈縫部なぞり、三叉文	褐、二次焼成
585	深鉢	隆一	I	II	30E-251 (261.76)	□ 16.0		口縁部張状把手、基底帯上にキザイ、脚部 三輪形区画、沈縫部深いなぞり、三叉文	褐褐、二次焼成
586	深鉢	隆一		II	30E-106 (261.77)	□ 24.6		基底帯、半隆起縁、玉抱き三叉文	にぶい褐、二次焼成
587	深鉢	隆一			30E-120 (261.90)			基底帯、沈縫、沈縫部キザイ	褐褐色
588	深鉢	周-I	D	II?	30E-167 (261.76)	□ 22.0		口縁部入字状突起、口縁部はり付縫合によ る横区画、脚部網目状、瓶上及び縫合部 に連續のキザイ、半隆起縁による横区画、薄 文R	赤褐、二次焼成-オコゲ 32G-23-25,
589	深鉢	周-I	a	II?	30E-261 (261.75)	□ 23.4		後付口縫、瘤状突起、口縁部波状縫合、脚部 沈縫による横区画、区画内縫合波状突起、空 直の三叉文、補修孔	褐、二次焼成-オコゲ 32G-18、31G-25
590	深鉢	周-I		II?	32-G-132	□ 38.4		口縁部突起、基底帯、沈縫、文帶区画にそっ て連續の突起、褐文R L	にぶい褐、二次焼成、 32G-8・13・18・25、 2B-14、32C-14、8 G、32G-7 P 1
591	深鉢	周-I			30E-45 (261.71)			縫合帯、沈縫部區画、玉抱き三叉文、褐文L R	褐
592	深鉢	周-I			30E-78 (261.84)			縫合帯横円区画、区画内縫合線、褐文L R?	褐
593	深鉢	周-I			30E-61 32-G-19 (261.69)	□ 39.2		口縁部三角形小突起、縫合上には刺突状爪形 文、褐文R L	灰褐、二次焼成-オコゲ 32G-1・3・4・5・ 13・P 3、32G-18-19- 22・23
594	深鉢	周-I			30E-155 (261.75)			縫合部縫合線、糸糸L	褐、二次焼成
595	深鉢	周-II			30E-254 (261.79)			沈縫ワツビ手状文、褐文R L	褐、二次焼成 32G-1
596	深鉢	周-I			30E-74 (261.83)	□ 36.2		口縁部小突起、褐文R L	にぶい褐、二次焼成
597	深鉢	周-II			30E-90 (261.83)	□ 29.2		口縁部無文、沈縫、褐文L R	褐、二次焼成
598	深鉢	周-I			30E-260 (261.67)			2本沈縫による横縫合区画、区画内列点刺突 起	褐、二次焼成 33F-1・1、33G-1・1、32 G-3・17・18・110
599	深鉢	周-I			30E-150 (261.66)			糸糸L	明赤褐、二次焼成 32G-17・18・23・25
600	深鉢	周-I			30E-23 (261.85)	□ 14.6		褐文L R	赤褐、二次焼成
601	深鉢	周-I			30E-242	□ 28.6		折返し口縫、褐文(L)	褐、二次焼成 32G-8・17・18・19・ 23・25
602	深鉢	周			30E-57 (261.86)	□ 25.4		褐文L R	明赤褐、二次焼成
603	深鉢	周-I			30E-10 (261.84)	底 14.0		褐文L R、底部付近は無文	褐、二次焼成 32G-18・24
604	深鉢	周-I			30E-154 (261.66)			褐文L	赤褐、二次焼成 32G-23
605	浅鉢	北	A		30E-256 (261.78)	□ 40.8		半隆起縁の沈縫部深いなぞり、褐文L R	黄褐 32G-8・9

31 B 住

番号	形	基	F	I	29-C-P20 一括	口 36.8 底 14.0 高 28.3	1/1	口縁部4単位小突起、口縁部1文様縫合帯構 造区画、口縁下平把Y字状波状面下、脚部波 状沈縫、脚部波状沈縫底、褐文R L	赤褐、二次焼成-オコゲ
606	深鉢	周-II							

33 住

番号	器種	分類			出土地点 (レベル) (m)	法 (cm)	遺存	文 種	色調・二次施成・施合関係
		系 列	部 形	時 期					
607	深鉢	圓-V	D	I	33住-1番 (258.17)	口 34.0 底 14.4 高 36.9	6/5	口縁部台形様小波状把手、口縁部隆起円弧 面、区画にそって半隆起線文、爪形文	34D-8
608	深鉢	圓-	C?		33住-32 (258.15)	口 27.0		隆起円弧面、区画にそって沈線部キザミ、 区画内斜状模様	明褐色 二次施成 34E-3
609	深鉢	圓-			33住-14 (258.28)	口 30.0		口縁部突起、底面にそって選択のキザミ	褐色 二次施成
610	深鉢				33住-26 (258.13)			側面左方向線状模様	褐色 二次施成
611	深鉢	圓-III		I	33住-92 (258.23)			半隆起線、沈線部なぞり、三叉文、高巻文、 網状模様	赤褐色 二次施成
612	深鉢	圓-			33住-62 (258.09)	底 14.0		鍍錫沈線帯、萬文R L、底部網代底	K.ふい-褐色 二次施成 34C-25・覆土、34D-8・12・13・14
613	深鉢	圓-			33住-89	底 9.0		萬文L R	K.ふい-褐色 二次施成
614	深鉢?	圓-			33住-32 (258.15)	口 35.4		口縁部無文、萬文R L	褐色

35 A 住

615	深鉢	圓-II		II	35A住-覆土			頭部横状把手、基隆部横S字文、三叉文、 沈線部底面なぞり	褐色赤褐色 二次施成
616	深鉢	圓-	D		35A 30B住-P19	口 17.4		横状突起、口縁部にそって沈線、萬文L R	K.ふい-褐色 二次施成
617	深鉢	圓-			35E-271 (256.37)	口 33.0		口縁部小突起、萬文R L	灰褐色 15住、30B-8・14
618	深鉢	圓-			30-B-P14			萬文L R	K.ふい-褐色 二次施成 オコゲ
619	深鉢				30-B-P13	口 33.0		萬文L R	K.ふい-褐色 二次施成 29住-22
620	浅鉢	北	A		30-B-P14			高強度、半隆起線、爪形文、ボタン状浮文	K.ふい-褐色

37 住

621	深鉢	圓-V		I	31-C-P 3 -20			爪形文、半隆起線文	K.ふい-褐色 二次施成 オコゲ
622	深鉢			I	37A住-56 (256.87)			沈線部剥離、底半隆起線文	赤褐色 二次施成
623	深鉢	圓-VI ?		I	37A住-354 (256.51)			大波状口縁、中央に2本の横帶(爪形刺突を もつ)が底面下、細かい小刺突	灰褐色 二次施成 オコゲ 35B住、31B-10
624	深鉢	圓-		I?	37A住-30 (256.74)			台形波状口縁、沈線部連続刺突	褐色 二次施成 オコゲ
625	深鉢	圓-VII	D-a	I	37A住-31-C -P 2	口 16.0		口縁部小突起、玉置き三叉文、口縁上部半隆 起線文、底面上にキザミ	褐色 二次施成-オコゲ
626	深鉢	圓-IV	D	I	37A住-418 (256.46)	口 31.2 底 14.0 高 41.0	1/2	口縁部突起?、口縁部有による2段の滑円区 域部上に部分的キザミ、区画内斜状模様、 開部Y字状隆起面下、底面上にキザミ、萬文 R L	褐色 二次施成 オコゲ 31B-P 2・覆土、31C-P 12・10
627	深鉢	圓-	A	I?	37住-776 (256.46)	口 21.4 底 11.2 高 [?]		半隆起線文による模様面、萬文L	K.ふい-褐色 二次施成 オコゲ 31B-P 1・4・7
628	深鉢	圓-	D	I?	37住-344 (256.56)	口 16.0		波状口縁、縁面にX字状区画、区画内斜 状模様、側部萬文L	褐色 二次施成 オコゲ 31B-P 2・28・5・覆 土・31
629	深鉢	圓-V (?)	D	I	37A住-272 (256.60)	口 22.0 底 11.0 高 28.9	6/5	口縁部横状突起1個、口縁上部及び縫間に刺 突状模形文、側部半隆起線文、萬文L	赤褐色 二次施成 オコゲ
630	深鉢	圓-	A		37住-17 (256.60)			1/3 口縁部にキザミ、口縁部無文、太い基帯が1 本めぐる、側部萬文L	K.ふい-褐色 二次施成 31B-7
631	深鉢	圓-VI	B		31-C-P 20	口 27.6		折返し口縁、萬文L	K.ふい-質黄 二次施成

番号	器種	分類			出土地点 (レーザーA) (m)	深 (cm)	遺存	文様	色調・二次焼成・他 接合関係
		系別	器形	時期					
632	深鉢	圓-IX	B-a		37A住-410 (256.42)	口 37.4 底 17.0 高 44.6	1/2	口縁部小突起、弦部横状縦帶、側面Y字状縫 状縦帶、縄文RL	灰灰褐色 二次焼成 31B-P2-2-覆土、4+ 5+6+11+13+17+30+ 36
633	深鉢	圓-IX	D	I?	37A住-135 (256.43)	口 38.8		台形状波状口縁、口縁部にそって数条の半隆 起縞文、側面縦半隆起縞文、縄文RL	にぶい赤褐色 二次焼成 31C-P3-18+19
634	浅鉢	北	A		37A住-304 (256.69)	口 40.6		半隆起縞、沈縁部なぞり、爪形文、玉抱き三 交叉文、縄文RL	にぶい橙

38 住

635	深鉢	圓-Ⅴ		I	38住-187 (256.75)			糸格子目文	にぶい赤褐色 二次焼成
636	深鉢	圓-II a	G	II	38住-⑩ 32-B-P6 ⑥ (256.19)	口 16.6		口縁部4單位突起、コイル状深鉢突起、基盤 帯、半隆起縞、沈縁部なぞり、玉抱き三交叉文	にぶい赤褐色 二次焼成 オヨゲ
637	深鉢	圓-I		I	32-B-P I (256.12)	口 20.2		口縁部不規則な把手、半隆起縞、沈縁部なぞ り	暗赤褐色 二次焼成 オヨゲ 32C-13
638	深鉢	圓-I			38住-312 (256.22)			横円区画、区画内対点刻突、半隆起縞文	明赤褐色 二次焼成 オヨゲ
639	深鉢	圓-I群	I		38住-90 38住-184 (256.40)			縦帯にそってキャタピラ文	赤褐色 二次焼成-オヨゲ
640	深鉢	圓-I群		I	38住-37 (256.36)			縦帯にそって連續のキザミ、沈縁	赤褐色
641	深鉢	圓-I群	G?	II?	38住-540 (256.30)	口 21.0		連続横円縦帶、半隆起縞文、縄文RL	にぶい黄褐色 二次焼成 オヨゲ
642	深鉢	?	?	?	38住-560 (256.75)			弧状Y字状縫帶、縄文L	にぶい橙 二次焼成
643	深鉢	圓-I群	I		38住-142 (256.28)			弧状沈縲、ベン先状刺突、三交叉文、細かい淮 綱刺突	明赤褐色 二次焼成
644	深鉢	圓-I群 ?			38住-251 (256.28)			細かいはり付け縫帶、縄文RL、口縁部小突 起	にぶい赤褐色 二次焼成
645	深鉢				38住-448 (256.25)			口縁部半隆起縞束、沈縁部なぞり、横状縫帶 縄文RL	後
646	深鉢	圓-I			38住-17 (256.15)	底 14.0		沈縲による筒巻文	にぶい橙 二次焼成 1C-風-166, 32B-P 6, 31B-24+18+98+ 71+50+73+355+357
647	深鉢	圓-II			38住-387 (256.15)	底 14.0		半隆起縞文による支柱区画、三角、円形刺突、 縄文RL	にぶい橙 二次焼成
648	深鉢	圓-I			38住-①				にぶい橙 二次焼成
649	浅鉢	北	A		38住-518 (256.77)			口縁部小突起、半隆起縞文	後
650	深鉢	圓-I群	D-b	I	38住-66 67 (256.49)	口 19.0		波状口縁、キャタピラ文、ベン先状刺突、精 円形刺突	赤褐色 二次焼成-オヨゲ
651	深鉢	圓-I			38住-357	底 14.0		細い横沈縲、縄文RL	にぶい橙 二次焼成 オヨゲ 32B-P 6
652	深鉢	圓-I			32-C-?			口縁部小突起、X字状縫帶、側面横状縫帶、縄 文L, R	にぶい橙 二次焼成 オヨゲ
653	深鉢	圓-II ?	F	II	38住-269 270 (256.46)		1/5	口縁部高基盤及び沈縲による筒巻文、瓶部に 基盤と側面部逆U字縫帶により単位区画、沈縲 による区画、三交叉文、区画内対点刻突	にぶい橙 二次焼成
654	浅鉢		A		32-B-P 4	底 14.4	2/5	縄文RL	にぶい橙 32B-P 48+11
655	浅鉢	北	A		38住-450 (256.39)	口 39.0		爪形文、半隆起縞文	明褐色

4 遺物

39 住

番号	器種	分類	形	出土地点 (レベル) (m)	法量 (cm)	遺存	文様	色調・二次焼成・他 特徴
656	深鉢	縄-VI	I	39住-15 (256.33)			台形模状口縁、縁帶上にハの字状のキザ: 三叉文	赤褐 二次焼成
657	深鉢	縦一		39住-12 (256.33)			沈線のみによる文様、無文部多い	褐
658	深鉢			39住-17			沈線片端部に連続のキザ: 、渦巻	にぶい-褐
659	深鉢			39住-27 (256.31)			沈線、沈線部に連続の刻実、補修孔	褐 二次焼成-オコゲ
660	浅鉢	北	A	39住-41 (256.27)	口 40.0		半隆起底文、沈線底部深い、闊文 R L	にぶい-褐

40 住

661	深鉢	縦一		40住-195 E (257.15)			闊文 L	褐 二次焼成 33C-24
662	深鉢	縦-IV	A	40住-195 K (257.12)	口 25.2		無文 L	にぶい-褐 二次焼成 7 A住
663	深鉢	縦-III	A	40住-79 (257.13)	口 16.4		無文 R	暗赤褐 二次焼成 オコゲ
664	深鉢		A	40住-108 (257.28)	口 14.0		無文	にぶい-褐 二次焼成 オコゲ
665	深鉢		A	33-C-P21	口 17.0		無文	明赤褐
666	深鉢	間一勝	I	40住-44 (257.23)			旋帯、縁帶にそってキャラビラ文	赤褐 二次焼成 オコゲ
667	深鉢		B	32-C-P23			内外面に沈線、無文、補修孔	褐 33C-P21
668	深鉢	北	A	40住			半隆起底文、爪形文	褐

41 住

669	深鉢	縦-II ?	D	II	41住-417 (258.04)	口 18.4	口縁部入字状突起、眼鏡状把手。基盤帯渦巻 三叉文	赤褐 二次焼成-オコゲ
670	深鉢	縦一			41住-39 (258.06)		半隆起底文、への字状沈線、三角形印刻	赤褐 二次焼成-オコゲ 33D-15-C
671	深鉢	縦一			41住-369 (258.20)		基盤帯、沈線、無文帶	明褐 二次焼成-オコゲ
672	深鉢	縦一			41住-158 (258.16)		半隆起底文、爪形文、への字状沈線	褐 二次焼成 33D-15-C, 33C -15-D
673	深鉢	縦一			41住-381 (258.19)		眼鏡状突起、基盤帯渦巻、粗い。	淡黄褐 33D-15-A
674	深鉢	間一勝	I		41住-149 (258.26)		縁帶、縁帶にそってベンチ状刻突	明赤褐 二次焼成
675	深鉢	縦一			41住-75 (258.17)	口 12.8	口縁部小突起、闊文 R L	にぶい-褐 二次焼成 オコゲ
676	深鉢	縦-IV	A		41住-2 P	口 35.6	闊文 L	にぶい-褐 二次焼成 33D-P 2-1
677	深鉢	縦-III			41住-88 (258.16)		闊文 R L, 口唇部痕跡	にぶい-褐 二次焼成 33D-75
678	深鉢		A		41住-13 (258.03)	口 16.2	無文	赤褐 二次焼成-オコゲ
679	深鉢				41住-283 (258.12)		口縁部U字状突起、鎖状縫合、巻沈東	明赤褐 二次焼成 オコゲ 32E-9, 31E-23
680	深鉢				41住-421 (257.94)		無文	にぶい-褐 二次焼成 オコゲ
681	深鉢		G		41住-432 (258.03)	口 26.0	無文	灰褐 二次焼成-オコゲ 33D-5-15
682	深鉢				41住-359 (258.05)	底 12.2	無文	褐 34D-24-25
683	深鉢				41住-76 (258.14)		無文	褐 二次焼成-オコゲ

番号	器種	分類			出土地点 (「べる」 (m))	出土 (cm)	遺存	文様	色調・二次焼成・施 装合併
		系別	器形	時期					
684	浅鉢	北	A	41往-125 (258.21)				半縫起線文、爪形文	にぶい緑
685	浅鉢		A	41往-214 (258.23)				圓文R L	灰白 33D-15
686	浅鉢	北	A	41往-2	口 36.4			半縫起線、沈縫部なぞり、縫起線上キザイ、 玉泡き三叉文。圓文R L	にぶい緑
687	浅鉢		B	41往-154 (257.99)	口 39.0			無文	緑 二次焼成-オコダ 33D-15-A・C

43 住

688	深鉢	隆-II b	G	II	43往-1(327 (259.25)	口 35.8		口縫部入字状突起、基縫帶、半縫起縫による 施色、玉泡き三叉文、補修孔	にぶい緑 二次焼成 オコダ 32E-9
689	深鉢	圓-IV	E	I ?	43往-1(327 (259.44)	口 32.6		口縫部浮突突起、削い底文による痕痕凹凸区画、 縫部追U字状純正縫痕。圓文R L	緑 二次焼成 7C往-35D-20, 35E -22, 31F-12, 34F-12
690	深鉢	縫-IX	H	I ?	43往-1(319	口 34.8		縫部に断面三角彎曲、陸舟上にキザイ、口縫 部通続山形縫痕、陸舟上にキザイ	緑 二次焼成 32E-19, 32F-12
691	深鉢	隆-I b		II ?	43往-165 (259.14)	口 39.0 1/2		口縫部4單位突起、X字状把手、縫部側方向 に流れる基縫帶、半縫帶起線文による施物、 玉泡き三叉文。無文部を残す。圓文R L (F 半部)	赤褐 二次焼成-オコダ 32E-TP17・TP16・P 22・18
692	深鉢	圓-VII	C-b	I	43往-1(243 (259.25)	底 8.4		波状口縫、口縫にそって有筋沈縫、沈縫、三 角印記、縫部に刻みの施色2本、その間は無 文部、萬丈文 R	赤褐 二次焼成 31E-7
693	深鉢	圓-VII	A	I	43往-1(174 (259.23)	底 10.5		口縫部下端に突起、突起部側に連続のキザイ、 沈縫	にぶい緑 二次焼成 オコダ 32E-7
694	深鉢	隆-			43往-1(250 (259.35)	底 13.0		半縫起縫。(沈縫部になぞり)による縫区画	緑 二次焼成
695	深鉢	隆-IV	B		43往-1(322 H-57 (259.21)	口 30.6 2/5		縫部に隆起、口縫部基縫帶渦巻、玉泡き三叉 文、縫部織文 R L	緑 二次焼成 33E-19
696	深鉢	圓-			43往-246 (259.41)			口縫部小突起。圓文R L	黒褐
697	深鉢	圓-Ⅷ			43往-1(229 (259.27)			沈縫による内形容ケラビ手形。圓文R L	明赤褐 二次焼成
698	深鉢	圓-	E	I ?	43往-1(177	口 29.6		口縫部状4単位、縫部に縫帶及び沈縫、縫 上半に縫跡状沈縫、圓文R L	にぶい赤褐 二次焼成 32F-20, 32E-7・11
699	深鉢	圓-	D		43往-1(2131 (259.35)	口 22.2		口縫部はりつけ陸舟上に連続指縫痕。圓文 R L	明赤褐 二次焼成 32E-15・16・25, 32F -16
700	深鉢	圓-	H		43往-1(2400 (259.28)	口 36.0		口縫部下端に突起、尖舟上に縫縫花綴。口縫 部には半縫起縫2本がめぐる。沈縫部は深く なぞられる。圓文R L	にぶい赤褐 二次焼成 オコダ
701	鉢				43往-1(182	口 21.6 底 8.6 高 10.1	3/5	無文、口縫部に縫帶	にぶい赤褐 二次焼成 32E-6・7
702	浅鉢		B		43往-1(2123 (259.23)	口 33.0		口縫部にそって2条の沈縫。沈縫の片端部に 通縫のキザイ、圓文R L	明赤褐 32E-14・15・20
703	浅鉢	北	A		43往-1(186			半縫起縫文、剝状爪形文。外表面赤、口舟 部内面に化粧	緑
704	浅鉢	北	A		43往-315 (259.53)			半縫起縫文、爪形文、半縫起縫渦巻	にぶい緑
705	浅鉢	北	A		43往-486			半縫起縫文、剝状爪形文	緑

大 F・P

706	深鉢	圓-Ⅷ	B		F・P 4 30-B-P 9 -21	口 20.4		圓文L	にぶい緑 二次焼成
707	深鉢	圓-			F・P 4 30-B-P 9	底 13.5		沈縫による縫区画(部分的に有筋沈縫)圓文 R L、網代底	明褐 二次焼成-オコダ

4 遺 物

番号	器種	分類		出土地点 (ルベル) 系 列	法 直 (cm)	速存	文 標	色調・二次焼成・他 複合関係
		系 列	形 時 期					
708	深鉢	縦一		F・P 4 30-B-P 9	口 14.4		溝縁帶、半徑起線、沈縁なぞり、三叉文、補 修孔	赤褐色 二次焼成
709	台付			F・P 6 32-G-P 1			無文	褐 二次焼成

小 F・P

710	深鉢	縦-II b	F	II	F・P 26 33-C-P 4	口 32.3 底 16.6 高 38.5	1/1 口縁部入字状縁状突起、口縫部相対する基盤 帯及び半縫起線による4単位、三叉文、頸部 に縫状突起、側上半周巻文、ヨスモス状文、 無文	明赤褐色 二次焼成 オコゲ
711	深鉢	底一b	D	II	F・P 28 33-C-P 4	口 19.4 底 [18.0] 高 27.9	4/5 口縫部円孔突起、環縁状把手、底起線、沈縁 底深いなぞり、脚部無文	明赤褐色 二次焼成 オコゲ
712	深鉢	縦-W			F・P 28 33-C-P 4	口 15.6	小波状口縫、織文L	褐
713	深鉢				F・P 28 33-C-P 4	底 7.0	無文	褐 二次焼成
714	鉢	縦一			F・P 28 33-C-P 4	口 11.2	織文(?)	にぶい褐 二次焼成 オコゲ
715	深鉢	脇			F・P 8 33-C-P 5	口 14.5	基盤帯、沈縁、三叉文	明赤褐色 二次焼成
716	深鉢	脇			F・P 20 29-F-P 10	口 8.8	口縫端部にキザミ、脚部沈縁による方形区画	褐
717	深鉢	縦一			F・P 17 33-C-P 12	底 4.8	織文RL	褐 二次焼成

T・P

718	深鉢	肩一帯		T・P 22 32-G-T・ P 2	口 17.8	口縫やギザミのある縁帯による三角区画、縫 帶間に沈縁	にぶい褐 二次焼成
719	深鉢	肩一		T・P 22 32-G-T・ P 2	口 23.8	沈縁による区画、織文LR	にぶい赤褐色 二次焼成
720	深鉢	肩一	A	T・P 22 32-G-T・ P 2		はり付け縁帯、脚部半縫起線文、玉抱き三叉 文、織文LR	明赤褐色 二次焼成 オコゲ
721	深鉢	肩一		T・P 23 32-G-T・ P 1		織文LR	褐 二次焼成
722	深鉢	肩一		T・P 19 31-H-T・ P 1		織文LR	にぶい褐

土 坑

723	深鉢	縦一		29-D-P 19 土坑12号	底 9.8	織文LR	明褐色
724	深鉢		A	30-D-P 8 土坑16号	口 33.0	口縫部に沈縁、織文RL?	淡黃褐色 二次焼成
725	深鉢	北	A	30-E-P 2 土坑7号	口 34.6 底 13.0 高 15.5	1/1 半縫起線文(沈縁部なぞり)、爪形文、三叉文	褐 器内面あれ
726	深鉢	縦一		30-E-P 2 土坑7号	口 21.0	口縫部小突起、円孔、織文RL	褐 二次焼成
727	深鉢	縦一	A	30-E-P 2 土坑7号	口 13.0 底 6.8	口縫部円孔突起、織文L	にぶい褐 二次焼成 オコゲ
728	深鉢	縦一III b	I?	31-C-P 12 土坑27号		U字状縁帯、縁帯にそって有縫沈縁	にぶい褐
729	深鉢	縦一		31-C-P 12-3 土坑27号		織文RL	明赤褐色 二次焼成 オコゲ

番号	器種	分類			出土地点 (レベル) (m)	法 長 (cm)	遺存	文 様	色調・二次焼成・他 接合関係
		系 列	器 形	時 期					
730	深鉢	縄-V			31-C-P4 土坑26号	口 36.3		口縁部小字突起、腹部に基盤帯、口縁部から腹部に基盤帯が垂下、文様区隔、基盤帯にそっては黒彩文。半隆起縫文(沈縫部なぞり)、商文LR	橙 二次焼成
731	深鉢	縄-I	A		31-D-P10 土坑29号	口 12.1	1/3	口縁部に小字突起、商文RL	暗赤褐 二次焼成
732	深鉢	縄-I			31-D-P7 (①)土坑9号			商文RL	にぶい緑 二次焼成 31D-P10
733	深鉢	縄-I			31-D-P5 土坑32号	口 10.2 底 7.3 高 13.9	1/3	口縁部波状4単位。縫帶による範囲内。有節 縫帶による商文。近部網代、商文RL?	明赤褐 二次焼成 オコゲ
734	深鉢	縄-I			32-D-P1 土坑45号	口 14.0	1/3	口縁部2単位突起、頭部及び胴部に半縫合縫 文、商文L	橙 二次焼成-オコゲ
735	深鉢				32-E-P14 土坑49号			商文RL	にぶい緑
736	深鉢	縄-I	A		32-D-P3 土坑47号	口 12.6	2/5	商文RL	明赤褐 二次焼成
737	深鉢	縄-I	D		32-E-P14 土坑49号			商文RL	赤褐 二次焼成-オコゲ 32E-7
738	深鉢	縄-I			31-D-P4 土坑33号			商文RL	明赤褐 二次焼成 オコゲ
739	浅鉢				30-F-P8 土坑24号			無文	明褐
740	浅鉢	北	A		29-C-P11 土坑58号	口 42.6		半隆起縫文、商文LR	にぶい緑 29B-10

その他のピット

741	深鉢	縄-I	F		30-E-P5	口 17.8		口縁部端縫、有節波線、交叉列点刺突、頭部 に2条の小縫合状波縫、縫文に嵌入小縫合状 波縫、縫文L	明赤褐 二次焼成 オコゲ
742	深鉢	縄-I			30-E-P10	口 27.4		7-8条の横波縫。商文RL	明赤褐 二次焼成
743	深鉢	縄-I			31-F-P3	口 28.4		口縁部小字突起(?)、縫帶による三角区画、縫 帶にきに波縫、商文R	にぶい緑
744	深鉢	縄-W	E		30-C-P4	口 31.3		商文RL	にぶい緑 二次焼成
745	深鉢	縄-I	I		33-E-P3 42件Pit	口 30.2		口縁部字突起、沈縫部連続刺突、沈縫によ る縫帶	橙 二次焼成
746	深鉢	縄-W	C		33-E-P3 42件Pit	口 17.6		商文L	にぶい緑 二次焼成
747	深鉢	縄-I	I		27-C-P1			キッタピタ文、三角形刺突	橙
748	深鉢	縄-I	C		32-E-P17 43件Pit	口 35.8		商文RR	橙 二次焼成
749	深鉢	縄			28-C-P1			商文RL	赤褐 二次焼成-オコゲ
750	浅鉢	北	A		29-C-P1	底 12.0		爪形状隆起縫文、三角形印刻、商文LR	明赤褐
751	深鉢	縄-I	C	I?	30-F-P39	口 25.6	1/2	頭部に縫帶、口縁部底縫帶による三角形区画、 区画にそって刺突状有節波縫、玉造き三足文、 頭部逆U字状縫帶、蛇彎縫帶商文、商文LR	にぶい緑 二次焼成 オコゲ
752	深鉢	縄-I	?		32-B-P1 (38A住Pit)	底 9.2	2/5	胸方部の文織縫成、基盤帯、半隆起縫文(沈縫 部なぞり)、玉造き三足文	赤褐 二次焼成-オコゲ
753	深鉢	縄-I	H?		29-F-P4	口 14.2	2/5	口縁部突起1箇、頭部に2本の縫帶、縫帶上 片面に連続刺突、突起部からY字状縫帶2本 継ぎ、胴部波縫による横波縫、三足文、商文 L	明赤褐 二次焼成 オコゲ
754	深鉢		A		32-C-K1	口 26.6		商文L	橙 二次焼成
755	深鉢	縄-I			30-B-風			商文L	にぶい緑 二次焼成
756	深鉢				30-C-P21 15A住P?			無文	橙 二次焼成

26-C

757	深鉢	縄-IX	A	I?	26-C-15	口 17.6		口縁部2単位突起。上半部に横縫状縫帶、胸 部は縫合縫(縫合縫及び波縫)、沈縫部連続 の刺突、商文RL	明赤褐 二次焼成
-----	----	------	---	----	---------	--------	--	--	----------

4 造 物

番号	器種	分類			出土地点 (レベッジ) (m)	法 番 (cm)	遺存	文 標	色調・二次焼成・他 組合関係
		系 列	器 形	時 期					
758	深鉢	縄-IX	A	I?	26-C-18②	口 18.8	胸上部に領状縦帶、腹部も同様の領状縦帶により範囲区画、区画内縦横幅広縦帯、縄文R L	明赤褐 二次焼成 オコゲ	
759	深鉢	縄-IX		I?	26-C-22②	口 22.5	4箇位波状口縁、腹部に幅広縦帯がめぐる。口縁部下に部分的に領状縦帶、他は沈縫による範囲区画、三叉文	にぶい赤褐 二次焼成 オコゲ	
760	深鉢	縄-			26-C-11①		手縫起縫文、粗沈縫	赤褐 二次焼成	
761	深鉢				26-C-13①		細い縫合状縫	にぶい赤褐	
762	深鉢	縄-			26-C-11		手縫起縫文(沈縫部や个園いなぞり)、縦帯上にキサギ、三叉文	明赤褐	
763	深鉢				26-C-4①		把手、沈縫部にキサギ	にぶい赤褐	

26-D

764	深鉢	圓一勝	I	26-D-23②	口 19.2	口縁部突起、縦帯にそってキタビラ文、ペン先状刺突、三叉文		明赤褐	
765	深鉢	圓一勝	I	26-D-24②		縦帯、ペン先状刺突		暗	26D-23
766	深鉢	圓一勝	I	26-D-21		断面三角形の太い縦帯、縦帯にそって幅広のペン先状刺突		明赤褐	二次焼成 オコゲ
767	深鉢	圓一勝	I	26-D-23		縦帯にそってキタビラ文、ペン先状刺突、三角形区画		にぶい暗	
768	深鉢	圓一勝	I	26-D-23②		縦帯、縦帯にそってキタビラ文、ペン先状刺突		明赤褐	二次焼成 オコゲ
769	深鉢	圓一Ⅲ a	I	26-D-23②		眼状次把手、口縁部繩状突起、縦帯にそって有筋沈縫		明赤褐	二次焼成
770	深鉢	圓一	II	26-D-4		基底帯、半縫起縫、玉抱き三叉文		にぶい暗	二次焼成
774	深鉢			26-D-24②		沈縫部にキサギ		明赤褐	二次焼成 オコゲ
775	深鉢	圓一		26-D-21		眼状次把手、縦帯上にキサギ、区画内ヘラ状沈縫		にぶい赤褐	
776	深鉢			26-D-25①		黒縦帯、沈縫部窪いなぞり、ハの字状沈縫		黒褐	二次焼成
777	深鉢	圓一Ⅲ b	I	26-D-16		波紋口縁、舌半縫、縦帯にそって有筋沈縫、逆続刺突		にぶい赤褐	二次焼成
778	深鉢	圓一Ⅳ		26-D-17②		波紋口縁、環状浮文、縦帯、縦帯にそって沈縫、沈縫部にキサギ、縄文R L		にぶい赤褐	
779	深鉢	圓一Ⅳ	D	26-D-22②	口 25.0	口縁部把手、口縁部上半縫帯による商円区画、縦帯にそって有筋沈縫、区画内縦横幅広縦帯、口縫部下半縫帯による範囲区画、縄文R L		明赤褐	二次焼成
780	深鉢	圓一I	I	26-D-23②		縦帯、横沈縫、横浮文、縦帯にそって有筋沈縫、縄文R L		明赤褐	
781	深鉢	圓一 A		26-D-24②	口 22.9 底 13.8 高 28.6	4/5 口縁部断面三角形縦帯による連続三角形区画、縄文R L		明赤褐	二次焼成
782	深鉢	圓一 A		26-D-16	口 31.0	口縁部に横沈縫、連続刺突(有筋沈縫状)、縫文R L		明赤褐	二次焼成
783	深鉢	圓一		26-D-23②		無文		明赤褐	二次焼成
784	深鉢	圓一		26-D-18		口縫沈状小突起、口縁にそって2条沈縫、縫縫に領状縦帶		暗	
785	深鉢	圓一		26-D-16①		度次口縁(折返し)、縄文R L		灰褐	二次焼成
786	深鉢	圓一Ⅲ A		26-D-25②	口 19.6 底 9.0 高 24.8	2箇一对の小突起が対する、縄文R L		にぶい赤褐	二次焼成 オコゲ
787	深鉢	圓一Ⅲ A		26-D-16①	口 10.4	縄文R L		にぶい暗	二次焼成 オコゲ
788	深鉢	圓一Ⅲ		26-D-23②	口 25.2 底 14.3	黒赤R、底部網代底		暗	
789	深鉢	圓一Ⅲ		26-D-1	口 39.8	縄文R L		明赤褐	二次焼成

26-E

番号	器種	分類			出土地点 (レベル) (m)	法 長 (cm)	遺存	文 様	色調・二次焼成・他 接合関係
		系 列	器 形	時 期					
790	深鉢	鍋			26-E-23			隆唇による三角形区画、2本沈縁(沈縁なぞり)による文様、黒余L	青 二次焼成 27E-3
791	深鉢	圓一勝	I		26-E-12②			2本の隆唇、隆唇間無文、隆唇にそって2列の刺突尖、鋤形沈縁	明赤褐 二次焼成 オコゲ
792	深鉢				26-E-22②			細長い横円区画、溝縁者、隆唇にそって刺突尖、墨黒文	にぶい橙 二次焼成 墨黒文
793	深鉢	隆一	II		26-E-22②			腹に流れる基隆帯、深い沈縁、三叉文	浅黄褐
794	深鉢	圓一	II		26-E-23②			基隆帯、底縫次把手、半鋤形縁(沈縁なぞり)	橙 二次焼成
795	深鉢	隆-II a	G-a	II	26-E-8②	口 15.6		口縁部突起、ヨイル状隆状突起、基隆帯、半鋤形縁	にぶい赤褐 二次焼成 オコゲ
796	深鉢	隆一			26-E-16②			口縁部隆唇による三角区画、隆唇にそってキサギ葉基隆帯及び沈縁	青 二次焼成
797	深鉢	隆一			26-E-14②			基隆帯、半鋤形縁	にぶい青
800	深鉢	縫	II		26-E-17②			基隆帯、半鋤形縁、横円区画、区画内小突起	橙
801	深鉢	隆一			26-E-3			三角形突起、口縁部にハナ状沈縁	明褐 二次焼成
802	深鉢	縫一			26-E-9①			腹部に隆唇、腹唇にそって上方にキサギ葉、腹部に隆唇、腹唇にそって沈縁、萬字?	にぶい青 二次焼成 オコゲ 26E-5
803	鉢		A		26-E-12②	口 8.2		口縁部無文帯、輪文下に隆唇、腹部にも隆唇、腹唇間隙に沈縁、萬字(?)	赤褐 二次焼成
804	鉢		A		26-E-13②		底 6.4	腹部にキサギ葉付された隆唇、腹部に波状の隆唇基下、腹部半鋤形縁	橙 二次焼成
805	深鉢	縫一			26-E-17②			隆唇、腹唇にそって沈縁、有脚沈縁(脚突出)	にぶい橙
806	深鉢	縫-II b			26-E-12②		2/5	幅広波状隆唇、腹唇間に2本沈縁、萬文R L	二次焼成 26E-30・2、27F-27
807	深鉢	縫-II b	D	II	26-E-17②	口 22.0		口縁部・腹部には付け隆唇による文様、萬文L R	にぶい橙 二次焼成 オコゲ
808	深鉢	縫-II b	A		26-E-10			沈縁によるタランタ区画、萬文L R	明赤褐
809	深鉢	縫一			26-E-5			細い斜行沈縁	にぶい橙 二次焼成 オコゲ
810	深鉢				26-E-22②		底 9.5	斜方向刺突	橙 二次焼成 26E-23
811	深鉢	縫-W			26-E-21②			口縁部小突起、無文、腹部萬文R L	橙 二次焼成
812	深鉢	縫-W	A		26-E-23②	口 18.2	1/5	折返し口縁、口縁部無文、黒余L	赤褐 二次焼成-オコゲ 26B-22
813	深鉢				26-E-23			折返し口縁	にぶい黄
814	深鉢		B		26-E-22②			無文	にぶい黄
815	深鉢	縫-W			26-E-7②	口 18.0		萬文R L	橙 二次焼成
816	深鉢	縫-W			26-E-17②	口 22.4		折返し口縁、萬文R L	青 二次焼成
817	深鉢				26-E-22②	底 18.0		無文	明赤褐 二次焼成
818	深鉢	北	A		26-E-7①			半鋤形縁、爪形文	明褐色 27E-8
819	深鉢	北	A		26-E-17②			爪形文	灰褐色 二次焼成
820	深鉢	北	A		26-E-12①			半鋤形縁、横長刺突	にぶい橙
821	深鉢		B		26-E-22②			口唇部沈縁、萬文R L	にぶい橙
822	深鉢	北	A	II	26-E-13②	口 38.2		弧状基隆帯、半鋤形縁、玉抱き三叉文、口縁部突起、萬文R L	26F-12
823	深鉢	北	A		26-E-22②	口 43.0		半鋤形縁、爪形文、三叉文、弧状腹帶、萬文R L	にぶい青 二次焼成
824	深鉢	北	A		26-E-25			半鋤形縁、三叉文、萬文R L	にぶい青 二次焼成
825	深鉢		C		26-E-13②			波紋口縁、無文	明赤褐
826	深鉢	北	A		26-E-11		底 14.2	基隆帯、半鋤形縁、爪形文、萬文R L、底 回納式底	青橙

4 遺物

26-F

番号	器種	分類			出土地点 (レベル) (m)	法 (cm)	遺存	文様	色調・二次焼成・他 接合関係
		系 列	器形	時 期					
827	深鉢	縦一			26-F-22D			羅井、沈縫部剥離状キザ	男赤 26E-22
828	洗鉢	北	A		26-F-19D	口 26.5		手縫起縫沈縫部深いなぞり、縞文(?)	にぶい緑
829	洗鉢	北	A		26-C-4D			網目縞文(RL)	にぶい緑

27-B

830	深鉢			I?	27-B-23D	口 18.5		散紋口縫、口縫部半幅起縫文による方形区画、区画内横半幅起縫文、頭部無文、脚部網目縫、(基盤部上に爪形文)、区画内斜方向半幅起縫文	男赤褐 二次焼成 オコゲ 28B-3
831	深鉢	縦一勝 ?		I	27-B-15D	口 16.8		口縫部縫状突起、縫帶による横円区画、区画にたってキヨタキラ文、三角形刺突	男赤褐 二次焼成 オコゲ
832	深鉢			I?	27-B-20D	口 31.7		口縫部小突起、縫帶による横円区画、区画にそって有節状突起、波状文	明赤褐 二次焼成
833	深鉢	縦一			27-B-15D			口縫部縫状突起に付ける隆起、口縫部吹縫、縫帶吹縫、縫文RL	褐 二次焼成
834	深鉢	縦一			27-B-18D			半縫起縫文、三叉文	にぶい赤褐 二次焼成 オコゲ
835	深鉢	縦一			27-B-17D			横縞帯、波曲状沈縫、有節吹縫、縞文RL	にぶい緑 二次焼成
836	深鉢	縦一			27-B-15D	口 18.6		横波状沈縫、波羽状縞文(RL+LR)	にぶい褐 二次焼成 オコゲ
837	深鉢	縦一			27-B-20D	口 34.8		Y字状に付ける隆起、縞文RL	男赤褐 二次焼成
838	深鉢	縦一			27-B-20D	口 19.4		無文	灰褐 二次焼成
839	先鉢?				27-B-15D			口縫部に吹縫、縞文し	にぶい緑
840	深鉢	縦一W	D		27-B-20D			交互吹縫えによる小波状横帯、縞文RL	男赤褐 二次焼成 オコゲ
841	深鉢	縦一			27-B-20D			交互吹縫えによる小波状横帯、縞文RL	男赤褐 二次焼成 オコゲ
842	深鉢	縦一			27-B-20D			縞文RL	男赤褐 二次焼成 オコゲ 27B-11・15
843	深鉢	縦一			27-B-19D	底 10.4		縞文し、底部横状圧痕	にぶい緑 二次焼成 27B-20

27-C

844	深鉢	縦一	G	H	27-C-15			基盤部、半縫起縫、沈縫部深いなぞり、三叉文、無文帯を複数	にぶい赤褐 二次焼成
845	深鉢	縦一			27-C-14D	口 26.0		口縫部横帯及び吹縫、沈縫部にキザ、頭部有節吹縫、縞文RL	灰褐 二次焼成 オコゲ 27C-11・19, 27B-23
846	深鉢	縦一V ?	D		27-C-20	口 16.0		口縫部小突起、基盤強帯、半縫起縫文、頭部三角形吹縫、區面内玉筋文三叉文	灰褐 二次焼成 27C-11
848	深鉢	縦一III a	D	I?	27-C-16D	口 16.2		口縫部4單位吹縫、突起下に横状突起、X字状吹縫、基盤強帯、基盤部にそって半縫起縫(沈縫部など)、区面内細吹縫、三叉文	赤褐 二次焼成-オコゲ 27C-11
849	深鉢	縦一IX		I?	27-C-15D	口 25.4		口縫部小突起、口縫部吹縫部に透続裂穴、透底半縫起縫、交互指押えによる隆起、Y字状に垂下する隆起、頭部吹縫による脛状面、縞文RL	にぶい赤褐 二次焼成 オコゲ
850	深鉢	縦一	D		27-C-20	口 18.6		口縫部三角形区画、高基盤、半縫起縫、三叉文	男褐 二次焼成
851	深鉢	縦一			27-C-9	底 7.5	4/5	縱軸竹管平行線、横波状文、縞文RL	にぶい緑 二次焼成
852	深鉢	縦一			27-C-19D			羽状縞文(RL+LR)、横くり文	褐 二次焼成
853	深鉢	縦一W	E		27-C-50	口 39.4		4単位小波状口縫、縞文RL	にぶい緑 二次焼成 オコゲ 27C-9・10・11・15
854	深鉢		A		27-C-19D	底 6.4	3/5	2個の小突起、口縫部に突帯、無文	男赤褐 二次焼成 オコゲ
855	深鉢	縦一			27-C-20I			縞文RL	褐 二次焼成-オコゲ
856	深鉢		A		27-C-20I	口 36.0		横門区画、区面内沈縫、横割突窓、縞文RL	穂 27C-20

番号	基盤	分類			出土地点 (ヤヘル) (m)	高 度 (cm)	遺存	文 様	色調・二次焼成・他 総合関係
		系 列	器 形	時 期					
857	浅鉢	北	A		27-C-19②	口 42.0		半径起線文、交叉三叉文、圓文RL	明褐色 27C-9

27-D

858	深鉢	D		27-D-4①	口 27.8		圓文RL、扇形状弦帯	にぶい褐色 二次焼成
859	深鉢		I	27-D-4①	口 23.0		口縁部圓文、頂部突起のある盛唇、胴部横広 隆唇、区画にそってキヤタビラ文	黒褐色 二次焼成
860	深鉢			27-D-15他			刻みのある盛唇、兩面状剥皮	にぶい褐色 二次焼成 32G-9、31G-10
861	深鉢							
863	深鉢	黒-II	D	27-D-20②	口 40.8		口縁部盛唇による横円区画、区画内斜沈線、 三叉文、圓文RL	黒褐色 二次焼成 27E-21
865	浅鉢			27-D-5	底 15.2		無文、外縁ウルシ?、胴底	褐色 27D-5

27-E

866	深鉢	黒-V	D-b	I	27-E-19②		4位半大波状口縁、口縁にそって爪形文、半 圓形底文	明赤褐色 二次焼成 オコゲ 27E-24
867	深鉢	黒-V		I?	27-E-2	口 35.5	口縁部突起、盛唇による文様区画、盛唇上に 刺突状爪形文、区画内に沈線、圓文RL	黒褐色
868	深鉢	黒-II	D		27-E-7②	口 30.4	口縁部横広盛唇、横円区画、有筋沈線、区画 内沈線、圓文RL	明赤褐色 二次焼成
869	深鉢	黒-V		I	27-E-13②	口 17.4	口縁部台形様突起、翼爪形文	にぶい褐色 二次焼成 オコゲ
870	深鉢	黒-V			27-E-8		盛唇による文様区画、盛唇上に刺突状爪形文、 区画内沈線、圓文RL、有筋沈線	にぶい褐色 二次焼成
878					27-E-7			
871	深鉢	黒-I	D		27-E-25①	口 22.4 底 12.6 高 21.0	口縁部に盛唇、沈線、盛唇上にキザミ、圓文 RL	赤褐色 二次焼成-オコゲ
872	深鉢	黒-II		a	27-E-14②	口 21.0	口縁部厚状突起、横円区画、区画内逆続刺突、 圓文RL	にぶい褐色 二次焼成
873	深鉢	黒-II	G		27-E-5①	口 22.6	口縁部盛唇による横円区画、筋状盛唇、圓文 RL	明赤褐色 二次焼成
874	深鉢				27-E-5①		有筋沈線、円形列点刺突	にぶい褐色
875	深鉢	黒			27-E-5		盛唇、沈線	赤褐色 金賞母多 27E-2・4
876								
877								
879								
880	深鉢	黒-I	D		27-E-21②	口 32.4	波状口縁、沈線による横円区画、沈線部にキ ザミ、圓文RL、胴底横沈線	褐色 二次焼成
881	深鉢	黒-IX			27-E-6②		網状底文、沈線片断部にキザミ、圓文RL	にぶい褐色 27E-7
882	深鉢	黒-II			27-E-17②		口縁部盛唇による横円区画、区画内波状沈線、 圓文RL	黒褐色 二次焼成
883	深鉢	黒-I			27-E-25	口 22.8	横円区画、区画内刺突、太い沈線、圓文RL	にぶい褐色 二次焼成
884	深鉢	黒-IX		I?	27-E-12②		網状底文、沈線横区画、圓文RL	赤褐色 二次焼成
885	深鉢	黒			27-E-13		口縁部突起、沈線	褐色 二次焼成-オコゲ
886	深鉢	黒-I			27-E-5②		胴部盛唇による横円区画、胴部沈線区画、圓 文RL	にぶい赤褐色 二次焼成
887	深鉢	黒-I			27-E-5①		沈線縦区画、三叉文	にぶい褐色 二次焼成
888	深鉢	黒-I		I?	27-E-9②	口 15.4	沈線による区画、側曲状沈線	明褐色 二次焼成
889	深鉢	黒-I			27-E-3		半径起線、ハの字沈線	明赤褐色 二次焼成 オコゲ 27F-17
890								
891	深鉢	黒-I	I		27-E-15②		盛唇、ペイント先状沈線	にぶい褐色 二次焼成 オコゲ
892	深鉢		I?		27-E-19②		蓮華文風半圓起線文	黒褐色 二次焼成
893	深鉢		I?		27-E-19②		蓮華文風半圓起線文	褐色 二次焼成

4 遺 物

番号	器種	分類		出土地点 (ルベル) (m)	法量 (cm)	遺存	文様	色調・二次焼成・施 接合関係
		系 列	器形					
894	深鉢	陸一		I?	27-E-9②		縦帶、環状浮文、沈部による文様区画、有茎 沈縫	明赤褐 二次焼成-オヨゲ
895	深鉢	陸-VII	D-b	I	27-E-22①	□ 16.4	4単位波状口縁、波状帯に円孔、半隆起縫上 に爪形切妻突、中央玉造き三叉文、脚部半縫 起縫	灰褐 二次焼成-オヨゲ
896	深鉢	陸一		II	27-E-23	□ 22.2	口縁部環状把手、基礎帶渋色、半巻起縫(沈 縫部僅いなぞり)、三叉文	にぶい褐色 二次焼成
897	深鉢	陸一	D	II	27-E-22	□ 27.4	高輪帶柄内区画、手筋起縫文、無文部を残す	高輪帶 残
898	深鉢			27-E-4②			縦帶、化粧、沈縫部に割突	赤赤褐 二次焼成
899	深鉢	陸-V ?		II	27-E-2②		高輪帶、手筋起縫文	明赤褐 二次焼成 27E-1
900	深鉢	陸-V		I	27-E-18②	□ 21.0	口縫部突起、縦帶による三角形区画、縫帶上 に爪形文、区画内にそって半隆起縫文、区画内 に縫帶状沈縫	赤赤褐 二次焼成 27E-17
901	深鉢	開一		27-E-2②			縦帶及び沈縫による斜方向の文様、有筋沈縫 縫帶上にナヂイ、縄文LR	赤褐 二次焼成
902	深鉢			27-E-20			縫帶状縛基	黒褐 二次焼成
903	深鉢			27-E-7②	□ 23.6		口縫部後帶横円区画、区画内有筋沈縫、表列 の割突	桂 27E-12
904	深鉢			27-E-7②			沈縫区画、三叉文、縫状沈縫	赤褐 二次焼成
905	深鉢	開一 河 ?		27-E-2②			縫帶横円区画、区画内にそって、沈縫及びナヂ I	にぶい赤褐 二次焼成
906	深鉢	縛		27-E-24			縫帶帯、縄文RL	にぶい桂 二次焼成
907	深鉢	陸一		27-E-18①			縫沈縫、渋巻文	桂 二次焼成-オヨゲ
908	台付			27-E-22②	底 6.5		無文	赤褐
909	深鉢			27-E-8②	□ 34.8		口縫部沈縫、無文	にぶい桂
910	深鉢			27-E-18	□ 31.0		無文	にぶい桂 二次焼成 オヨゲ 27E-13
911	浅鉢?	B		27-E-2①	□ 44.6		口縫部沈縫、半隆起縫文	にぶい桂
912	有孔調 付			27-E-22	□ 37.8		縫帯による対象の文様?	桂 7往-3700
913	深鉢			27-E-4② 27-E-8	□ 14.2		縫部にそってナヂイ及び縫状縛基	にぶい桂 二次焼成
914	深鉢	開一 河 (?)	I?	27-E-11②			波状口縁、口縫部及び縛基上にナヂイ、縫 帯にそって後列の波状沈縫	黒褐 26E-25
915	深鉢	縛-XV		27-E-3	□ 39.4		口縫部小突起、縄文L	にぶい桂 二次焼成 36E-21
916	深鉢	縛-XV	A	27-E-3⑥	□ 19.6		口縫部に沈縫、縄文RL	にぶい桂 二次焼成
917	深鉢	縛-XV	A	27-E-4	□ 18.6		口縫部粗文、沈縫、縄文RL	同赤褐 二次焼成
918	深鉢	縛-XV	A	27-E-9	□ 31.2 3/5		口縫部無文、把糸R	赤褐 二次焼成 27E-2
919	深鉢	縛-XV	H	27-E-9	□ 24.0 2/5		口縫無文、縄文LR	赤褐 二次焼成-オヨゲ
920	深鉢	縛一		27-E-14			縄文L	にぶい桂 二次焼成
921	深鉢	縛-XV	A	27-E-9②	□ 19.4		縄文L	にぶい桂 二次焼成
922	深鉢	縛-XV		27-E-7②	□ 35.0		口縫部突起、縄文RL	灰褐 二次焼成 27E-7+16
923	深鉢	縛一		27-E-9			縄文RL	赤褐 二次焼成-オヨゲ 27E-8+13
924	深鉢	縛一		27-E-11②			口縫部沈縫、縄文LR	にぶい赤褐
925	深鉢	縛一		27-E-22			縄文L	桂 二次焼成-オヨゲ 27E-9+17
926	深鉢	縛一		27-E-3⑥			縫状縛基、木目状撚糸文(R)	にぶい桂 二次焼成 27E-6
927	深鉢			27-E-24②	□ 25.0 2/5		無文	明赤褐 二次焼成
928	深鉢	北 A		27-E-8②	□ 44.5		半縫起縫、爪形文、玉造き三叉文	桂 27E-3
929	深鉢	北 A		27-E-13	□ 33.4		半隆起縫文、爪形文、縄文LR	にぶい黄褐
930	深鉢	北 A		27-E-3⑥	□ 36.0		口縫部突起、爪形文、半縫起縫文、三角形印 判	にぶい赤褐

番号	器種	分類		出土地點 (レバード) (m)	古量 (cm)	達存	文 様	棟	色調・二次焼成・施 接合技術	
		系別	形 時 期							
931	浅鉢	A		27-E-2	口 40.4	半隆起線文		櫻		
932	浅鉢	北	A	27-E-13②		口唇部突起、手縫起線文、爪形文、三叉文		赤褐		
933	浅鉢	北	A	27-E-18②		半隆起線小柄円区画、爪形文、三叉文		櫻		
934	浅鉢	北		27-E-18①		口唇部平底き三叉文、半隆起線文、基盤部、 縞文(?)		男赤褐		
935	浅鉢	北	A	27-E-13②		半隆起線、沈縞部なぞり、爪形文、口唇部沈 縞		淡黄褐色		
936	浅鉢	北	A	27-E-11②		半隆起線文、刺突		にぶい櫻		
937	浅鉢	B		27-E-3	口 35.9	口縒部平底起線、無文		にぶい櫻	二次焼成	
938	浅鉢	B		27-E-11②	口 34.9	半隆起線文、與文R L		櫻		
939	浅鉢			27-E-2②		半隆起線文、三叉文、無文		にぶい櫻		
940	浅鉢	B		27-E-15	口 36.9	無文		にぶい櫻		
941	浅鉢?			27-E-28②	口 32.4	縞文S R		櫻		
942	深鉢			27-E-18②		口唇部次第2本、與文L R		にぶい赤褐		
943	浅鉢			27-E-5②	口 34.6	口唇部平底き三叉文、無文		櫻		
944	深鉢	陸-I	I	27-E-13②	口 19.8 底 16.4 高 17.0	入字状斜起2基、基盤部による圓渦、三角形 区画平底起線、沈縞部なぞり、隆起線上に爪 形文、端部にサギザ、三叉文	3/5	赤褐	二次焼成-オコゲ	
945	深鉢	陸-II a	D	I	27-E-2	口 28.0	3/5	沈縞部による文様区画、口縒部相対する交差の ヨの字文、頭形模致紋、圓渦も沈縞による。 與文R L	赤褐	二次焼成-オコゲ
946	深鉢	陸-I a	G	II	27-E-8②	口 19.0	2/5	口縒部小突起、網目狀、斜方向基底帯、陶物、 玉造と三叉文、半隆起線、沈縞なぞり	男赤褐	二次焼成 オコゲ 27-E-14
947	深鉢			I	27-E-8②	口 19.0 底 9.4	3/5	網目狀に文帯、網目狀4単位区画、区画内に は與文と逆U字文、爪形状連続刻痕、與文部を 多く残す、三叉文	赤褐	二次焼成-オコゲ 27-E-9
948	深鉢	開一河	D	I	27-E-9②	口 36.4	2/5	帶部による構造複雑、Y字状底帯、区画にそっ て側面有筋沈縞、底状文サギザ	赤	二次焼成-オコゲ
949	深鉢				27-E-14②	口 18.6	無文		男褐	
950	深鉢				27-E-2②	口 14.6	陸帯、横円区画、区画にそって側面刻痕		男赤褐	二次焼成 オコゲ
951	深鉢	縄-II	I ?	27-E-18②	口 30.3	口縒部帶状突起、無文帯、齒状状沈縞、羽状 縞文(L R・R L)		褐褐	二次焼成	
952	深鉢	縄-Ⅲ	II	27-E-15②		陸帯による縦・横区画、與文L R		にぶい赤褐	二次焼成	
953	深鉢	縄-Ⅲ		27-E-2②	口 18.6	口縒部小突起、陸帯による区画、沈縞		櫻		
954	深鉢	縄-Ⅳ	D	27-E-2	口 33.4	口縒部無文、與文L R		褐		
955	深鉢	縄-IX		27-E-3②	口 26.2	部縒状斜底帯、無文		暗褐	二次焼成	

27-F

956	深林	陸-II a(?)	G	H	27-F-7	口 25.4	口縁部薄状突起、基底葉角形、半隆起形、沈緑部側面、なぞり、三叉文、ロ縁部小突起	荷 二次虎成 26F-24
957	深林	陸-II a(?)		H	27-F-7	口 13.2	ロ縁部小突起、半隆起形、沈緑部側面、なぞり	赤荷 二次虎成-オヨダ
958	深林	陸-		H	27-F-25		高葉背、半隆起線、三叉文	にぶい 赤荷 二次虎成
959	深林				27-F-2②		半隆起形、沈緑部側面にカギリ、三叉文	赤荷 二次虎成
960	深林	陸-III b	I	H	27-F-16	口 27.6	口縁部半突起、観葉底、陸帶にそって沈緑、有 縫合線、観葉状形	沢荷 二次虎成
961	深林	開-勝	I	H	27-F-8①		三叉文、半隆起線形	明赤荷
962	深林	開-河	I	H	27-F-8②		太い陸帶による區画、區画にそって複列沈緑	にぶい赤荷 二次虎成 27E-12
963	深林	陸-			27-F-7		絶壁、陸帶上にカギリ、沈緑、有縫合線	にぶい 横
964	深林	縞-I			27-F-20		陸帶、觀葉狀形	横
965	深林	陸-III a	D		27-F-8①	口 17.9	口縁部半突起(「人」状)陸帶による区画漏斗、 他也縫合區、区画内細沈緑、観葉状形	西赤荷 二次虎成 オヨダ 27F-7・15
966	深林	縞-I	I		27-F-18②	正 9.0	3/5 豎根座布(舌状)による偽巻文、觀葉状形、 陸帶上にそって複列状有縫合漏斗、沈緑?	にぶい 横 二次虎成 オヨダ

4 遺物

番号	器種	分類			出土地点 (レベル) (m)	法 長 (cm)	遺存	文 様	色調・二次焼成・他 要旨備考
		系 列	器 形	時 期					
967	深鉢	縄-I		I	27-F-19②	底 7.8	2/5	舌状縦縞帶、渦巻、横波状文、縄文RL	明赤褐 二次焼成 オコゲ 27E-19
968	深鉢	縄			27-F-1			太い縦帯、刺突、波線	橙 二次焼成
969	深鉢	縄			27-F-9②			沈縫ベン先矢刺突、縦縞帶	明赤褐 二次焼成 オコゲ
970	深鉢	縄-V			27-F-1①			爪彫文、縄文RL	明赤褐 二次焼成
971	深鉢	圓-游	I		27-F-8②			輪廓縞帶、縞帶にそってヤカタビラ文	橙
972	深鉢	圓-游	I		27-F-6			ヤカタビラ文、2列のベン先矢刺突	赤褐
973	深鉢	圓-游	I		27-F-9			半透起線、沈縫部なぞり、爪彫文、沈縫片端 面キズ	橙 二次焼成-オコゲ
974	深鉢	圓-阿	I		27-F-9			口縁部幅広縞帶による横円区画、区画にそっ て波状の刺突窓	赤褐 二次焼成
975	深鉢	隆-IV b	I		27-F-20			口縁部小突起、小縫合状沈縫、沈縫部キズ	赤褐
976	浅鉢				27-F-1①	□ 30.6		半透起線文、縄文RL、口唇部玉掛け三叉文	にぶい橙
977	浅鉢	圓-阿			27-F-8②			台形波状口縁、複列の刺突窓	橙
978	深鉢	北	D-b	I	27-F-2②	□ 19.4		波状4単位、半透起線文、爪彫文	にぶい橙 二次焼成 30F-P 7
979	深鉢	縄-X		I	27-F-25	□ 33.0		口縁部把手、縦帯、拘内波状花 縞、脚部Y字状隆帯、区画にそって波状沈縫、 縄文LR	明赤褐 二次焼成
980	深鉢	縄-II a	D	I	27-F-3①	□ 25.0		口縁下部に斜め隆帯、口縁部沈縫による区画、 脚部Y字状隆帯文、縄文LR	赤褐 二次焼成
981	深鉢	縄-I			27-F-13②			重ね縞帶、沈縫波状、縄文RL	赤褐 26F-23, 27F-18
982									
983	深鉢	縄-IX			27-F-2②			鉛状縞帶、沈縫波状、縄文RL	明褐 二次焼成
984	深鉢	縄-I			27-F-14②	□ 34.0		頭部半透起線、爪彫状刺突、縄文RL	にぶい赤褐 二次焼成
985	深鉢	縄-IX			27-F-11①	□ 11.6		口縁部波状文、頭部鉛状縞帶、把手RL	にぶい・褐 二次焼成
986	深鉢	縄-XI b	H		27-F-6	□ 31.8		小波状口縁、縄文RL	にぶい・赤褐 二次焼成 27F-1
987	深鉢	圓-I			27-F-1	□ 35.0		頭部半透起線文、刺突状爪彫形文、縄文RL	にぶい・赤褐 二次焼成
988	深鉢	圓-I	H		27-F-7	□ 31.8		縄文RL	橙 二次焼成
989	深鉢	圓-II a	II		27-F-23①			重ね縞帶、沈縫による横区画、縄文RL	赤褐 二次焼成 28F-4
990	深鉢	縄-IX	G		27-F-4②	□ 23.8		口縁部横状沈縫、縦縞状沈縫、頭沈縫、縄文 LR	にぶい・褐 二次焼成 27F-21
991	深鉢	圓-I			27-F-7	□ 32.4		小波状口縁、縄文RL	にぶい・橙
992	深鉢				27-F-22②			無縫、縫合み底	橙 二次焼成
993	深鉢	縄-XI D			27-F-7	□ 16.6 2/5		口縁部鉛状把手1個、縄文RL	赤褐 二次焼成-オコゲ
994	深鉢		A		27-F-11	□ 17.6		口縁部にキズ、無文	にぶい・褐 二次焼成
995	浅鉢	北			27-F-17			半透起線文、爪彫形、頭部無文	にぶい・褐 27F-12
996	浅鉢	北	A		27-F-17			區帶区痕、沈縫	褐

27-G

997	深鉢	縄-I	I	27-G-24	□ 32.6		舌状縞帶、垂錐状把手。縞帶にそって有節沈 縫	にぶい橙 二次焼成 32F-17
998	深鉢	圓-阿	I	27-G-24②			太く背高の突起状縞帶。縞帶にそって数点の 刺突窓	にぶい・橙 二次焼成 27F-9
999	深鉢			27-G-24②			台形状把手、大字状複列刺突窓	にぶい・橙 二次焼成
1000	深鉢			27-G-25			口縁部にそって沈縫及び突起、突起上に機具 刺突	にぶい・橙

28-C

1001	深鉢			28-C-P 16	□ 12.0		頭部沈縫、沈縫	にぶい・橙 二次焼成 オコゲ
------	----	--	--	-----------	--------	--	---------	-------------------

番号	器種	分類			出土地点 (レーベル) (m)	法 長 (cm)	遺存	文 様	色調・二次焼成・他 総合関係
		系 列	形 式	時 期					
1003	深鉢		D		28-C-14②	口 18.2		半輪起線、無文	赤褐 二次焼成 オコゲ 27C-9

28-D

1003	深鉢	圓-VI	D-b		28-D-6	口 20.6	台形波状口縁、口縁部X字状隆帯、波渦、底 面にそって割み列、底部羽みのある絆帶及び 沈縁台、捺余L	にぶい赤褐 二次焼成
------	----	------	-----	--	--------	--------	---	------------

28-E

1004	深鉢	圓-II n			28-E-5	口 24.4	口縁部突起、底帶横門区画。区画内有節沈縫、 圓文L.R	明赤褐 二次焼成
1005	深鉢	圓-I	I		28-E-21②	口 33.4	口縁入字状突起、基接唇、環狀把手、捺余 L	橙
1006	深鉢	圓-I n			28-E-P22		底帶横門区画、沈縫による文様	橙 二次焼成-オコゲ
1007	深鉢				28-E-P2	口 19.8	口縁部突起、口唇部キザイ、沈縫、刺突によ る文様	橙 二次焼成-オコゲ 28E-21
1008	深鉢	圓-IX			28-E-2②	口 32.8	口縁部沈縫、側伏隆帯、刃切綱文 (L.R + R L)	にぶい橙 二次焼成 27E-18, 28E-7
1009	深鉢	圓-V			28-E-2②	口 41.2	圓文R.L	明褐灰 二次焼成
1010	深鉢	圓-V			28-E-2②	口 17.0	頭部入沈縫、圓文R.L	にぶい赤褐 二次焼成
1011	深鉢	圓-V			28-E-5②	口 19.4	折返し唇、圓文L	にぶい赤褐 二次焼成
1012	深鉢	圓-			28-E-21	口 35.0	口縁部突起 (?)、圓文R.L	にぶい橙 二次焼成
1013	深鉢				28-E-14②	底 15.0	鐵沈縫、銅代底	淡灰褐 二次焼成 8B住
1014	浅鉢	北	A		28-E-22②		半輪起線文、赤彩、圓文?	橙
1015	深鉢		A		28-E-11②	口 40.6	無文	

28-F

1016	深鉢	圓-I	II	28-F-20			頭部把手、基接唇、半輪起線、沈縫部など り	にぶい橙 二次焼成 オコゲ
1017	深鉢	圓-	II	28-F-5①	口 35.8		口縁部突起、底帶による文様区画、底帶上に キザイ。区画内に沈縫、刺突	黃褐 二次焼成
1018	深鉢	圓-		28-F-1			基接唇、沈縫部たぞり、口縁部沈縫状沈縫	灰褐
1019	深鉢	圓-I		28-F-14①			圓状厚唇、唇帶、圓文R.L	橙 二次焼成
1020	深鉢			28-F-3①			沈縫部内区画、沈縫部連続刺突	橙 二次焼成
1021	深鉢	圓-		28-F-1			頭状脣縫、沈縫による三角形区画	赤褐 二次焼成 オコゲ 28F-2
1022	深鉢	圓-		28-F-1			半輪起線文、玉鉢き三叉文	橙
1023	深鉢	圓-V	D	28-F-5①	口 29.7		圓文R.L	明赤褐 二次焼成
1024	深鉢	北	A	28-F-15			爪形文、玉鉢き三叉文	にぶい褐
1025	深鉢	圓-II n		28-F-8①			底半起線文、圓文R.L	橙 二次焼成-オコゲ
1026	深鉢	圓-IX	H	I	28-F-1	口 25.7 2/5	口縁部小突起、斜状唇縫、捺余L	にぶい橙 二次焼成 27F-21

28-G

1027	深鉢	圓-VI	I	28-G-9②			台形大波状口縁、頂部上面波状唇縫、中央に 底帶下口縫及び隨縫にそって沈縫、沈縫部 にキザイ、頭部唇縫及び沈縫	明赤褐 二次焼成 オコゲ
1028	深鉢	圓-		28-G-18			半輪起線、進続刺突	明赤褐 二次焼成
1029	深鉢		I	28-G-7①			交互刺突による鋸歯状文	にぶい褐
1030	深鉢			28-G-17②			底帶横門区画、区画内ハッカ状連続刺突列、 底帶上にキザイ	明褐
1031	深鉢	圓-I	I	28-G-19②			舌状唇縫換縫、唇縫にそって有節沈縫、口縁 部捲糸R模様文	明褐 二次焼成

4 遺物

番号	器種	分類			出土地点 (レーベル) (m)	法量 (cm)	遺存	文様	色調・二次焼成・焼合関係
		系別	器形	時期					
1032	深鉢	圓一円 ?		I	28-G-3②	口 20.0	縦帶による指内区画、区画にそって爪形文	男赤褐 二次焼成	
1033	深鉢	圓一円 ?		I	28-G-17		太く高い縦帶、縦帶上に压痕、縦帶にそって網目形有輪比較	にぶい褐色 二次焼成	
1034	深鉢	圓一三		I	28-G-19②	底 13.0	継平陸起源による文様区画、区画内斜沈線	男赤褐 二次焼成 オコゲ	
1035	深鉢				28-G-7		口縫部縦帶指内区画、区画内有輪沈線	男赤褐 二次焼成-オコゲ	
1036	深鉢	圓-II	D		28-G-7⑦	口 33.6 底 15.6 高 [x.5]	口縫部縦帶及び平陸起源による文様、環状浮文、三叉文	にぶい赤褐 二次焼成 オコゲ	
1037	深鉢	圓-II a	D		28-G-7	口 33.2	口縫部斜巻帯が突起、縦沈線、縦文L R	にぶい赤褐 二次焼成	
1038	深鉢	圓-三			28-G-15②		沈線による文様区画、波状文	男赤褐 二次焼成 30E-11, 28G-20	
1039	浅鉢				28-G-4②	底 9.0	無文	男赤褐	
1040	浅鉢				28-G-7②	口 19.0	縦文R L	にぶい褐色 二次焼成	
1041	深鉢	圓-三			28-G-7②		平陸起源、縦文L R	男赤褐	
1042	浅鉢	北	A		28-G-7②				

29-B

1043	深鉢	圓一四	D	I	29-B-10②	口 32.6	口縫部把手、縦帶による三角形区画、縦帶上にナギサ、区画にそって有輪比較、縦文R L	褐色 二次焼成 29B-14	
1044	深鉢	圓一			29-B-P 1 ②	口 40.8	把手把手、把手手上に縦巻	にぶい褐色	
1045	深鉢	圓一			29-B	口 21.6	口縫部に2条の突起、突起間は焦文、横状把手、縦文R L	にぶい褐色 二次焼成	
1046	深鉢	圓一			29-B-15①		縦帶による3本の沈線、細沈線、縦文R L (朱模)	にぶい赤褐色 二次焼成 オコゲ	
1047	深鉢	圓一四			29-B-20①	口 22.2	縦巻による三角区画、縦帶上に刺突、区画内に次經	にぶい褐色 二次焼成	
1048	深鉢	圓一			29-B-15①		縦文R L	黄褐色 二次焼成 29B-20	
1049	深鉢				29-B-20②		沈線	にぶい褐色 二次焼成	
1050	深鉢	圓-II a			29-B-15②	口 33.0	縦帶による指内区画、区画内深い沈線、縦文R L	にぶい赤褐色 二次焼成	
1051	深鉢	圓一	A		15H-294 29B-	口 32.6	縦文L	褐色 二次焼成	
1052	浅鉢	北	A		29-B-20	口 35.6 底 13.6 高 13.6	平陸起源文、爪形文、縦文R L	褐色	

29-C

1053	深鉢	圓-II a			29-C-6	口 24.4	口縫部小突起、縦帶指内区画、区画内沈線、縦文R L	褐色 二次焼成	
1054	深鉢	圓一			29-C-14② 29-C-P 2		半纏起源文による文様、無文部を残す	にぶい褐色 二次焼成 オコゲ	
1055	深鉢	圓一		II	29-C-10	口 19.0	基礎帶による渦巻、絞縫帶深いなぞり、三叉文	男赤褐色 二次焼成 オコゲ 29C-P 15	
1056	深鉢	圓一		I	29-C-P 17 ①		絞縫帶、巻き上げに爪形文、半纏起源文による方形区画	褐色 二次焼成-オコゲ	
1058	深鉢	圓一			29-C-14②	口 31.6	絞縫状沈線、縦文R L	男赤褐色 二次焼成 29C-9・20	
1059	深鉢	圓-三 b	I		29-C-16①		絞縫区画、絞縫状沈線、縦文R L	にぶい褐色 二次焼成 29C-11	
1060	深鉢	圓一			29-C-P 11 ①		巻き上げ、沈線状沈線、縦文L	男赤褐色 二次焼成	
1061	深鉢	圓一	A		29-C-11- 底	口 25.0	口縫部無文、縦文L	にぶい褐色 二次焼成	
1062	深鉢	圓一			29-C-25②		沈線による巻き上げ(太闊)、縦文R L	男赤褐色 二次焼成	
1063	深鉢	圓一		II	29-C-15		2本沈線による横S文字、縦文R L	赤褐色 二次焼成	

29-D

番号	形種	分類			出土地点 (レベル) (m)	法 量 (cm)	遺存	文 様	色調・二次焼成・他 基古関係
		系 列	部 形	時 期					
1064	深鉢				29-D-10	□ 44.0	縫帶上刺突による爪形文、繊細沈線、縄文R L	にぶい赤褐 二次焼成	
1065	深鉢	縁-II a	II		29-D-4 ①	□ 24.4	口縁部小突起、半隆起線による施文、三叉 文	にぶい赤褐 二次焼成 オロゲ	
1066	深鉢	縁			29-D-16	□ 38.5	沈線部に刺突刃、縄文LR	にぶい赤褐 二次焼成	

29-E

1067	深鉢	縁-IV			29-E-1	□ 19.5	波状口縁、縫帶上にキザミ、縄文LR	明赤褐 二次焼成 オロゲ
1068	深鉢	縁-IV			29-E-5 ②	□ 14.6	□縫帶部S字状はり付け縫帶、有縫沈線、縄文 RL?	にぶい-褐 二次焼成
1069	深鉢	縁-			29-E-1	直 16.6	縄文RL、底部網代底	明赤褐 二次焼成

29-G

1070	深鉢	縁-I b	D-a	II	29-G-16	□ 18.0	3/5	4單位突起、基縫帶による両巻文、半隆起線、 沈線部なぞり、縫帶状把手、三叉文、無文部 を残す	明赤褐 二次焼成 オロゲ 13住
1071	深鉢	縁-I a		I?	29-G-16 ②	□ 12.4 直 7.6 高 11.2		半隆起線、沈線部なぞり、三叉文、無文部を 残す	明赤褐 二次焼成 オロゲ
1072	深鉢	縁-			29-G-7 ①			縫帶横円区画、有縫沈線	にぶい-褐
1073	深鉢				29-G-16 ②			縫帶横円区画、区画内縫半隆起線	明赤褐 二次焼成
1074	深鉢	縁-			29-G-17 ②			縫帶横円、半隆起線、沈線部なぞり、ヘラ状 沈線	にぶい-褐
1075	深鉢	縁-			29-G-10 ②			縫帶、半隆起線文、沈線部刺突	褐
1076	深鉢	縁-V			29-G-24 ②			半隆起線文、爪形文、縄文RL	明褐 二次焼成
1077	深鉢				29-G-20 ②			縫帶、縫帶、沈線部過続刺突	赤褐
1078	深鉢	縁-			29-G-5			縫帶横円区画、区画内小突起、縫帶にそって 刺突刃、半隆起線文	褐
1079	深鉢	縁-V			29-G-4 ②			縫帶上に爪形文、波線、縄文RL	明赤褐 二次焼成
1080	深鉢				29-G-17 ②			沈線横円区画、沈線にそって縫帶のキザミ	にぶい-褐
1081 1083	深鉢	縁-I I		I	29-G-21			縫帶内区画、キタビリ文、ベン先状刺突、三 叉文	赤褐 二次焼成 29G-15+24
1084 1086	深鉢	縁-I I		I	29-G-11			キタビリ文、ベン先状刺突	にぶい-褐 二次焼成 29G-5
1087	深鉢	縁-IX			29-G-16 ②	□ 26.6		無文、縫帶に網状縫帶	にぶい赤褐
1088	深鉢	縁-IX	A		29-G-20 ②	□ 14.4		口縁部網状縫帶、縄文RL	灰褐 二次焼成
1089	深鉢	縁-IX		I?	29-G-24			縫網状縫帶、半隆起線文、沈線部なぞり、縄 文RL	明赤褐 二次焼成 オロゲ 30G-4
1090	浅鉢	縁-			29-G-18 ②	□ 32.4		縄文LR	褐
1091	鉢				29-G-2 ②	□ 18.0		無文	明赤褐
1092	浅鉢	北	A		29-G-6			半隆起線文、爪形文	褐
1093	浅鉢	北	A		29-G-16 ②			半隆起線文、爪形文	褐
1094	浅鉢	北	A		29-G-20 ②			半隆起線文	褐

29-H

1095	深鉢				29-H-1 ①	□ 29.0		口縫帶内孔把手、横半隆起線、沈線部なぞり	赤褐 二次焼成
1096	深鉢	縁-I			29-H-2 ①			沈線内重円、細かいキザミ、三叉文	にぶい赤褐 二次焼成
1097	深鉢	縁-II			29-H-11 ①	□ 31.0		縫帶横円区画、区画内沈線、沈線網目状文	暗褐 二次焼成
1098	深鉢	北	A		29-H-6	□ 35.0		口縫帶把手、半隆起線文	褐

4 遺物

30—B

番号	器種	分類			出土地点 (レベル) (m)	法量 (cm)	遺存	文様	色調	二次焼成・伝 接合関係
		系 列	器 形	時 期						
1099	深鉢				30-B 黒 1 -49			黒縁帯横区画、Y字状捺帯、鶴文 RL	黒	二次焼成
1100	深鉢	盤—I b			30-B 黒 1 -57	底 11.2		有筋沈縁による捺文、沈縁	黒褐	二次焼成

30—C

1101	深鉢	陸—I			30-C-8	口 18.4	腰帶横円区画、腰帶上にキザシ、沈縁端部にナザリ、三文字	にぶい・黒 二次焼成 オコゲ
------	----	-----	--	--	--------	--------	-----------------------------	-------------------

30—G

1102	深鉢	陸—I c		II	30-G-8			口縁部入字突起、継基縁帯、渦巻、沈縁、 撫文部多く残す。	土器不明	二次焼成
1103	深鉢	萬—I			30-G-14	口 17.0		沈縁、有筋沈縁、鶴文 RL	明褐	二次焼成 30G-9
1104	深鉢	陸		II	30-G-19			継半連起線文、瓦瓦三角印刻、無文部を残す。	明褐	二次焼成 オコゲ
1105	深鉢	陸—I		II	30-G-6 ①			鶴S字腰帯、半連起線、沈縁深いなぞり、鶴文 部を残す	明赤褐	二次焼成
1106	深鉢	陸—I		II	30-G-9 ②			基縁帯、深い沈縁	にぶい・黒	二次焼成 オコゲ
1107	深鉢	陸—V	F	I?	14H 30-G-14A	口 12.4	3/5	口縁部2段尖突起、口縁にそって3列の有筋 沈縁、沈縁による三区画、腰帶半連起線による 区画内沈縁による凸巻	赤褐	二次焼成 オコゲ 30G-9 C
1108	深鉢				30-G-5	底 4.4		無文	にぶい・黒	
1109	深鉢				30-G-4			有筋沈縁、キャラビラ沈縁剥突	赤褐	二次焼成
1110	深鉢								30G-4	
1111	深鉢	陸—VI		I	30-G-7 a	口 38.6		口縁三角形突起、底部ヨリ丁字状腰帯、腰帶 上にキザシ、脚部横広縁帯、腰帶上にキザシ	にぶい・黒	二次焼成 30G-2 + 6 + 7
1112	深鉢	萬—VI			30-G-13 b	口 29.0 底 11.4 高 26.2		4個の小突起、口縁部外端部にナザリ、	赤褐	二次焼成 30G-4 + 8 + 10, 14往
1113	深鉢	萬—I			30-G-14	口 24.2	1/5	小波状4單位口縁、腰帶の中に平行沈縁、鶴 文 RL	にぶい・黒	二次焼成 30G-9 C
1114	深鉢	萬—I	A		30-G-4 5	口 23.0	2/5	口縁無厚壁、捺余 L	黒	二次焼成 30C-9, 14往
1115	浅鉢	北	A		30-G-4 ②	口 32.8		口縁部突起、爪形文、半連起線文、三文字	明褐灰	
1116	浅鉢		B		30-G-4 ③	口 38.0		無文	明赤褐	二次焼成 オコゲ
1117	浅鉢				30-G-4 ④	口 46.0		半連起線文	にぶい・赤褐	

30—H

1118	深鉢	萬—I		I	30-H-21	口 34.0		波状4單位、突起部断続状、腰帶横円区画、 区画にそって沈縁、渦巻	にぶい・黒	二次焼成
1119	深鉢	萬—V		I	30-H-11 ①	口 19.4		逆C字底部爪形突起、鶴文?	暗褐	二次焼成
1120	浅鉢		C		30-H-1 ①	口 36.2		無文、波状口縁	黒	

31—C

1121	深鉢	陸—I		II	31-C-22	口 23.4		円孔のある台形様突起4個、瓶頸状把手、腰 沈尖突起、基縁帯、半連起線、沈縁など	にぶい・黒	二次焼成
------	----	-----	--	----	---------	--------	--	--	-------	------

31—E

1122	深鉢				31-E-25			口縁部入字突起(横紙)、鶴文 L	黒	
1123	深鉢				31-E-23		3/5	半連起線(底)、区画内菱形状沈縁	にぶい・黒	二次焼成 オコゲ
1124	深鉢	陸—I			31-E-3	底 17.0		継縁帯、半連起線、沈縁など	にぶい・赤褐	二次焼成 オコゲ

31-F

番号	器種	分類		出土地点 (レベル) (m)	径 (cm)	遺存	文様	色調・二次焼成・他 複合関係
		系別	器形・時期					
1125	深鉢	縦一田 b		31-F-12②	口 27.8	縫帶、沈帯による文様区画、沈縫部通続刺突、 三叉文	にぶい赤褐 二次焼成	

31-G

1126	深鉢	縦一Ⅷ		5 A-81	口 35.0	波状口縫、沈縫部突、圓文L	にぶい赤褐 二次焼成	
1127	深鉢	縦一		31-G-17①	口 34.0	刺突沈縫	にぶい赤褐 二次焼成	
1128	深鉢	縦一		5 A-81	口 20.2	渦巻状突起、縫帶による区画、口唇部にキザ く、区画内沈縫、圓文？	褐 二次焼成	
1129	深鉢	縦一帯	I	31-G-23		斜行沈縫、キタヒラ文	にぶい赤褐 二次焼成	
1130	深鉢	縦一 n	G?	31-G-25	口 31.0 底 14.0 高 41.6	縫帶にそって比縫、沈縫部に刺突、沈縫によ る格円区画、斜行に換沈縫	にぶい赤褐 二次焼成 オコゲ 31G-24	
1131	深鉢	縦一Ⅸ	B	31-G	口 41.4	斜行口縫、口縫部無文、頸部斜曲状沈縫、 圓文L R	にぶい赤褐 二次焼成 31G-4・5・9・10、 試(A-S)	
1132	深鉢	縦一Ⅷ	I	31-G-25①	口 23.4	波突4單位口縫、腹部に無文帯、瓶状把手、 区画にそって刺突沈縫、縫帶上にキザく、圓 文L R	にぶい赤褐 二次焼成	
1133	鉢	縦一勝		31-G-25	口 11.4 底 7.0 高 7.6	3/5 小突起2個、幅広Y字縫帶	明赤褐 31G-5	
1134	浅鉢	北	A	31-G-24②	口 28.6	爪彫文、半縫起線文、玉泡き三叉文	明赤褐	

31-H

1135	深鉢	縦一勝		31-H-6		三角形区画、ベン先状刺突、三叉文、斜行沈 縫	褐	
1136	深鉢	縦一勝		31-H-6		縫帶三角区画、ベン先状刺突、三叉文	明赤褐	
1137	深鉢	縦一		31-H-6②		圓文L?	褐 二次焼成	

32-B

1138	深鉢	縦一W	I?	32-B-25	口 25.8	口縫部降帯区画、縫帶にそって突起沈縫、区 画内山形沈縫	明褐 二次焼成
------	----	-----	----	---------	--------	--------------------------------	---------

32-D

1139	深鉢			32-D-21-C	口 26.0	無文	捲黃斑 二次焼成
1140	深鉢	縦一W		32-D-2②	口 19.6	口縫部無文、圓文R L	明褐
1141	鉢	縦一W		32-D-5	口 18.0	口縫部無文、圓文L R	明褐 二次焼成

32-E

1142	深鉢	縦一 III B	I	32-E-24	口 36.8	片頭狀把手、基蔭帯、平墜丸縫、有筋沈縫	明赤褐 二次焼成 32E-17
1143	深鉢			32-E-7		口縫部突起、縫帶縫区縫、沈縫に列み列、 交互刺突	明褐
1144	深鉢	縦一Ⅷ	I	32-E-19②		口縫部突起、太い縫帶上にキザく、深い沈縫	灰褐 二次焼成
1145	深鉢	縦一I	I	32-E-7	口 24.4	口縫部突起、舌状蔭帯、有筋沈縫	暗褐 二次焼成
1146	深鉢	縦一		32-E-14②		換基垂帶、平墜起縫、無文帯	褐 二次焼成
1147	深鉢	縦一 III n		32-E-7		波状口縫、縫帶による三角形区画、縫帶にそっ て通続のキザく、区画内矢羽根状沈縫	褐 二次焼成-オコゲ
1148	深鉢?	縦一 III n		32-E-20	口 25.2	沈縫、キタヒラビ状突起	赤褐 二次焼成
1149	深鉢	縦一		32-E-25	口 19.6	3/5 沈縫による文様区画、肩部逆垂張文、圓文L	赤褐 二次焼成-オコゲ
1150	深鉢			32-E-7		圓文R L	暗赤褐 二次焼成 オコゲ

32-F

番号	器種	分類		出土地点 (レベル) (m)	法 長 (cm)	遺存	文 様	色調・二次焼成・他 板合関係
		系 列	器 形					
1151	深鉢	周-I	I	32-F-17②		舌状隆帯、脣縫状把手、有筋沈線	黒褐 二次焼成	
1152	深鉢	周-II a	I	32-F-13②	□ 23.2	口縁部突出突起、脣縫状把手、構内区画、区 画内斜沈線	黒褐 二次焼成-オコゲ 32F-7	
1153	深鉢	周-W		32-F-18②		脣縫状把手、口縁にそって爪状刺史、龍帶、 頸部、脚部にも龍帶、脣縫状把手、魂文L	黒赤褐 二次焼成 オコゲ 32F-19	
1154	深鉢	周-	II	32-F-14②	□ 24.0	口縁部脣縫状突起(動物) 基盤帯による三角 形の凹凸、龍帶上にキザI、区画内重三角文、 沈線帯や中隠I、三叉文	黒褐 二次焼成	
1155	深鉢	周-I G	I	32-F-22	□ 25.0 底 12.2 高 27.0	□ 1/5 口縁部突起、手延起縫による脣縫内区画、区 画内斜沈線、への字状刺史。沈線帯にキザI、 基盤帯による重円区画	にぶい赤褐 二次焼成 オコゲ 32F-2・18・23	
1156	深鉢	周		32-F-19	□ 32.3	口縁部小突起、有筋化繩、木目状线条文(R)	赤褐 二次焼成-オコゲ	
1157	深鉢	周-IX		32-F-23②	□ 33.8	口縁部突出突起、脣縫状把手、脚部に沈線、 魂文RL	灰褐 二次焼成 32F-8・18	
1158	深鉢	周-I	I	32-F-21		舌状隆帯、魂文LR	にぶい橙 二次焼成	
1159	深鉢	周-A		32-F-21	□ 30.2	口縁部無文、沈線、魂文LR	褐 二次焼成	
1160	深鉢	周-II a		32-F-24②	□ 26.2	口縁部構内区画、区画にそって沈線、魂文L R	赤褐 二次焼成	
1161	深鉢	周		32-F-17②		脣縫に太い隆帯、隆帯上にキザI、脣縫沈線 魂文RL	にぶい褐 二次焼成	
1162	深鉢	周-II a		32-F-24②	□ 12.8	口縁部無文、隆帯構内区画、脚部Y字状隆帯、 魂文RL	明赤褐 二次焼成 オコゲ 32F-17	
1163	深鉢	周-II a	D II?	32-F-24	□ 16.4 底 8.4 高 22.7	□ 4/5 口縁部隆帯構内区画、区画にそって沈線、脚 部U字状沈線、側面沈線	明赤褐 二次焼成 オコゲ 32F-19・24	
1164	深鉢	周-I		32-F-22	□ 32.0	口縁部に突起、口縁にそってへの字状刺史、 魂文L、浦彌孔	明赤褐 二次焼成	
1165	深鉢	周-I	A	32-F-23②		絞連帶、隆帯上にキザI、翼沈線、全面に布 施け針突	にぶい橙 二次焼成 32F-7	
1166	深鉢	周-II c	A	32-F-2②	□ 29.0 底 12.1 高 30.9	3/5 口縁部沈線、構内区画、沈条R	赤赤褐 二次焼成 32F-21	
1167	深鉢	周-II n		32-F-16		綴継広沈線、魂文RL	黒褐 二次焼成 32F-8・12・15	
1168	深鉢	周-I		32-F-24		綴半縫接束縫、沈条L	にぶい褐 二次焼成 32F-23	
1169	深鉢	周-I		32-F-21	□ 32.0	口縁部小突起、沈条R	褐 32F-24	
1170	深鉢	周-I		32-F-21	□ 23.1	□ 3/5 口縁部突起、沈帶による2単位文様、沈条L	赤赤褐 二次焼成-オコゲ	
1171	深鉢	周-I	II?	32-F-21	□ 22.2	魂文LR	浅黄褐 二次焼成 オコゲ 32F-21	
1172	深鉢	周-I		32-F-24		脚部に隆帯、沈線、魂文LR	明赤褐 二次焼成 32F-25	
1173	深鉢	周-I		32-F-24		脚部に隆帯、沈線、魂文LR	明赤褐 二次焼成 32F-25	
1174	深鉢	周-I	B	32-F-18	□ 35.0	□ 縫部無文、魂文LR	褐 32F-13	
1175	浅鉢	北	A	32-F-25②	□ 48.8	基盤帶、半隆起魂文、無文、魂文LR	にぶい橙 二次焼成 オコゲ 32F-24	
1176	浅鉢	北	A	32-F-21		基盤帶渦巻、半隆起魂文、隆帯上にキザI、 沈縫部連續刺史	にぶい橙	
1177	浅鉢	北	A	32-F-17②	□ 39.2	半隆起縫、沈縫部深いなぞり、三叉文、沈縫 にそって網状のキザI	褐 32F-16	
1178	浅鉢		A	32-F-18②	□ 37.3	無文	褐沢 二次焼成-オコゲ 32F-17・23	
1179	浅鉢	北	A	32-F-22②	□ 36.0	半隆起縫、三叉文、魂文RL	にぶい橙 二次焼成	
1180	浅鉢		B	32-F-14②	□ 44.4 底 14.4 高 13.6	□ 縫部無文、魂文LR	にぶい褐	

番号	器種	分類			出土地点 (レベル) (m)	法量 (cm)	遺存	文様	色調・二次焼成・他 被合関係
		系別	器形	時期					
1181	浅鉢	圓一	C		32-G-4②		波状口縁、口部端部にキザミ、口唇部有節状 縫、無文	にぶい緑 32G-21	
1182	鉢?				32-G-17②	□ 33.6	無文	青	

32-G

1183	深鉢	隆一	G	II	32-G-7②	□ 23.8	口唇部突起、基底部渦巻、平底起線、沈線な ぞり、無文部を多く残す	明赤褐 二次焼成 オコゲ 32G-18
1184	深鉢	隆一			32-G-21②	□ 24.8	入字状突起、平底起線文	褐 二次焼成
1185	深鉢	隆一			32-G-25②	□ 26.6	口縁部小突起及び窓状突起、口唇部内綱化 渦巻	にぶい緑 二次焼成
1186	深鉢	隆一	G		32-G-8②	□ 27.4	口縁部小突起、頭綱状把手、平底起線文	明赤褐 二次焼成
1187	深鉢	隆一 II		II	32-G-21②		頭綱部把手、半縫合線文（沈線部なぞり）に よる渦巻文、三叉文、底面にへの字状沈線	明赤褐 二次焼成
1188	深鉢	圓一	I		32-G-22②		キヤタビリ文、ベン先状刺突	にぶい緑 二次焼成 オコゲ
1189					32-G-7②			
1190	深鉢	圓一	I		32-G-3①		ベン先状刺突、三角形区画	にぶい緑
1191	深鉢	隆一			32-G-18②	□ 21.0	輪帶三角形区画、区画にそって有脊沈線、玉 龜き三叉文	明赤褐 二次焼成
1192	深鉢	隆一 IV	F-a	II	32-G-8	□ 25.4	口唇部窓突起及び窓状把手、基底部によ る渦巻文、逆V字文、三叉文、平底起線の沈 線部なぞり、頭綱文L R	にぶい赤褐 二次焼成 オコゲ 32G-6・12
1193	深鉢	圓一 I	A-b	I	32-G-7	□ 16.0 底 高 16.0	4/5 波状4単位の口縁、波状部下に横状把手、頭 部に渦巻、沈線、綱文R L	にぶい緑 二次焼成
1194	深鉢	圓一 II			32-G-8	□ 18.6	口縁部把手による横円区画、沈線、綱文L R	赤褐 二次焼成
1195	深鉢	圓一 II			32-G-22②	□ 23.0	口縁部窓帶横円区画、区画内無文、Y字状隆 帯、綱文L R	褐 二次焼成
1196	深鉢	圓一 II	F		32-G-4①	□ 38.6	口縁部横円区画、区画内横行沈線、横沈線、 有脊沈線、窓帶R L	褐 二次焼成
1197	深鉢	圓一			32-G-13①	□ 35.0	口縁部粗広窓帶及び深い沈線、綱文し	梗 二次焼成
1198	深鉢	圓一			32-G-18②	□ 28.8	沈線、ナゼイ、無文	明赤褐 二次焼成
1199	深鉢	圓一 III			32-G-22②	□ 22.6	口縁部突起、沈線による丈縫区画、綱文R L	明赤褐 二次焼成
1200	深鉢	圓一			32-G-19①	□ 18.2	頭綱沈線	明赤褐 二次焼成
1201	深鉢	圓一 III			32-G-22②	□ 36.0	頭綱に断面三角隆帯、綱文L R	灰褐 二次焼成
1203								
1202	深鉢	圓一 IV		II	32-G-1		平底起線、沈線部なぞり、クサシテ文様、綱 文R L	明赤褐 二次焼成 32G-21, 33G-1, 35 D-2
1204	深鉢	圓一 III		I ?	32-G-8		輪帶による横円区画	褐 二次焼成
1205	深鉢	圓一 III			32-G-24②		沈線によるクサシテ手状文、羽状綱文（L R + R L）	梗 二次焼成
1206	深鉢				32-G-21②	底 11.2	沈線による綱縫区画	明赤褐 二次焼成 32G-31
1207	深鉢	圓一	A		32-G-17	□ 13.6	口縁部に突起、綱文R L	にぶい緑 二次焼成 オコゲ
1208	深鉢				32-G-7②	□ 39.0	武状口縁、輪帶による三角形区画、無文	明赤褐 二次焼成
1209	深鉢?	圓一			32-G-22①		有孔縫合、無文、輪帶による丈縫区画	明赤褐
1210	深鉢	北	A		32-G-23①	□ 38.0	口縁部粗糸三叉文、基底部渦巻、基底部上 にへの字状沈線、手縫起綫文	搜査標
1211	深鉢		A		32-G-1①	□ 26.0	口縁部輪帶横内区画、区画内側突	にぶい青 二次焼成
1212	深鉢	北	A		32-G-16	□ 32.0	平底起線、爪形文、三叉文	にぶい緑 32G-21
1213	深鉢	圓一			32-G-3	□ 14.6	綱文R L、口縁部に輪帶	梗 二次焼成—オコゲ

32-H

1214	深鉢	圓一	A	I	32-H-6	□ 31.8	2/5	蛇頭状突起、波状縫合、綱文R L	にぶい緑 二次焼成
1215	深鉢	圓一			32-H-6①			側状縫合、沈縫区画、綱文R L	梗 二次焼成

4 遺物

番号	器種	分類			出土地点 (レベル) (m)	法 長 (cm)	遺存	文 様	色調・二次焼成・他 関係
		系 列	器 形	時 期					
1216	深鉢	周-II a			32-H-1			施有、有跡沈線、繩文RL	にぶい緑 二次焼成 オロゲ
1217	深鉢	周-I			32-H-21①			舌状捲毛、半縫起線文、R内刺突	緑 二次焼成
1218	深鉢	周-I A			32-H-6①			波状口縁、繩文LR	にぶい緑 二次焼成 32H-10

33-B

1219	浅鉢	北	A		33-B-10②	口 37.0		半縫起線、三叉文	にぶい緑 二次焼成
------	----	---	---	--	----------	--------	--	----------	-----------

33-C

1220	浅鉢	北	A		33-C-24	口 36.0		半縫起線文、爪形文、繩文LR、底部網代底	緑
------	----	---	---	--	---------	--------	--	----------------------	---

33-D

1221	深鉢	周-W B			33-D-8	口 28.4 底 15.0 高 43.0	3/5	X状把手、繩文LR	赤褐 二次焼成
1222	深鉢	周-II G			33-D-15C			半縫起線文、網区曲、捲毛	にぶい赤褐 二次焼成

33-E

1223	深鉢	周-W G	II	33-E-2	口 29.0			半縫起線文による網区曲、口部縫接状把手、繩文LR	にぶい赤褐 二次焼成 33E-2, 33E-P 3 -26+28+30, 35D-T P 1
1224	深鉢	周-I勝		I	32-E-2			キャラタリ文、ベン先状刺突	明赤褐
1225									34E-3
1226	深鉢	周-I			33-E-23②			施有交替突抜状文、有跡沈線、沈線、繩文LR	灰褐 二次焼成
1227	深鉢				33-E-5			施有、沈線、キャラ	明赤褐 二次焼成
1228									
1229	深鉢	周-II B		33-E-5	口 16.6			断形幅広縁、沈線区画、施有R	にぶい緑 二次焼成
1230	深鉢	周-I	I	33-E-24				施有、半縫起線による網区画、繩文RL	明赤褐 二次焼成
1231	深鉢	周-I		33-E-14	口 32.6			口部交替刺突による続状文及び沈線、繩文RL	灰褐 二次焼成
1232	深鉢			33-E-24	口 23.0			口部小尖突、弧状縁	にぶい緑 二次焼成
1233	深鉢	周-I		33-E-24				幅広帯文による三角区画、区画にそって沈線繩文RL	明赤褐 二次焼成
1234	深鉢	周-W G		33-E-9	口 25.8			施有L、口部厚肥	馬褐 二次焼成
1235	深鉢	周-W D		33-E-3	口 26.8			口部無文、繩文LR	明赤褐 二次焼成 オロゲ 33E-2
1236	深鉢	周-W		33-E-20	口 28.6			繩文L	にぶい赤褐 二次焼成
1237	深鉢	周-W		33-E-3	口 32.0	2/5		繩文L	明赤褐 二次焼成 オロゲ 33E-3+7
1238	深鉢	周-II b	G II	33-E-2	口 21.8 底 10.6 高 25.9			口部突起4個、横平縫起線、沈線状キャラ、繩文RL、網代底	明赤褐 二次焼成 33E-2 A, 33E-P 3 -17, 35E-T P 1
1239	浅鉢	北	A	33-E-24	口 34.3			半縫起線、沈線など、三叉文	緑
1240	浅鉢	北	A	33-E-24	口 39.4			施有密溝巻、半縫起線、爪形文	黒 33E-22
1241	浅鉢	北	A	33-E-5	口 39.6			半縫起線、爪形状刺突	明赤褐 34E-18+12
1242	浅鉢		A	33-E-2	口 43.0			施有捲毛、沈線、沈線内刺突	明赤褐 二次焼成 33E-10

33-F

番号	器種	分類		出土地点 (レベル) (m)	法 長 (cm)	遺存	文 様	色調・二次焼成・他 組合関係
		系 列	器 形					
1243	深鉢	盤-I c	G-a	II	33-F-5	口 29.4	盤帯による横円区画、区画内三角形刺突、三叉文、平継起縁、沈縫部なぞり	にぶい褐色 二次焼成 33F-10
1244	深鉢	盤-V	G	II	33-F-13	口 31.4 底 11.0 高 [30.0]	太い縦帯、縦帯にそって沈縫、曲巻文、脚下半部無文	赤褐色 二次焼成
1245	深鉢	盤-		II	33-F-13- 95	口 37.6	基隆帯曲巻、半隆起縁文、三叉文	にぶい黄褐色 二次焼成
1246	深鉢	盤-II		II	33-F-5	口 32.4	基隆帯曲巻、半隆起縁文(縫隙部なぞり)、三叉文	赤褐色 二次焼成オロヨグ
1247	深鉢	盤-I c?		II	33-F-4	口 24.4	口縫部横状把手、基隆帯曲巻、半隆起縁、沈縫部なぞり、玉掛き三叉文	褐
1248	深鉢	盤-			33-F-23	口 31.4 底 12.5	基隆帯上にハの字状弦紋、基隆帯、沈縫部なぞり、三叉文	暗赤褐色 二次焼成 32E-24・25
1249	深鉢	盤-		II	33-F-17	口 42.8	版縫状把手、基隆帯、沈縫部探いなぞり、玉掛き三叉文	暗褐色 二次焼成
1250	深鉢	盤		II	33-F-12①	口 31.9	太い縦帯による横円・三角形区画、基隆帯上にハの字状弦紋、玉掛き三叉文	淡黄褐色 二次焼成
1251	深鉢	盤-II			33-F-13		縦帯に横帯、半隆起縁文による洞巣、三叉文	明赤褐色 二次焼成 オロヨグ
1252	深鉢	盤-I a		I	33-F-3①	口 14.0	波状口巻、沈縫による文様区画、周文(?)	灰褐色
1253	深鉢	盤-I n			33-F-9② 底 6.6		細い半隆起縁文を斜に施文	明赤褐色 二次焼成 26E-24
1254	深鉢				33-F-1		太い縦帯、縦帯上に爪形刺突、ヘラ状工具による細孔	明赤褐色 二次焼成 32F-22
1255	深鉢	盤-			33-F-2	口 26.2	口縫部把手、沈縫、連續刺突	黒褐色 二次焼成 33F
1256	深鉢	盤-I b		I	33-F-6①	口 19.0	台形縫波次口縫、横凹縫帶区画、沈縫に連續のキザミ	にぶい褐色 二次焼成 33F-1
1257	深鉢	盤-			33-F-5②		口縫部突出、縦帯にそってキサツビク文	明赤褐色
1258	深鉢	盤-I ?	A	I	33-F-11	口 13.6	横円区画、縦帯上にハの字状弦紋、ベン先状刺突	橙 二次焼成 33F-6・7
1259	深鉢	盤-I	D	I	33-F-17	口 24.2	口縫部横状突起、舌状縫帶による凸巻文、縦帯にそって沈縫、三叉文、粗縫状把手、周文R.L	赤褐色 二次焼成オロヨグ 33F-12-13
1260	深鉢	開-I勝		I	33-F-2		キサツビク文、ベン先状刺突	赤褐色 二次焼成 32F-1
1261	深鉢	開-I勝		I	33-F-6		縦帯三角形区画、ベン先状刺突	赤褐色 二次焼成 34E-20
1262	深鉢	開-I勝			33-F-16			
1263	深鉢	開-I勝		I	33-F-6①		キサツビク文、ベン先状刺突	暗赤褐色 二次焼成
1264	深鉢	開-I勝			33-F-16			
1265	深鉢		A I?	33-F-1	口 24.0 底 13.8 高 25.4	4/5	口縫部2個の突起、口縫部にキザミ、太い縦帯垂下、縦帯上にキザミ、周文し	赤褐色 二次焼成オロヨグ 33F-6
1266	深鉢			33-F-1①			縦帯、ベン先状刺突	にぶい褐色 金銀母
1267	深鉢	盤-I b		33-F-2②	口 27.2		台形縫波次口縫、縦帯上にキザミ、縦帯にそつて複列の有筋沈縫	黒褐色 二次焼成 33F-7
1268	深鉢	盤-II a		33-F-1-1 底	口 17.0		口縫部突起、縦帯横円区画、区画にそつて連續刺突、周文R.L	後 二次焼成オロヨグ 33F-11
1269	深鉢	盤-VII	I	33-F-13	口 22.8		口縫部突起、沈縫部通続のキザミ	赤褐色 二次焼成オロヨグ 33F-7
1270	深鉢	盤-		33-F-16②			版縫状把手、縦帯脇に連續刺突、沈縫、周文L.R	にぶい褐色
1271	深鉢	盤-II a		33-F-3①	口 32.4		縦帯、爪形文、三叉文、周文R.L	灰褐色 二次焼成
1272	深鉢	盤-II b	I	33-F-8②	口 24.0		縫状突起、縦帯横円区画、Y字状縫帶、周文L.R	赤褐色 二次焼成 33F-12-13
1273	深鉢	盤-II a		33-F-1②	口 16.0		口縫部横状把手、縦帯横円区画、区画内沈縫、周文R.L	にぶい黃褐色 二次焼成
1274	深鉢			33-F-7	口 13.8		小突起、油焼キザミ、縫状沈縫	にぶい褐色 二次焼成 オロヨグ

4 遺 物

番号	器 様	分 類		出土地点 (レーベル) (m)	法 量 (cm)	遺存	文 種	色調・二次焼成・施 接合関係	
		系 列	器 形						
1275	深鉢	周-II n	F		33-F-1	□ 20.8	口縁部小突起、横平底起線文、縦帶上にキザ l	橙 二次焼成 24E-13	
1276	深鉢	周-W	D	II	33-F-8	□ 37.9	1/4	2本沈線(平底起線)によるクランク文様、 縄文R L、口縁部突起あり	にぶい橙 二次焼成 33F-6・7一括
1277	深鉢	周-I			33-F-11			縦溝形、縄文R L	にぶい橙 二次焼成 オコゲ 33F-12一括
1278	深鉢	周-II n	I	33-F-2②	□ 32.3		縦帶による瓶円区画、区画内にそって沈線、 三角印角、頭部沈線による瓶区画、縄文I R L	暗褐 二次焼成 33F-3・8一括	
1279	深鉢	周-IX	E?	33-F-1②	□ 32.0		口縁部無文、瓶状把手、頭部横伏腰带、縄文 L	にぶい橙 二次焼成 33F-6	
1280	深鉢	周-IX		33-F-2	□ 33.6		折返し口唇、頭部横伏腰带	明赤褐 二次焼成 33F-8	
1281	深鉢	周		33-F-13	□ 27.2		小袋状口縁、(鋸齒状)	にぶい赤褐 二次焼成	
1282	深鉢	周		33-F-9①	□ 32.4		縦伏状口縁、縄文R L	暗赤褐 二次焼成 33F-5	
1283	深鉢	周-I		33-F-8			太い沈線による文様、縄文R L	にぶい赤褐 二次焼成	
1284	深鉢	周-I		33-F-2	□ 30.2		口縁部無文、瓶部にへの字状沈線、縄文I	にぶい橙 二次焼成 33F-3	
1285	深鉢	周-II a		33-F-7	底 8.9		太い沈線による瓶区画、逆弧文、波状文	赤褐 二次焼成 33F-3・4	
1286	深鉢	周-I	D	33-F-2	底 7.8		縄文R L	明赤褐 二次焼成 オコゲ 33F-3	
1287	深鉢	周-I		33-F-12	底 9.6		縄文L R	赤褐 二次焼成-オコゲ	
1288	深鉢	周-I		33-F-9			縄文R L	赤褐 二次焼成-オコゲ	
1289	深鉢	周-II		33-F-12			沈線のみによる文様区画、縄文R L	にぶい赤褐 二次前底 オコゲ	
1290	深鉢	周-I		33-F-5			瓶部に太い縫帶、縄文R L	橙 二次焼成	
1291	深鉢	周-I		33-F-8	□ 23.4		縄文L	褐 二次焼成	
1292	深鉢	周-I		33-F-1	□ 20.3		縄文R L	黒褐 二次焼成	
1293	深鉢	周-I	D	33-F-3	□ 31.3		口縁部小突起1個、縄文R L	明赤褐 二次焼成 33F-8	
1294	深鉢	周-I	F	33-F-8		2/5	頭部平底起線、縄文R L	明赤褐 二次焼成 オコゲ 33F-7一括	
1295	深鉢	周-W	A	33-F-21	□ 20.0		縄文I	にぶい橙 二次焼成	
1296	深鉢	周-III	B	33-F-1	□ 33.0		口縁部円孔突起、縄文I R	にぶい橙 二次焼成	
1297	浅鉢		B	33-F-2	□ 44.4		口縁部V突起、無文帶横円区画	にぶい橙 二次焼成	
1298	深鉢	壁	B	33-F-9②	□ 49.4		口縁部玉抱き三叉文、基隆着済、平底起線 文	灰白 二次焼成	
1299	浅鉢	北	A	33-F-8②	□ 39.8		半径起線文、沈線部窪い、玉抱き三叉文、 縄文R L	明赤褐 二次焼成	
1300	浅鉢	北	A	33-F-7	□ 37.0		半径起線、爪形文、玉抱き三叉文	にぶい橙	
1301	浅鉢		A	33-F-7			半径起線文	にぶい橙 33F-9	
1302	浅鉢	北	A	33-F-12①	□ 47.2		基底帶陶輪、縦帶上にへの字状沈線、半径起 線、口縁部玉抱き三叉文	橙	
1303	浅鉢	北	A	33-F-1	□ 54.0		口縫部への字状沈線、半径起線文による横円 区画、沈線部に連続のキザ	にぶい褐	
1304	浅鉢	北	A	33-F-7	□ 42.0		半径起線文、爪形文、沈線にそってキザ、 縄文R L	橙	
1305	浅鉢			33-F-1	底 15.2		縄文R L、底部網代底	にぶい橙	

33-H

1306	深鉢		I	33-H-10			斜格子目文	橙
1307	深鉢			33-H-1①	□ 18.2		縄文L	にぶい橙 二次焼成
1308	深鉢	周-II		33-H-19①	□ 31.0		縦状突起、沈線方形区画、区画にそって有筋 沈線	灰褐 二次焼成
1309	浅鉢			33-H-10	□ 34.8		無文	にぶい橙

34-B

番号	跡種	分		出土地点 (レベル) (m)	法 (cm)	遺存	文 様	色調・二次焼成・他 接合関係
		系	列					
1310	陶鉢	北	A	34-B-20	口 32.0	半腰起線文、黒彩文、三叉文	褐	
1311	陶鉢			34-B-10	底 12.0	縦沈線及び刻文	明赤褐	

34-C

1312	陶鉢	縦-I		34-C-25		基部帶模様、縦帯にそって連続のキザミ	にぶい-褐 二次焼成 オコゲ
1313	陶鉢	縦-III b	I	34-C-20	口 33.0	断面輪廓状把手、縦状突起、縦帶による横円 区画、区画にそって連続刻文、縦帶状比較	浅黄褐色 二次焼成 34D-P16, 34E-23
1314	陶鉢	縦-II		34-C-20	口 22.8	口縁部三角起線、縦帯上のハハキ状沈線、基 部帶三角区画、半腰起線、沈線感なぞり、三 叉文	にぶい-褐
1315	陶鉢	縦-II a		34-C-15		縦帶横円区画、区画内への字状沈線、黒文し R	浅黄褐色
1316	陶鉢			34-C-20	底 15.2	縞文RL	褐

34-D

1317	陶鉢	縦-I	II	34-D-19	口 39.8	縦張状把手、基部帯渋毛、半腰起線	明赤褐
1318	陶鉢	縦-III a	I	34-D-20	口 21.4	太い縦帯、縦縫線條、縦張状把手、縞文(?)	にぶい-褐 二次焼成 オコゲ
1319	陶鉢	縦-III b	I	34-D-18	底 8.3	口縁部基部渋毛による横円、三角区画、玉跳き 三叉文、基部上にヤマイ、断面輪廓区画、三叉 文、半腰起線、沈線感なぞり	明赤褐 二次焼成 オコゲ
1320	陶鉢			34-D-25	口 30.4	口縁部突起把手、縦状把手、網状縦帶、縞文RL	褐
1321	陶鉢	縦-IV	II	34-D-15		縦帯純方形区画、半腰起線文、縞文RL	褐
1322	陶鉢	縦-I b	G	34-D-26	口 20.0	1/2 口縁小突起1個、口縁部輪廓横1字区画、区 画にそって高輪削例、断面基部帯渋毛、縦状 突起、縦張状把手、半腰起線文、沈線感なぞ り、三叉文、無文帯と残す	赤褐 二次焼成-オコゲ 45D-15, 30D-20
1323	陶鉢	縦-V	G	34-D-13	口 38.7	口縁部横状把手、太い縦帯三角区画、区画に そって半腰起線文、玉跳き三叉文、断面半横 区画	明赤褐 二次焼成
1324	陶鉢	開-I勝	I	34-D-13	底 7.5	キヤタビツ文、ベン先状三角削突	赤褐 二次焼成-オコゲ
1325	陶鉢	開-I河	I	34-D-19	口 27.0	2/5 縦帯横円区画、区画にそってハの字状刻突、 縦張無文、脚下半以下1字区画	赤褐 二次焼成-オコゲ
1326	陶鉢	開-I河	B	34-D-15	口 24.2	口縁部小突起、縦帯区画、縦帶上に圧痕	明赤褐 二次焼成 オコゲ
1327	陶鉢	縦-IV	G-a	34-D-4	口 32.0	口縁部横状把手、横円区画、区画内半腰起線 文、断面基部渋毛による横円、三角区画、半腰 起線文、縦張状把手、縞文RL(?)	灰白 二次焼成
1328	陶鉢	縦-II b		34-D-25		太い沈線による菱方形区画、縞文RL	にぶい-赤褐 二次焼成
1329	陶鉢	開-II		34-D-20	口 37.0	折返し口縁、口縁部正直、縞文RL	にぶい-黄褐色 二次焼成
1330	陶鉢	開-II a	I	34-D-18	口 36.4	沈痕による菱方形区画、縞文RL	明赤褐 二次焼成
1331	陶鉢	開-II b	I	34-D-25	口 38.4	断面三角縫合部分区画、縞文RL	にぶい-赤褐 二次焼成
1332	陶鉢	縦-I	A	34-D-15	口 18.6	2/5 口縁部小突起、縞文RL	赤褐 二次焼成 34D-10
1333	陶鉢			34-D-19		縞文(RL)、爪形文、沈痕	褐
1334	陶鉢			34-D-19	3/5	口縫部無文、縞文(L,R)、横沈縫2本	にぶい-褐
1335	陶鉢	縦-I		34-D-13		横状沈縫、羽吹縞文(RL, L,R)	赤褐 二次焼成
1336	陶鉢	縦-I		34-D-13		縦縫帶、沙漏、半腰起線突	明赤褐 二次焼成
1337	陶鉢	縦-I		34-D-18	口 32.8	口縫部把手、縞文L	にぶい-褐 二次焼成
1338	民鉢	開-I	B	34-D-25	口 35.2	幅広縫帶無文	褐
1339	陶鉢	北	A	34-D-20	口 37.6	爪形文、半腰起線文、三叉文	褐 34D-13+14
1340	陶鉢	北	A	34-D-13		爪形文、半腰起線文、三叉文	褐

4 遺物

番号	器種	分類			出土地点 (レーベル) (m)	高 (cm)	遺存	文 様	色調・二次焼成・堆 積関係
		系 列	器 形	時 期					
1341	浅鉢	北	A		34-D-14	底 14.0	半縫起線、爪彫文、圓文 R L、底部網代底	絆 34D-18-19	

34-E

1342	深鉢	縁一四 ?			34-E-7		陸帯三角区画、陸帶上にヤヂミ	絆
1343	深鉢				34-E-4	口 12.9	縄部に連帯(爪形刺突)、縦帶渦巻(縦帶上に ヤヂミ)、陆帶にそって沈線、有筋沈線	赤褐 二次焼成 オコゲ
1344	深鉢	縁一三 b	I?		34-E-3	口 18.4	縦帶突起、刺沈沈線、円形刺突	明褐 二次焼成 34E-2
1345	深鉢	縁一			34-E-2		底縫合、横縫状沈線、圓文 R L	赤褐 二次焼成 オコゲ 34E-6、33E-P 3 -8
1346	深鉢	縁一			34-E-24	口 31.0	交互焼りによる鋸歯状縫合、沈縫部にヤヂミ 圓文 R L	褐 二次焼成 34E-18-19
1347	深鉢	縁一 I	I		34-E-6		縦縫状把手、渦巻状縫合、縦帶にそって刺突 沈線、圓文 R L、爪形刺突	褐 二次焼成 34E-8-9-12-17
1348	深鉢	縁一			34-E-17	口 43.6	旋状 4 単位、半縫起縫による区画、圓文 R L	にぶい赤褐 二次焼成 34E-7-11-12
1349	深鉢	縁一			34-E-4	口 19.0	口縫形小突起、横沈線、強部延縫、圓文 R L	にぶい褐 二次焼成 オコゲ
1350	深鉢	縁一			34-E-9	口 28.5	波状口縫、圓文 R L	褐 二次焼成
1351	深鉢	縁一			34-E-6	口 29.4	圓文 R L	明褐 二次焼成 34D-20
1352	深鉢	縁一			34-E-16		波状口縫、口縫 S 字状把手、圓文 R L	明褐 二次焼成 34E-12
1353	深鉢	縁一游	I		34-E-20		ヤヂミビラ文、ベン先状刺突	明赤褐 二次焼成
1354	浅鉢		B		34-E-13	口 37.2	無文	絆 32F-25、34E-12-17
1355	浅鉢		B		34-E-12	口 37.6	無文	明褐
1356	浅鉢	北	A		34-E-6	口 34.6	半縫起縫、爪彫文、圓文 L	にぶい赤褐 34E-11-16
1357	浅鉢	北	A		34-E-1	口 38.0	半縫起縫文、爪彫文、三叉文	絆
1358	浅鉢		A		34-E-6	口 34.0	半縫起縫、連続刺突、無文	絆

34-F

1359	深鉢	縁一			34-F-17		2本沈縫による扁物、圓文 L R	赤褐 二次焼成-オコゲ
1360	深鉢	縁一			34-F-6	口 32.8	太い筋縫、沈縫、連続ヤヂミ	黄赤褐 34-G
1361	深鉢	縁一III b	I		34-G-19	口 19.6	陸帯横門区画、区画にそって刺突沈縫	淡褐 二次焼成 オコゲ 25F-29
1362	深鉢	縁一			34-G-24	口 33.8	憑添 L	褐 二次焼成
1363	深鉢	北	A		34-G-21①	口 39.0	爪彫文、半縫起縫文、三叉文、圓文 R L、下 部ケヌリ	淡赤褐 二次焼成 34G-22-括

35-D

1364	深鉢	縁-I b	G	II	35-D-23	口 31.0	口縫形突起、粗縫状把手、半縫起縫(沈縫部 など)、野呂基疊縫、半縫起縫、玉泡き三叉 文	にぶい赤褐 二次焼成 オコゲ 35D-18
1365	深鉢	縁-II b			35-D-14 下層	口 38.0	純把手手、陸帯横円区画、区画にそって沈縫、 沈縫部にヤヂミ	にぶい褐 二次焼成
1366	深鉢			I?	35-D-17	口 25.0	2列の刺突沈縫、この間に粗縫状沈縫	にぶい褐 二次焼成
1367	深鉢	縁一			35(14)下層	口 25.6	口縫形連続刺突による縫合沈縫、圓文 R L	赤褐 二次焼成

36-E

1368	浅鉢	北	A		36-E-5	口 40.0	半縫起縫文、三叉文	絆
------	----	---	---	--	--------	--------	-----------	---

36-G

番号	部 種	分 類			出土地点 (レベル) (m)	深 度 (m)	遺存	文 横	色調・二次施度・他 試合関係
		系 列	形 形	時 期					
1369	瓦器	北	A		36-G-2	口 41.4		平陰起線文、沈縁部なぞり、陸起線上に細かいキザく、三叉文	にぶい黄橙

37-F

1370	瓦器	既—I		II?	37-F-13			大い基底帯、クランク区画、平陰起線、沈縁 なぞり、美巣、三叉文	明褐 二次焼成 37F-1
------	----	-----	--	-----	---------	--	--	------------------------------------	------------------

B 石 器 類

発掘調査で得られた石器・自然礫等は、約400箱（箱サイズ約60×40×20cm）である¹⁾。これらの遺物は、まず石器（石器種・石製品・剥片類・石核等）と自然礫（焼石・炉石等の嵌入礫）に分けた。その結果、選別された石器は多種にわたり、各種別の出土数も極めて多い。これらの石器は一部の旧石器時代のものを除き、伴出した土器から縄文時代早期・前期後半・中期前葉・中期後葉・後期後半の所産と考えられる。さらに時期を限定しようとすれば、主体となる土器との関連から多くは中期前葉の石器であり、また検出遺構との関連から環状集落跡に廃棄された石器である。

本節では、調査区全体から出土した石器の多くをできるかぎり、遺構・出土地点・所属時期の区別なく提示し、分析を試みた。この過程で中期前葉の集落跡の石器様相およびこれ以外の時期の石器様相が明らかになるように努めた。

1) 資料提示の方法

資料提示については、おおむね「清水上遺跡」の石器（高橋ほか1990）と同様、出土石器一覧表・実測図・観察表・写真図版を用いた。

a 出土石器一覧表の記載

遺構別・地点別・器種別に出土数を記入した表である。

出土地点 遺構内出土石器類はそれぞれの遺構ごとに、遺構外出土石器類は基本的には小グリッドごとに処理した。確認調査で出土した石器類は、本調査の大グリッドに戻した。その他のピットは小グリッドの後にピット番号を付け、大型フ拉斯コ状土坑・小型フ拉斯コ状土坑・トラップピット・土坑・その他の遺構・風倒木痕は該当する小グリッドを備考欄に記入した。

遺構名の略号は次のとおりである。

住一住居跡 大FP一大型フ拉斯コ状土坑 小FP一小型フ拉斯コ状土坑

TP一トラップピット P一ピット 風一風倒木痕

器種名 従来より一般的な石器や定形的な石器は、従来から呼称されている器種名を付けた。剥片石器で不定形な石器は「不定形石器」とした。これ以外で分類できない石器は、石器の特徴を考慮した名称、または「分類不明石器」「分類不明石製品」とした。

出土点数 基本的には完形品・略完形品・破損品・破片²⁾の別を問わず、1個を1点として数えた。未成品は（ ）内に数を記入し、完成品と区別した。破損品・破片が接合した場合は、同一出土地点（同一遺構内または同一小グリッド内）では接合後のものを1点とし、これ以外ではそれぞれの出土地点で1点ずつ数を記入した。遺構が重複する場合は、基本的にはどちらか片方の遺構に数を記入し³⁾、備考欄に重複遺構名を示した。転用品については、転用後の器種に入れた。

b 実測図の表示方法

実測図は個々の石器の諸特徴を図化したものである。出土石器の図化数と図化率は表8のとおりである。

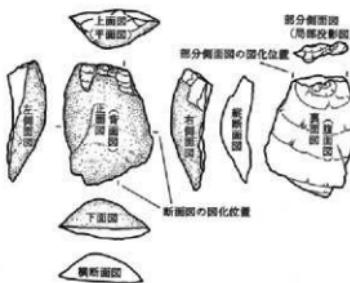
- 1) この他に大型で持ち運びにやや困難な自然礫が、約1450個出土した。発掘調査時に自然礫と判断のうえ、出土地点・石材・重量を記録し廃棄した。なお出土石器一覧表の自然礫類の欄には数が含まれている。
- 2) 完形品・略完形品・破損品・破片の区別は「c 観察表の記載」でふれる。
- 3) 住居跡同士の重複で新旧関係が不明確な場合は「○住・○住重複部分」という遺構名に数を記入した。

実測図の図法 第12図のとおり実測図法は、機械製図に用いられる正投影画法の正視画法（大脇1988）による正面（背面）・裏面（腹面）・上面（平面）・下面・左侧面・右侧面の6面、傾斜部分を斜めに描いた側面図（補助投影図）、必要部分のみ取り出した部分側面図（局部投影図）、縦断面図・横断面等の断面図、これらいくつかを組み合わせ1つの実測図とした。

縮尺率 表9のように器種ごとに統一した。なお、図版にはスケールを付け、縮尺も記入した。

表現方法 線描や点描のほかに、記号・文字・スクリーントーンを使用した。表現例は下記のようになり、具体的な例は第13図のとおりである。

- 外形線・剝離線・リング・フィッシャー・破線・打面と主要剝離面との境界線・破損線・推定線等は線の太さを変えた。
- 同一の剝離が二面以上に表現される場合（例えば剝片石器の二次加工が正面図と側面図に描かれている場合など）は、適宜どちらか一方の面のリング・フィッシャー・剝離線等を省略した。
- 新しい破損や剝離（例えば耕作や発掘調査時以降の破損や剝離）については、リング・フィッシャーを入れていない。
- リング・フィッシャーは、風化状態や石質により若干強弱をつけた。
- 自然面は石質にかかわらず、ほぼ同じような点描の表現で統一した。節理面についても同様に斜破線で統一した。
- 黒色付着物については黒く塗り潰した。
- 使用痕の範囲は、基本的にその範囲にスクリーントーンを貼ったが、縁辺のみに認められる石器は、外形線の外側にスクリーントーンを貼った。
- 使用痕及び使用痕と考えられる痕跡については基本的に同一スクリーントーンを用いたが、下記の石器については別の表現にした。



第12図 実測図法の模式図

表8 出土石器の図化数量と図化率

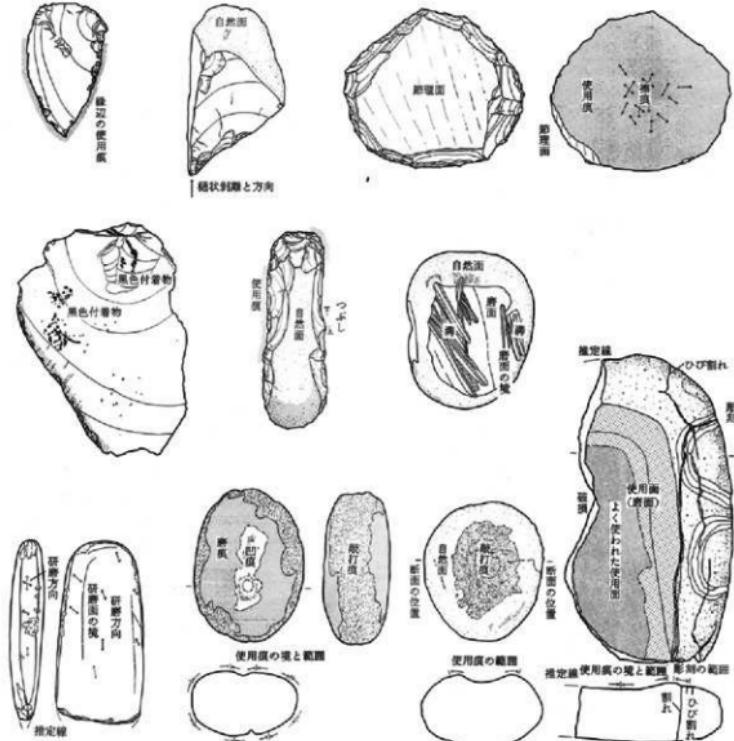
器種名	石 器 種 類	石 器 種 類	不 定 形 石 器	三 脚 石 器	板 状 石 器	打 磨 石 器	磨 擦 石 器	磨 擦 石 器	石 灰 器	台 石 器	三 角 形 石 器	石 頭 器	尖 頭 器	分 類 不 明 石 器	玉 類	加 工 の あ る 滑 石 片	分 類 不 明 石 器	石 核	剥 片 類	板 状 石 器 の 資 材	合 計				
出土数	22	68	21	17	2,082	3	1,036	87 (10)	27	1,027	56	30	31	8	6	1	4	4	6	5	355	11,481	56	21,048 (25)	
実測数	15	24	17	25	177	3	63	114	27	15	98	30	20	5	5	4	1	3	4	4	4	48	21	50 (40)	
図化率(%)	71.7 (22)	35.3	57.2	36.2	8.2	100.0	6.0	12.9	23	19.5	7.1	53.6	8.3	18.7	100.0	65.6	80.0	75.0	100	66.6	38.0	12.5	2.2	4.1	1.7 (11.0)

表9 各器種の縮尺率

器 種 名	石 器 種 類	石 器 種 類	不 定 形 石 器 種 類	三 脚 石 器 種 類	板 状 石 器 種 類	打 磨 石 器 種 類	磨 擦 石 器 種 類	磨 擦 石 器 種 類	石 灰 器 種 類	台 石 器 種 類	三 角 形 石 器 種 類	石 頭 器 種 類	尖 頭 器 種 類	分 類 不 明 石 器 種 類	玉 類 種 類	加 工 の あ る 滑 石 片 種 類	分 類 不 明 石 器 種 類	石 核 種 類	剥 片 種 類	板 状 石 器 の 資 材 種 類		
縮尺率	2/3	1/2	1/2	1/2	1/2	1/2	1/3	1/3	1/4	1/5	1/4	1/5	1/4	1/3	1/3	1/2	1/3	1/2	1/3	1/2	1/3	1/3

4 遺物

- 磨石類・石皿・砥石・台石に認められる敲打痕は別のスクリーントーンを貼った。
- 磨石類の凹痕は線・点描である。
- 砥石の磨面・溝は線描で表現し、スクリーントーンを貼っていない。
- 石皿の磨面はよく使用されている部分とそうでない部分では、スクリーントーンに濃淡をつけた。
- 磨石類・石皿・砥石・台石の断面図の ←→ は、それぞれの使用痕の範囲である。
- 板状石器の ←→ は擦痕の方向である。
- 不定形石器D類の → → は穂状剥離の位置と方向である。
- 磨製石斧・石製品の ← → は研磨方向である。
- 打製石斧の ← → は「ツブシ」の範囲である。



第13図 実測図の主な表現例

c 観察表の記載

観察表は石器の諸特徴などを記入した表で、実測図の下に付けた。したがって、図版は実測図と観察表でセットになる。実測図を示していない石器の観察表は、本報告書に掲載していないが、データは県教育委員会に保管してある。観察表の主な項目は下記のとおりであり、各器種固有の観察項目は「2) 出土石器類の分類と分析」で説明する。

図No 実測図の番号で通し番号を付けた。実測図番号・観察表図No・写真図版の遺物番号は一致する。

出土地点・層位 出土石器一覧表の出土地点と同じである。出土層位の分かれる石器は、出土地点の後に記入した。

分類 器種ごとに細分類した分類記号である。細分類の説明は「2) 出土石器の分類と分析」で記述する。

法量 第15回参照。器種ごとに石器の正裏面・上下の並べ方及び計測基準を設定し、計測値を記入した。長さは最大長、幅は最大幅、厚さは最大厚、重さは現存値である。破損品・破片の場合は、現存値に()をつけた器種もある。

石材 石材鑑定では、新潟県立教育センター地学研究室の村松俊雄氏(現県立新潟東高校)、河内一男氏に御教授を頂き、石材認定を行った。使われた石材のうち、下記の石材は表記を改めた。

○古銅輝石安山岩(サヌカイトに近似するもの)は「黒色輝石安山岩」、これ以外の安山岩は「安山岩」とした。

○青白珪石は「チャート」、赤白珪石・鉄石英は「鉄石英」とした。

○剝片石器の90%以上は頁岩系である。このため、明確には分けられないが、それぞれの異なった性質から、表10のように6種類の石材に分けた。なお、堆積岩ではこれ以外に、硬砂岩・砂岩・礫岩・凝灰岩・チャート・鉄石英を使用した。

遺存状態 完形品・略完形品・破損品・破片の区別は次のとおりである。なお、破損品は破損部位や破損の仕方を記入した器種もある。石皿・砥石・台石・磨石類のように遺存の割合を分数で記入したものもある。

○完形品は完全な形で法量が計測できるものである。

○略完形品はわずかに欠損しているが、完形時の形とあまり変わらず、法量も完形品とはほとんど変わらないものである。

表10 頁岩系の各石材の主な特徴(一般的な性質を表す)

石材名	表面の色調	内部の色調	風化状態	珪質化	硬さ・緻密さ	層理・節理	剥離	備考
頁岩 I	灰・灰黄・灰白	暗灰・黒	著しい	未発達	硬質頁岩・珪質頁岩に比べ軟質	——	亜貝殻状	滑水による 漂動では「黒色 頁岩」とした
頁岩 II	灰・灰黄・灰白	暗灰・黒	やや著しい	未発達	硬質頁岩・珪質頁岩よりやや軟質	——	亜貝殻状・貝殻状	
硬質頁岩	褐・黒褐・黒青灰・灰	表面よりやや薄い	少し風化	やや発達	硬く・緻密	——	貝殻状が著しい	滑水による 漂動では「頁岩」とした
珪質頁岩	褐・黑褐・墨青灰・灰	表面と同じ 表面よりやや薄い	ほとんど風化せず	発達著しい、光沢	硬く・緻密	——	貝殻状が著しい	
粘板岩	灰・灰灰	暗灰・黒	少し風化	未発達	硬い	やや発達	亜貝殻状・板状・階段状	
泥板岩	淡灰・淡褐・褐 暗灰・黑褐	表面よりやや薄い	やや著しい、 少し風化	未発達	硬質頁岩・珪質頁岩に比べやや軟質	極めて発達、薄くはがれる	板状・階段状 亜貝殻状	

4 遺 物

○破損品は完形時の形がある程度想定できるが、法量は完形品と大きく異なるものである。

○破片は器種のみ特定できる程度のものである。

素材 剣片石器は第14図のとおり、主要剣離面の打点から遠位端の長さ(a)とこれに直交する最大幅(b)を比べ、aがbより大きい場合は縦長剣片、aがbより小さい場合は横長剣片とした。打点が除去されても明らかに区別できるものはそのまま記入し、ある程度区別が推定できるものは()をついた。打製石斧については側縁側に打点があったと考えられるものは横長剣片、刃縁または基端側に打点があったと考えられるものは縦長剣片とした。また、両極剣離痕のある剣片は両極剣片、自然面を多く残した礫素材と考えられるものは礫、自然面を残さなくとも剣片とは考えられないものを石核素材とした。

自然面 自然面の有無を記入し、さらに自然面のある部位名称を記入した器種もある。

使用痕 剣片石器の使用痕については、次の5種類に分け記入した。1つの石器に多くの種類の使用痕が認められる場合は顕著な使用痕を記入したものもある。

○線状痕 石器の表面に観察される線条のキズ。

○光沢痕 石器の表面や縁辺が研磨されたように光沢を帯びるもの。

○磨耗痕 石器の表面や縁辺が滑らかになったもの。光沢を帯びない。

○つぶれ 石器の表面や縁辺が敲打されたようにザラザラしているもの。

○微細剣離痕 石器の縁辺に残された刃こぼれ状の極めて小さな剣離痕。

欠損(例えば打製石斧や磨製石斧の折れ)も使用の結果と推定されるが、遺存状態の項目でふれることから使用痕として記入していない。使用痕で器種認定されている石器(磨石・石皿・砥石・台石等)も同様である。

備考 観察項目にないもので、下記の事柄や特に必要と思われる事柄を記入した。

○黒色付着物 化学的分析をしていないため全て黒色付着物とした。肉眼で観察する限りアスファルト状のものが付着している石器は存在しない。

○被熱 表面の赤変・黒変・煤の付着・熱によるはじけや剝落から判断した。

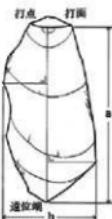
○風化状態 風化の激しい石器を中心に記述した。

○折断 不定期形石器を中心に縁辺が折り断ったようになっているものを折断とした。

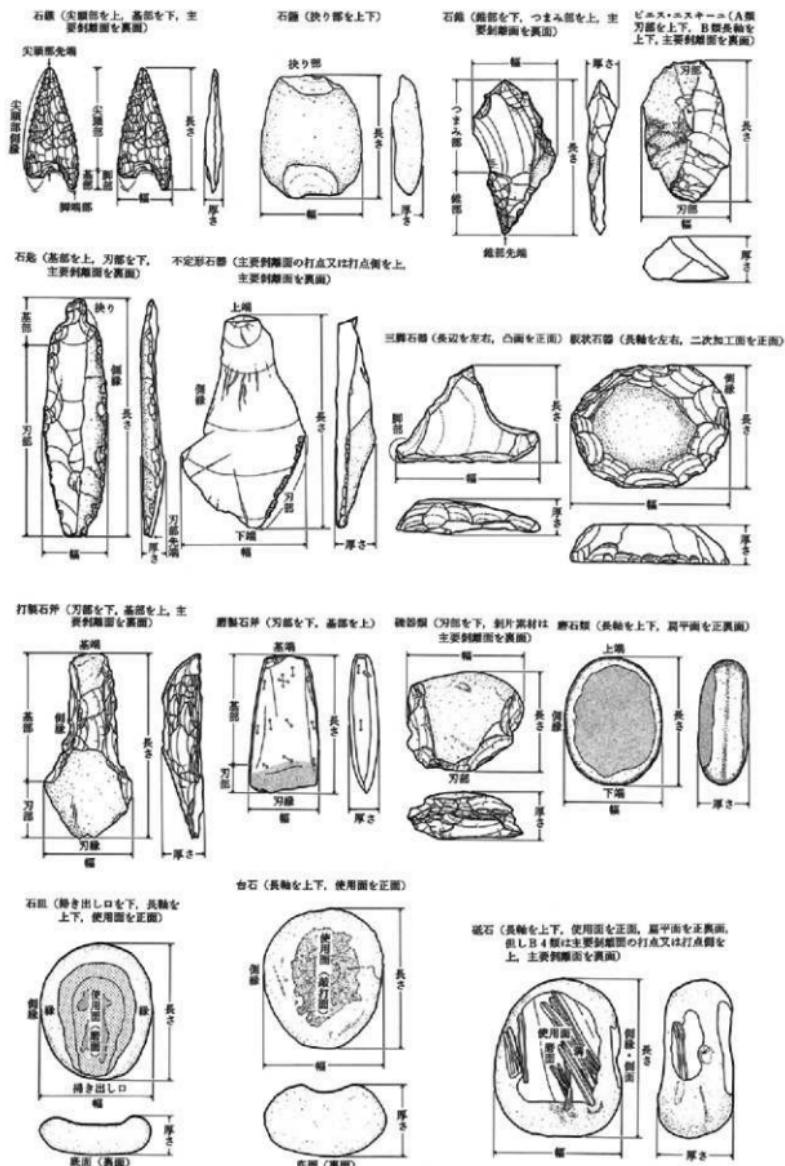
その他 各器種の部位名称については第15図のとおり、統一するように努めた。なお、観察項目の空欄は不明または観察不可能である。

d 写真図版

実測図で示した石器は、実測図と同じ順番、同じ縮尺で基本的に正面・裏面の写真を提示した。



第14図 素材の計測部位と名称



第15図 主な器種の並べ方及び部位名称と計測基準

2) 石器類の分類と分析

石器類は、まず石器と自然礫類に大きく分けた。自然礫類は集石・配石・焼石・柱穴の根固め石等や意味を見出せない搬入砾である。さらに石器は、生産・生活用具に使用されたと考えられる狭義の石器（以下「石器種」という）、精神生活に関わるものや宗教的性格を持つと考えられる石製品、剝片石器の素材になった剝片や二次加工の際に生じた剝片などの剝片類、剝片生産の素材となる石核、石材からすぐに区別のつく板状石器の素材に分けた。これらの内訳及び石器種・石製品の器種別出土数は、表11のようになるが発掘調査時の出土数（以下「総数」という）と整理作業で接合したため実際の数（以下「実数」という）がある。

以下、石器器種・石製品について器種ごとに分類と分析を加え、次いで石核・剝片類・板状石器の素材・自然種類の順に説明する。

a 石鐵 (1~20)

22点出土し、石器器種の中では0.4%と低い比率である。このほか未成品と考えられるものが18点出土している。

分類 表12参照。まず基部の形状・^{なかご}中茎の有無で2分した。

A類 基部が凹状で、中茎が無いもの。いわゆる凹基無茎鐵である。A類は長さと幅の比率からさらに2分できる。

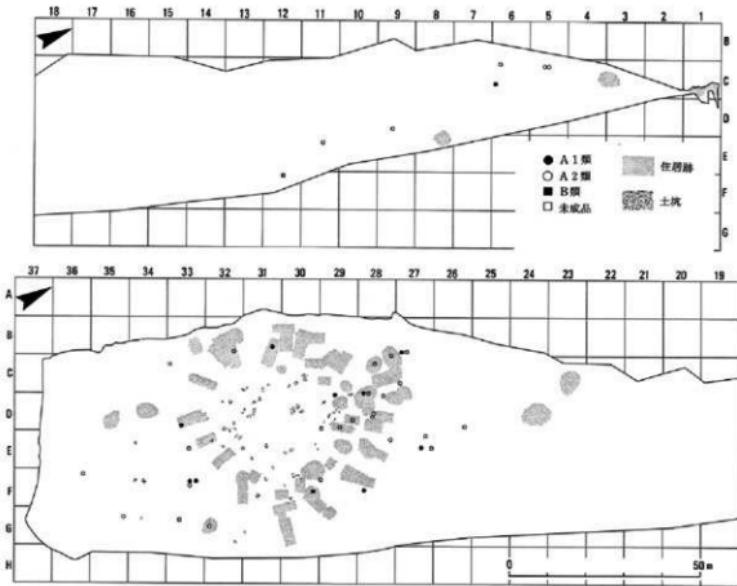
A1類 長さが幅の1.6倍以上のもの。(1~7)

表11 石器類の器種別数量

() 内は未成品の数。百分率は未成品を除く石器器種実数で求めた。遺存状態の区別できないものは合計のみ数を記入した。

表12 石炭分類表

基部の形状・ ^上 中茎の有無	長さと幅の比率	分類	
A類 基部が凹状 中茎が無い	1類 長さが幅の1.6倍以上	A 1類	
	2類 長さが幅の1.6倍未満	A 2類	
B類 基部が凹状 中茎が有る	_____	B類	



第16図 石器出土分布図

遺構別 分類	住居跡	遺構外	合計	石材 分類	凝灰岩	鉄石英	メノウ	黒色顕微 安山岩	真岩I	真岩II	褐色頁岩	社質頁岩	黒耀石	合計	
A 1類	4	6	10	A 1類	1		1	2	1	3	1	1		10	
A 2類	3	8	11	A 2類	1	1	2				4	1	2	11	
B 類		1	1	B 類							1			1	
合計	7	15	22	合計	2	1	3	2	1	3	6	2	2	22	
未成品	4	14	18	未成品			1				4	11		2	18

表14 石器石材表

表13 石器分類別出土数

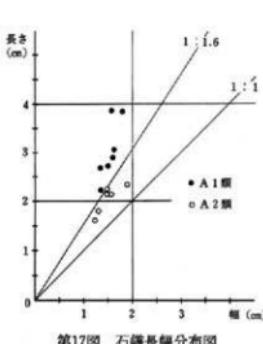
A 2類 長さが幅の1.6倍未満のもの。(8~15)

B 類 基部が凹型で、中茎のあるもの。いわゆる凹基有茎器である。(16)

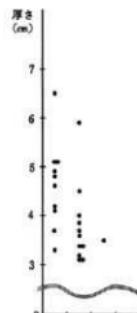
分類別出土数と出土分布状況 表13・第16図参照。22点のうち、遺構内7点(32%)・遺構外15点(68%)で、遺構内のものは全て住居跡からの出土である。分類別ではA 1類10点(45%)・A 2類11点(50%)・B 類1点(5%)で、A類(凹基無茎器)が21点(95%)を占める。

個々の遺構・小グリッドごとでは、33-F-12グリッドで2点出土する以外単独出土である。調査区全体での出土分布状況は、多くは環状集落及びその外側からの出土であるが、分類別で若干異なる。A 1類は環状集落及びその外側にすべて分布し、A 2類の2点とB 類は調査区北東側より出土する。B 類は形状・出土地点から中期前半以外の時期に所属するものと考えられる。なお、未成品は28~29-Dグリッドにやや多いほかは調査区に散在する。

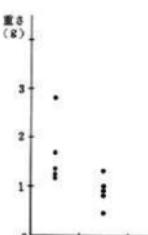
長さと幅 第17図参照。資料数が少ないため、長さと幅の計測できた13点を対象とする。A 1類・A 2



第17図 石様長幅分布図



第18図 石様厚さ分布図



第19図 石様重量分布図

類ともに幅11~19mmに分布するが、長さではA 1類が22~39mm、A 2類では27~24mmに分布する。長さの違いは、分類基準に長さと幅の比率（以下、「長幅比」という）を求めたためである。

厚さ 第18図参照。破損品であっても、すべて完形時の厚さと推定されるため、22点の全点を対象とする。3mm~5mmにはほとんど分布するが、A 1類がA 2類よりやや厚い傾向にある。

重さ 第19図参照。完形品・略完形品の10点を対象とする。分類基準の長幅比や厚さを反映しA 1類は1.2~2.8gと重く、A 2類は0.5~1.7gと軽い。

石材 表14参照。他器種に比べ出土数が少ない割りに多種類の石材を使用している。いずれも硬質で緻密な石材である。頁岩系（頁岩I・頁岩II・硬質頁岩・珪質頁岩）がやや多く12点（55%）、搬入石材と考えられる鉄石英1点（5%）・黒色緻密安山岩2点（9%）・黒耀石2点（9%）・メノウ3点（14%）は少ない。頁岩系以外の石材は、他器種ではほとんど使用されていない。

素材 素材の区別できたもの、または推定されるものは8点で、縦長剝片3点（A 1類2点・A 2類1点）、横長剝片5点（A 1類4点・A 2類1点）である。

遺存状態 完形品・略完形品10点（45%）、破損品12点（55%）でほぼ同数である。破損品の内訳は脚部の片方が欠損したものの7点（A 1類3点・A 2類4点）、尖頭部先端が欠損したものの4点（A 1類2点・A 2類2点）、尖頭部先端と中茎の欠損したものの1点（B類）である。

二次加工 周縁から施される二次加工が相対的に見て深いか浅いかを観察した。言い換えれば一般的に前者はていねいなつくり、後者は粗雑なつくりである。深いもの12点（A 1類2点・A 2類9点・B類）、浅いもの9点（A 1類7点・A 2類2点）、判断しかねるもの1点（A 1類）で、A 2類がていねいなつくりのものが多い。

その他 尖頭部側縁の形状について、多くは弧状に広がるが、2・8・12のように直線状に広がるもののが4点（A 1類2点・A 2類2点）存在する。また、1・4・9・16のように鋸歯状を呈するものが5点（A 1類2点・A 2類2点・B類）認められる。

b) 石錐 (21~44)

剝片の尖頭状の端部に両側縁から中・小型剝離の二次加工が施された石器、または尖頭状の端部が磨耗している石器を石錐とした。平面形は不定形状を示すのが多く、不定形石器D類に近似するが、二次加工や使用痕のあり方において明らかに異なる。また、素材も石錐の方が小型の剝片が多い。総数68点出土し、石器器種の中では1.1%の比率である。

分類 表15参照。まず二次加工と素材により4分し、さらにA類・B類は錐部からつまみ部の形状により、それぞれ2つに細分した。

A類 縦長剝片を使用し、粗雑な二次加工が錐部付近に集中するもの。

A 1類 錐部からつまみ部にかけて大きく広がり、太身のもの。(21~24)

A 2類 錐部からつまみ部にかけて次第に広がり、やや細身のもの。(25~28)

B類 橫長剝片を使用し、粗雑な二次加工が錐部付近に集中するもの。

B 1類 錐部からつまみ部にかけて大きく広がり、太身のもの。(29~34)

B 2類 錐部からつまみ部にかけて次第に広がり、やや細身のもの。(35~40)

C類 ていねいな二次加工がつまみ部までの広範囲におよぶもの。(41~43)

D類 つまみ部と錐部の間に抉りをつくるもの。(44)

A類・B類は素材が異なるだけで、錐部のつくりなどは基本的に同様であり、C類・D類とは区別される。なお、A 2類には角柱状の剝片が含まれ、D類は特殊な石錐といえる。

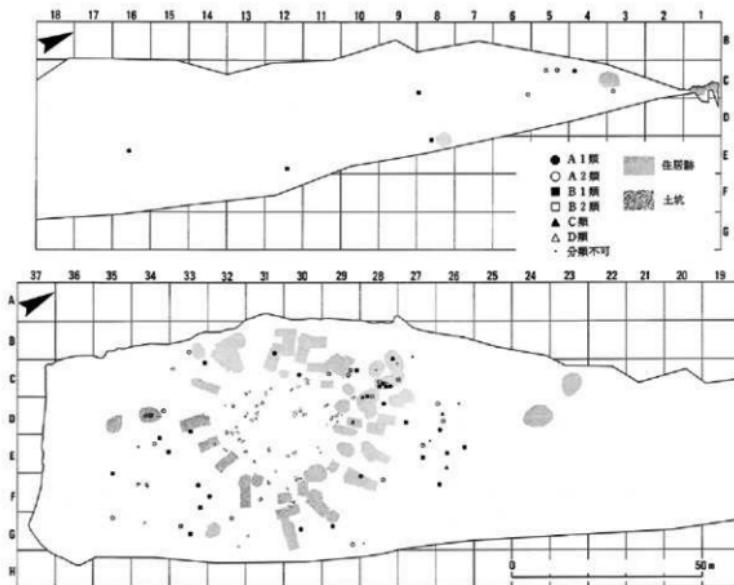
分類別出土数と出土分布状況 表16・第20回参照。68点のうち、遺構内19点(28%)、遺構外49点(72%)で、遺構内のものは1点を除き住居跡からの出土である。

分類別では、B 1類21点(31%)が多く、以下A 1類・A 2類・B 2類がそれぞれ12点(18%)であり、A類・B類で84%を占める。分類不可7点(10%)も素材が不明なだけで、錐部のつくりはA類・B類と同じ。C類3点(4%)・D類1点(1%)は極めて少ない。つまり出土した石錐のほとんどは錐部のつくりが粗雑であることが特徴である。

個々の遺構・小グリッドごとでは、7 A住居跡2点(A 1類1点・分類不可1点)、7 C住居跡4点(A 2類1点・B 1類2点・分類不可1点)、7 住居跡2点(A 1類)、8 A住居跡3点(B 1類・B 2類・C類各1点)、

表15 石錐分類表

二 次 加 工	素 材	錐部からつまみ部にかけての形状	分 類
粗雑な二次加工が錐部付近に集中する	A類 縦長剝片	1類 大きく広がる (太身のもの)	A 1類
		2類 次第に広がる (細身のもの)	A 2類
	B類 横長剝片	1類 大きく広がる (太身のもの)	B 1類
		次第に広がる (細身のもの)	B 2類
	C類 ていねいな二次加工 がつまみ部までの広 範囲におよぶ	——	C類
D類 つまみ部と錐部の間 に抉りをつくる	——	——	D類



第20図 石錐出土分布図

遺構別 分類	住居跡	小型 フラスコ 状土坑	遺構外	合計
A 1 類	4		8	12
A 2 類	1	1	10	12
B 1 類	4		17	21
B 2 類	4		8	12
C 類	1		2	3
D 類	1			1
分類不可	3		4	7
合計	18	1	49	68

表16 石錐分類別出土数

石材 分類	鉄石英	硬砂岩	頁岩 I	頁岩 II	硬質頁岩	混質頁岩	黒耀石	合計
A 1 類	1				5	4	2	12
A 2 類		1			4	5	2	12
B 1 類		1	3	12	5			21
B 2 類		1	1	6	3	1		12
C 類					1	1	1	3
D 類							1	1
分類不可				1	4	2		7
合計	1	3	5	22	20	6	1	68

表17 石錐石材表

33住居跡2点(B2類)出土するが特殊な出土状況を示すものはない。これ以外は単独出土である。

調査区全体での出土分布状況は、各類ともほとんどが環状集落跡およびその外側からの出土であり、中でも北東側と南側に集中する傾向が見られる。これ以外は散在する程度である。

長さと幅 第21図参照。分類不可以以外の完形品48点を対象とする。A1類は長さ3.5~7.5cm・幅3.0~5.5cm、A2類は長さ4.0~7.5cm・幅2.0~3.5cm、B1類は長さ3.5~8.0cm・幅3.5~7.5cm、B2類は長さ3.0~6.0cm・幅1.0~3.5cmにやや多く分布する。分類基準を反映し、1類は幅が狭く、2類は広い。A類とB類ではB類が長さ・幅ともに大きく、分布域はA類をほぼ包含し、B類はA類に比べ大型の剝片を使用している。

厚さ 第22図参照。A類からD類までの厚さの計測できた61点を対象とする。全体的に見ると0.6~1.6

cmに集中するが、B1類はこれより厚いものが多くある。また、A2類・B2類は厚さ1.0cm以下の薄手のものが少なからず認められる。

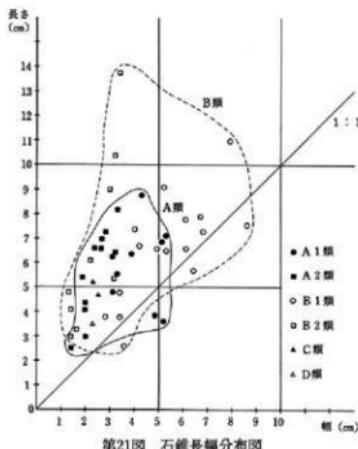
重さ 第23図参照。完形品54点を対象とする。全体的に見ると5~20gと30~55gにかけてやや多く分布し、20~30gにかけては希薄である。各分類を比較すると長さ・幅・厚さを反映し、1類が2類より重い傾向にあり、C類・D類・分類不可は10g以下で軽い。

石材 表17参照。各分類とも硬質で緻密な石材を使用している。D類以外はほぼ同様な石材選択の傾向が見られる。頁岩系(頁岩I 5点・頁岩II 32点・硬質頁岩20点・珪質頁岩6点)63点(93%)が極めて多い。他地域からの撤入石材と推定される鉄石英・黒耀岩は各1点で少ない。

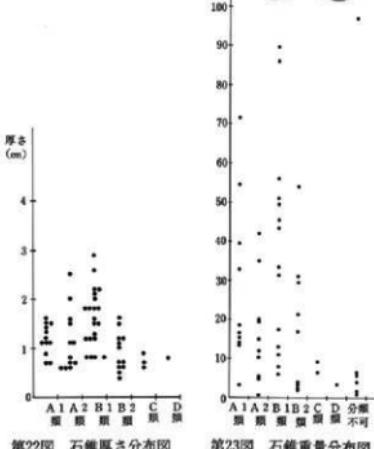
素材 素材の形状を分類基準にしたため、A類とB類では素材は区別される。全体的に見ると縦長剝片25点(37%)、横長剝片35点(51%)、不明8点(12%)で、横長剝片が多い。

遺存状態 破損品14点のうち、錐部を欠損したもの10点、つまみ部の一部を欠損したもの2点、両方欠損したもの2点である。錐部を欠損したものの多く、そのほとんどが先端のみを欠損したものである。石錐の形状・機能から当然の結果である。43は欠損後も使用され、欠損面も磨耗している。

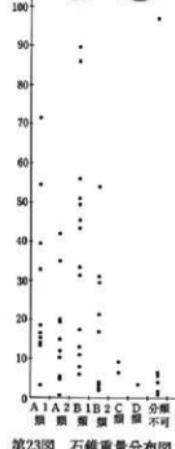
錐部断面形 表18参照。完形品は錐部先端から5mmの断面、破損品は欠損面の断面を観察し、三角形・菱形・台形の3つに分けた。断面三角形37点(52%)が多い。なお、22のように錐部を2ヶ所に持つ石器がA1類で2点・A2類で1点認められた。



第21図 石錐長幅分布図



第22図 石錐厚さ分布図



第23図 石錐重量分布図

表18 石錐鎌部断面形表

断面形 分類	三角形	菱形	合形	合計
A 1 類	7	4	3	14
A 2 類	4	5	4	13
B 1 類	15	1	5	21
B 2 類	6	4	2	12
C 類	0	2	1	3
D 類	0	0	1	1
分類不可	5	2	9	7
合計	37	18	16	71

表19 石錐使用痕表

種別 分類	磨耗	光沢	微細削離	擦長・光沢	矛状擦離	つぶれ	合計
A 1 類	2	1	2	1			6
A 2 類	3			2			5
B 1 類	1		1		1		3
B 2 類	2		1				3
C 類	1						1
D 類	1						1
分類不可	1					1	2
合計	11	1	4	3	1	1	21

使用痕 表19参照。肉眼による観察のため必ずしも正確ではないが、68点のうち21点に使用痕が認められた。全て錐部先端またはつまみ部までの両側縁に残るものである。A類のはうがB類より多く、約半数に使用痕が認められる。使用痕の種別では、磨耗及び擦耗に伴う光沢16点(76%)が多い。使用部分・使用痕の種別から石錐は回転穿孔のために使用されたものと推定される。

折断 折断の認められるものは9点(13%)(A 1類1点、A 2類・B 1類・B 2類・分類不可各2点)あり、全て片側縁に施されている。素材獲得後の中形及び二次加工の一部として、折断が行なわれたと推定される。

c) 石匙(46~56)

「つまみ状の突起を一端に付け、鋭い刃を持った打製石器」(坪井1959)を石匙とした。総数21点出土し、石器器種の中では0.3%の比率を占める。

分類 表20参照。つまみ部と刃部の関係から3分した。

A類 つまみ部に対し刃部が縱に長いもの。いわゆる縦型石匙である。(45~50)

B類 つまみ部に対し刃部が横に長いもの。いわゆる横型石匙である。(51~55)

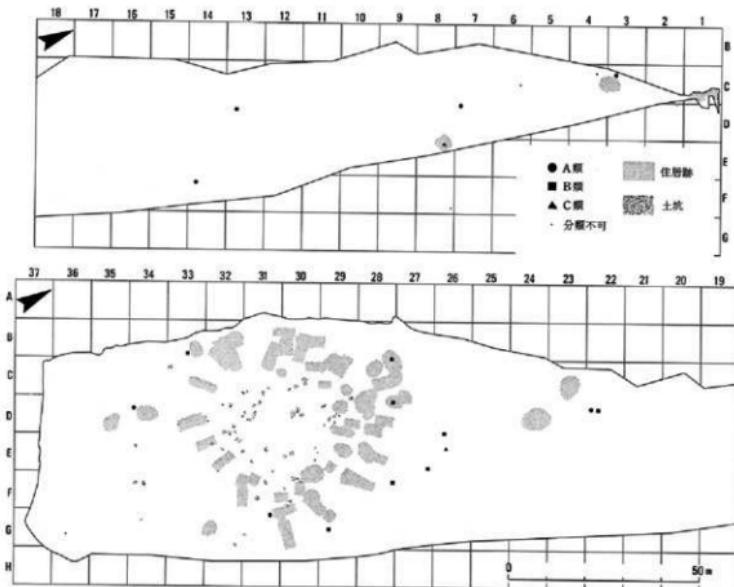
C類 つまみ部に対し刃部が斜め方向のもの。いわゆる斜刃型石匙である。(56)

46・47・49・50はA類に含めたが刃部はやや斜め方向であり、54もB類に含めたが同様である。

分類別出土数と出土分布状況 第24図・表21参照。21点のうち、遺構内6点(29%)、遺構外15点(71%)で、資料数は少ないが遺構内のものは必ずしも住居跡に集中しない。分類別ではA類8点(38%)、B類7点(33%)ではほぼ同数である。C類2点(10%)は少ない。個々の遺構・小グリッドごとでは、22-D-17-ピット1で2点出土(45・55)し、これ以外は単独出土である。22-D-17-ピット1は径約1.3m・深さ25cmを測り、ほぼ円形である。底面は平らで、壁は急斜に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。石匙2点は遺構内中央部の礫直上に置かれていた。礫は長さ約30cm、幅約20cm、厚さ約10cmの扁平砾で覆土中層に存在した。遺物の出土状況より石匙は礫上に置かれたと推定される。また、石匙の形状より縄文時代前期と考えられるが、断定できない。

表20 石匙分類表

つまみ部と刃部の関係	分類		A類	B類	C類
刃部が縱に長い(縦型)	A類				
刃部が横に長い(横型)	B類				
刃部が斜め方向(斜刃型)	C類				



第24図 石匙出土分布図

遺物別 分類	住居跡	小型 プラスチック 土坑	その他の ビット	遺物外	合計
A類	1	1	1	5	8
B類	1		1	5	7
C類	1			1	2
分類不可				4	4
合計	3	1	2	15	21

表21 石匙分類別出土数

石材 分類	真岩 I	真岩 II	硬質真岩	軟質真岩	合計
A類	2	3	3		8
B類	1	3	2	1	7
C類		1	1		2
分類不可	1	2	1		4
合計	4	9	7	1	21

表22 石匙石材表

素材 分類	縦長剥片	横長剥片	合計
A類	6	2	8
B類		7	7
C類	1	1	2
分類不可	2	2	4
合計	9	12	21

表23 石匙素材表

調査区全体の出土分布状況では、3～8列グリッド、26～28列グリッドにやや分布する以外、希薄に散在する。

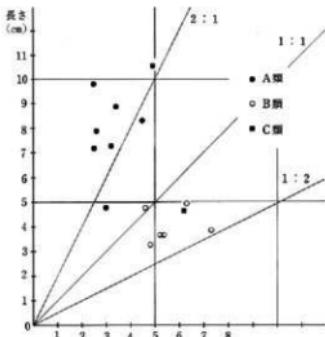
長さと幅 第25図参照。完形品・略完形品の15点を対象とする。分類基準を反映し、A類長さ7～10cm・幅2.5～3.5cm、B類長さ3.0～5.0cm・幅4.5cm～7.5cmにはば分布する。

厚さ 第26図参照。完形品・略完形品の15点を対象とする。各分類とも約0.5～1.0cmに多く分布し、分類別の違いは認められない。

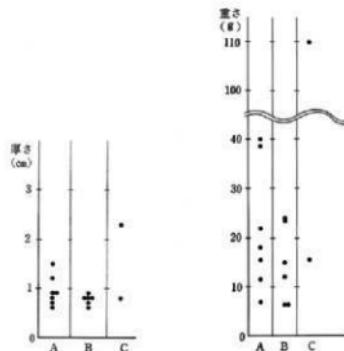
重さ 第27図参照。完形品・略完形品の15点を対象とする。A類・B類ともに5～25gにほとんど分布し、分類別の違いは認められない。

石材 表22参照。各分類とも全て真岩系で占められ、その中でも真岩II 9点(43%)・硬質真岩 7点(33%)が多い。

素材 表23参照。分類基準の形状を反映し、A類は8点のうち6点が縦長剥片、B類は全て横長剥片で



第25図 石匙長幅分布図



第26図 石匙厚さ分布図

第27図 石匙重量分布図

大きく異なる。C類・分類不可はどちらとも言えない。なお、21点のうち、14点がつまみ部に打点があると推定される。

遺存状態 破損品 6点のうち、刃部を欠損したものの 5点、つまみ部を欠損したものの 1点である。

使用痕 21点のうち、9点に使用痕が認められた。全て刃部に認められたものである。このうち 1点はつまみ部も磨耗している。

その他 46・50・54のようにつまみ部だけに二次加工が施され、刃部はほとんど無加工のものがある反面、45・47・48・51・52・53・55のように刃部にも比較的ていねいに二次加工を施すものがある。

4) ピエス・エスキュー (57~81)

「両極削離痕と 2 個一対（4 個二対）¹⁾ の鋭い刃部を有し」（阿部1979）、両極削離痕のある石核（石核G類）以外の石器を一括した。総数70点出土し、石器器種の中では1.1%の比率を示す。なお、接合するものがあり実数は69点である。

分類 表24参照。刃部の形状により二分した。

A類 2 個一対の刃部と両極削離痕をもつもの。(57~72)

B類 4 個二対の刃部と両極削離痕をもつもの。(73~81)

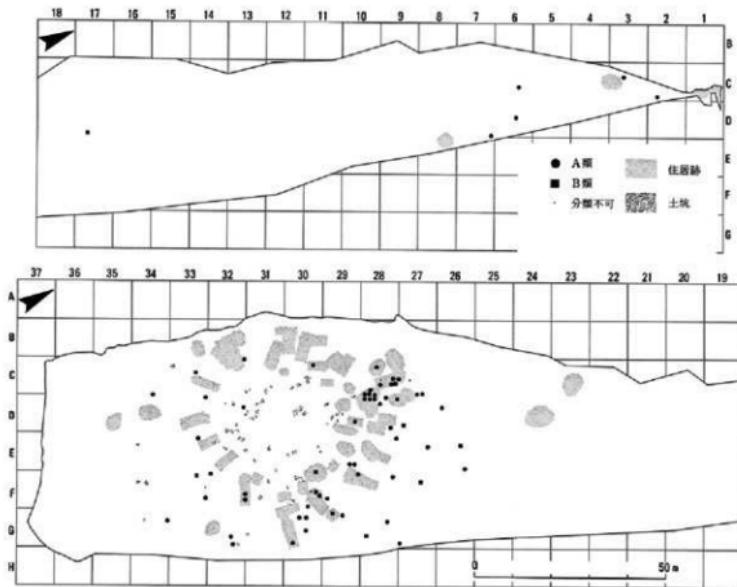
分類別出土数と出土分布状況 第28図・表25参照。総数70点を対象とする。遺構内26点(37%)、遺構外(63%)で、遺構内のものは全て住居跡からの出土である。分類別ではA類37点(53%)、B類29点(41%)で、A類がやや多い。分類不可4点(6%)は全て破片である。

個々の遺構・小グリッドごとに、8A号住居跡7点(A類5点・B類2点)と多く、20号住居跡3点7

表24 ピエス・エスキュー分類表

刃部の形状	分類		
2 個一対の刃部と両極削離痕をもつ	A類		
4 個二対の刃部と両極削離痕をもつ	B類		

1) () 内は加筆



第28図 ピエス・エスキュー出土分布図

B・7 C・28号住居跡各2点、これ以外は単独出土である。

調査区全体の出土分布状況では、ほとんどが環状集落跡及びその外側からの出土であり、中でも環状集落の北東側から東側にかけて多い。分類別ではA類が調査区の北側に若干出土するが、分布に大きな相違は認められない。

長さと幅 第29図参照。完形品・略完形品・接合完形品の31点を対象とした。A類は刃部を上下に、B類は長軸上の刃部を上下に置き計測したものである。B類は長さ3.0~5.5cm・幅2.5~4.5cm・長幅比1:1~1.5:1の範囲にほぼおさまる。A類は長さ2.0~6.0cm・幅2.0~6.0cmにやや多いがB類のように集中分布は認められない。分類基準ひいては使用の結果の反映であり、A類は長方形または不定形のものが多く、B類は正方形に近いものが多い。

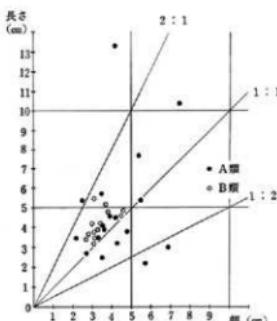
厚さ 第30図参照。完形品・略完形品・接合完形品の31点を対象とする。0.6~1.8cmにA類はほとんど、B類は全て分布するが、A類は1.0cm前後と1.6cm前後にやや集中し、B類は0.6~0.9cmに集中する。A類はB類に比べ厚手といえる。

重さ 第31図参照。完形品・略完形品・接合完形品の31点を対象とする。A類は約10~30gにかけて、B類は約5~20gにかけて多く分布する。長さ・幅・厚さを反映し、A類は重く、B類は軽い。また、B類はA類に比べ、集中化傾向が見られ、分布範囲は狭い。

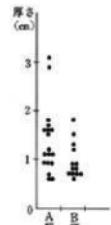
石材 表26参照。実数69点を対象とする。頁岩I・頁岩II・硬質頁岩・珪質頁岩で64点(93%)を占め、中でも硬質頁岩40点(58%)が多い。分類別に石材選択の違いは認められない。

表25 ピエス・エスキュー分類別出土数

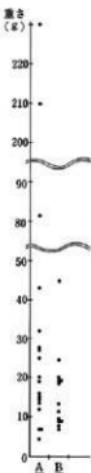
遺構別 分類	住居跡			合計
	遺構内	遺構外	合計	
A類	13	24	37	
B類	11	18	29	
分類不可	2	2	4	
合計	26	44	70	



第29図 ピエス・エスキュー長幅分布図



第30図 ピエス・エスキュー厚さ分布図



第31図 ピエス・エスキュー重量分布図

第29図 ピエス・エスキュー長幅分布図

石材 分類	微灰岩	鐵石英	硬砂岩	粘板岩	頁岩I	頁岩II	變質頁岩	變質頁岩	合計
A類	1			2	2	7	24		36
B類		1	1		7	5	13	2	29
分類不可						1	3		4
合計	1	1	1	2	9	13	40	2	69

表26 ピエス・エスキュー石材表

素材 表27参照。実数69点を対象とする。全体的に見ると素材不明34点(49%)で半数を占めるが、全て剝片素材と推定される。次いで横長剝片23点(33%)、縦長剝片11点(16%)で素材が分かるものでは横長剝片が多い。繊素材は1点のみである。分類別にみるとB類が素材不明の割合が高い。分類基準ひいては使用の結果の反映である。また、A類はB類より縦長剝片の割合が多い。

遺存状態 総数70点を対象とする。遺存状態は刃部の有無を基準に分けた。

完形品 2個一対(4個二対)の刃部を完全に残すもの。

略完形品 2個一対(4個二対)の刃部を一部欠損するもの。

破損品 2個一対(4個二対)の刃部を残すが、大きく欠損するもの。

破片 2個一対(4個二対)の刃部を残さない、または点状の刃部になったもの。

全体的にみると完形品・略完形品30点(43%)、破損品27点(39%)、破片13点(19%)で半数以上は欠損品である。分類別でもほぼ同様の傾向を示す。

その他 刀部には両側剥離痕が認められるが、この他に使用の結果と推定される微細剥離やつぶれのあるものは、A類13点・B類11点存在する。なお、磨耗・光沢等は1点も認められない。使われ方の違いによるものと考えられる。

折断の認められるものがA類5点・B類3点である。

71は接合品で2つに割れていた。破損面を見る限り71Aは破損後も使用され、71Bは使用された痕跡は認められない。71Aは8A住から、71Bは29-E-4-2層からの出土であり、約18m程離れている。

素材 分類	礫	巻長剝片	巻長剝片	不明	合計
A類	1	8	13	14	36
B類		3	10	16	29
分類不可				4	4
合計	1	11	23	34	69

表27 ピエス・エスキュー素材表

e) 不定形石器 (82~252)

石器として認定しにくい器種であるが、つぎの方法により不充分ながら不定形石器を抽出した。

- まず礫石器、定形石器を除外した。
- 次いで石核、板状石器の素材¹⁾を除外した。
- 残ったもので二次加工や使用痕の認められない剝片・碎片を剝片類とし、これ以外は全て不定形石器とした。

つまり不定形石器は剝片を素材とし、二次加工や使用痕が認められ、定形石器でない石器である。なお極く一部であるが薄く小型の剝片状の礫素材のものも不定形石器に含めてある。

総数2081点出土し、石器種の中では34.6%を占める。これは全器種中もっとも高い比率を示す。

分類 表28・29参照。分類は主に刃部形状の違いに着目して行ない、さらに各分類で刃部ライン・素材・二次加工部位等により細分類を行なった。また、充分な観察ではないが一つの石器に形状の違った刃部が二つ以上存在するものは複合として抽出した。分類は12種、細分類を含めると21種である。分類可能なものは1677点 (80.6%)、不可能なものは404点 (19.4%) である。

A類 (82~87) 刃部の二次加工は中型で急角度の剝離が連続的に施されている石器である。いわゆるスクレイバー・搔器・削器と呼称されていたものに相当する。刃部は滑らかな外彫状を呈し、縦長剝片は側縁に、横長剝片は底縁または側縁を刃部とするものが一般的である。片面加工を基本とし、腹面(裏面)側から背面(正面)側に向かって剝離されるものが多い。したがって、腹面側は主要剝離面の平坦面を広く残し、刃部断面形は急角度の片刃を呈す。

B類 (88~94) 刃部の二次加工は小型で急角度の剝離が連続的に施される石器である。いわゆるスクレイバー・搔器・削器と呼称されていたものに相当する。刃部は滑らかな外彫状を呈し、縦長剝片は側縁に、横長剝片は底縁または側縁を刃部とするものが一般的である。片面加工を基本とし、腹面側から背面側に向かって剝離されるものが多い。したがって、腹面は主要剝離面の平坦面を広く残し、刃部断面形は急角度の片刃を呈す。A類・B類は刃部の二次加工の大きさによって区分される。

C類 (95~117) 刃部の二次加工は急角度の鋸歯状剝離が施される石器である。鋸歯縁石器・鋸歯状石器と呼称されるものに相当する。刃部ラインは直線状または外彫状を呈するものが多い。刃部の剝離の大きさにより2分される。

1類 (95~107) 大型で急角度の鋸歯状剝離が施される。したがって刃部の凹凸は大きい。素材は2類に比べ厚手のものが多く、縦長剝片の場合は側縁を、横長剝片の場合は底縁を刃部とするものが一般的である。また、片面加工を基本とし、腹面側から背面側に向かって剝離され、腹面は主要剝離面の平坦面を広く残すものが多い。

2類 (108~117) 小型で急角度の鋸歯状剝離が施される。したがって刃部の凹凸は小さい。素材は1類に比べ薄手のものが多く、縦長剝片の場合は側縁を、横長剝片の場合は底縁または側縁を刃部とするものが一般的である。片面加工を基本とするが背面側に二次加工が施されるものが多い。

D類 (118~134) 細利な尖端部とそれに続く側縁に二次加工が施される石器である。尖端部に続く側縁は直線状または内彫状を呈すのが多い。二次加工が片側縁だけのものは、一方の片側縁は古い剝離面や折断面を利用している。石錐との区別は一部不明確なものも存在するが、石錐は中型・小型剝離で両

1) 板状石器の素材は泥板岩であり、その抽出は容易である。

4 造 物

側縁に二次加工が施されるものとした。また石錐は使用痕に磨耗のものが多く、種々剥離のあるものは1点も存在しない。これに対しD類は尖端部の使用痕に磨耗のものが極めて少なく、種々剥離がかなり認められることからも区別される。

D類は刃部の剥離・素材・二次加工部位により4分される。

1類(118~121) 尖端部に続く側縁の二次加工は大型で急角度剥離のものである。素材は一般的に厚手のものが多い。二次加工は片面加工を基本とし、腹面側から背面側に加えられるのが多い。したがって腹面側は主要剥離面の平坦部を広く残し、刃部断面形は三角形・台形を呈するものが多い。

2類(122~125) 尖端部に続く側縁の二次加工は大型で浅角度剥離のものである。素材は一般的に大型の割りにはやや薄手のものが多い。二次加工は両側縁に施されるものが多く、両面加工のものも少なからず認められる。

3類(126~129) 尖端部に続く側縁の二次加工は中型・小型剥離で、片側縁にだけ施される。素材は薄手である。

4類(130~134) 尖端部に続く側縁の二次加工は中型・小型剥離で、片側縁にだけ施される。素材は厚手である。

E類(135~154) 縁辺の一辺にノッチ状の抉りを持つ石器である。刃部は当然内彎状を呈している。ノッチ・抉入石器と呼称されているものに相当する。ノッチの大きさにより2分される。

1類(135~145) 大型のノッチを持つものである。刃部の二次加工は大型・中型剥離でノッチを作出している。2類に比べ大型で厚手の素材を用い、縦長剥片は側縁に、横長剥片は底縁を刃部とするものが一般的である。片面加工が多いが、腹面側の主要剥離面に二次加工が施されるものもかなりあり、両刃状の刃部を持つものも少なからず存在する。

2類(146~154) 小型のノッチを持つものである。刃部の二次加工は中型・小型剥離でノッチを作出している。1類に比べ小型で薄手の素材を用い、縦長剥片は側縁に横長剥片は底縁または側縁を刃部とする。片面加工を基本とするが、腹面側に二次加工が施されるものもあり、両刃状の刃部を持つものもある。

F類(155~178) 縁辺の一部に中型・小型の剥離が不連続に施される石器である。他の石器に比べ一段と素材獲得時の形状を変えていない。刃部ライン・素材・二次加工部位は多様であるが、小型で薄手の素材が目立つ。小型剥離のものはJ類と区別できないものが少なからず認められる。素材により2分される。

1類(155~167) 縦長剥片を素材とする石器である。二次加工部位は側縁だけのものと、側縁から下端にかけて施されるものがあり、後者は刃部ラインに丸みを持つ。

2類(168~178) 横長剥片を素材とする石器である。二次加工は底縁または側縁に施される。

G類(179~189) 刀部の二次加工は大型・中型で浅角度不連続剥離の石器である。刃部ラインは直線状や外彎状を呈し、大型で厚手の素材を使用するものが多い。縦長剥片は側縁に横長剥片は底縁を刃部とするものが一般的である。

H類(190~193) 背面に極めて広い自然面を残す素材を用い、中型・小型で浅角度の不連続剥離を施す石器、また無加工のものは使用痕のある石器である。刃部は素材の形状を生かし外彎状を呈す。素材は大型の割には薄手のものが多く、縦長剥片は側縁を、横長剥片は底縁を刃部にするのが一般的である。このような石器は、県内の糸魚川地方から富山県東部にかけて最近頻度が増加し、糸魚川市中原遺跡・

表28 不定形石器分類表(1)

分類	刃 部 形 状	刃部ライン	素 材	二 次 加 工 部 位	細分類
A類	スクレイパー 中型・急角度・連続剝離	外 曲 状	縦長	側縁	A類
			横長	府縁・側縁	
B類	スクレイパー 小型・急角度・連続剝離	外 曲 状	縦長	側縁	B類
			横長	府縁・側縁	
C類 <small>鋸歯状石器</small>	大型・急角度・鋸歯状剝離	直 線 状	縦長・厚手	側縁	C1類
		外 曲 状	横長・厚手	底縁	
	中型・小型・急角度・鋸歯状剝離	直 線 状	縦長・薄手	側縁	C2類
		外 曲 状	横長・薄手	底縁・側縁	
D類 <small>鋸利な尖端部を持つ石器</small>	大型・急角度剝離	直 線 状	厚手	片側縁（一方の片側縁は古い剝離面や折断面等を利用する）	D1類
		内 曲 状		両側縁	
	大型・浅角度剝離	直 線 状	——	片側縁（D1類に同じ）	D2類
		内 曲 状		両側縁	
	中型・小型剝離	直 線 状	薄手	片側縁（D1類に同じ）	D3類
		内 曲 状	厚手	片側縁（D1類に同じ）	D4類
		内 曲 状	——	両側縁	石錐
E類 <small>折入石器 (ワッカチ)</small>	大型ノッカチ 大型・中型・折入剝離	内 曲 状	縦長・厚手	側縁	E1類
		内 曲 状	横長・厚手	底縁	
	小窓ノッカチ 中型・小型・折入剝離	内 曲 状	縦長・薄手	側縁	E2類
		内 曲 状	横長・薄手	底縁・側縁	
F類	中型・小型・不連続剝離	——	縦長	側縁	F1類
		端部に丸味	縦長	側縁と端部	
		——	横長	底部・側縁	
G類	大型・中型・浅角度・不連続剝離	直 線 状	縦長・厚手	側縁	G類
		外 曲 状	横長・薄手	底部	
H類	無加工（使用痕あり） 中型・小型・浅角度・不連続剝離	外 曲 状	背面は自然面	底縁・側縁	H類
I類	端部に小型・連続剝離	端部に丸味	縦長・薄手	端部	I類
J類	無加工（使用痕あり）	——	縦長	側縁	J1類
			横長	側縁と端部	
		——	縦長	底縁	J2類
		——	横長	底縁と側縁	
K類	両面加工（調整）石器 刃部平面形は波状、側面觀はジグザグ状	外 曲 状	厚手	ほぼ全周（円形・稍円形）	K1類
				ほぼ半周（半円形状）	K2類
				K1・K2類以外（不整形）	K3類
複合	A～K類の組み合わせ	——	——	——	複合

※ゴシック以外の明朝体は、一般的傾向を表す。

表29 不定形石器分類表(2)



岩野E遺跡（高橋・小池1986）、原山遺跡・大塚遺跡（寺崎1988）等、富山県朝日町境A遺跡（山本1990）、馬場山D遺跡（山本1987）では出土石器のかなりの割合を占めている。

I類（194～203） 剣片の端部に小型の剝離を漸進的に施す石器である。素材は小型で薄手の剣片が多い。二次加工は片面加工を基本とし、端部の腹面側から背面側に施される。また、端部平面形は丸みを持ち、断面形は片刃を呈す。二次加工の剝離角は浅角度・急角度のいずれも存在する。

J類（204～226） 刃部の二次加工はないが、使用痕と推定される痕跡が認められる石器である。「使用痕のある剣片」「U-フレイク」と呼称されていたものに相当する。F類との区別が難しいものが一部存在する。素材獲得時の形状を変えていないため、刃部ライン・素材・二次加工部位等は多様なあり方を示す。素材により2分される。

1類（204～216） 縦長剣片を素材とする石器である。

2類（217～226） 横長剣片を素材とする石器である。

K類（227～246） 刃部平面形は波状、側面から見る（側面観）とジグザグ状を呈する石器である。「両面加工（調整）石器」と呼称されているものに相当する。刃部の二次加工はやや厚手の剣片に比較的大型の剝離を両面に施すものであり、交互剝離も少なからず認められる。二次加工部位、平面形により3分される。

1類（227～234） 二次加工はほぼ全周する。したがって平面形は円形・橢円形を呈す。

2類（235～242） 打面や折断面等の一辺を大きく残し、これ以外の部位に二次加工が施される。したがって平面形は半円形状のものが多い。

1類・2類は交互剝離が多く認められ、平面形の規則性も強い。

3類（243～246） 1類・2類以外の石器で両面に二次加工が認められる石器である。交互剝離も少なく、両面の二次加工も均等ではなく、平面形も不整形のものが多い。

複合（247～252） 1つの石器にA～K類までの形状の違う刃部が2ヶ所以上認められる石器である。刃部形状等は多様なあり方を示す。

分類不可 多数存在するが、その多くは石材の風化（具体的には頁岩Iが多い）や破片等から、二次加工があると推定されるだけのものである。この他二次加工が少なく、またはあっても不定形石器か単なるフレイクか判断しかねるものも一部含まれている。

分類別出土数と出土分布状況 表30・第32・33・34・35図参照。総数2081点のうち、遺構内541点（26.0%）、遺構外1540点（74.0%）である。遺構内出土のものは、その約90%は住居跡からである。各分類別では出土数が少ないA・B・H・I類・複合は比率にばらつきがあり、出土数の多いものでもJ類は遺構外（61.0%）が少なく、逆にK類は遺構外（87.1%）が多い傾向にある。この他の分類はほぼ全体と同傾向であり、遺構内出土のものは各分類とも住居跡からのものが極めて多い。

分類別出土数を見ると、F類356点（17.1%）、C類320点（15.4%）、J類282点（13.6%）が多く、逆にB類13点（0.6%）、A類22点（1.1%）、H類28点（1.3%）、I類38点（1.8%）は極めて少ない。

個々の遺構・小グリッドごとに、7A号住居跡32点、7B号住居跡11点、7C号住居跡25点、7D号住居跡21点、8A号住居跡40点、10A号住居跡21点、10B号住居跡21点、11号住居跡11点、15号住居跡16点、18A号住居跡18点、20号住居跡10点、21号住居跡24点、28号住居跡25点、37A号住居跡13点、38D号住居跡10点、41A号住居跡13点、43号住居跡10点の出土数の多さが目立つ。これ以外で複数出土は、遺構で34遺構、小グリッドで350地点である。しかし特殊な出土状況が認められるものは存在しない。

表30 不定形石器分類別出土数

遺物別 分類別	住居跡	大型 フラスコ 状土坑	小型 フラスコ 状土坑	トラップ ビット	土 坑	その他の 遺構	その他の ビット	遺構外	小 計	合 計
A 類	4							18	22	22
B 類	4					1		8	13	13
C 1 類	45	1	1					3	155	205
C 2 類	29	1				1		84	115	320
1 類	5		1	1				20	27	
D 2 類	6							16	22	
D 3 類	5							17	22	
D 4 類	8				1			21	30	101
E 1 類	8			1		1		52	62	
E 2 類	22						2	64	88	150
F 1 類	32		1	1			1	128	163	
F 2 類	41	2				1	1	124	169	
細分類不可	3		2	1				18	24	356
G 類	31				1		2	101	135	135
H 類	11					1	2	14	28	28
I 類	6						2	30	38	38
J 1 類	46	1	1	1		2	3	74	128	
J 2 類	47		1					89	137	
細分類不可	9							8	17	282
K 1 類	6							28	34	
K 2 類	4							44	48	
K 3 類	11				1			77	89	171
複 合	10						1	50	61	61
分類不可	89	3		2	1	1	8	300	404	404
合 計	482	8	7	7	4	8	25	1,540	2,081	2,081

調査区全体の出土分布状況を見ると、環状集落及びその外側の26~34列グリッドに集中分布する。その中でも集落の北側から東側、東側から南側にかけて多い。逆に北側から西側にかけて少ない。環状集落の内側はほとんど出土していない。また、調査区の北東側1~10列グリッドからもある程度出土しているが、環状集落に伴うものではない。分類別でも、ほぼ全体の傾向と一致する。環状集落の北側から西側にかけては各分類とも少ないが、A・B・K類はほとんど出土していないか皆無である。

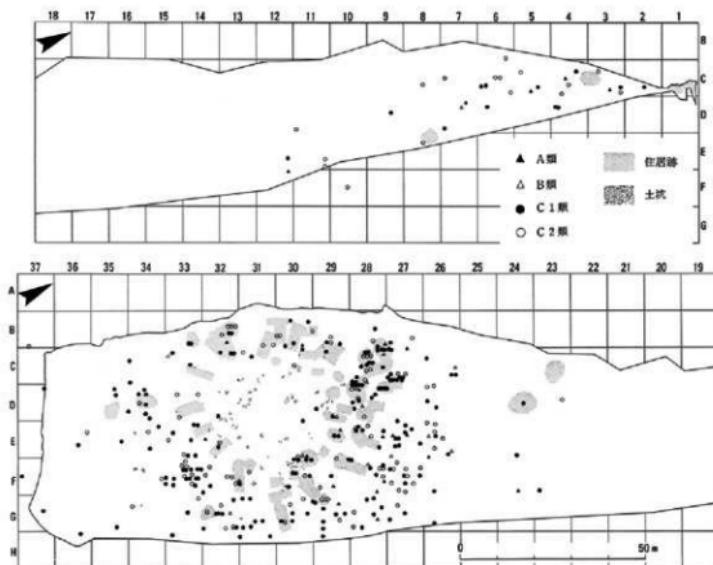
長さと幅 第36図参照。A類からK類までを対象とする。完形品と破損品の区別が明確でないため、破損・折断を考慮せず、全てグラフ化した。全体的に見ると、様々な大きさの分布を示すが、おおむね長さ・幅ともに約3.0~10cm程度に多く分布する。

分類別では、I類・J類がやや小型のものが多く、G類は大型のものが多い。また、長幅比で見ると、K類は長幅比の小さいものが多く、D類・G類は長幅比の大きいものが多い。

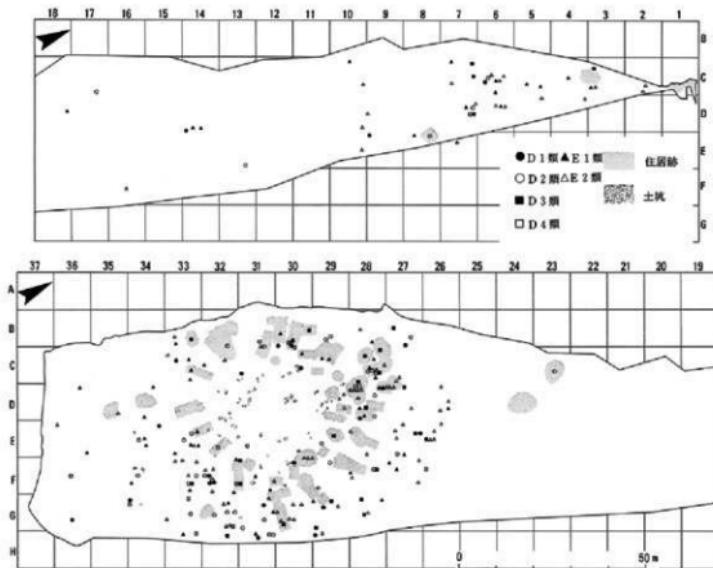
各分類内の細分類を見るとC類は1類が大きく、2類が小さい。D類は1・2類が大きく、3・4類が小さい。E類は1類が大きく、2類が小さい。いずれも刃部の大きさ、二次加工の剥離の大きさを反映している。F類・J類は1類・2類が長幅比ほぼ1:1で分布が片寄るが、これは分類基準に素材を含めたためである。K類は1類が長幅比率が小さく、3類が大きい。二次加工部位の範囲を反映している。

厚さ 第37図参照。A類からK類までを対象とする。全体的に見ると約0.5~3.0cmにはほとんど分布する。

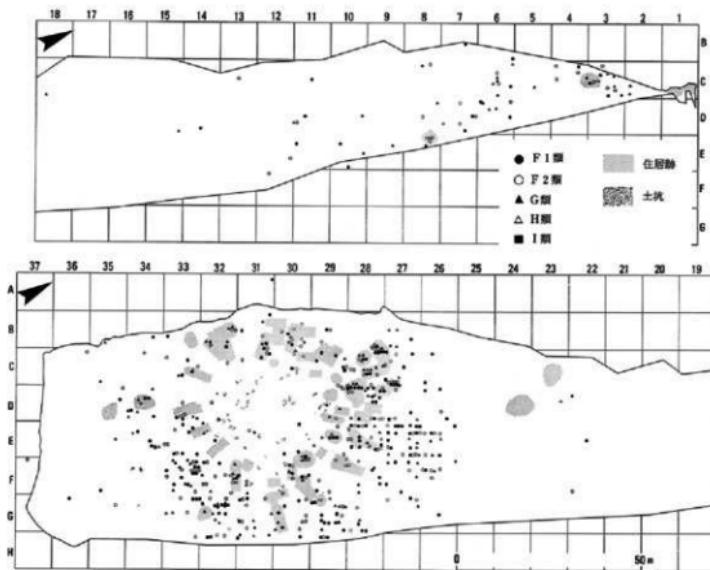
分類別では、F類・I類・J類はやや薄手のものが多く、C類・E類・K類はやや厚手のものが多い。各分類内の細分類を見るとC 1類・E 1類は厚手のものが多く、C 2類・E 2類は薄手のものが多い。刃部形状・二次加工の反映である。なお、D 3類が薄手、D 4類が厚手なのは分類基準に厚さを含めたためである。



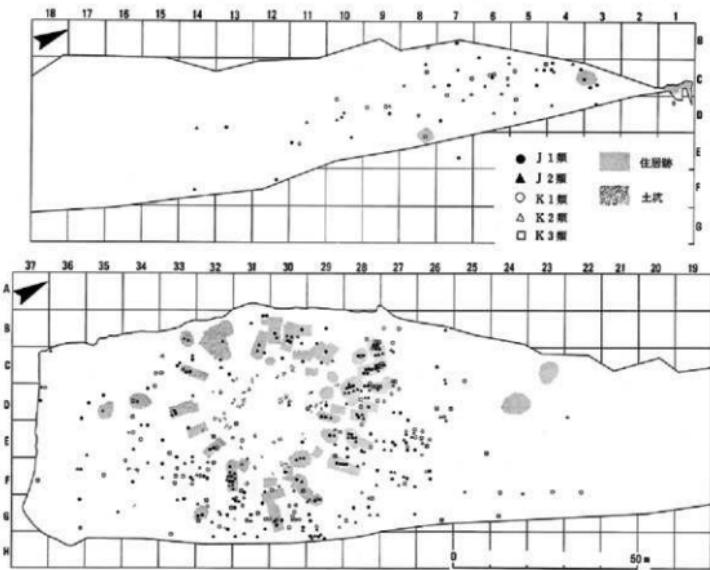
第32図 不定形石器A・B・C類出土分布図



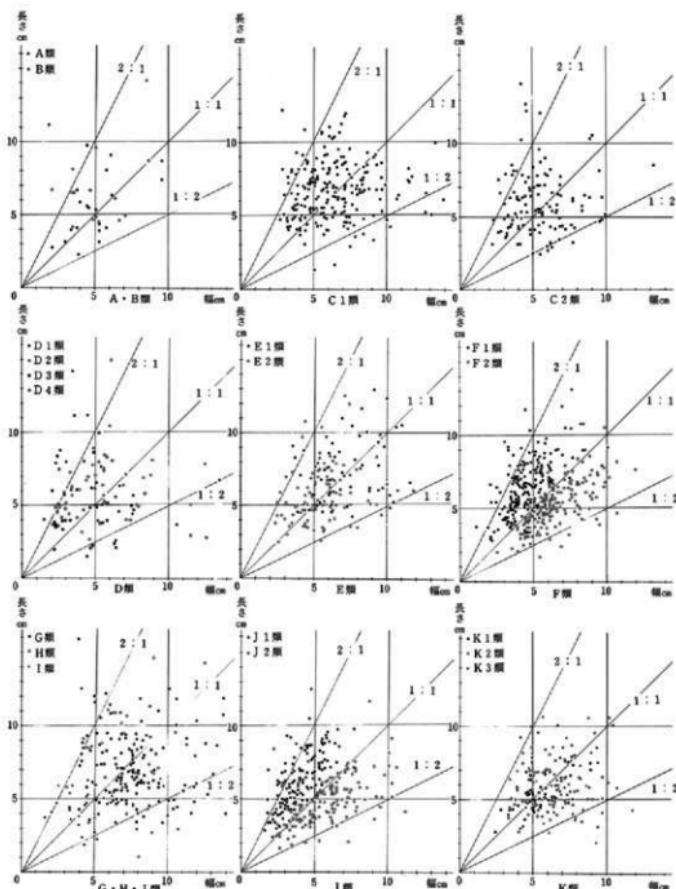
第33図 不定形石器D・E類出土分布図



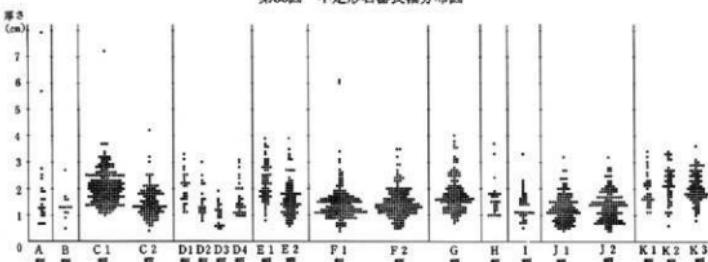
第34図 不定形石器F・G・H・I類出土分布図



第35図 不定形石器J・K類出土分布図



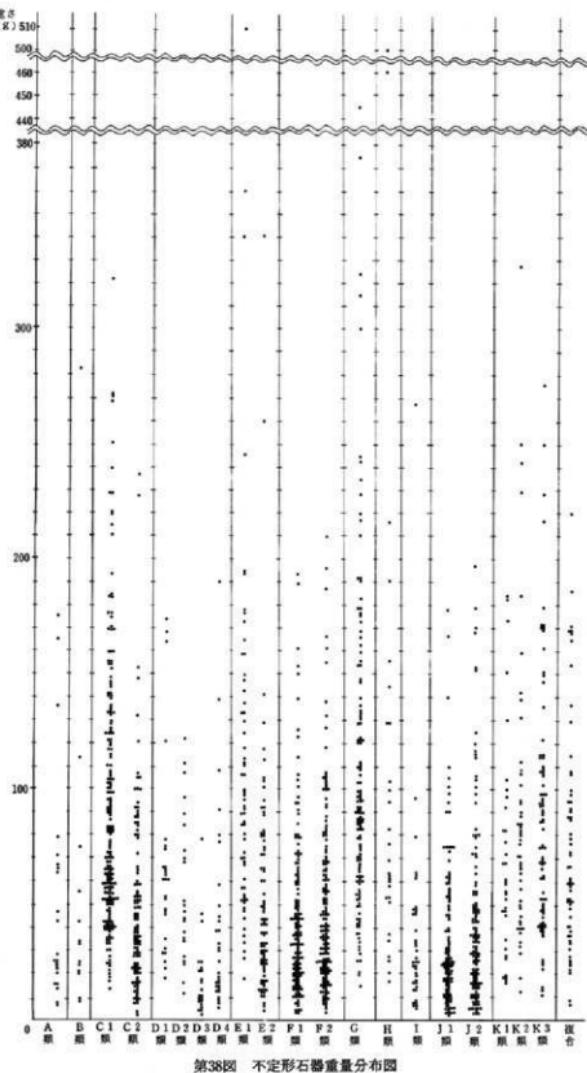
第36図 不定期石器長幅分布図



第37図 不定期石器厚さ分布図

4 遺 物

重さ 第38図参照。A類から複合までを対象とする。長さ・幅・厚さを反映し、様々なものが存在するが、約5~110g程度のものが多い。F類・I類・J類は比較的軽いものが多く、C類・G類が重い傾向にある。各分類内の細分類では、C1類・D1類・E1類が重く、C2類・D2類・E2類が軽い。刃部形状・二次加工・素材の反映である。



第38図 不定形石器重量分布図

表31 不定形石器石材表

石材 分類別	真岩 I	真岩 II	硬質真岩	後質真岩	粘板岩	泥板岩	硬砂岩	砂 岩	鐵灰岩	泥灰岩	黑色緻密 安山岩	黑耀石	石 英	チャート	鉄石英	不 明	合 計
A 類	1	8	10	2								1					22
B 類		5	5	2							1						13
C 1 類	46	110	26	19		7		3									205
C 2 類	7	55	27	22		1		1		2							115
D 1 類	12	9	3	1		1		1									27
D 2 類	7	11	3					1									22
D 3 類		6	9	3				1	1								22
D 4 類	3	10	12	1		2		2									30
E 1 類	9	32	13	3		1	1	1		1		1					62
E 2 類	7	41	28	8	2	1				1							88
F 1 類	5	81	64	9	2			1								1	163
F 2 類	7	86	53	9	4	5		3	1			1					169
總計不可	1	16	6	2	1	1	1	1					1				24
G 類	14	89	8	3	16	3		1		1							135
H 類	14	5		7	2												28
I 類	1	13	17	6		1											38
J 1 類	27	87	9	2		1		1			1						128
J 2 類	24	81	7	4	7		3	1									137
總計不可	2	14		1													17
K 1 類	7	17	7	3													34
K 2 類	12	18	11	3		2		1		1							48
K 3 類	17	38	22	3	4	2	1	2									89
複 合	1	31	18	8		1		1		1							61
合 計	157	749	529	117	43	1	38	3	24	1	9	2	1	1	1	1	1,677

石材 表31参照。分類不可を除く1677点を対象とする。全体的に見ると真岩II749点(44.7%)・硬質真岩529点(31.5%)・真岩I157点(9.4%)・珪質真岩117点(7.0%)が多く、頁岩系が1572点(92.5%)を占める。分類不可とした石器の石材はほとんど頁岩系で占められ、頁岩系の占める割合はさらに高くなる。搬入石材と推定される黒色緻密安山岩・黒耀石・石英・チャート・鉄石英は極めて少ない。板状石器で多く使用される泥板岩は1点しか認められない。

各分類別でもほぼ同様の傾向であるが、粘板岩がG類で135点中16点(11.9%)・H類で28点中7点(25%)とやや多く使用されている。粘板岩は比較的大型の剝片が得られやすいためと考えられる。

使用痕 表32参照。分類不可を除く1677点のうち673点(40%)に使用痕が認められた。肉眼による観察のため不充分であるが、微細剝離が多く、浅りも刃部の磨耗が大半を占める。また、D 3類・D 4類には尖端部に種々剝離のあるものが少數認められ、刺突具・彫刻刀等の用途も考えられる。

素材 表33参照。分類不可を除く1677点を対象とする。全体的に見ると縦長剝片695点、横長剝片680点ではほぼ同数である。また両極剝離のある剝片は3点と少なく、両極技法の剝片生産が主体的ではないといえる。そのほか薄手の剝片状の礫素材を用いた石器も8点存在する。

分類別では、A類・複合は縦長剝片の比率が高く、G類は横長剝片の比率が高い。K類は二次加工のため素材不明が極めて多く、特に二次加工がほぼ全周するK 1類はほとんど素材不明である。これ以外は素材に片寄りは認められない。なお、F類・J類内の細分類で素材が片寄るのは、分類基準に素材を含めたためである。

剝片の形状¹⁾ 表33参照。分類不可を除く1677点を対象とした。剝片の形状分類ができたものは1046点であり、背面のようすを観察するとC型(背面が剝離面)500点(48%)が多く、A型(背面が全て自然面)138

1) 剥片の形状分類については「W」剥片類の分析」を参照。

表32 不定形石器使用痕表

種別 分類別	散離剖面	磨耗	走査・散離剖面	磨耗・光沢	つぶれ	光沢	散離剖面 ・光沢	つぶれ・磨耗	光沢・磨耗 ・散離	磨耗剖面 ・磨耗・つぶれ	つぶれ・散離剖面	研磨剖面	合計
A 類	6	2	1			1							10
B 類	2	2											4
C 1 類	17	6	1						1				25
C 2 類	19	5	3	1		2				1			31
I 類		1											1
D 2 類	1	1											2
D 3 類	1			1								1	3
4 類	1	1				1	1					6	10
E 1 類	6	2	1										9
E 2 類	9	5		1					1				16
F 1 類	45	14	12	2	1		1		1				76
F 2 類	48	10		4		1							63
組合不可	1		1										2
G 類	8	15	7				1	2		1			34
H 類	25	2						1					28
I 1 類	12	3								1			16
I 2 類	126		1				1						128
J 2 類	131	4	2										137
組合不可	17												17
I 類	2												2
K 2 類	7				1								8
K 3 類	7		1		2						1		11
複合	19	8	8	2		1	1	1					40
合計	510	81	41	8	6	5	4	4	3	2	2	7	673

点は少ない。打面のようすを観察すると2型(剝離が1つの剝離面打面)465点(44%)が多く、3型(剝離が2つ以上の剝離面打面)266点(25%)は少ない。型別ではC 2型237点(23%)、B 2型201点(19%)が多く、A 3型15点(1%)・A 2型27点(3%)が少ない。

分類別ではC 1類・G類がA類がやや多いのが目立つ。H類は全てA類であるが、これは分類基準に剝片の形状を含めたためである。これ以外では、A類・D類・K類・複合は剝片の形状分類不可が多く、傾向は必ずしも明確でない。その他の分類はほぼ全体的傾向に一致する。

打面の大きさ¹⁾ 表33参照。打面の大きさと最大幅を比較したもので、対象数1677点のうち、計測可能947点、計測不可730点である。計測可能のうち最大幅の1/2より大きいものは732点(77%)で、この中には最大幅とはほぼ同じものが119点も存在する。最大幅の1/2より小さいものは215点(23%)であり、最大幅に比べ打面幅の比較的大きい剝片を使用している。分類別ではA類・K類・複合は計測不可能が多いものの、これ以外の分類も含め、ほぼ全体的傾向に一致し、分類ごとの片寄りは認められない。

転移痕²⁾ 表33参照。主要剝離面と背面の剝離方向の比較である。対象数1677のうち、観察可能な1215点である。0°(同方向)のもの785点(65%)が多く、以下90°(約90°ずれる)のもの308点(25%)、180°(約180°ずれる)のもの76点(6%)、90°+180°のもの46点(4%)である。分類別では全て観察不可のH類・K 1類以外は、ほぼ全体の傾向と一致し、分類ごとの片寄りは認められない。

折断 表33参照。対象数1677点のうち、414点(25%)に折断が認められた。分類別ではA類(41%)・C類(34%)・D類(36%)・I類(39%)が多く、B類(15%)・H類(14%)・J類(15%)・K類(12%)が少ない。このように折断が多く認められたことは、素材獲得段階、または二次加工段階の整形や二次加工の一部として折断の技術が用いられていたものと考えられる。

- 1) 打面の大きさの決め方については「W」剝片類の分析」を参照。
- 2) 転移痕の見方については「W」剝片類の分析」を参照。

表33 不定形石器素材 観察表

分類別	出土数	素材の種類	鉄片の形状			打面の大きさ			主要削離面と背面との傾斜度			新鮮状態の割合																			
			A型	B型	C型	分類	角度	不可	0°	0°+90°	90°	0°+180°																			
A 鋼	22	14	5	3	3	1	1	2	1	1	11	1	7	3	11	6	3	2	2	2	1	1	9	9	13						
B 鋼	13	6	6	1	1	3	1	1	3	1	3	1	2	2	5	3	3	6	2	2	2	1	1	2	11						
C 1 鋼	205	93	85	1	26	25	5	4	13	29	12	7	14	8	86	8	61	30	105	59	27	21	6	5	87	69	136				
C 2 鋼	115	62	41	1	11	5	2	1	11	16	7	7	14	8	44	4	66	14	51	65	10	13	1	1	2	3	39	39	76		
1 鋼	27	8	12		7	1			3		2		1	20		5		2	20	9	1	3			1	13	7	20			
D 2 鋼	22	8	8		6	1			2	3			4	2	10		10	2	10	12	1				1	8	4	18			
D 3 鋼	22	9	9	1	3	1	1	2	1	4	2	3	8	2	8	3	9	13	1	5	1				2	5	17				
E 4 鋼	30	12	8	10	1			2	2	1	5	1	18	2	4	4	20	14	4	3					1	1	7	20	10		
E 1 鋼	62	22	27	13	5	3	10	10	4	5	4	5	16	4	23	6	29	22	6	7	2	4	1	3	17	17	45				
E 2 鋼	88	33	30	1	24	3	1	1	7	7	6	7	10	11	35	9	21	11	47	43	7	6	2	1	3	24	32	56			
F 1 鋼	163	163			8	2	1	12	27	9	13	40	24	27	18	83	24	38	112	13	11	5	1	1	2	18	40	123			
F 2 鋼	169	168			1	9	2	3	12	19	18	18	35	34	19	22	91	30	26	165	22	14	6	1	5	2	14	26	143		
G 鋼	135	49	75	1	10	8	4	2	12	20	9	11	9	6	54	11	53	14	57	61	8	18	5	5	3	35	31	104			
H 鋼	28	15	13		20	3																				27	4	24			
I 1 鋼	38	17	15		6		1	1	3	2	4	11	5	11	5	14	3	16	17	8	5	2	1	2	3	15	23				
I 1 鋼	128	128				1	8	23	5	6	40	14	31	12	63	22	31	99	14	2	4	1	3	3	2	16	112				
J 2 鋼	137	137			1	1	10	23	12	10	29	28	23	12	71	30	24	79	25	12	10	6	3	1	9	25	112				
細分類不明	17				17										17											17					
K 1 鋼	34	1	1		32				2							32															
K 2 鋼	48	6	8	2	32	1	1	2	2	1	1	39	2	4	42	10															
K 3 鋼	89	17	16	2	54	2		2	6	1	4	5	69	13	1	75	24	3	4												
複 合	61	32	16	3	2	11	2	1	3	5	4	4	8	4	30	3	17	7	34	32	4	9	1	1	14	18	43				
合 計	1,677	655	689	3	8	29	31	96	27	15	111	201	96	108	237	155	631	119	613	215	730	785	166	142	48	28	23	23	462	414	1,263

4 遺物

f) 三脚石器 (253~255)

「平面形は抉入三角形または三角形を呈し、両面加工で裏面が平板状でない石器」(高橋1990)を三脚石器とした。総数3点と極めて少ない。いずれも側縁は内凹状を呈し、厚手の頁岩IIを素材とし、清水上遺跡の三脚石器A1類に相当する。253は一脚の端部を欠損するが、他の2点は完形である。また、255は自然面を残さないが、他の2点は正面に自然面を残す。環状集落跡の南側・西側より出土した。

g) 板状石器 (256~318)

扁平な自然縁または板状の剥片を素材とし、裏面から正面への急角度の片面加工が施され、裏面が平板状の石器である。まれに裏面にも剥離が認められる場合もあるが、いずれも浅角度で浅く、不規則の場合が多い。

総数1034点出土し、石器種類の17.1%の比率を示す。出土数の多さは本遺跡の一つの特徴である。

分類 表34参照。分類は平面形の違いにより、6分した。しかし、各分類の中間形も少なからず存在し、明確に区分することができないものもある。

A類 平面形がほぼ円形のもの。(256~267)

B類 平面形がほぼ椭円形のもの。(268~283)

A類とB類は長軸比1:1.2をおおむねの基準とした。

C類 平面形がほぼ三角形のもの。(284~296)

D類 周縁の一部が直線状を呈し、平面形がほぼ半円・半椭円形のもの。(297~306)

E類 周縁の一部に抉りのあるもの。(307~312)

F類 上記以外のもの。平面形は不整形である。(313~318)

表34 板状石器分類表

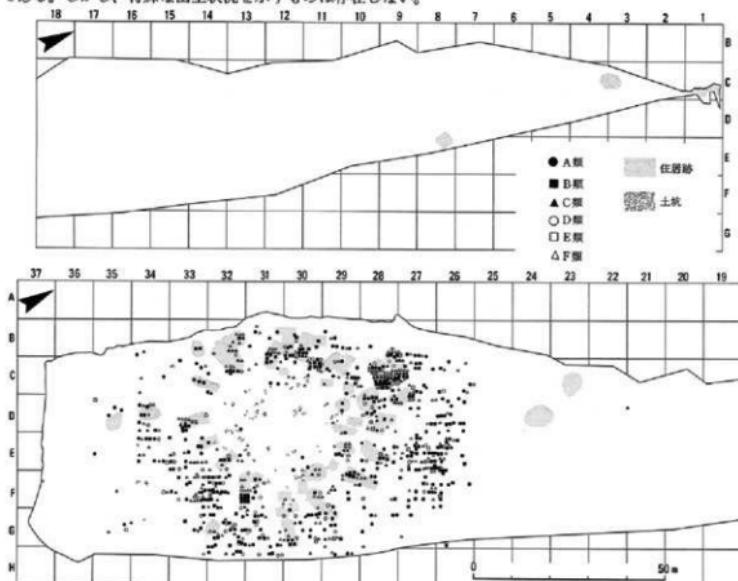
平面形	分類					
円 形	A類					
椭 圆 形	B類					
三 角 形	C類					
半円・半椭円形	D類					
周縁に抉りがある	E類					
不 整 形	F類					

表35 板状石器分類別出土数

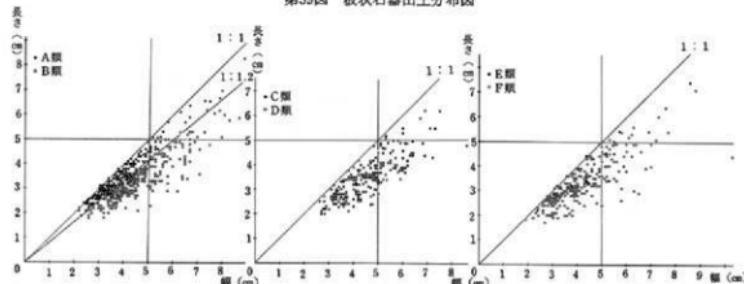
遺構別 分類	住居跡	大型 フラスコ 状土坑	小型 フラスコ 状土坑	トラン ピット	その他の 遺構	その他の ピット	遺構外	合 計
A類	36	1	1	1	1	2	102	144
B類	53	2		1		4	182	242
C類	38	3				3	86	130
D類	13					1	59	73
E類	6						15	21
F類	76	2	2	1		3	123	207
破 片	62		1		1	2	151	217
合 計	284	8	4	3	2	15	718	1,034

分類出土数と出土分布状況 第39図・表35参照。総数1034点のうち、遺構内316点(31%)、遺構外718点(69%)である。遺構内出土のものはその約90% (284点) が住居跡からのものである。分類別ではB類(梢円形) 242点(23%)、F類(不整形) 207点(20%)が多く、E類(抉りのあるもの) 21点(2%)が少ない。なお破片が217点(21%)認められるが、多くは板状に剥落した破片であり、使用石材の石質を反映している。

個々の遺構・小グリッドごとでは、7A号住居跡15点、7B号住居跡21点、7C号住居跡33点、7D号住居跡15点、8A号住居跡10点、28号住居跡16点、41A号住居跡12点、27-E-4グリッド10点、32-C-1号風倒木痕10点で出土数の多さが目立つ。これ以外の複数出土は、遺構で36遺構、小グリッドで72地点である。しかし、特殊な出土状況を示すものは存在しない。



第39図 板状石器出土分布図



第40図 板状石器長幅分布図

4 遺物

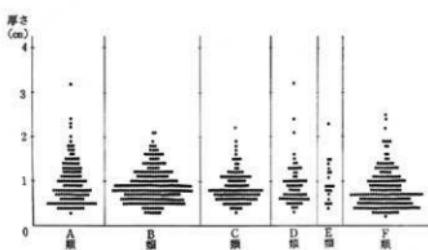
調査区全体の出土分布状況は4点を除き、全て環状集落及びその外側に集中分布する。他器種に比べ著しく環状集落及びその外側に集中する傾向が見られる。各分類ごとの片寄りは見られず、ほぼ同様の分布状況を示す。

長さと幅 第40図参照。完形品・略完形品の817点を対象とする。長軸を幅としたため長幅比1:1より横長の傾向にある。全体的に見ると長さ約2.0~5.0cm、幅約2.5~6.5cmのものが多く、中でも長さ約2.5~3.5cm・幅3.0~4.5cmに集中する。しかし、これ以上のものもかなり存在し、小型のものから大型のものまでその差は著しい。これは、使用による刃部(周縁)損耗と刃部再生のくり返しの結果とも考えられる。分類別では、大きさに片寄りは認められず、全体的傾向に一致する。なお、A類(円形)とB類(椭円形)は長幅比1:1.2で別れるが、分類基準の反映である。

厚さ 第41図参照。完形品・略完形品の817点を対象とする。全体的に見ると約0.4~1.5cmに大半が含まれ、中でも0.5~1.0cmに多く集中する。分類別の分布の違いは認められない。

重さ 第42図参照。完形品・略完形品の817点を対象とする。全体的に見ると約4~55gにほとんど分布し中でも5~15gに多く集中する。分類別の分布の違いは認められない。

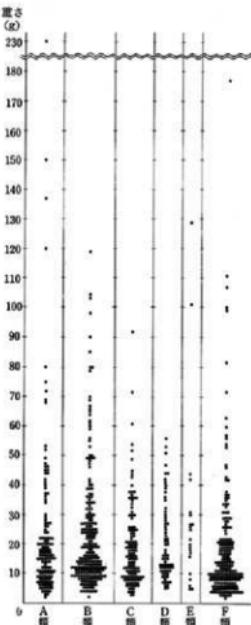
石材 表36参照。総数1034点のうち、泥板岩962点(93%)と特徴的な石材選択が認められた。泥板岩は表10の石材の特徴でも述べたように、頁岩よりやや軟質であるが、層理・節理が極めて発達した石材である。したがって、板状素材の得やすい石材である。板状石器は裏面が平板状で周縁が急角度剥離の石器であることから、この石器にもっとも適した泥板岩を多く用いたと推定される。



第41図 板状石器厚さ分布図

石材分類	泥板岩	粘板岩	頁岩I	頁岩II	硬砂岩	砂岩	礫灰岩	散細葉隕岩	合計
A類	134	5		2			3		144
B類	230	8		1			2	1	242
C類	114	6	1	8		1			130
D類	67	4				1	1		73
E類	19			2					21
F類	189	7		6	1	3		1	207
破片	209	2		2		3	1		217
合計	962	32	1	21	1	8	7	21,034	

表36 板状石器石材表



第42図 板状石器重量分布図

表37 板状石器自然面集計表

分類	有	(残存部位)	無	不明	合計
A 類	120	(正面111、正裏面2、正裏面側縁2、正面側面3、側面1、裏面側面1)	17	7	144
B 類	201	(正面185、正裏面3、正裏面側面2、側面1、正面側面10)	25	16	242
C 類	112	(正面106、正裏面1、正面側面4、裏面側面1)	13	5	130
D 類	68	(正面55、正裏面1、正面側面9、裏面1、正裏面側面2)	3	2	73
E 類	16	(正面4、側面1、正面側面1)	3	2	21
F 類	164	(正面150、正裏面1、裏面1、側面4、正面側面7、正裏面側面1)	28	15	207
合 計	681	(正面621、正裏面8、正裏面側面7、正面側面34、側面7、裏面側面2、裏面2)	89	47	817

素材 表37参照。完形品・略完形品の817点を対象とする。素材のいずれかに自然面を残すものが681点(83%)と多い。内訳は正面が自然面のもの670点、側面が自然面のもの50点、裏面が自然面のもの19点である。但し、裏面は使用痕で磨耗したものと自然面との判別が困難なため、実際は裏面が自然面のものはもっと多くなる。いずれにしても、扁平様の薄手のものはそのまま用い、厚手のものは板状石材に分割したものを用いたといえる。しかも、片面に自然面を残すことが多いことから、2分割が多く、3分割以上のものは少ないと考えられる。なお、分類ごとの素材の違いは、D類が自然を残すものがやや多く、E類がやや少ない程度で、大きな違いは認められない。

使用痕 表38参照。完形品・略完形品817点のうち、裏面に使用痕の認められるものは733点(90%)、側縁に使用痕の認められるものは713点(87%)である。裏面の使用痕は裏面のほぼ全体が磨耗し、滑らかになっているものであり、鋭い光沢を帯びるものも存在する。裏面に線条の擦痕が認められるもの少數(A類2点、D類2点)存在する。側縁の使用痕は、縁辺の磨耗や微細剝離が残るものである。

分類別では、F類でやや比率が低い以外、ほぼ同様の比率である。いずれにしても、多くの板状石器に使用痕が認められることは、用途・機能を考えるうえで重要といえる。

その他 板状石器を平面形に分類し、諸属性の分析を試みた。しかし、各分類間での違いが認められなかった。平面形でも各分類間の中間形が少なからず存在し、またE類の抉りの多くは二次加工時の欠損の可能性がある。平面形と機能とは何ら相関性は存在しないといえよう。

h) 打製石斧 (319~432)

大ぶりな成形・調整によって斧形に仕上げられた石器であり、総数891点出土している。破損品同士の接合があるため、実数は887点である。出土石器種の14.6%を占める。他の未完成と思われるものが17点出土している。

分類 表39参照。分類は完形品・略完形品及び破損品同士が接合し完形品となったもの(以下、「接合完形」という)を対象とし、二次加工・素材・平面形・断面形等に着目し行なった。しかし、各分類の中間形も多く、分類基準も相対的な基準も含まれているため、一部に判断しかねるものも存在した。分類は8種であり、さらに各分類内の細分を含めると14種である。

なお平面形の撥形・短冊形の区分は、第43図のように刃部幅と基部幅の比で行ない、刃部幅が基部幅の1.5倍以上の場合に撥形、1.5倍未満は短冊形とした。また、F類(石笠に近似するもの)は二次加工が他と

表38 板状石器使用痕表

分類	裏面の 有無	裏面		側縁		裏面 擦痕
		有	無	有	無	
A 類	130	14	124	20	2	
B 類	222	20	218	24		
C 類	117	13	117	13		
D 類	67	6	66	7	2	
E 類	19	2	19	2		
F 類	178	29	169	38		
合 計	733	84	713	104	4	

4 遺物

区別されるため、破損品でも抽出した。

A類 (319~363) 削片を素材とし、二次加工は正面のみの片面に施され、急角度削離のもの。裏面の二次加工は基本的に施されないが、部分的に二次加工のあるものもある。しかし、その二次加工は正面に比べ著しく少なく、浅角度削離である。A類は大きさ(長さ・幅)に対する厚さで2分され、A1類は平面形でさらに2分される。

1 a類 (319~336)

大きさに対し比較的厚手で、平面形が盤形のもの。

1 b類 (337~357)

大きさに対し比較的厚手で、平面形が短冊形のもの。

2類 (358~363) 大きさに対し比較的薄手のもの。

B類 (364~368) 削片を素材とし、二次加工は正面のみの片面比較的に浅角度削離が施されるもの。裏面の二次加工は基本的に施されないが、部分的に浅角度の二次加工のあるものもある。B類は大きさに対する厚さで2分される。

1類 (364~365) 大きさに対し比較的厚手のもの。

2類 (366~368) 大きさに対し比較的薄手のもの。



第43図 打製石斧盤形・短冊形の分類基準図

素材	二次加工	正面の加工	厚さ	刃部幅/基部幅	基部断面形	分類
片 （二部ちぎりある）	片面加工 (裏面の一部に二次加工のあるものもある)	A類 急角度削離	1層 厚手	a層 1.5倍以上(盤形)	——	A 1a類
			2層 薄手	b層 1.5倍未満(盤形)	——	A 1b類
		B類 浅角度削離	1層 厚手	——	——	A 2類
			2層 薄手	——	——	B 1類
	両面加工	C類 急角度削離	厚手	——	——	C類
			薄手	——	——	出土無
		D類 浅角度削離	1層 厚手	a層 1.5倍以上(盤形)	——	D 1a類
			1.5倍未満(盤形)	b層 盤形	D 1b類	D 1c類 三角形・台形
縫		2層 薄手	——	——	——	D 2類
					E類	
					F類	
					G類	
					H類	

表39 打製石斧分類表

A類・B類の裏面は無加工または加工があつても部分的なため、主要剝離面の平坦面を大きく残す。

C類(369~373) 大きさに対して厚手の剝片または石核を素材とし、二次加工は両面に施されるが、正面の二次加工は急角度剝離のものである。裏面の剝離は主要剝離面に対し、極めて浅角度剝離で平坦面を作り出している。なお、薄手素材のものは出土していない。

D類(374~405) 剥片または石核を素材とし、二次加工は両面に施されるが、正面の二次加工は比較的浅角度のものである。D類は大きさに対する厚さにより2分され、D1類は平面形・基部断面形(裏面の二次加工)により3分される。

1 a類(374~385) 大きさに対し比較的厚手のもので、平面形が菱形のもの。裏面の剝離は正面の二次加工と同様に比較的浅角度のもの、または極めて浅角度のものもある。

1 b類(386~391) 大きさに対し比較的厚手の素材を用い、平面形が短冊形のもの。裏面の二次加工は正面と同様に比較的浅角度で、基部断面形はほぼ菱形を呈する。

1 c類(392~398) 大きさに対し比較的厚手の素材を用い、平面形が短冊形のもの。裏面の二次加工は正面に比べて極めて浅角度で、基部断面形は底辺の長い三角形・台形を呈する。

2類(399~405) 大きさに対し比較的薄手のもの。平面形はほとんど短冊形である。D2類は関東地方で多出する短冊形石斧や清水上遺跡のB類に近似する。

E類(406~413) 両側縁に抉りを持つ、いわゆる「分銅形石斧」である。ほとんどが薄手の剝片を素材とし、両面加工が一般的である。

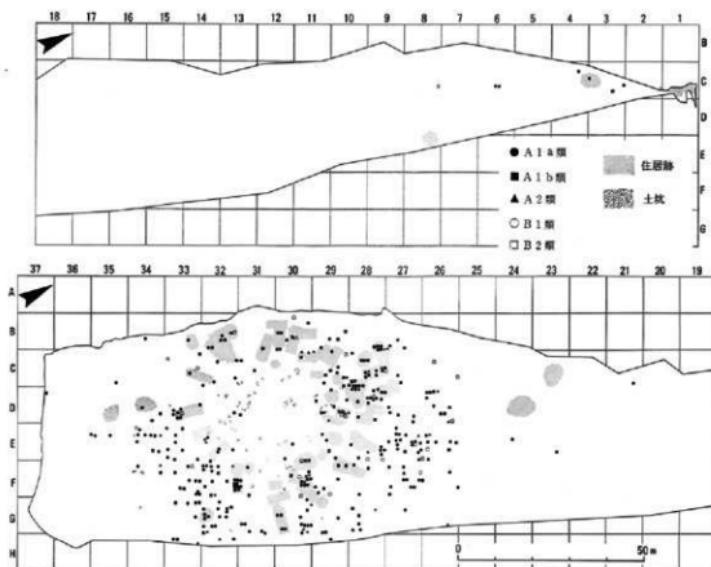
F類(414~422) 比較的細かな剝離をていねいに施し、東北地方で多出する、いわゆる「石斧」に近似するものである。剝片素材で両面加工が一般的である。

G類(423) 両面に自然面を残す扁平盤を素材とするものである。1点しか出土せず、両面加工である。

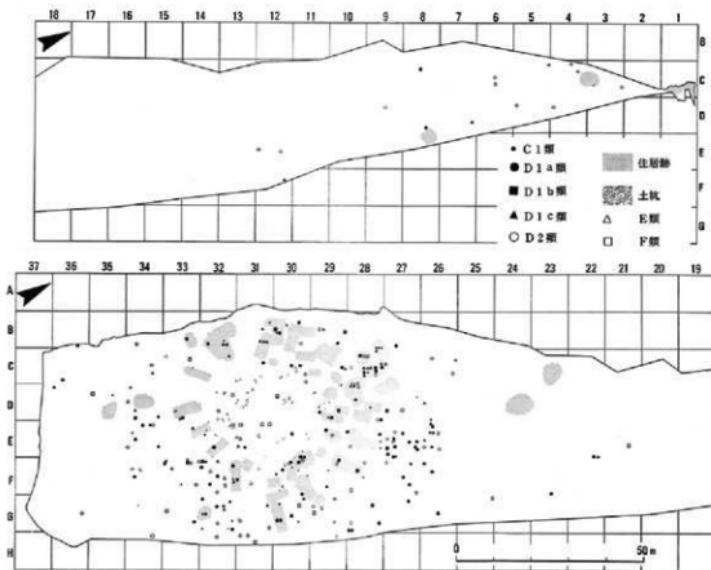
H類(424~432) 上記の分類に含まれない分類不可である。風化が激しく、打製石斧と認定し得るだけのもの、破損後に刃部を再生しているもの、ほとんど無加工のもの等、多様な形状を示す。

表40 打製石斧分類別出土数

遺構 分類	住居跡	大型 フラスコ 状土坑	小型 フラスコ 状土坑	トラップ ビット	土 坑	その他の 遺構	その他の ビット	遺構外	合計
A 1 a類	38						5	137	180
A 1 b類	36	1	1	1	1		3	80	123
A 2類	9							26	35
A類小計	83	1	1	1	1		8	243	338
B 1類								2	2
B 2類	7		1					16	24
B類小計	7		1					18	26
C類	12	1			1			15	29
D 1 a類	8							40	48
D 1 b類	9							23	32
D 1 c類	19	1	2	1	1		1	27	52
D 2類	8						1	49	58
D類小計	44	1	2	1	1		2	139	190
E類								15	15
F類								9	9
G類								1	1
H類	5							27	32
破損品・破片	43	3	2			1	2	196	247
合計	194	6	6	2	3	1	12	663	887



第44図 打製石斧A・B類出土分布図



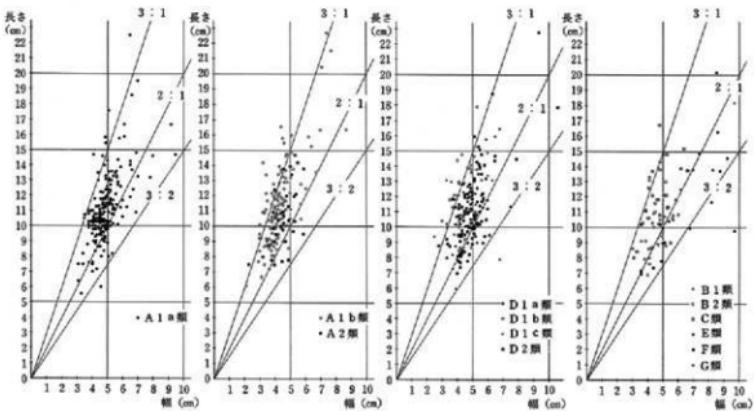
第45図 打製石斧C・D・E・F類出土分布図

分類別出土数と出土分布状況 表40・第44・45図参照。総数892点出土するが、出土地点の違うものが接合しているのが5点存在するため実数は887点である。実数887点のうち、遺構内224点(25%)、遺構外663点(75%)である。遺構内出土のものは、87%が住居跡出土である。分類別では出土数の少ないものを除き、全体的傾向に一致する。個々の遺構・小グリッドごとでは、7A号住居跡11点、7C号住居跡12点、8A号住居跡15点、9B号住居跡11点、28号住居跡13点で出土数の多さが目立つ。これ以外で複数出土は、遺構で31遺構、小グリッドで128地点であるが、特殊な出土状況を示すものは存在しない。

調査区全体の出土分布状況を見ると、環状集落及びその外側からの出土が多く、中でも集落の西側を除く部分に集中する。分類別では、E類(分鋼形)が遺物のはほとんど出土しない環状集落の内側から5点(33%)も出土しているのが注目される。また、D2類の8点(14%)、F類の3点(33%)が環状集落か遠く離れた北東部からの出土が目立つ。これ以外は分類別の片寄りが認められず、全体的傾向に一致する。

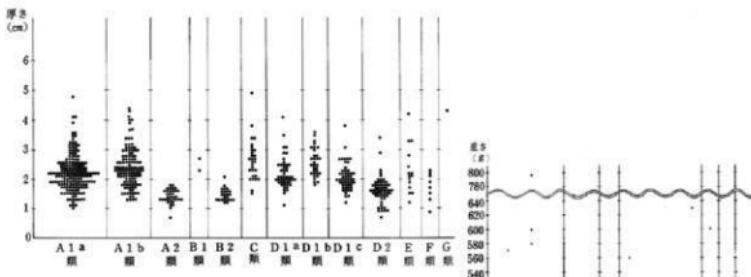
長さと幅 第46図参照。完形品・略完成品・接合完形品とした640点のうち、639点¹⁾を対象とする。全体的に見ると長さ約8.5cm~13.0cm・幅約3.5~5.5cm・長幅比3:1~2:1前後にかけて集中する。しかし、これ以上・以下の大きさのものや、長幅比からずれるものも少なからず存在する。分類別に見ると、A1a類はA1b類より、D1a類はD1b類・D1c類より幅が広い傾向にある。分類基準の搬形と短冊形を反映している。また、出土数は少ないが、E類(分鋼形)は大型で幅広のもの、F類(石窓状のもの)は小型のものが多い傾向にある。出土数の多いA類とD類は、両者間に大きさの違いは認められない。

厚さ 第47図参照。A類~G類までの608点のうち、607点²⁾を対象とする。全体的に見ると約1.0~4.0cmにはほとんど含まれ、中でも約1.5~2.5cmに集中分布する。分類別では、分類基準の素材の厚さを反映し、A1類・B1類・C類・D1類は厚手、A2類・B2類・D2類は薄手である。また、F類は出土数は少ないが、薄手のものが多い。



第46図 打製石斧長幅分布図

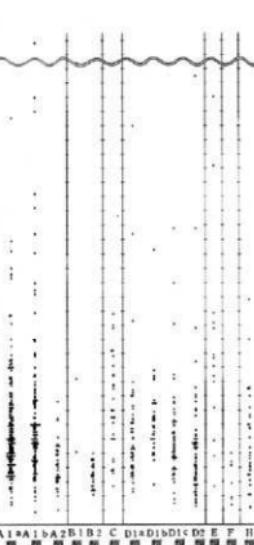
1) F類に1点、破損品があり、分析を除外した。
2) 1)の理由による。



第47図 打製石斧厚さ分布図

表41 打製石斧石材表

石材	頁岩I	頁岩II	珪質頁岩	粘板岩	砂岩	砂岩	泥板岩	微細泥板岩	合計
A 1 a 種	67	97	4	3	8	1			180
A 1 b 種	52	65	1		2	3			123
A 2 種	10	16			6	2	1		35
A種小計	129	178	5		11	13	2		336
B 1 種	1	1							2
B 2 種	14	9			1				24
B種小計	15	19			1				26
C 種	7	14	4		2	2			29
D 1 a 種	17	25			4	2			48
D 1 b 種	19	12			1				32
D 1 c 種	16	39			8	1			52
D 2 種	23	26			9				58
D種小計	75	93			19	3			199
E 種	6	8			1				15
F 種	3	4	2						9
G 種								1	1
H 種	11	16			2	3			32
硬岩片	90	136	1		16	2	1	1	247
合計	333	458	14	2	62	23	5	1	887



第48図 打製石斧重量分布図

重さ 第48図参照。A類～F類までの607点のうち、606点¹⁾を対象とする。大きさ・厚さを反映し20g程度のものから500g以上の様々な重さのものが存在するが、全体的に見ると約50g～180gに多く分布する。分類別では分類基準の素材の厚さを反映し、A 2類・B 2類・D 2類が軽いものが多い。また、F類は長さ・幅・厚さを反映し、重いものが多い。

石材 表41参照。実数887点を対象とする。頁岩II 458点(52%)・頁岩I 333点(38%)が多く用いられ、两者で90%を占める。次いで粘板岩52点(6%)が少数用いられている。同じ頁岩系でも硬質頁岩14点(2%)、珪質頁岩2点(0.2%)は非常に少ない。石錐・石錐・石匙・ビニス・エスキーネ・不定形石器等の小型剝片石器の頁岩系石材の使用状況とは異なり、打製石斧とこれらの小型剝片石器とは明らかに石材選択の違いが認められる。打製石斧の刃部形状(小型剝片石器ほど鋭い刃部を必要としない)、衝撃に対する強さ(頁岩I・IIがねばり強く?)、硬質頁岩・珪質頁岩は硬いがもろいと考えられる)、素材の得やすさ(石器・剝片・石核を見る限り、頁岩I・IIは大礫が多く存在するが、硬質頁岩・珪質頁岩は少ないように感じられる)の違いと考えられる。

分類別では、粘板岩がA 2類 6点(17%)・D 2類 9点(15%)でやや多く使用されている。2類はいずれ

1) 前ページ1)の理由による。

も素材が薄手のため、用いられたものと考えられる。

F類(石籠に近似するもの)は、出土数は少ないながら、頁岩II・硬質頁岩・珪質頁岩で占められ、他の打製石斧の石材選択と異なる。硬質・緻密な石材を用いたためと考えられる。これ以外は、ほぼ同様の石材選択であり、出土数の多いA類とD類は両者間に違いが認められない。

素材 表42・43参照。素材は次ぎの基準で4種類に分けた。

○縦長剥片 主要剥離面を残し、打点が基端または刃

○横長剣片 主要剣頭面を残し、打点が側縁側にあつたと考えられるもの。

表42 打製石斧素材表

素材 分類	綫長	横長	石板	磚	不明	合計
A 1 a 類	80	73			27	180
A 1 b 類	52	55	1		15	123
A 2 類	13	20			2	35
A類小計	145	148	1		44	338
B 1 類	1	1				2
B 2 類	9	11			4	24
B類小計	10	12			4	26
C 類	6	7	5		11	29
D 1 a 類	9	21	2		16	48
D 1 b 類	3	4	13		12	32
D 1 c 類	10	14	2		26	52
D 2 類	12	26			20	58
D類小計	34	65	17		74	190
E 類	3	5	1		6	15
F 類	1	4			4	9
G 類				1		1
H 類	12	10	1		9	32
合計	211	251	25	1	152	640

表43 打製石斧自然而集計表

4 遺 前 物

○石核 主要剝離面がなく、自然面が極めて少ないもの。

○礫 正・裏面に自然面を多く残すもの。

A類～H類までの640点を対象とする。素材の判断できたのは488点で、このうち縦長剝片211点(43%)、横長剝片251点(51%)で横長剝片がやや多く、剝片が462点(95%)を占める。残りは石核24点(5%)、礫1点である。分類別では石核素材がC類5点(28%)・D1 b 13点(65%)で多く、他分類と異なる。また、A1 a類は縦長剝片が多く、D1 a類・D2類は横長剝片が縦長剝片の2倍以上存在する。さらに片面加工(A類・B類)より、両面加工(C類・D類)の方が横長剝片を多く使用する傾向にある。

打面の位置を見ると、縦長剝片では基礎側に極めて多く、横長剝片では左側面と右側面ではほぼ同数である。

また、自然面の残存状況を観察すると640点のうち、自然面を残すものは419点(65%)、ないものは100点(16%)、風化により不明のもの121点(19%)で、自然面を残すものが多い。自然面を残すものは6点を除き、正面及び正面周辺部に自然面を残すものである。さらに遺存部位を観察すると、刃部と基端では基礎に自然面を残すものが多い。これは縦長剝片の場合基礎に打面が極めて多いこと、刃部は使用により剝離(破損)されていくことに関係するものと思われる。また、右側面と左側面では数は少ないがほぼ同数であり、横長剝片の打面の位置が右側面と左側面がほぼ同数であったことと一致する。

いずれにしても、このように片面に自然面を残すものが多いことは、素材を作り出す原石は、成品に比べそれほど、大きくなきものを用い、これを主に2分割し素材を得たものと推定される。

遺存状態 表44参照。実数887点のうち、破損しているもの(接合完形品10点・F類1点・破損品・破片)は258点(29%)である。分析では破損品・破片とした247点を対象とし、接合完形品とF類の1点は含めていない。遺存部分と破損の仕方についての基準は第49図のことおりである。

破損部分については、ほぼ中央で破損したもの(B・B')が96点(39%)で最も多く、次いで刃部側で破損したもの(C・C')が71点(29%)である。基端側で破損したもの(A・A')は63点(26%)でやや少ない。また、少數ながら縦方向に破損したものの(D・D')は9点、刃部と基端の両方が破損したものの(E)は3点、薄く破損(剥落)したものの(F)は5点存在した。

遺存部分を見ると、基礎側を残すもの(A・B・C・D)が145点(59%)、刃部側を残すもの(A'・B'・C'・D')が94点(38%)である。基礎側が多いのは、集落外で使用し、破損した時、着柄した柄とともに持ち帰った。



第49図 打製石斧遺存部分と破損の仕方模式図

種類 分類	A 1	A 2	A 3	A' 1	A' 2	A' 3	B 1	B 2	B 3	B' 1	B' 2	B' 3	C 1	C 2	C 3	C' 1	C' 2	C' 3	D	D'	E	F	合計
破損品・破片	14	14	1	17	13	4	16	32	6	22	14	6	11	32	16	5	6	1	3	6	3	5	247
	A計	29		A'計	34		B計	54		B'計	42		C計	59		C'計	12		—	—	—	—	
	AA計	63		BB計	96								CC計	71		DD計	9		—	—	—	—	247

表44 打製石斧遺存部分と破損の仕方集計表

1) これらの分類には()付きの石核が多くあり、主要剝離面が除去されているが、剝片素材であった可能性も否定できない。

たためと推定される。しかし、刃部側の破損品もかなり存在することは集落内の使用も頻繁であったものと思われ、それは接合完形品が10点出土したことからも裏づけられる。

破損の仕方（折れ方）は、長軸方向に対し横に折れたもの85点（34%）、斜めに折れたもの111点（45%）、複雑に折れたもの34点（14%）で、横や斜めに折れたものが約8割を占める。

刃部平面形 表45参照。A～H類までの640点を対象とする。使用の結果による変形も考えられるが第50図の模式図をもとに分類した。全体的に見ると円刃393点（61%）、偏円刃133点（21%）が多く、直刃58点（9%）、偏直刃22点（3%）が少ない。他に尖頭状のものが7点あり、不明は判断しかねるものである。

分類別では、E類（分銅形）は出土数が少ないながら円刃は8割を占め、偏円刃を含めると9割以上を占めるのが注目される。これ以外ではほぼ全体的傾向に一致する。

刃部断面形 表46参照。刃部平面形と同じく使用による変形も考えられるがA～H類の640点を対象とする。全体的に見ると片刃440点（69%）が多く、両刃191点（30%）が少ない。

分類別ではA・B・C類とD・E・F・G類では大きく異なる。前者は片刃が圧倒的に多く、A1類では約90%が片刃で占められる。しかも、完成時は片刃で、使用の結果、両刃になったと考えられるものが少なからず認められる。後者は両刃が多く、D2類は約70%、E類は約80%を占める。この違いはA・B類が片面加工、C類は正面の二次加工が急角度削離、裏面が極めて浅角度削離で片面加工的であるのに対し、D類は両面加工、E・F・G類も両面加工が極めて多いことによる。この他、素材の厚さを見ると1類（厚手）のものが2類（薄手）のものより片刃が多い傾向が見られる。いずれにしろ、片面加工のA・B類、正面の二次加工が急角度削離のC類の多くは、片刃を意識的に作り出していると推定される。



第50図 打製石斧刃部平面形模式図

分類	円刃	直刃	偏円刃	偏直刃	尖頭状	不明	合計
A 1 a類	100	22	41	9	1	7	180
A 1 b類	74	7	30	5	1	6	123
A 2 類	20	3	10		1	1	35
A類小計	194	32	81	14	3	14	338
B 1 類	2						2
B 2 類	15	2	6			1	24
B類小計	17	2	6			1	26
C 類	21	1	4	1	1	1	29
D 1 a類	28	6	11	3			48
D 1 b類	23	2	5			2	32
D 1 c類	35	6	7	1	1	2	52
D 2 類	40	7	8	2		1	58
D類小計	126	21	31	6	1	5	190
E 類	12		2	1			15
F 類	6	1	1			1	9
G 類	1						1
H 類	16	1	9		2	4	32
合 計	393	58	134	22	7	26	640

表45 打製石斧刃部平面形表

分類	両刃	片刃	不明	合計
A 1 a類	21	157	2	180
A 1 b類	10	113		123
A 2 類	9	24	2	35
A類小計	40	294	4	338
B 1 類	1	1		2
B 2 類	5	19		24
B類小計	6	20		26
C 類	8	21		29
D 1 a類	22	25	1	48
D 1 b類	19	13		32
D 1 c類	25	27		52
D 2 類	41	17		58
D類小計	107	82	1	190
E 類	12	3		15
F 類	5	3	1	9
G 類	1			1
H 類	12	17	3	32
合 計	191	440	9	640

表46 打製石斧刃部断面形表

4 遺物

表47 打製石斧刃部使用痕表

種類 分類	磨耗 光沢 剥離 削離 つぶれ 縫合 光沢 剥離 つぶれ 縫合 磨耗 光沢 剥離 つぶれ 縫合 磨耗 光沢 剥離 つぶれ 縫合 合計
A 1 a 種	28 7 2 12 3 5 3 3 2
A 1 b 種	17 7 2 12 2 3 2 1
A 2 種	6 1 3 1 2 2
A 種小計	51 15 4 27 6 7 7 6 2
B 2 種	1
C 種	6 3 1 1 2 1
D 1 a 種	10 5 2
D 1 b 種	3 3 2 1
D 1 c 種	14 4 2 1
D 2 種	14 2 4 2 1 1
D 種小計	41 14 19 3 2 2
E 種	4 2
F 種	7 1
H 種	2
合計	110 34 5 39 19 11 11 6 2 1 1 3 1 27 261

表48 打製石斧基部使用痕表

後側 分類	磨耗 つぶれ 縫合 光沢 剥離 つぶれ 縫合 合計
A 1 a 種	25 1
A 1 b 種	10 1 4 1
A 2 種	3 1
A 種小計	38 2 5 1
B 2 種	1
C 種	6 1 1
D 1 a 種	4 3
D 1 b 種	1
D 1 c 種	8
D 2 種	10 3
D 種小計	23 6
E 種	2 1 1 1
H 種	3 1
合計	72 4 14 2 1 93

使用痕 表47・48参照。A～H類の640点のうち、261点（41%）に刃部の使用痕が認められた。使用痕は1つの石器に複数の種類の使用痕が認められるものが多い。使用痕の種類では、磨耗痕228点、つぶれ痕86点、光沢痕60点、線条痕29点、微細剝離10点である。このように使用痕が多く認められるのは、打製石斧の使用頻度、使われ方（刃部の衝撃が強い）、石材によるものと考えられ、つぶれ、光沢痕、線条痕が多いこと、破損品が多いことからも裏付けられる。

分類別に見ると、E類・C類で使用痕の認められる石器がやや多い以外、ほぼ同様の割合である。しかし、線条痕の29点はすべて長軸方向に平行するものであり、A類が21点を占め、他はB 2類3点、C類1点、D類4点にすぎない。線条痕は刃部の正面に認められるものが27点、両面に認められるものが2点出る。両面に線条痕が認められるのは、D 1 c類・D 2類の各1点で、D 1 c類は正面の線条痕が強く長い。

刃部の使用痕が正面と裏面ではどちらが強く広範囲に認められるかというと、磨耗痕や光沢痕は剝離面では見つけやすいが、自然面とは明確に区別できないこと¹⁾、つぶれや微細剝離では範囲が狭すぎることから明確でなかった。しかし、線条痕を見る限り、A類は明らかに正面の使用痕が裏面より強いといえる。B・C類も出土数が少ないが、その傾向にあると考えられる。

「横斧の使用痕は、斧の主軸に平行する線条痕からなっており、後正面で強く長く、前正面では弱く短い。」（佐原1975）といわれていることから、A類の正面が横斧の後正面（使用者の逆側）、裏面が横斧の前正面に相当するものと考えられ、着柄は後正面片刃横斧（現代の鉈の刃と同様に使用者の逆側に片刃面のあるもの）と推定される。

一方、刃部の反対側の基部や基端にも使用痕が認められるものが640点のうち、93点（15%）存在した。使用痕の種類は磨耗痕、及び光沢痕がほとんどであり、着柄による使用痕と推定される。使用痕は裏面と側面の稜線や二次加工の剝離同士の境に多く、この他に裏面の剝離平坦面もやや目立った。正面側は自然面のものが多く、使用痕として認定しにくいものが多く、やや裏面に比べ少ない。分類別ではC類(28%)、

1) 打製石斧の正面は自然面のものがほとんど、裏面は剝離面のものがほとんどであることから、正面側の使用痕は認めにくいのが一般的であることから、使用痕の強さや広さは判断できない。

D2類(22%)、E類(33%)がやや多い以外、他はほぼ全体的傾向と一致する。

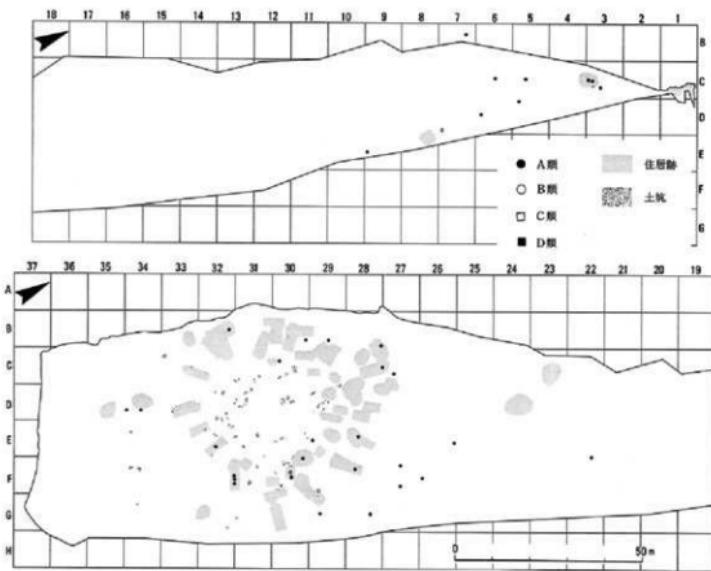
ツブシ 側面の稜線が潰れているツブシは、A~H類の640点のうち、39点(6%)しか存在しなかった。ツブシは片側縁のものと両側縁のものがあり、両者はほぼ同数である。分類別では39点のうち、両面加工のもの(C・D・E・H類)には33点と多く、片面加工のもの(A類)が6点と少ない。なかでも、数は少ないがE類(分鏡形石斧)は最も割合が高く(20%)、全て抉り部に認められたものである。これは形状差が反映したと考えられる。片面加工のものを含め、全体的にツブシが少なかった。しかしツブシとは違い、小さな剣離が集中するものが多い。着柄を意識した加工と思われる。

その他 340・345・354・373・380・390・424・431・432のように刃部欠損後、新たに二次加工を加え、刃部を再生したものが22点(A1a類5点・A1b類7点・C類2点・D1a類2点・D1b類1点・D2類1点・H類4点)あった。また、320・340・345・373のように刃部平面形とは別に刃縁を鋸齒状に仕上げているものが12点(A1a類4点・A1b類3点・A2類1点・C類1点・D1c類3点)ある。

418・419はF類の中では平面形がやや細身で異なり、風化もやや進んでいることから、中期以前の所産と推定される。

i) 磨製石斧(433~459)

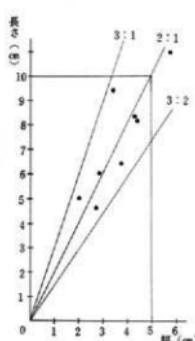
敲打・剥離等により成形し、研磨を加えて仕上げられた斧形石器である。調査区からは総数37点出土しているが、この中には縄文時代中期以前の所産と考えられる局部磨製石斧2点、石製品ともされる玉斧1点が含まれる。したがって、縄文時代の一般的な磨製石斧は34点で、石器器種の0.6%で極めて低い比率である。なお、分析には局部磨製石斧、玉斧も少数のため、併行して記述してある。



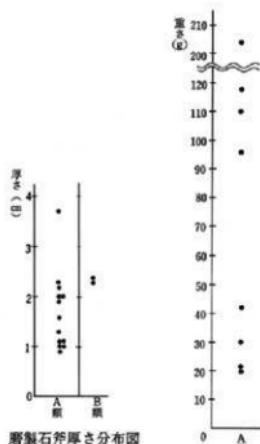
第51図 磨製石斧出土分布図

表49 磨製石斧分類別出土数

分類	住居跡		その他の ビット	遺構外	合計
	A類	B類			
A類	9	1		22	32
B類	1			1	2
合計	10	1		23	34
C類				1	1
D類				2	2

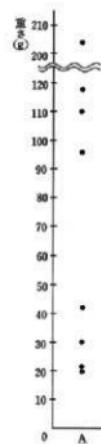


第52図 磨製石斧長幅分布図



第53図 磨製石斧厚さ分布図

第54図 磨製石斧重量分布図



分類 形状で4分した。

A類(433~454) 定角式磨製石斧。正裏面と側面に棱を持ち、基部断面形が長方形または隅丸長方形を呈するもの。

B類(455~456) 乳棒状磨製石斧。正裏面と側面に棱がなく、基部断面形が梢円形のもの。

C類(457) 玉斧。基部が穿孔されている石製品。

D類(458・459) 局部磨製石斧。旧石器時代の所産と考えられる。

分類別出土数と出土分布状況 表49・第51図参照。34点のうち、遺構内11点(32%)、遺構外23点(68%)で、遺構内のものは1点を除き、全て住居跡からのものである。分類別ではA類が32点(94%)で、B類は2点(6%)にすぎず、定角式磨製石斧が主体を占める。

個々の遺構・小グリッドごとでは、1号住居跡より2点、2号住居跡及び同ビットより合わせて3点出土しているが、特殊な出土状況を示すものではない。他は単独出土である。1号住居跡は中期後半の土器の出土した住居跡であることから、磨製石斧も同時期と考えられる。

調査区全体の出土分布状況は、環状集落の東半部およびその外側からの出土がやや多く、また、3列~6列グリッドにかけても若干分布する。1点出土のC類(玉斧)は環状集落の29-F-20グリッド、D類(局部磨製石斧)は環状集落外の27-F-14、5-C-18グリッドよりそれぞれ出土している。

長さと幅 第52図参照。完形品・略完形品の8点を対象とするが、完形品・略完形品の比率が24%と低く、中型品・小型品に完形品が多いため、必ずしも全体の傾向を反映していない。全てA類である。長さ約4.5~8.5cm・幅約2.0~4.5cm、長幅比2:1前後を中心に分布する。

厚さ 第53図参照。出土数が少ないため、完形時の厚さと認められる、A類14点、B類2点を対象とする。1点を除き、0.8cm~2.4cmに分布する。数は少ないがB類はA類より厚手である。

重さ 第54図参照。完形品・略完形品の8点を対象とする。前述のように対象数が少なく、磨製石斧の全体的傾向を示すものではないが、50g以下のものと90g以上のもの、200g以上のものがあり、小型品・中型品・大型品に相当すると思われる。

表50 磨製石斧石材表

石材 分類	蛇紋岩	緑泥千板岩 緑泥片岩	頁岩II	硬質頁岩	不 明	合 計
A類	25	3	2		2	32
B類		2				2
合計	25	5	2		2	34
C類	1					1
D類			1	1		2



第55図 磨製石斧刃部断面形模式図

表51 磨製石斧遺存部分と破損の仕方集計表

種類 分類	A 2	A 3	A' 1	A' 2	B 1	B 2	B 3	B' 2	C 1	C 3	C' 1	C' 2	C' 3	D'	E	不明	合計
A類	1	2	2		1	1	1		1	4	1	3	3	2		2	24
B類				2													2
合計	1	2	4		1	1	1		1	4	1	3	3	2		2	26
C類								1									1
D類				1										1			2

石材 表50参照。A類・B類の34点のうち、蛇紋岩25点(74%)を占め、次いで緑泥片岩・緑泥千板岩が5点(15%)である。いずれも、硬さはやや軟質かもしれないが、割れ面を見る限り繊維を束ねたような石質で、折れにくく粘り強い石材である。蛇紋岩は本遺跡周辺では採集されず、本県糸魚川地方から搬入されたものと推定され、しかも、本遺跡からは、蛇紋岩原石・未完成品・剝片・チップ等が出土していないことから、完成品または完成品に近い形のものを搬入したものと思われる。

分類別では蛇紋岩は全てA類で、B類は2点とも緑泥片岩である。

なお、C類は蛇紋岩、D類の2点は頁岩II・硬質頁岩である。

遺存状態 表51参照。A類・B類34点のうち、破損品・破片が26点(76%)を占め、他器種に比べ著しい破損率を示す。遺存部分と破損の仕方の観察は第49図の打製石斧と同じである。

26点のうち、破損部分は刃部側で折れたもの(C・C'・D')が14点(54%)で、基端側や、ほぼ中央で折れたもの(A・A'・B・B')10点(38%)より多い。遺存部分では、基端側が遺存するもの(A・B・C)11点(42%)、刃部側が遺存するもの(A'・B'・C'・D')13点(50%)で、ほぼ同数であり、打製石斧のように基部側の破片が多いとは、大きく異なる。

このように、破損品・破片が1点も接合しないにもかかわらず、刃部側の破損品・破片が多く出土することは、集落外で使用し破損しても、刃部を集落内に持ち帰ったものと推定される。それは石材が希少なこと、破損品の再利用(研磨)が多いことからも裏付けられる。

分類別ではB類は2点とも基端側が欠損し、しかも蔽打状の痕跡も認められることから、楔またはタガネとしての用途も考えられる。

破損の仕方は長軸に対し横方向に折れたもの7点(27%)、斜め方向に折れたもの5点(19%)、複雑に折れたもの10点(38%)で複雑に折れたものがやや多い。また、多くの場合は、折れ面がザラザラしている。使用石材の石質の反映と言えよう。なお、C類は孔部分で折れており、D類は刃部側で折れているが、1点は刃部もかなり欠損している。

4 造物

表52 磨製石斧刃部平面形表

形分類	円刃	直刃	偏円刃	不明	合計
A類	13	1	3	15	32
B類	2				2
合計	15	1	3	15	34
C類	1				1
D類	1			1	2

表53 磨製石斧刃部断面形表

形分類	両凸刃	弱凸強凸刃	両平刃	不明	合計
A類	16	5	1	10	32
B類	2				2
合計	18	5	1	10	34
C類		1			1
D類	1			1	2

表54 磨製石斧使用痕表

種別分類	磨耗	光沢	並列剥離	つぶれ	磨耗・光沢	磨耗・つぶれ	磨耗・線条痕	磨耗・光沢・並列剥離	磨耗・光沢・つぶれ	磨耗・光沢・線条痕	光沢・つぶれ	合計
A類	2	1	2	3	8		1	2		1	1	21
B類						1			1			2
合計	2	1	2	3	8	1	1	2	1	1	1	23
C類										1		1

刃部平面形 表52参照。A類・B類の34点のうち、観察可能なものは19点である。円刃15点(79%)が多く、直刃1点(5%)は少ない。偏円刃が3点(16%)認められる。C類は円刃、D類は1点の不明を除き、円刃である。

刃部断面形 第55図・表53参照。A類・B類の34点のうち、観察可能なものは24点である。両凸刃18点(75%)が多く、弱凸強凸刃5点(21%)は少ない。両平刃が1点(4%)認められる。弱凸強凸刃は5点であるが、全てA類であり、しかも小型品に多い傾向にある。

なお、C類の1点は弱凸強凸刃、D類のうち1点は両凸刃である。

使用痕 表54参照。A類・B類の34点のうち、23点に使用痕が認められた。これは、破損品を含め、刃部側が遺存するほとんどに使用痕が認められた数である。使用痕の多くは磨耗痕及び光沢痕である。A類で線条痕が認められるものが2点あった。1点は長軸方向と同じ方向で小型品、1点は斜め方向で刃部のみ遺存するが、大型品と推定される。

C類は、玉斧であるが、使用痕が認められ、実際に使用されたものである。しかも、線条痕は長軸方向と同じ方向である。

その他 破損後、再研磨が行なわれたり、再生品として利用されているものが4点あった。完形品が少ないと合わせて、磨製石斧の使われ方に注目されるが、それは、前述のように石材の希少性や製作に時間がかかることによるものと考えられる。

j) 積器類(460~474)

積または大型で厚手の剝片の一部に片面からあるいは両面から、二次加工を加え、刃部を作り出した石器である。平面形は不定形を呈するが、不定形石器とは大きさ・厚さから明らかに区別される。しかし、石核との区別が明確でないものもある。总数77点出土し、石器種の1.3%を占める。

分類 表55参照。まず素材で2分した。

A類(460~466) 積素材のもの。A類は二次加工でさらに2分される。

1類(460~462) 片面加工のもの。片刃がほとんどである。

2類(463~466) 両面加工のもの。両刃がほとんどである。

B類(467~474)大型で厚手の素材のもの。B類は二次加工でさらに2分される。

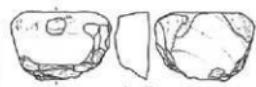
1類(467~469)片面加工のもの。片刃がほとんどである。

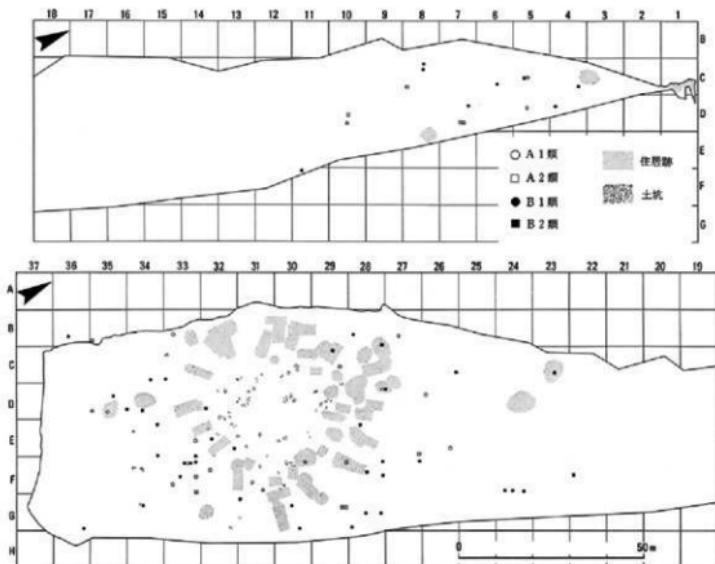
2類(470~474)両面加工のもの。両刃がほとんどである。

分類出土数と出土分布状況 表56・第56図参照。総数77点のうち、遺構内9点(12%)、遺構外68点(88%)で、遺構外出土の比率が他器種に比べ多い。分類別ではB2類25点(32%)、次いでB1類24点(31%)が多く、大型で厚手の剝片を素材とするもの(B類)が64%を占める。また、両面加工のもの(2類)は42点(55%)で、片面加工のもの(1類)35点(45%)よりやや多い。

個々の遺構・小グリッドごとでは、33-F-6グリッド3点、10A号住居跡・5-C-10グリッドP2・

表55 碓器類分類表

素 材	二次加工	分類	
A類 砂	1類 片面加工	A1類	
	2類 両面加工	A2類	
B類 大型で厚手の剝片	1類 片面加工	B1類	
	2類 両面加工	B2類	



第56図 碓器類出土分布図

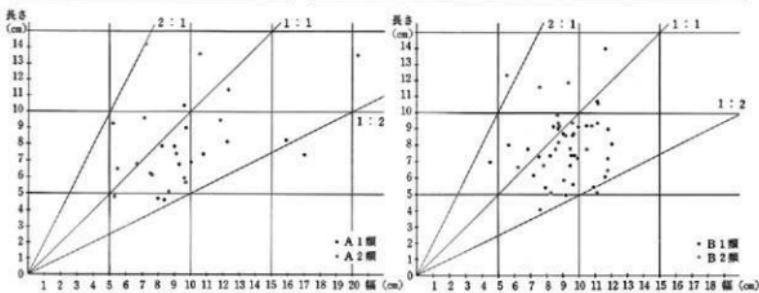
4 遺物

表56 硬器類分類別出土数

遺構別 分類	住居跡	その他の ピット	遺構外	合計
A 1 類	3	1	7	11
A 2 類	1		16	17
B 1 類	1		23	24
B 2 類	2	1	22	25
合計	7	2	68	77

表57 硬器類石材表

石材 分類	頁岩 I	頁岩 II	硬質頁岩	微細斑 構岩	粘板岩	不 明	合 計
A 1 類	4	7					11
A 2 類	3	5	4	3	1	1	17
B 1 類	5	18	1				24
B 2 類	4	17	2		1	1	25
合計	16	47	7	3	2	2	77



第57図 硬器類長幅分布図

7-D-14グリッド・29-G-2グリッドで各2点の出土であるが、特殊な出土状況を示すものではない。

調査区全体の出土分布状況は、環状集落の外側に多く分布するが、内側及び集落の西側からはほとんど出土していない。また、調査区北東寄りの4列～10列グリッドにかけても分布が目立つ。分類別に片寄った分布は認められず、全体的傾向に一致する。

長さと幅 第57図参照。完成品と未完成品の区別が困難なため、全て完成品として取り扱い、総数77点を対象とする。また、計測は刃部を下に置き計測した。全体的に見ると、長さ約5～10cm、幅7～12cm、長幅比1:1～1:2に多く分布し、横長の傾向が見られる。分類別ではほぼ同様の分布を示すが、B類がA類に比べ、やや集中分布の傾向がある。

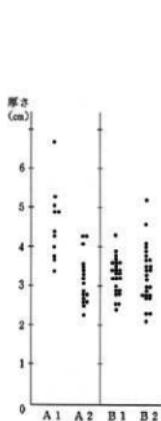
厚さ 第58図参照。総数77点を対象とする。約2.5～4.5cmに多く分布する。分類別では、A1類が約3.5～5.5cmにやや多く分布し、他分類とは大きく異なる。

重さ 第59図参照。総数77点を対象とする。約100～700gにはほとんど分布するが、400g以下のものが多い。分類別ではA1類が重い傾向にあり、A2類がやや軽い傾向にある。

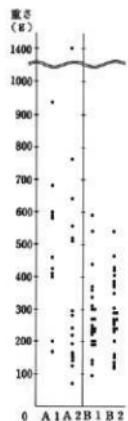
石材 表57参照。総数77点のうち、頁岩II47点(61%)が最も多い。次いで頁岩I16点(21%)・硬質頁岩7点(9%)で、頁岩系が70点(91%)を占める。分類別ではA2類が他分類より、石材選択の幅があり、磨石類以外の器種ではほとんど使用されていない微細斑構岩が3点存在するのが目立つ。これ以外では、石材選択の違いは認められない。

素材 分類基準に素材の違いを求めたため、当然のことながら、A類は砾(3点の石核を含む)、B類は剥片である。A類は扁平砾が大半を占め、円砾がやや多い。しかし、角砾も若干認められる。B類は49点のうち、縦長剝片9点、横長剝片25点で、横長剝片が多く用いられている。これは、前述の長幅分布にはほぼ一致する。

また、自然面を見ると、自然面無しは4点(B類1点・B2類3点)と非常に少ないのは、石器自体が大



第58図 砥器類厚さ分布図



第59図 砥器類重量分布図

表58 砥器類使用痕表

種類 分類	つぶれ	つぶれ ・磨耗	つぶれ ・表面剥離	磨 耗	表面剥離	磨耗 ・光沢	合 計
A 1 類	2	4	1				7
A 2 類	1			1	1		3
B 1 類	5	2				1	9
B 2 類	11	3	1				15
合 計	19	9	1	1	1	1	34

きいこと、二次加工が刃部を中心に行なわれ、全面に剝離が及ばないことによるためと考えられる。

使用痕 表58参照。総数77点のうち34点に使用痕が認められた。このうち、つぶれが認められるものは29点(85%)ある。このように、つぶれが多く認められるものは、他器種に存在しない。使用痕から、砥器類は切るよりも、敲打の機能が主体だったようと思える。

その他 断折がB1類に10点、B2類に7点認められた。

k) 磨石類 (475~572)

穂の表面に残された痕跡を下記の3種類に規定し、これらの痕跡のいずれかが認められる石器を磨石類とした。従来、磨石・凹石・敲石と呼称されていた石器に相当する。

磨痕 正裏面または側面にある程度の広がりの磨耗が認められるもの。磨耗面は滑らかなものからザラザラしたものまである。また、磨耗面が平均的なものから曲面的なものまであるが、内縁(凹面)しない。

凹痕 正裏面に残された敲打状の痕跡である。明確に凹痕を呈するもの、浅い凹痕のもの、凹凸に器面が荒れているものがある。また、凹痕が狭い範囲にあるものから比較的広い範囲にあるものまであるが、正裏面のほぼ中央を中心とした位置にあるのが多い。

敲打痕 側面や端部に残された敲打状の痕跡である。痕跡は凹凸状に器面が荒れているものが一般的で、凹痕状になるものは極めて少ない。

これらの痕跡の認められた石器は、総数1392点出土している。しかし、接合したものがあり、実数は1372点である。これは、不定形石器に次いで多い数であり、石器器種の22.8%の比率を示す。

分類 表59参照。まず、石器の表面に残されている磨痕・凹痕・敲打痕の組み合わせにより7分類し、さらに各分類内で、磨痕の認められるものは磨痕の位置、敲打痕の認められるものは敲打痕の位置により細分した。この他に、「特殊磨石」に近似するものを1分類加えた。

A類 (475~483) 磨痕だけのもの。A類は磨痕の位置により3分される。

1類 (475~480) 磨痕が正裏面のいずれかに位置するもの。

4 遺物

2類 (481) 磨痕が側面に位置するもの。

3類 (482・483) 磨痕が正裏面のいずれかと側面に位置するもの。

B類 (484~496) 磨痕と凹度が認められるもの。B類は磨痕の位置により3分される。

1類 (484~491) 磨痕が正裏面のいずれかに位置するもの。

2類 (492) 磨痕が側面に位置するもの。

3類 (493~496) 磨痕が正裏面のいずれかと側面に位置するもの。

C類 (497~501) 磨痕と敲打痕が認められるもの。C類は磨痕と敲打痕の位置により、5分される。

1a類 (497) 磨痕が正裏面のいずれかに位置し、敲打痕が端部に位置するもの。

1b類 (498) 磨痕が正裏面のいずれかに位置し、敲打痕が側面に位置するもの。

1c類 (499) 磨痕が正裏面のいずれかに位置し、敲打痕が端部と側面に位置するもの。

3a類 (500) 磨痕が正裏面のいずれかと側面に位置し、敲打痕が端部に位置するもの。

3b類 (501) 磨痕が正裏面のいずれかと側面に位置し、敲打痕が側面に位置するもの。

D類 (502~528) 磨痕と凹度と敲打痕の全てが認められるもの。D類は磨痕の位置と敲打痕の位置により、8分される。

表59 磨石類分類表

使用痕の組合せ	磨痕の位置	敲打痕の位置	分類	備考
A類 磨痕	1類 正裏面	——	A 1類	
	2類 側面		A 2類	
	3類 正裏面+側面		A 3類	
B類 磨痕+凹度	1類 正裏面	——	B 1類	
	2類 側面		B 2類	
	3類 正裏面+側面		B 3類	
C類 磨痕+敲打痕	1類 正裏面	a類 端部	C 1a類	
		b類 側面	C 1b類	
		c類 端部+側面	C 1c類	
	2類 側面	a類 端部	C 2a類	出土せず
		b類 側面	C 2b類	出土せず
		c類 端部+側面	C 2c類	出土せず
	3類 正裏面+側面	a類 端部	C 3a類	
		b類 側面	C 3b類	
		c類 端部+側面	C 3c類	出土せず
D類 磨痕+凹度+敲打痕	1類 正裏面	a類 端部	D 1a類	
		b類 側面	D 1b類	
		c類 端部+側面	D 1c類	
	2類 側面	a類 端部	D 2a類	
		b類 側面	D 2b類	
		c類 端部+側面	D 2c類	出土せず
	3類 正裏面+側面	a類 端部	D 3a類	
		b類 側面	D 3b類	
		c類 端部+側面	D 3c類	
E類 凹痕	——	——	E類	
F類 凹痕+敲打痕	——	a類 端部	F a類	
		b類 側面	F b類	
		c類 端部+側面	F c類	
G類 敲打痕	——	a類 端部	G a類	
		b類 側面	G b類	
		c類 端部+側面	G c類	
H類 「特殊磨石」に近似するもの	——	——	H類	

- 1 a類 (502~505) 磨痕が正裏面のいづれかに位置し、敲打痕が端部に位置するもの。
- 1 b類 (506~508) 磨痕が正裏面のいづれかに位置し、敲打痕が側面に位置するもの。
- 1 c類 (509~513) 磨痕が正裏面のいづれかに位置し、敲打痕が端部と側面に位置するもの。
- 2 a類 (514) 磨痕が側面に位置し、敲打痕が端部に位置するもの。
- 2 b類 (515) 磨痕が側面に位置し、敲打痕が側面に位置するもの。
- 3 a類 (516~519) 磨痕が正裏面のいづれかと側面に位置し、敲打痕が端部に位置するもの。
- 3 b類 (520~523) 磨痕が正裏面のいづれかと側面に位置し、敲打痕が側面に位置するもの。
- 3 c類 (524~528) 磨痕が正裏面のいづれかと側面に位置し、敲打痕が端部と側面に位置するもの。

E類 (529~539) 凹痕だけのもの。

F類 (540~553) 凹痕と敲打痕が認められるもの。F類は敲打痕の位置により3分される。

- a類 (540~545) 敲打痕が端部に位置するもの。
- b類 (546~549) 敲打痕が側面に位置するもの。
- c類 (550~553) 敲打痕が端部と側面に位置するもの。

G類 (554~564) 敲打痕だけのもの。G類は敲打痕の位置により3分される。

- a類 (554~557) 敲打痕が端部に位置するもの。
- b類 (558~560) 敲打痕が側面に位置するもの。
- c類 (561~564) 敲打痕が端部と側面に位置するもの。

H類 (565~569) いわゆる「特殊磨石」と呼称されているものに近似し、三角柱・四角柱・厚みのある椎円柱状の砾(側面)に磨痕を持つものである。なお、凹痕・敲打痕と複合するものも一部存在するが、全てH類とした。

分類別出土数と出土分布状況 表60・第60・61図参照。総数1392点のうち、完形品・略完形品1085点、破損品・破片・接合品307点である。出土数が極めて多いこと、破損品・破片・接合品が完形品・略完形品の出土分布状況とほぼ同様なことから、完形品・略完形品を対象とする。

完形品・略完形品1085点のうち、遺構内より314点(29%)、遺構外より771点(71%)出土している。遺構内出土のものの約80%は住居跡からのものである。

分類別ではE類337点(31%)、B類223点(21%)、D類208点(19%)、F類141点(13%)が多く、G類66点(6%)、A類60点(6%)、H類43点(4%)、C類7点(1%)が少ない。使用痕の種類が単独に認められるもの(A・E・G類・H類の一部26点)は489点(45%)、2種類以上認められるもの(B・C・D・F類・H類の一部17点)は596点(55%)で、2種類以上の痕跡が認められるものがやや多い。使用痕別に見ると磨痕のあるもの(A・B・C・D・H類)が541点(50%)、凹痕のあるもの(B・D・E・F類・H類の一部6点)が428点(39%)であり、凹痕のあるものが多い¹⁾。また、それぞれの痕跡の位置を観察すると、磨痕のあるもの541点のうち、正裏面に位置するもの(各類の1類)は354点(65%)、側面に位置するもの(各類の2類・H類の一部42点)は50点(9%)、正裏面と側面の両方に位置するもの(各類の3類・H類の一部1点)は137点(25%)である。敲打痕のあるもの428点のうち、端部に位置するもの(各類のa類・H類の一部3点)は168点(39%)、側面に位置するも

1) 砂の表面に残された痕跡を観察し、器種認定する磨石類では、風化状態・石質等から、使用痕と自然面の区別は凹痕が最も容易であることも一因と考えられる。

4 遺物

の(各類のb類・H類の一部3点)は92点(21%)、端部と側面の両方に位置するもの(各類のc類・H類の一部1点)は168点(39%)である。

個々の遺構・小グリッドごとでは、7A号住居跡25点、7D号住居跡10点、8A号住居跡29点、18A号住居跡10点、21号住居跡14点、28号住居跡14点、41A号住居跡11点で出土数の多さが目立つ。この他、複数出土は遺構で4遺構、小グリッドで92ヶ所存在する。しかし、特殊な出土状況を示すものはなかった。

調査区全体の出土分布状況では、環状集落及びその外側からの出土が多く、中でも集落の西側以外に集中する。また、他石器と同様に集落内側からの出土は極めて少ない。これ以外では、調査区北側の3列~10列グリッドからの出土が多く、環状集落とは関連性の見いだせない24列グリッド以北の磨石は276点(25%)である。このように集落以外の場所からの高い比率は他器種に見られない。

分類別の分布状況では24列グリッド以北の磨石類はH類17点(40%)が多く、次いでE類111点(33%)、A類19点(32%)がやや多く分布する。これ以外はほぼ同様の分布状況を示す。H類(いわゆる特殊磨石)に近

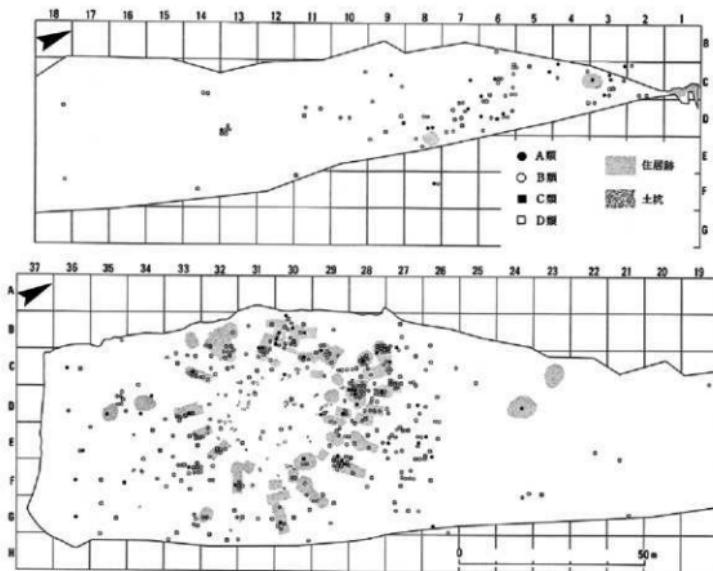
(完形品・略完形品)

表60 磨石類分類別出土数

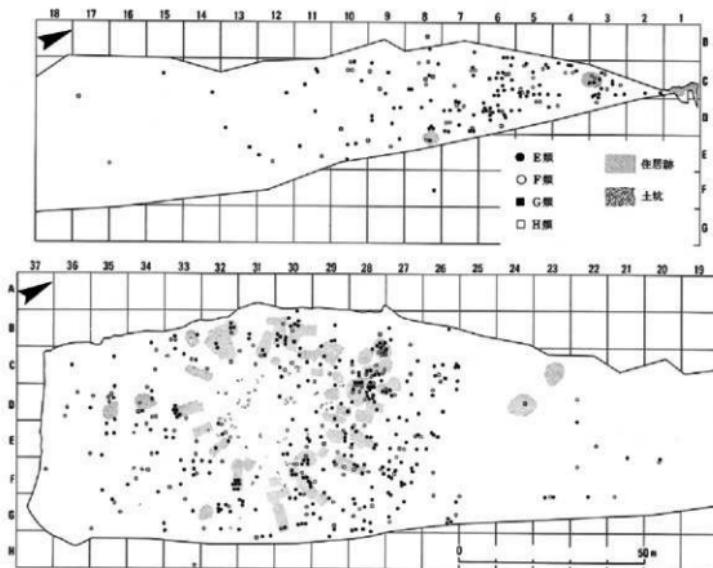
遺構別 分類	住居跡	大型 フラスコ 状土坑	小型 フラスコ 状土坑	トラップ ビット	土 坑	その他の 遺構	その他の ビット	遺構外	合 計
A 1 類	18		1				1	30	50
A 2 類								1	1
A 3 類	3							6	9
A 類 小計	21		1				1	37	60
B 1 類	56	1	4			2	5	118	186
B 2 類								2	2
B 3 類	18							17	35
B 類 小計	74	1	4			2	5	137	223
C 1 a 類	1								1
C 1 b 類								1	1
C 1 c 類	1							2	3
C 3 a 類	1								1
C 3 b 類								1	1
C 類 小計	3							4	7
D 1 a 類	4		2				1	38	45
D 1 b 類	2						2	11	15
D 1 c 類	6		2		1		2	42	53
D 2 a 類	2								2
D 2 b 類								3	3
D 3 a 類	3				1			14	18
D 3 b 類	12							13	25
D 3 c 類	11	1	1			1	3	30	47
D 類 小計	40	1	5		2	1	8	151	208
E 類	55	4	2		4	4	13	255	337
F a 類	13	1					1	52	67
F b 類	7							25	32
F c 類	4		1				1	36	42
F 類 小計	24	1	1				2	113	141
G a 類	13					2		17	32
G b 類	5							7	12
G c 類	5						1	16	22
G 類 小計	23					2	1	40	66
H 類	8						1	34	43
合 計	248	7	13		6	10	30	771	1,085

(破損品・破片・接合品)

遺構別 分類	住居跡	大型 フラスコ 状土坑	小型 フラスコ 状土坑	トラップ ビット	土 坑	その他の 遺構	その他の ビット	遺構外	合 計
破損品・破片	33	3	2	1	1	2	1	218	261
接合品	12	1			1		1	31	46 (実数26)
合 計	45	4	2	1	2	2	2	249	307



第60図 磨石類A・B・C・D類出土分布図



第61図 磨石類E・F・G・H類出土分布図

似するもの）は早期中葉から後葉の撫糸文・押型文土器群に特徴的に伴出する（小林1987・八木1976）といわれており、しかも6-Cグリッドから押型文土器も出土していることから、6-Cグリッド周辺のH類の多くは早期の所産の可能性が高い。しかし、H類の26点（60%）は、環状集落及びその周辺からの出土であり、中期前葉にも特殊磨石に近似する磨石が存在したと推定される。

長さと幅 第62図参照。完形品・略完形品の1085点を対象とする。各分類ごとで大きさ及び長幅比に若干の違いが認められる。使用痕が単独に認められるA・E・G類とH類（ほとんどが側面の磨痕で占められる）を見ると、A類は長さ9~13cm・幅6.5~9.5cm・長幅比2:1~1:1、E類は長さ8~14cm・幅5~9.5cm・長幅比2.5:1~1:1に多く分布する。G類は集中化は明確でないが長さ6~15cm・幅4~9cm・長幅比3:1~1:1に多く散在し、H類は長さ13~17.5cm・幅6~8.5cm・長幅比3:1~2:1前後に多く分布する。いいかえればA類は円形・椭円形が多く、E類も円形・椭円形が多いが、長椭円形も少なからず存在する。また、大きさも小型のものが多いが大型のものもある程度認められる。G類は円形から長椭円形・棒状のものまで平面形は多様、大きさも小型から大型のものまで多様なあり方を示す。H類は長椭円形・棒状の大型品で占められる。使用痕の種類が複数認められるB類（磨痕+凹痕）はA・E類の中間のあり方、D類（磨痕+凹痕+敲打痕）はA・E・G類の中間あり方、F類（凹痕+敲打痕）はE・G類の中間のあり方をほぼ示す。C類（磨痕+敲打痕）は出土数が少なく明確でない。

一方、磨痕の位置から見ると、各類の1類（正裏面の磨痕）は椭円形から円形で中小型品のものが多く、2類（側面の磨痕）及びH類（ほとんどが側面の磨痕）は椭円形から長椭円形・棒状で大型品が多く、3類（正裏面と側面の両方に磨痕）は1・2類の中間のものが多い。

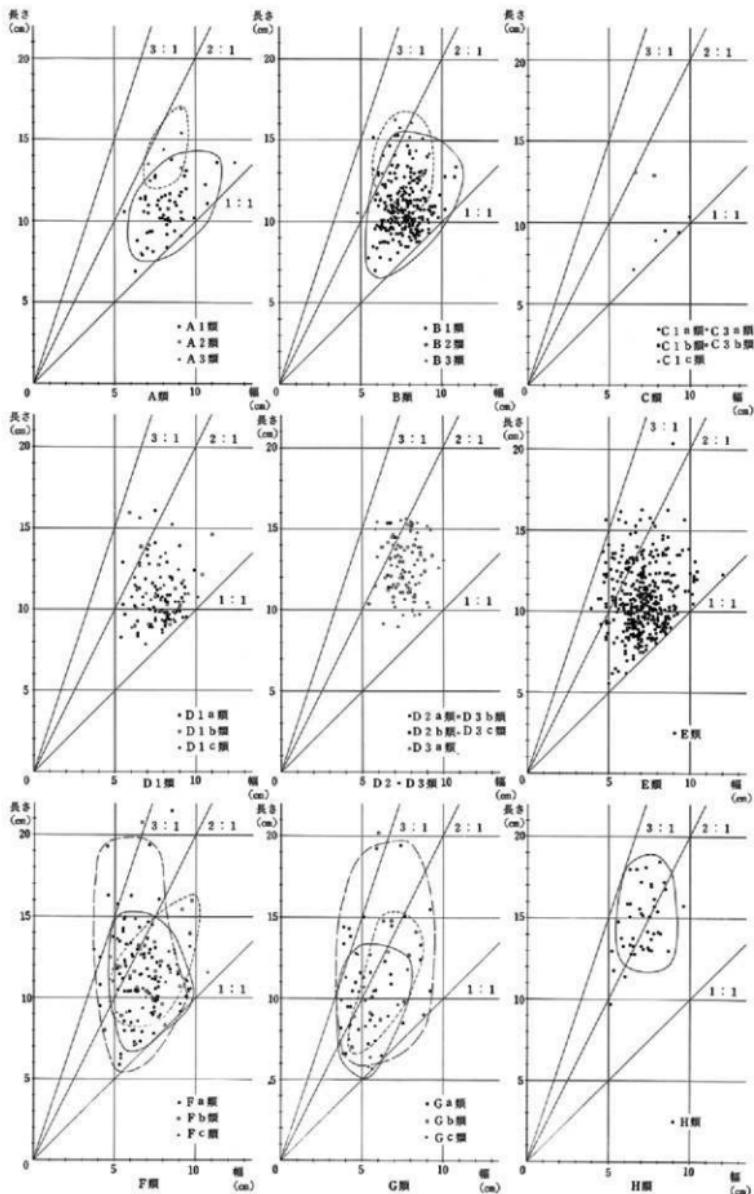
また、敲打痕を見ると、磨痕ほど明確でないが、a類（端部の敲打痕）は小型品ほど円形・椭円形の傾向が強く、大型品ほど長椭円形・棒状の傾向が強い。b類（側面の敲打痕）は椭円形で、中・小型品が多い傾向にある。c類は（端部と側面の両方に敲打痕）は両者の中間のものが多い。

厚さ 第63図参照。完形品・略完形品の1085点を対象とする。全体的に見れば2~7cmにはほとんど分布するが、分類毎に若干の違いが見られる。使用痕の種類が単独に認められるA・E・G類とH類（ほとんどが側面の磨痕で占められる）について見れば、A・H類（磨痕）は4~6cmに多く分布し、E・G類に比べ厚い。これに対しG類（敲打痕）は2~5cm前後に広範囲に分布するが、A・H・E類に比べ薄い。E類は2~6.5cmの広範囲に分布するが、中でも3.5~5cmのものが最も多く、両者の中間の厚さといえる。使用痕の種類が複数認められるB類はA・E類、C類はA・G類、D類はA・E・G類、F類はE・G類のはば中間の厚さのものが多い。

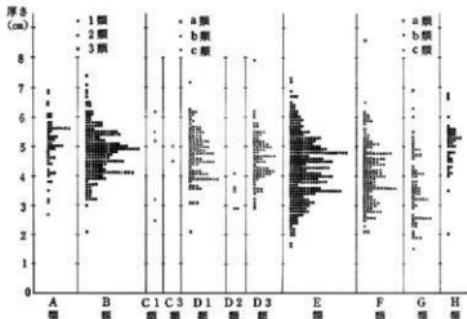
一方磨痕の位置や敲打痕の位置と厚さの関係では、長さと幅で見られたような違いは認められなかつた。

重さ 第64図参照。完形・略完形品の1085点を対象とする。長さ・幅・厚さを反映し、各分類ごとに重量の違いが認められる。重さの分布は広範囲であるが、A・H類は重い傾向にあり、G類は軽い傾向にある。使用痕の種類が複数認められるB類はA・E類の、C類はA・G類の、D類はA・E・G類の、F類はE・G類のはば中間の重さのものが多い。磨痕の位置から見ると2類及びH類（側面の磨痕）が重く、1類（正裏面の磨痕）が軽い。3類（正裏面と側面の磨痕）は中間の重さの傾向がある。しかし、敲打痕の位置から見ると、明確な分布の差は認められない。

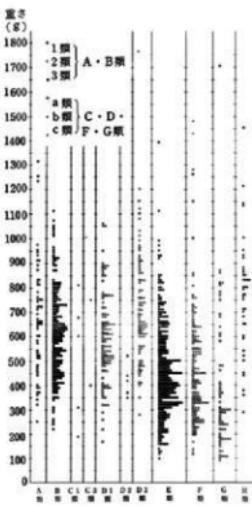
以上、長さ・幅・厚さ・重さの観察の結果、使用痕の種類及び位置でそれぞれ違いが認められた。使用による変形や重さの軽量化が若干あるにしても、既に「清水上遺跡」の報告書で指摘したように使用方法



第62図 磨石類長幅分布図



第63図 磨石類厚さ分布図



第64図 磨石類重量分布図

(機能)の反映(高橋ほか1990)であり、さらに使用度の位置の反映と推定される。つまり、A・E類が磨りの機能であり、台の上で前後・左右・円運動(水平運動)と推定され、E・G類より重い(大きい)ものが多くなる。E類は敲く機能であるが、表裏面の凹痕から上下運動(垂直運動)が主体と推定され、G類は同じく敲く機能ながら、側面・端部の敲打痕から、上下運動はもちろん、斜めに振り降ろすなどの複雑な運動が推定される。つまり、複雑な運動が伴うG類は軽い(小さい・細い)ものが多く、上下運動のE類は台上での水平運動のA・H類より軽い(小さい)が、G類よりも重い(大きい)ものが多くなると考えるのが妥当といえよう。また、A・H類(磨痕)とE類(凹痕)は一定の強さの運動に対して、G類(敲打痕)はこれらより強弱のある運動が推定される。これが、G類の法量グラフの集中化がA・H・G類より、弱くなっている要因の1つとも考えられる。なお、それぞれの使用痕の種類が複数認められるものは、中間の重さ(大きさ)を示すのは当然といえよう。

次に使用度の位置との関係を見れば、磨痕の位置では、表裏面の磨痕(1類)は水平円運動を中心としたものと推定され、側面の磨痕(2類とH類のほとんど)は前後運動を中心としたものと推定される。しかも、円運動の場合は手の平からはみ出るほど大きいと使用しにくいため、前後運動の場合は手で把むことができれば、手の平から横にはみ出ても使用に差し支えず、むしろ、磨面の面積が大きくなつて都合よいと考えられる。また、円運動の場合は両手を添えて使うには不都合で、前後運動では、両端を持っても使用するのに都合がよいと考えられる。したがって、正裏面の磨痕は楕円形・円形に近いもの(長幅が小さい)が多く、側面の磨痕は楕円形・長楕円形のもの(長幅比が大きい)が多く、側面の磨痕の方が正裏面の磨痕のものより、やや大きい(重い)ものが多くなる。なお、正裏面と側面の両方に磨痕があるのは中間の大きさ(重さ)・形のものが多くなるのは当然といえる。

次に敲打痕の位置では、端部の敲打痕は大きさが小さいものほど円形・楕円形(長幅比が小さい)に近く、大きいものほど長さが長くなるのに対して幅は大きくならず長楕円形・棒状(長幅比が大きい)のものが多い。

くなる。これに対し側面の敲打痕は大きいものほど長さとともに幅も広くなり、橢円形・円形のもの（長幅比が小さい）が多い。これは、端部の敲打痕の場合は、斜めに振り降ろすなどの複雑な運動が考えられるのに対し、側面の敲打痕は上下運動を中心のためとも考えられる。事実、側面の敲打痕には凹状のものが少なからず認められること、敲打面は端部より平坦面になるものが多いことからも裏付けられる。また、斜めに振り降ろす場合は、片端部は振りながら使用する方が使いやすく、上下運動の場合は片側をつかんで使用する方が都合よい。しかし、端部の敲打痕では、小さなものほど橢円形・円形が多い。これは、持ち方の違いと推定される。長さも小さくなると、まず片端部を手で握ることは困難であること、長橢円形・棒状であれば、当然、長さに比して幅・厚さも小さくなるから、折れやすく、使用に耐えない。したがって、橢円形・円形に近いものが多くなると考えられる。大きさや形の違いは持ち方や敲打面の衝撃の強さの違いに反映すると考えられることから、用途も異なると推定される。しかし、具体的な用途は推定できない。なお、正裏面と側面の両方に敲打痕のあるものは、形は中間の形を示すが、重さでは比較できないのは当然といえる。

石材 表61参照。完形品・略完形品・接合品の1111点を対象とする。全体的に見ると、1111点のうち微細斑縞岩575点（52%）が最も多く、次いで、砂岩181点（16%）、花崗岩143点（13%）、安山岩129点（12%）、凝灰角礫岩45点（4%）で、これ以外は少數である。

分類別に見ると、出土数の少ない分類はともかく、D類では微細斑縞岩の割合が高く70%を占める。逆にA・E類では微細斑縞岩の割合が低く、A類は37%、E類は38%である。花崗岩は敲打痕のあるもの（D類7%・F類4%・G類5%）で割合が低く、これ以外で磨痕のあるもの（A類27%・B類17%・H類30%）は割合が高い。花崗岩の粗さが磨りには都合よく、蔽きには逆に不適だったものと考えられる。風化の激しい安山岩はE類だけに比較的多く（25%）認められる。凹痕は風化しても確認しやすいことも一因と考えられる。砂岩はA類（22%）・F類（28%）・接合品（42%）に割合が高い。接合品に多いのは、資料が少なく断定できないが、比較的割れやすいためかもしれない。

磨痕の位置別の石材選択を見ると、微細斑縞岩は1・2・3類とも多く、60%前後を占めるが側面に磨痕があるもの（2類）は花崗岩（25%）が比較的多く、砂岩（6%）が少ない。逆に正裏面に磨痕のあるもの（1類）や両方に磨痕のあるもの（3類）は花崗岩（15%・10%）が少なく、砂岩（13%・18%）がやや多い傾向が見られる。

敲打痕の位置別の石材選択を見ると、端部に敲打痕のあるもの（a類）は、微細斑縞岩（64%）が多く、安山岩（3%）、砂岩（17%）が少ない。逆に側面に敲打痕のあるものは、微細斑縞岩（47%）が少なく安山岩（16%）、砂岩（28%）が多い。このように、磨痕の位置や敲打痕の位置で若干の石材選択の違いが認められるが、なぜそうなるのか明らかでない。

遺存状態 接合品（実数26点）・破損品・破片は287点で、磨石類の実数1372点の21%にあたる。他器種に比べ、破損の割合は低い。形状からして破損しにくい石器と考えられる。また、無加工石器であるため、素材獲得段階が完成品であることから、破損の多くは使用の結果と考えられる。しかし、破損品・破片・接合品の被熱は完形品・略完形品の1.7倍であることから、被熱によって破損したものもあったと考えられる。

被熱 表62参照。実数1366点のうち、被熱、または被熱の可能性があると思われるものが238点（17%）存在する。このように被熱の割合が高いのは石皿以外の他器種に見られない現象である。被熱は前述のように破損品・破片・接合品で多く、これらの約1/4が被熱している。完形品・略完形品ではD類の被熱（25%）

表61 磨石類石材表

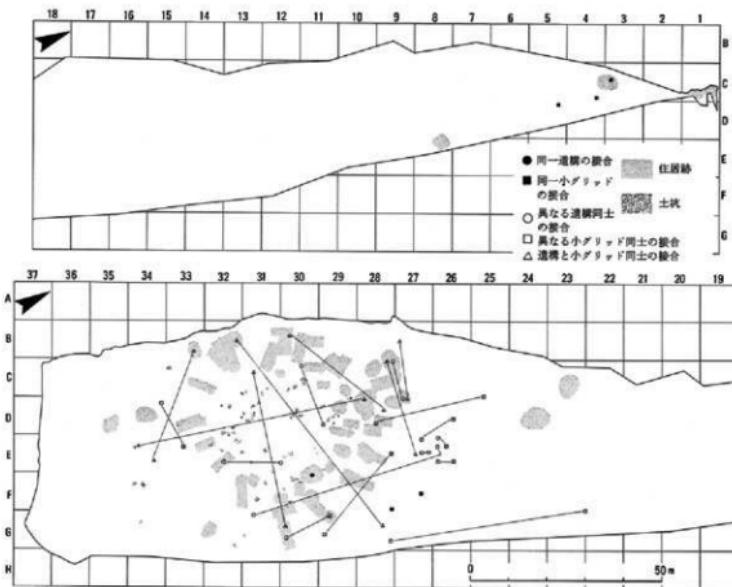
石材 分類	黒田 岩	花崗岩	安山岩	黒田角 岩	ひん岩	閃長岩	流紋岩	斑状岩	砂 岩	頁岩 I	頁岩 II	泥板岩	練 岩	不 男	合 計
A 1 類	19	12	4	4						10				1	50
A 2 類	1														1
A 3 類	2	4								3					9
A類小計	22	16	4	4						13				1	60
B 1 類	105	35	12	10	3					18				3	186
B 2 類	1						1								2
B 3 類	22	3	1	1						8					35
B類小計	128	38	13	11	3		1			26				3	223
C 1 a 類															1
C 1 b 類															1
C 1 c 類					1										3
C 3 a 類					1										1
C 3 b 類					1										1
C類小計					5		2								7
D 1 a 類	35	2	1	3		1				3					45
D 1 b 類	8	2	1							4					15
D 1 c 類	38	3	1				1			10					53
D 2 a 類	2														2
D 2 b 類					1					2					3
D 3 a 類	14	3								1					18
D 3 b 類	15	1	2	1						6					25
D 3 c 類	34	3	1	3						6					47
D類小計	146	14	7	7		2				32					208
E 類	128	52	83	14	1				6	46	1	1	1	1	337
F a 類	39	2	3	4						18				1	67
F b 類	9		10			1			2	10					32
F c 類	21	4	4		1					12					42
F類小計	69	6	17	4	2			2	40				1		141
G a 類	16	1	1	1	3				6		3			1	32
G b 類	8			1					3						12
G c 類	15	2						1	3			1			22
G類小計	39	3	1	2	3			1	12		3	1	1		66
H 類	25	13	3	1					1						43
接合品	13	1	1						11						26
合 計	575	143	129	45	9	2	1	9	181	1	4	2	2	8	1,111

表62 磨石類被熱表

分類	A 1 類	A 3 類	B 1 類	B 3 類	C 1 c 類	D 1 a 類	D 1 b 類	D 1 c 類	D 2 a 類	D 2 b 類	D 2 s a 類	D 2 s b 類	D 2 s c 類	E 類	F a 類	F b 類	G a 類	G b 類	G c 類	H 類	破損品 ・破片	接合品	合計
被熱数	9	2	23	10	1	12	4	12	1	2	1	7	14	35	12	4	3	2	3	7	67	7	238

の多さが目立つ。

接合品の出土分布状況 第65図参照。破損した磨石類の中で26点が接合した。内訳は同一遺構内の接合2例、同一小グリッド内の接合4例、異なる遺構同士の接合3例、異なる小グリッド同士の接合10例、遺構と小グリッド同士の接合7例である。接合品は後世の自然的移動(例えば、土砂と共に流れ)や人為的移動(例えば耕作による移動)も考えられなくもない。しかし、出土分布状況が他の磨石類や他器種との相違が見られないこと、異なる遺構同士の接合例や遺構と小グリッド同士の接合例が少なからず認められること、約10m以上離れた接合例が17例も認められ、中でも50m以上も離れる接合品が数例あること、さらに地滑りや土石流の形跡が見られないことなどを考慮すると、当時から多くの接合品はこのような分布図のあり方で廃棄されていたものと推定される。



第65図 磨石類接合品の出土分布図

その他 正裏面の磨痕は水平円運動が主体と推定され、平面形が橢円形・円形のものが多くなり、側面の磨痕は前後運動が主体と推定され、橢円形・長橢円形のものが多くなると記述した。さらに磨痕のようすを詳しく観察すると、正裏面の磨痕のものは磨面が滑らかで、側面の磨痕のものは磨面が粗く、ザラザラしているものがほとんどであった。正裏面の磨痕は、磨りの機能が強く、側面の磨痕は、磨りと敲打を兼用していた可能性がある。また、磨石と対になる台の材質の違い(例えば石皿や木製の台や皿など)も想定される。しかも磨面は正裏面の磨痕で円形に近い形ほど、磨面は曲面をなし、側面の磨痕はほとんど平坦に近いゆるい曲面をなすこと、側面の磨痕のものには、長さが大きすぎて石皿の使用面より大きいもののが少なからず認められることも、その裏付けになるものと考えられる。

観察表の磨痕・凹痕・敲打痕のあり方については○・○・×で表わした。

- 正裏面の磨痕が両面にある場合は○、片面の場合は○、ない場合は×で示した。
- 側面の磨痕が両側面にある場合は○、片側面の場合は○、ない場合は×で示した。
- 正裏面の凹痕が両面にある場合は○、片面の場合は○、ない場合は×で示した。
- 端部の敲打痕が両端にある場合は○、片端部の場合は○、ない場合は×で示した。
- 側面の敲打痕が両側面にある場合は○、片側面の場合は○、ない場合は×で示した。

4 遺物

e) 石皿 (573~600)

一般的に扁平な大型礫の片面、あるいは両面に使用の結果の磨面があるもの、または、使用面作出のための敲打整形の認められるものである。小型のものは、すべて、縁や使用面が敲打整形されている。

砥石とは磨面のようすや形状¹¹⁾で異なり、磨石類とは大きさや形状で区別される。しかし、台石との区別は困難であり、磨痕と使用による敲打痕の両方認められるものは、台石との兼用と考えられるが、石皿に含め、敲打痕だけのものを台石とした。

総数100点出土するが、接着するものや同一石材破片が多く、実数56点である。出土石器器種の0.9%の比率を示す。

分類 表63参照。まず、加工の有無で2分した。

A類 加工のあるもの。A類は加工部位・彫刻の有無で、さらに3分した。

1類 使用面・縁・掃き出し口が作出され、縁から側面にかけて彫刻の施されるもの。(573~578・754)

2類 使用面・縁・掃き出し口が作出され、彫刻の無いもの。(579~588)

3類 使用面のみ作出されているもの。(589~592)

A3類は使用が進んだ段階でA2類になることも考えられる。しかし、1・2類の多くは側面や裏面に敲打整形が施されるが、3類は施されず、整形痕も明確でない。(A-)類はA類の破片であり、多くはA2類の破片のものと推定される。

B類 無加工のもの。(596~600)

分類別出土数と出土分布状況 表64・第66図参照。総数100点のうち、遺構内より、31点(31%)、遺構外より69点(69%)で、遺構内のものはその90%が住居跡からの出土である。分類別では実数56点のうちA類33点(59%)、B類23点(41%)で、総数の割合にはほぼ同じ。A類の中ではA1類・A2類が多く、A3類は

表63 石皿分類表

加工の有無	加工部位	彫刻	分類					
A類 あり	使用面・縁・掃き出し口	1類 あり	A1類					
		2類 なし	A2類					
	3類 使用面のみ	—	A3類					
B類 なし	—	—	B類					

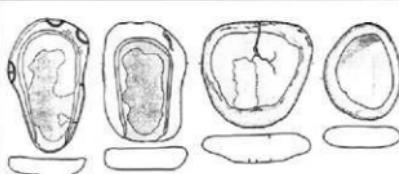
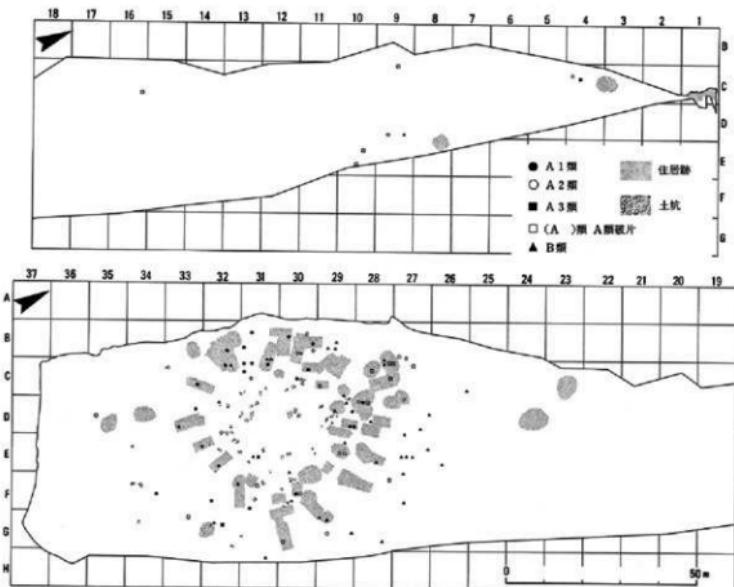


表64 石皿分類別出土数

分類別 分類	住居跡	大型 フラスコ 状土器	小型 フラスコ 状土器	トランプ ビット	土 坑	その他 の遺構	その他 のビット	遺構外	合計
A1類	5	1						16	29 (実数73)
A2類	5						1	6 (実数102)	
A3類	1						3 (実数4)		4
(A-)類	8							12 (実数32)	20
A類小計	19	1					1	37 (実数233)	58
B類	9						1	32 (実数23)	42
合計	28	1					2	69 (実数56)	100

1) 石皿の使用面は正面面にあり、使用面は広い。しかも、使用面は滑らかな平面、曲面をなす。これに対し、砥石の磨面は正面面以外の側面に見られ、使用面は石皿に比べ狭い。また使用面は溝状や帯状を呈する。



第66図 石皿出土分布図

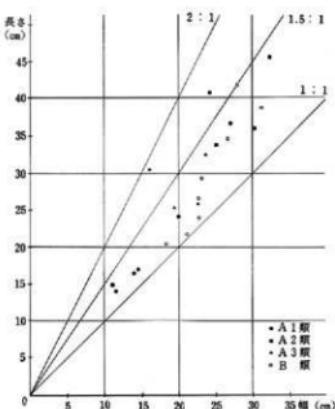
少ない。(A)類としたA類の破片の多くはA2類と考えられるため、A2類はさらに多くなる。各分類別の遺構別出土数はほぼ同様の比率を示し、全体的傾向に一致する。

個々の遺構・小グリッド毎では7A号住居跡4点、8A号住居跡3点、11号住居跡2点、15号住居跡2点、27-E-18グリッド2点、32-C-1号風倒木痕2点の複数出土であるが、特殊な出土状況を示すものではない。これ以外は単独出土であるが、577・591は石囲い炉石として使用されていたものである。調査区全体の出土分布状況では、環状集落及びその外側からの出土が多く、中でも集落の北半部からの出土がやや多い。調査区の北東側では散点が散在するのみである。分類別ではA1類がすべて環状集落及びその外側からの出土であることから、彫刻石皿の所属時期は中期前葉と推定される。これ以外で各分類の片寄りは認められない。なお、A1類は30・31-B・Cグリッド、(A)類は27・28-Cグリッド、B類は27-D・Eグリッド付近にやや多く分布するが、同一石皿の破片が散らばって分布するものである。

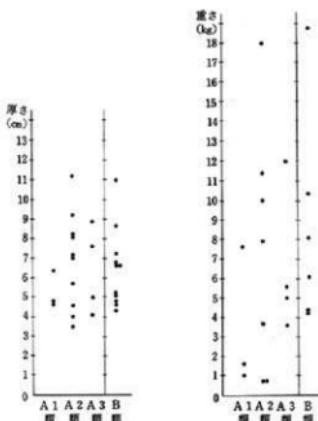
長さと幅 第67図参照。長さと幅の計測できた22点を対象とする。全体的に見ると長さ約20~40cm前後、幅約20~30cm前後、長幅比1.5:1~1:1に多く分布する。分類別では資料数が少ないが、A1類・A2類で15cm前後の小型品がそれぞれ2点ずつあるのが注目される以外、ほぼ同じ大きさである。

厚さ 第68図参照。厚さの計測できた28点を対象とする。全体的に見て約4~9cmに多く分布する。分類別の違いは認められないが、A1類・A2類の小型品は厚さも薄い。

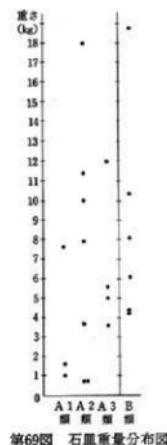
重さ 第69図参照。完形品・略完形品・接合完形品の20点を対象とする。大きさを反映するが4kg前後から12kgまでのものが比較的多い。分類別では、資料数が少なく十分な比較はできないが、A1類・A2類



第67図 石皿長幅分布図



第68図 石皿厚さ分布図



第69図 石皿重量分布図

石材 分類	砂岩	安山岩	花崗岩	礫岩	合計
A 1 類	6	1			7
A 2 類	8	1	1		10
A 3 類	4				4
(A)類	11			1	12
B 類	23				23
合 計	52	2	1	1	56

表65 石皿石材表

分類	被 出 上 数	被 熱 部 位			
		裏面	側面	裏面・側面	前面・裏面 略全面
A 1 類	3				
A 2 類	7	4	2	1	1
A 3 類	4	1		1	
B 類	3	1	1		
接合品					
A 1 類	4	4		1	1
A 2 類	3	3		1	1
(A)類	12	9	1	2	2
破 片					
B 類	20	15	4	3	7
合 計	56	37	8	9	12
					5
うち裏面の著 めいもの6点					

表66 石皿被熱数と被熱部位

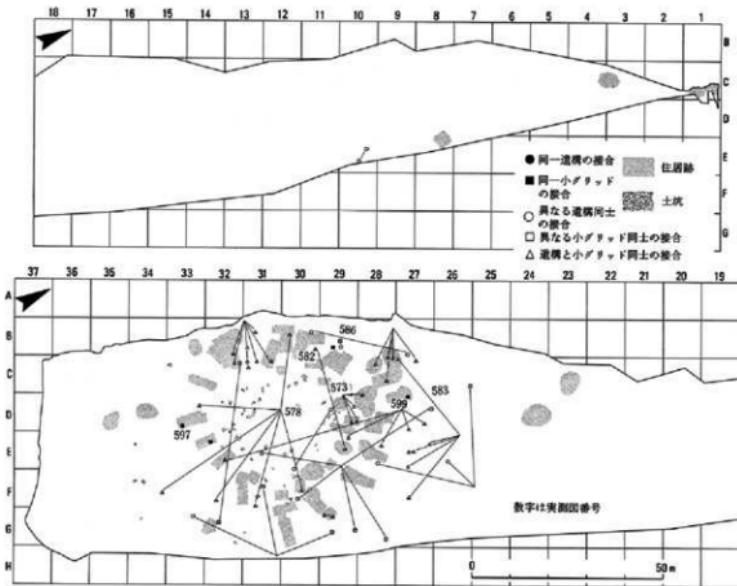
分割数 分類	対象数	2分割 以上	3分割	3分割 以上	4分割 以上	5分割 以上	6分割	6分割 以上	8分割 以上	10分割 以上	12分割 以上	41分割 以上
A 1 類	4	1							1		1	1
A 2 類	3			1	1				1			
(A)類	4	1		3								
B 類	10		2	2	2	1	2			1		
合 計	21	2	2	6	3	1	2	1	1	1	1	1

表67 石皿被熱品の分割状況

類の小型品を除き、分布に片寄りは認められない。

石材 表65参照。実数56点のうち、砂岩52点(93%)と極めて多數である。砂岩の粒子の粗さや硬さが、使用や加工に最も適していたと考えられる。分類別でも、石材選択の大きな違いは認められないが、B類はすべて砂岩で占められ、砂岩以外の石材の4点はすべてA類で用いられている。なお、砂岩の比率の多い器種は磁石・台石であり、磨石類でもある程度の比率が認められる。

遺存状態 表67参照。実数56点のうち、完形品・略完形品17点(30%)、破損品(接合品含む)・破片39点(70%)で、完形品の遺存率が極めて低い。しかも、接合品を見ると、他器種のような2分割、3分割程度



第70図 石皿接合品の出土分布図

でなく、それ以上の分割数のものが極めて多い。中には40分割以上に破損したものもある。石皿が他器種に比べ大きいこともあるが、人為的に破壊し、廃棄されたものが多いと推定される。分類別の差は資料数が少なく明確でないが、表67と実物を照らし合わせるとB類よりA類のはうが分割数が多く、細かく破壊（破損）している。A類の中ではA1類が分割数が多く、細かく破壊（破損）している。

被熱 表66参照。実数56点のうち、37点(66%)に被熱と思われる痕跡が認められた。これは他器種に比べ著しく高い比率である。被熱の割合は、完形品・略完形品で35%、接合品・破片で79%である。したがって、被熱による破損もあったと考えられる。被熱部位を見ると裏面や側面の被熱が多く、正面の被熱の半数は裏面の被熱が強い。つまり、裏面や側面がよく被熱されていたことになる。このようなことから、石皿の用途は從来からの植物質食料の磨り潰し・粉化・加工調理（安達1983）、非実用的用途（平出1978）などの他に、現代のフライパン（鉄板）のような食料加熱調理の用途も推定される。

なお、597は被熱のようすから破損後もさらに被熱された唯一の例であり、また、577・591の2点は炉石として使用されたものであり、被熱には炉石転用による被熱も考えられる。しかし、被熱数と被熱部位から石皿の食料加熱調理の用途を否定するものではない。

接合品の出土分布状況 第70図参照。接合品及び接合しなくとも同一石材の石皿は21例になる。うち、1例は住居跡と出土地点不明の接合のため、20例を対象とする。内訳は、同一遺構内の接合2例、同一小グリッドの接合2例、異なる小グリッド同士の接合8例、遺構と小グリッド同士の接合8例である。異なる遺構や小グリッドでの接合では、573のように径10m程度の範囲に散らばっているものと、578・599・600

4 遺物

のように径約20~60mの広範囲に散らばっているものがある。

その他 正裏面に磨面があるもの、またはその可能性のあるものが17点ある。内訳はA類6点、B類11点で、B類の約半数は両面使用の可能性がある。A類6点の裏面は正面のように加工で使用面・縁・掃き出しこれを作出するものではなく、単に磨面またはそれらしい痕跡が見られるだけのものである。

一方、加工とは異なり、使用の結果と見られる敲打痕の認められるものが8点あった。内訳は正面3点(すべてB類)、裏面4点(すべてA類)、両面1点(A類)で、これらは台石との兼用品と考えられる。

また、素材は大型扁平礫を用いるが、586・592のように、まず板状の素材を得てから、加工したと思われるものが2点ある。

m) 砧石(601~620)

「ものを探る工具」(宮下1984)であることから、溝状・帯状・平面状の痕跡(砥面)が認められる石器を砥石とした。石皿の使用面¹⁾や磨石類の磨痕とは、形状の違いにより区別される。しかし、砥面に敲打状の痕跡も認められるものもあり、台石との兼用品と考えられる。ここでは、敲打状の痕跡だけのものは台石にし、砥面があるものはすべて砥石にした。

総数247点出土するが、近世以降の所産と考えられる直方体状の砥石7点、接合品6点が存在する。したがって、実数は234点で、石器器種の4.0%を占める。

分類 表68参照。まず、砥石の大きさで2分した。

A類 大型で重く、置き砥石と考えられるものである。A類は砥面のようすで3分される。

1類 砧面が帯状、または平面状・凹面状を呈するもの。(601~603)

2類 砧面が溝状を呈するもの。(604)

3類 砧面に帯状・平面状・凹面状と溝状の両者が存在するもの。(605~608)

B類 小型で軽く、手持ち砥石と考えられるものである。B類は砥面のようすで4分される。

1類 砧面が帯状、または平面状・凹面状を呈するもの。(609~611)

2類 砧面が溝状を呈するもの。(612~613)

3類 砧面が帯状・平面状・凹面状と溝状の両者が存在するもの。(614~616)

4類 剣片の縁辺を使用するもの。玉製作に使用する内磨砥石に近似する。(617~620)

表68 砧石分類表

大きさ	砥面の様子	分類	
A類 大型のもの (置き砥石)	1類 帯状・面状	A 1類	
	2類 溝状	A 2類	
	3類 帯状・面状+溝状	A 3類	
B類 小型のもの (手持ち砥石)	1類 帯状・面状	B 1類	
	2類 溝状	B 2類	
	3類 帯状・面状+溝状	B 3類	
	4類 剣片の縁辺を利用	B 4類	

1) 168ページの1) 参照。

溝状砥面の溝は細いものから15mm程の太いものが存在し、太いものは帶状砥面との区別しかねるものが多い。また、B4類は、溝状砥面と複合するものもある。

分類別出土数と出土分布状況 表69・第71・72図参照。実数234点のうち、遺構内出土96点(41%)、遺構外出土138点(59%)である。遺構内出土の92%が住居跡からである。

分類別ではA類176点(75%)、B類58点(25%)で、置き砥石と考えられるものが多い。A類の中では、A1類・A3類が多く、砥面の溝状だけのA2類は非常に少ない。B類の中では、B4類が多い。

個々の遺構・小グリッドごとでは、7A号住居跡10点、7C号住居跡6点、8A号住居跡7点、21号住居跡9点で出土数の多さが目立つ。この他、複数出土は遺構で17遺構、小グリッドで5ヶ所存在する。しかし、特殊な出土状況を示すものはない。

調査区全体の出土分布状況では、環状集落跡及びその外側に多く分布し、中でも集落の北東部からの出土が多い。また、調査区北東側の2~9列グリッドからの出土がやや目立つ。

長さと幅 第73図参照。完形・略完形・接合完形の69点を対象とする。A類は長さ15~35cm・幅10~30cm・長幅比2:1~1:1にほとんど分布する。B1~B3類では資料数が少ないと、約5~15cm・幅3~9cmに散在し、B4類は長さ5cm前後・幅9cm前後に集中する。このように分布域が異なるのは、A類とB類の分類基準を大きさに求めたためであり、さらにB類内ではB1~B3類は長軸を長さに、B4類は砥面になる縁辺を下にして計測¹⁾したためである。

厚さ 第74図参照。完形・略完形・接合完形の69点を対象とする。A類は4~12cm、B類は1~4cmに多く分布する。これは前述のように分類基準を大きさに求めたためである。各分類ではA3類がA1類よりやや厚手の傾向にあり、B類内ではB4類が薄手の傾向にある。これは素材を見るとA1類では扁平鍛が多いこと、B4類では剝片が多いことの反映である。

重量 第75図参照。完形・略完形・接合完形の69点を対象とする。長さ・幅・厚さを反映し、A類は約1~8kg、B類は約50~200gに多く分布する。A類はA1類にやや軽いものが目立ち、B類内ではB4類が軽い傾向にあり50~100gにやや多く分布する。

石材 表70参照。実数234点のうち、砂岩229点(98%)で、ほとんど砂岩で占められている。各分類別の石材選択に違いは認められない。

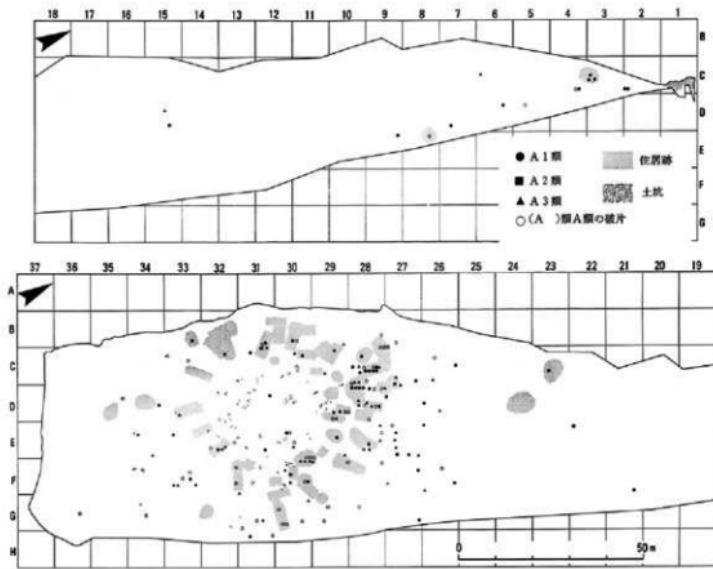
遺存状態 表71参照。実数234点のうち、完形・略完形66点(28%)、破損品・破片168点(72%)で、完形品の割合が低い。分類別では完形品の割合がA類26%、B類34%で、B類がやや高い。しかし、接合品を

表69 砥石分類別出土数

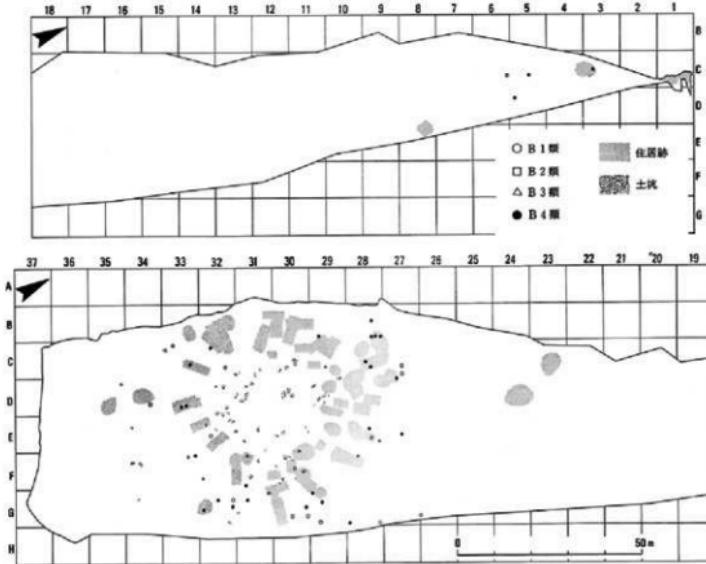
遺構別 分類	住居跡	トランピット	土坑	その他の遺構	その他のビット	遺構外	合計
A 1 類	26		1			32	59
A 2 類						2	2
A 3 類	18		1		2	38	59
(A) 類	22	1		1		32	56
A 類小計	66	1	2	1	2	104	176
B 1 類	1			1		5	6
B 2 類	2					8	10
B 3 類	6					7	13
B 4 類	13				2	14	29
B 類小計	22			1	2	34	59
合計	88	1	2	2	4	138	235

住居跡と遺構外の組合が3例あるが住居跡に含めた。

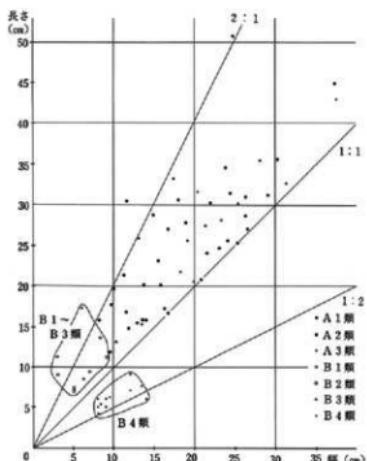
1) 砥面は長軸の縁辺になるため、長軸が幅になる。



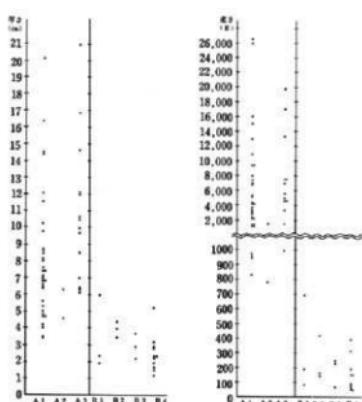
第71図 砥石A類出土分布図



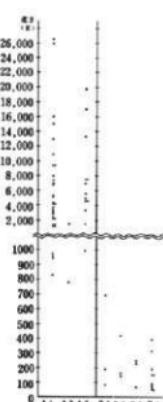
第72図 砥石B類出土分布図



第73図 砕石長幅分布図



第74図 砕石厚さ分布図



第75図 砕石重量分布図

石材分類	砂岩	凝灰岩	板状角礫岩	薄層板状岩	安山岩	合計
A 1 類	58				1	59
A 2 類	1	1				2
A 3 類	59					59
(A)類	54		1	1		56
A類小計	172	1	1	1	1	176
B 1 類	5	1				6
B 2 類	10					10
B 3 類	13					13
B 4 類	29					29
B類小計	57	1				58
合計	229	2	1	1	1	234

表70 砕石石材表

見る限り、石皿のように何分割にもしているのは見られない。破損には置き砾石から手持ち砾石の素材作成、被熱、敲打等による使用、使用面作出のための剝離など、さまざまな要因が考えられる。

被熱 実数234点のうち、44点(19%)に被熱、または被熱の可能性のあるものが存在する。内訳はA 1 類15点、A 2 類9点、(A)類19点、B 3 類1点であり、43点はA類が占める。またA類の2点は炉石として使用されていたものがあり、炉石転用のため被熱したものも含まれていると考えられる。

使用面数 表72参照。B 4 類29点のうち、9点は底面に溝状が混在する。これ以外の砾石205点のうち、1面(片面)のみ底面のもの46点(22%)、2面以上のもの110点(54%)、不明(24%)であり、砾石の使われ方の一端を見ることができる。また、溝状底面を観察すると、溝が太いのは置き砾石(A類)に多く、細いのは手持ち砾石(B類)が多い。手持ち砾石がより細かい研磨に使用された場合が多いと推定される。

この他、底面に使用によると思われる敲打痕が認められるものが27点存在する。台石との兼用と推定さ

遺存状態	完形	接合部完形	1/2(接合部)	1/4(接合部)	破片	合計
A 1 類	30	3	3	23		59
A 2 類	2					2
A 3 類	14		2	18	25	59
(A)類				9	47	56
A類小計	46	3	5	50	72	176
B 1 類	3		1	2		6
B 2 類	3			7		10
B 3 類	3		1	6	3	13
B 4 類	11			16	2	29
B類小計	20		2	31	5	58
合計	66	3	7	81	77	234

表71 砕石遺存状態表

表72 砥石砥面数表

砥面数	1	2	3	4	5	不明	合計
A 1 類	30	24	2	2		1	59
A 2 類	1					1	2
A 3 類	3	24	7	6	1	18	59
(A) 類	1	26	2			27	56
A 類小計	35	74	11	8	1	47	176
B 1 類	3	1		1		1	6
B 2 類	4	4	1			1	10
B 3 類	4	7	2				13
B 類小計	11	12	3	1		2	29
合計	46	86	14	9	1	49	205

表73 砥石敲打痕表

敲打痕の様子	鉛片面 打面 凹 凸	鉛片面 ササ 凹 凸	鉛片面側 状面 凹 凸	鉛片面 打面・ ササ 凹 凸	両面に 凹 凸	片面に 凹	合 計
A 1 類	6	3	1	1	1	1	13
A 2 類					1		1
A 3 類	3	7		1			11
(A) 類	1	1					2
合計	10	11	1	2	2	1	27

れ、すべてA類(置き砥石)であった。

その他 砥石の出土数が、磨製石斧や玉製作遺跡以外の一般集落に比べると極めて多い。しかし環状集落跡からは、磨製石斧や玉のように研磨を伴った石器。石製品は多くなく、むしろ少ない方である。研磨された遺物が残っていないこと、帯状砥面・溝状砥面が明確に分かることから、対象物はある程度の硬いものと推定され骨角器ではないかと思われる。それも砥石の出土量から、かなり盛んに製作されていたものと推定される。なお、当然のことながら、一部の石器・石製品及び木器の研磨にも使用されていたであろう。

n) 台石 (621~625)

大型の砾の表面に敲打状の痕跡が認められる石器である。磨石類とは大きさ(重さ)で区別され、手持ちではなく、置いて使用されたものと推定される。しかし、石皿・砥石としたものの中に敲打状の痕跡が認められるものが存在し、これらは台石との兼用品と考えられる。ここでは敲打状の痕跡のみ認められるものだけを台石として取り扱い、磨面や砥面が混在するものは、前述のようにそれぞれ石皿・砥石に含めた。

総数36点出土するが、接合するものが2点ある。したがって、実数は34点であり、石器種類の0.6%を占める。なお、細分類はしていない。

分類別出土数と出土分布状況 第76図参照。実数34点のうち、住居跡の3点(9%)を除き、遺構外からの出土である。

個々の遺構・小グリッドごとでは、8-B-8グリッドで2点出土する以外、単独出土である。

調査区全体の出土分布状況は、資料は少ないが、環状集落跡及びその外側、調査区北東側の5~13列グリッドにやや多く散在する。したがって、他器種のように環状集落に集中分布する傾向はやや弱い。

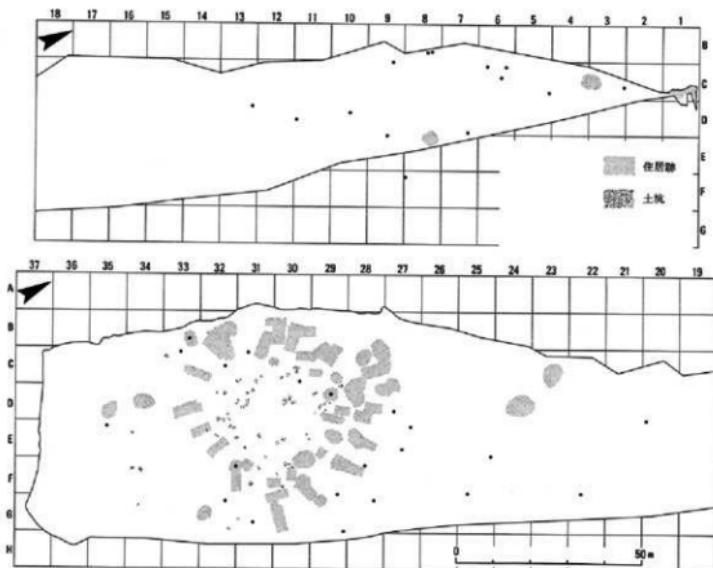
長さと幅 第77図参照。完形品・接合完形品の16点を対象とする。資料数は少ないが、長さ約14~21cm、幅約10~17cm・長幅比2:1~1:1に多く分布する。平面形は円形・橢円形のものが多い。

厚さ 第78図参照。完形品・接合完形品の16点を対象とする。資料数は少ないが、5~10cmに多く分布する。長さ・幅に比べ、やや厚手の扁平様が多い。

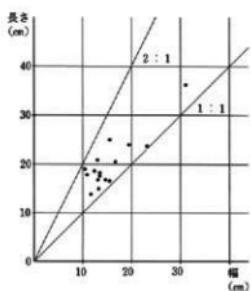
重量 第79図参照。完形品・接合完形品の16点を対象とする。1~14kgまでの広範囲に分布するが、1.5~2kg前後のものがやや多い。

石材 実数34点のうち、砂岩30点(88%)、微細斑塊岩4点(12%)で、砂岩の占める比率が極めて高く、特徴的な石材選択が認められる。

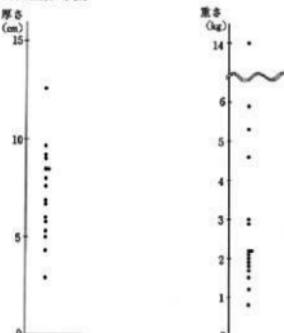
1) 県内では中期前葉の集落の半分を発掘調査した「清水上遺跡」で14点、中期中葉から後期初頭の集落を全面発掘調査をした「城之腰遺跡」で23点である。



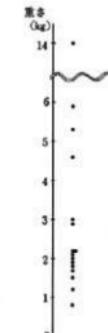
第76図 台石出土分布図



第77図 台石長幅分布図



第78図 台石厚さ分布図



第79図 台石重量分布図

遺存状態 実数34点のうち、完形品15点(44%)、破損品・破片19点(56%)で、破損品・破片の占める比率がやや高い。台石はほとんど無加工¹⁾の石器で、素材になる砾の獲得段階が完成品であること、被熱と推定されるものが5点と少ないとこと、石皿のように人為的に細かく破壊されたような形跡が認められないことなどから、破損は被熱によるものが少しはあったと考えられるが、多くは使用によるものと推定される。

敲打面の状況 実数34点のうち、片面使用14点(41%)、両面使用17点(50%)、破損のため不明3点(9%)

1) 加工があっても、凹みを作出する程度の加工である。

4 遺物

で、両面使用がやや多い。

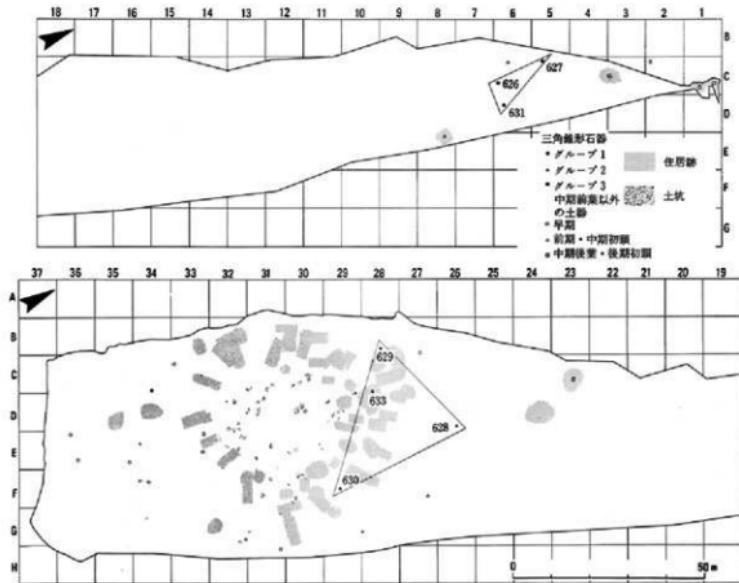
敲打面を見ると、敲打状の凹凸で器面が荒れているもの18点(53%)、敲打状の凹痕があるもの14点(41%)、両者が混在するもの2点(6%)である。敲打状の凹痕は、622・624・625のように、凹みに敲打状対象物を置き、使用したと考えられる。また敲打状の凹凸と凹痕が混在する2点のうち、1点は凹痕が多く存在し、いわゆる「蜂の巣石」と呼称されているものである。出土地点も環状集落から離れた9-E-11グリッドであることから、他時期可能性が高く、付近より中期後半の土器片が出土することから、同時期の可能性もある。

その他 破損品同士の接合が2例ある。いずれも遺構外出土のもので、約10~11m離れた地点での接合である。

○ 三角錐形石器 (626~633)

石核素材・礫素材で、1面以上殊に腹面に原石面または節理面・分割面による平坦面をもち、三(四)角錐(錐台)形状を呈する石器をいう。この遺跡では8点が採取されたが、うち1点(631)は打製石斧に、1点(633)は刺突具に分類すべきであったかも知れない。また、2点は破片であり、うち1点(632)は基部片で、推定復元される大きさは例外的な大型となる。しかし、ここでは全て三角石錐形石器に含めて取り扱うこととする。なお、隣接する十二木A遺跡でも完形1点が採取されている。全点について観察・掲載することができた。以下は観察項目について説明する。観察表にはそれぞれ記号で記入した。

分布 稀薄ではあるが、2箇所にまとまる傾向が認められ、ほかに1点が独立する。それらの分布域の1は台地北端の急崖と沢とに挟まれた狭い範囲、2は台地中央の中期環状集落北東半部と重複する範囲、



第80図 三角錐形石器及び中期前葉以外の土器分布図

3は環状集落南西半部と重複する範囲である。

石材 全点が黒色頁岩¹¹⁾であった。このことは、五丁歩遺跡・十二木遺跡の石器の大半が、所属時期を超えて、黒色頁岩を利用していることと矛盾しない。石材選択にマジック等はなかったものと理解される。

素材 用いられている素材には、A礫（0点） B石核（6点） C剝片（2点）がある。残存する礫面からもとの素材の大きさ・形状をうかがえるものを礫素材とした。また、大破片であっても剝離面で覆われているものは石核素材とした。前述の631・633を除くと全点がB素材となる。

原石面 原石面を残すことに特徴があるものと思われる。原石面・節理面の有無と残存部位について観察した。なお、古く大きな剝離面は節理面として扱うこととし、次の3類に分類した。I自然面・節理面を1面残すもの（2点）、II自然面・節理面を2面以上残すもの（5点）、III自然面・節理面を残さないもの（1点）。また、原石面の残存位置は①背面（國正面 5点）、②腹面（國裏面 6点）、③側面（4点）、④前面（國裏面 2点）であった。両側面に存在する場合は2点を数えた。腹面に原石面・節理面を残す頻度が高く、背面に残る原石面は小規模で剝ぎ残してある場合が多い。

断面形 横断面形は測定位置によって変化するが、主機能部である前面（國裏面）形に関係するとみられる基部断面では、A四角形（4点） B三角形（4点）がある。四角錐（台）か三角錐（台）かの違いは重要なではなかったものと思われる。縦断面形は基部の形態によって三角形（5点）と四角形（1点）とがある。なお、刃角は全て60°以上である。

前面と刃縁の作出 主要機能部であるとみられる前面（國裏面）は、ほぼ例外なく剝離面で覆われている

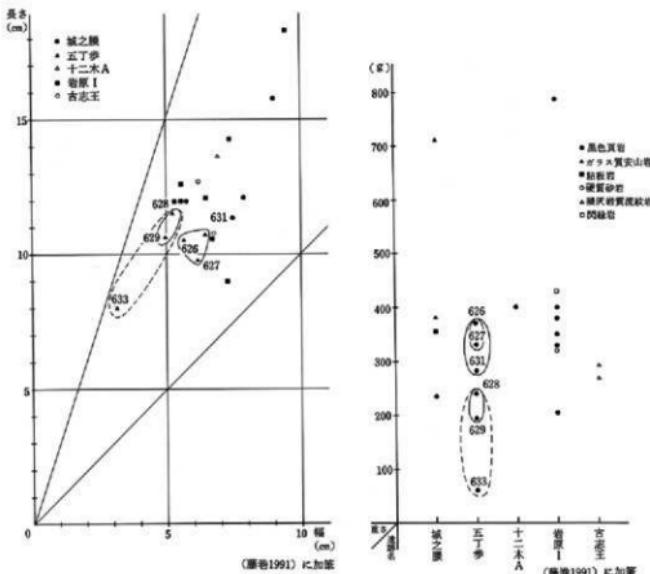


表74 三角錐形石器の分布による相違

偏り 分布	前面の作出	長軸関係	重 量 g	備 考
グループ1	II A	幅広	重 300以上	3点626・627・631 631はII B + 280.5g
グループ2	II B	縦長	重 300未満	4点628・629・630・633 633は除外するか
グループ3	I	(大型)		1点632 基部破片・推定

(II) が、その作出方法はA周縁からの剥離によるもの(2点)とB腹面側からの剥離によるもの(4点)とがある。なお、633は前面を作出しておらず(I)、違和感がある。刃縁は全て片刃状を呈すが、626・627・633は刃縁を作出していないようにみられる。

使用痕 使用痕の残存部位は①背面(四正面 6点)、②腹面(四裏面 11点)、③側面(16点)、④前面(四立面 9点)、更に A面上(17点)、イ接線上(25点)の存在とし、表記方法は例④—I—腹で前面の腹面側稜線(刃縁)とした。なお、観察によって着取した使用痕の種類は a 光沢(0点)、b 面状磨痕(15点)、c 線(筋)状擦痕(0点)、d ツブレ(29点)、e カケ(6点)であり、図中にトーンで示した。使用痕の状況からは複合的な使用であったことが理解される。

大きさ・重さ 観察中に実寸を記した。また、第81図によると、他の遺跡例に比してやや小型であり、重さはバラつきのあることが明瞭である。しかし、基部破片632からは例外的な大型の存在が推測される。さて、分布のみかけから稀薄なまとまりが認められたが、それぞれをグループ1・2・3とすると、数量的に不満はあるものの、各種観察項目のうち、前面の作出・長軸関係・重さについて、第81・82図及び表74のような片寄りが認められた。それ以外の項目については特に片寄りは認められない。また、前面作出がII B 2¹¹類は十二木A遺跡の1点があたるもの、五丁歩遺跡には存在しないこと、即ち五丁歩遺跡の三角錐形石器は全体の形が安定しておらず、作出された前面が整っていないことが明らかとなった。分布と各種観察項目における相違点の抽出がこの石器の所属時期の細分に役立つことを期待したが、五丁歩遺跡の稀薄な分布によってはこの石器の大まかな所属時期さえ明らかにはできなかった。

なお、以上の観察結果の検討によって631はこの石器に含め、632は保留し、633は除外する。

P) 石錘 (634~637)

扁平小円錐の両端または側縁を打ち欠き、抉りのある石器である。総数6点で非常に少ない。すべて砾石錘で、素材は梢円扁平錐4点(634~637)、やや角の残る扁平錐2点である。打ち欠きは、長軸の端部にあるもの4点(634・636)、短軸の側縁にあるもの2点(635・637)の2通りがある。

出土分布状況を見ると、環状集落跡及びその外側より3点、残りの3点は環状集落跡からやや離れて出土する。魚沼地方の中前期半の遺跡では石錘が極めて少なく、中期後半以降増加していくらしいこと(高橋1990)、環状集落以外では中期後半の遺物が多いことから、環状集落以外の3点は、中期後半に所属する可能性が高い。

大きさはすべて完形品で、長さ3.1~5.1cm・幅3.8~4.9cm・厚さ1.3~2.1cm・重さ20~44gに収まる。

石材は頁岩I 2点、頁岩II 1点、砂岩2点、安山岩1点である。

q) 尖頭器 (638)

1点しか出土せず、しかも尖頭部・基部の両端は欠損している。平面形は柳葉形、断面形は正裏面の四

1) 形態分類については城之腰遺跡(藤巻1991)を参照。

曲の違いから半月形状を呈する。二次加工は、まず正裏面にやや大きな剝離を加えたと考えられ、正面の方が裏面より剝離が多い。つづいて、ていねいで細かな剝離が加えられるが、正面の剝離の後に裏面の剝離が行なわれている。裏面の方が正面より剝離が多い。このような二次加工の違いは、素材の裏面が平坦状に対し、正面が凸状を呈することからと推定される。

風化は中期前葉期の同石材より明らかに進行し、古い時期の所産と考えられ、形状・二次加工と合わせ、旧石器時代終末から縄文時代初頭と考えられる。欠損面の風化は正裏面の剝離に比べ、明らかに新しく、尖頭器製作時期と欠損時期は一致しないものと推定される。

r) 分類不明石器（639～641）

前述までの器種のいずれにも所属しない石器を分類不明石器とした。総数4点あった。639は細身で長大、両端が鋭く尖る石器である。裏面はほぼ平坦、側面觀は船底形、横断面形はほぼ三角形を呈する。二次加工は、まず裏面に大きな剝離を加え、平坦面を作り出し、つづいて裏面の両側縁から正面に向かって、粗雑でやや大きな剝離を加えている。なお、正面のほぼ中央から下端にかけての稜線上が磨耗し、鈍くなっている。また、図示しなかったが、風化が激しく詳細は不明であるものの、640よりやや小型で近似するものが1点存在する。

640は厚手の石材の両側縁にやや大きな剝離を交互剝離を加えたものである。平面形は短冊状、横断面形は菱形を呈する。打製石斧の未成品とも考えられるが刃部は作出されていない。

641は縱長剝片を素材とし、側縁中央から下端にかけて、つまみ状の抉りを作り出し、上端部は尖頭状を呈する石器である。二次加工は粗雑な剝離で片面加工を基本とし、上半部は小さな剝離を不連続に、下半部はやや大きな剝離を集中させる。横断面形は中央部が半円状、下端付近は台形状を呈する。なお、下端は破損の可能性もある。

s) 玉（642～645）

4点出土している。642は半月形状を呈し、両面と左側面は平面状、右側面は曲面をなす。各面の間の稜はやや丸みを帯びる。643は橢円形状を呈するが、左側面はやや直線状である。右側面の一部は平面状である以外、丸く仕上げられ、横断面は橢円形である。644は穿孔部の破片で、平面形は不明である。遺存部を見る限り、稜ははっきり残り、大型品の可能性がある。645は丸玉の破片で、稜は丸く仕上げられている。

643・644は出土地点より、中期前葉以外の所産の可能性が高い。石材は643以外、滑石製である。

t) 加工のある滑石片（646～649）

6点出土している。うち5点は1面または2面に擦痕が認められる。成品の未成品ではないが、玉の素材である可能性が高い。出土地点は、1点を除き、環状集落から離れて出土し、内4点は5-Cグリッドに集中する。中期初頭以前に所属する可能性がある。

u) 分類不明石製品（650～653）

石製品と推定されるが器種分類不明のものを一括した。5点出土している。650は扁平橢円形を敲打整形し、両面に研磨を加えたものである。正面は、裏面より曲面が緩やかである。磨石類に近似するが、全面に敲打痕や研磨痕があること、石材が軟質の滑石であることから石製品とした。651は長方形の板状縁に線刻のあるものである。正面は2本平行する線をジグザグ状に、裏面は上部に横方向に線刻する。652は楔状の小礫の片面に研磨を加えている。653は扁平橢円形の小礫に正裏面・両側面に研磨を加えている。652・653は4号住居跡からの出土であり、伴出土器から前期の可能性がある。

v) 石核 (654~701)

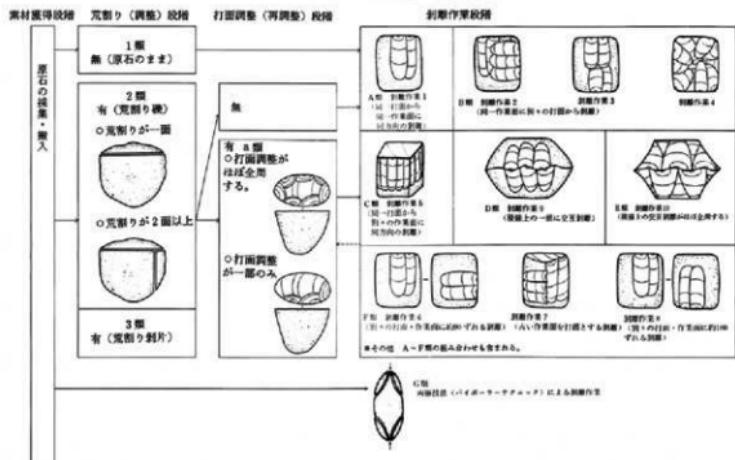
剝片を得るために用いた素材、または剝片を得た残りの部分（残核）である。総数356点出土し、接合するものが1例あり実数355点である。しかし、石核としたものの中には、不定形石器K類（両面加工の不定形石器）、礫器類との区別が困難なものが少なからず認められる。縄文時代の剝片剥離技術の解明は、旧石器時代のそれに比べ遅れている。石核及び得られた剝片・剝片石器の分析は、その解明に不可欠である。とりわけ剝片接合は重要といえる。しかし、整理では剝片接合に充分な時間をとることができなかつた¹⁾。したがって、得られた石核で剝片剥離作業工程を推定し、それに合わせて分類を行なった。

分類 表75参照。剝片剥離作業工程をもとに分類したが、分類不明の石核も多く存在する。以下、剝片剥離作業工程の各段階ごとに説明する。

①素材獲得段階 石核のもとになる原石を獲得する段階である。石器種種ごとに石材選択や大きさの違いが認められること、また、石核には調整（荒削り）段階や再調整（打面調整）段階を経ず、剥離作業に入るものがあることから、それらの石器の素材となる剝片（以下、目的剝片とする）に適した石材や大きさなど、また剥離作業の行ないやすい大きさ、形などを考慮し、原石を採集したものと推定される。ところで、本遺跡の遺構が掘り込まれている地山層は、礫を伴わない層である。しかも遺跡上には土石流や洪水がなかったと推定されることから、遺跡に残された自然礫は搬入石材である。しかし、自然礫が極めて多いこと、形状が多様なこと、分析の時間がなかったことから、搬入石材と石核の原石との判別は不可能であった。また、他地域からの搬入石材と考えられる黒耀石・蛇紋岩・黒色緻密安山岩・鉄石英等以外の石材は、眼前に流れる魚野川で採集されたものと考えられる。

②石核調整（荒削り）段階 原石に荒削りを加え、目的剝片が得やすく、しかも剥離作業が行ないやすい

表75 剥離作業工程表及び石核分類表



1) 剥片接合は、環状集落跡の27~35列グリッドから出土した剝片を対象に行なった。しかし、接合した剝片数は少ない。

大きさ、形の石核を作る段階である。荒削り面が打面になる場合が多いと考えられるが、そうでない場合もある。石核調整の有無と得られる石核により、原石のまま（1類）、荒削り疊（2類）、荒削り剥片（3類）に区別される。

1類 原石のまま 調整（荒削り）のないもので原石に同じ。原石のままで剥片剥離作業が行なえる形状や大きさのものである。

2類 荒削り疊 調整（荒削り）のあるもので、原石の1/2以上の方と考えられるもの。調整（荒削り）が1面だけのもの、2面以上のものがある。

3類 荒削り剥片 調整（荒削り）のあるもので、原石の1/2以下の方と考えられるもの。2類の残り部分も含むと推定される。裏面に自然面を多く残すものと自然面のないもの、または少ないものがある。当然のことながら、剥片石器や剥片に比べかなり大型の剥片であるが、疊器類や不定形石器K類との区別が判然としないものもある。

なお、剥離作業のすんだもので、2類と3類との区別が判然としないものもある。

③再調整（打面調整）段階 荒削り段階で得られた石核に打面調整を行ない、打面を作出する段階である。打面調整の有り（a類）と無しに区別される。

再調整無 打面調整の行なわないもので、荒削り段階で打面が作出された石核である。

a類 再調整有 打面調整の行なわれたもので、打面全体に調整が行なわれるものと、打面の一部に行なわれるものの2通りがある。

④剥離作業段階 剥離作業面に剥離を加え、目的剥片を生産する段階である。剥離作業は、剥離作業面数、打面数及び剥離方法（片面剥離・交互剥離・両面剥離等）により、さまざまであるが、7つに分類した。

A類 同一打面から同一剥離作業面に同方向から剥離作業が行なわれるもの。したがって打面が1面で、剥離作業面が1面である。（剥離作業1）

B類 同一剥離作業面に別々の打面（約90°・180°ずれる）から剥離作業が行なわれるもの。したがって打面は2面以上で、剥離作業面は1面である。（剥離作業2・3・4）

C類 同一打面から、別々の剥離作業面に同方向の剥離作業が行なわれるもの。したがって打面は1面で、剥離作業面は2面以上である。（剥離作業5）

D類 石核の棱線上の一部から交互剥離により、剥離作業が行なわれるもので、剥離作業が棱線上の一部だけにとどまり全周しないもの。剥離作業面は正裏2面で、打面は剥離作業により更新される。（剥離作業9）残核はチッピングトゥール状になり、疊器との区別が判然としないものもある。

E類 石核の棱線上から交互剥離により、剥離作業が行なわれるもので、剥離作業が全局するもの。剥離作業面が2面で、打面は剥離作業により更新される。（剥離作業10）剥片素材の石核や剥離作業の進んだ小型の石核では、両面加工石器（不定形石器K類）との区別が判然としないものもある。

F類 下記の剥離作業のもの。

○別々の打面と別々の剥離作業面で、剥離方向が約90°ずれる剥離作業のもの。したがって、打面が2面で剥離面が2面である。（剥離作業6）

○別々の打面と別々の剥離作業面を用いるが、片方の打面は古い剥離作業面を利用する。したがって打面が2面で、剥離作業面が2面である。（剥離作業7）

○別々の打面と別々の剥離作業面で、剥離方向が約180°ずれる剥離作業のもの。したがって、打面が2面で剥離作業面が2面である。（剥離作業8）

4 遺物

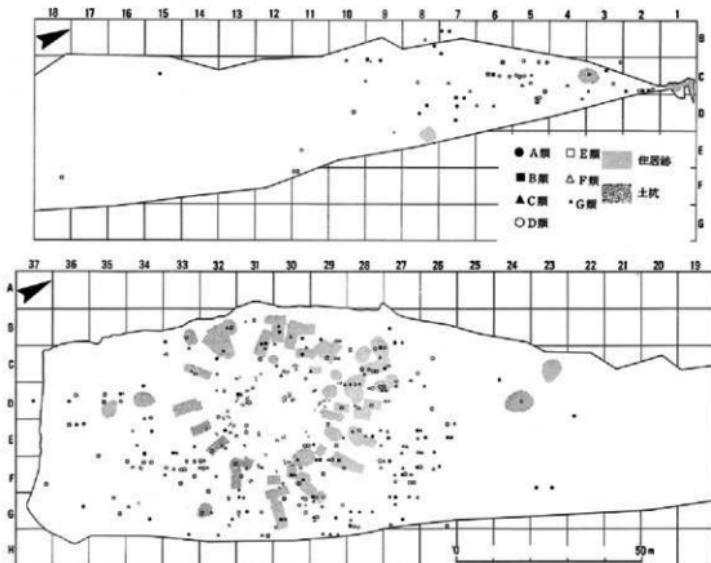
○これ以外に、A～F類までの剝離作業が組み合わされたものをF類に含めた。F類は剝離作業に規則性はあまり認められない石核または複雑な剝離作業の行われた石核といえる。

G類 両極技法（バイボーラーテクニック）による剝離作業が行なわれるもの。

以上の各段階での区分を組み合わせ、石核の分類を行なった。分類はまず、剝離作業方法の区分（A～G類）に着目し、次いで石核の素材（1～3類）を組み合わせた。さらに、再調整（打面調整）のあるものはa類を付けた。なお、G類はすべて原石であるため、単にG類とした。

分類出土数と出土分布状況 表76・第83図参照。実数355点のうち、遺構内より61点（17%）、遺構外より294点（83%）出土している。遺構内出土の93%は住居跡からの出土である。分類別ではF類85点（24%）、E類78点（22%）が多く、B類17点（5%）、G類6点（2%）で少ない。つまり、剝離作業にあまり規則性は認められない石核または複雑な剝離作業の行われた石核（F類）、交互剝離の石核（D・E類）が多く、両極技法の石核（G類）は極めて少ない。しかし、剝離作業に比較的規則性のある石核（A・B・C類）も少なからず存在するといえる。素材別に見ると、素材の判明した269点のうち、1類（原石）とG類は84点（31%）、2類（荒削り礫）34点（50%）、3類（大型剥片）51点（19%）である。また、打面調整（a類）が行なわれている石核は4点である。打面調整は明確なもの以外は含めてないため少ないので、これ以上に存在するものと考えられる。

個々の遺構・小グリッドごとでは7号住居跡3点、7A号住居跡5点、7C号住居跡4点、8A号住居跡5点、10A号住居跡5点、37A号住居跡3点、5-D-6グリッド3点、27-E-2グリッド3点、29-G-21グリッド3点、29-G-24グリッド3点、32-F-21グリッド3点、32-F-22グリッド3点、35-



第83図 石核出土分布図

表76 石核分類別出土数

分類	位置	大型 アラスコ 式土坑	土坑 その他の 位置	遺構外	小計		合計
					大	中	
A	1種	3			12	15	51
	2種	2			29	31	
	3種				5	5	
B	2種	2			8	10	17
	2a種				1	1	
	3種	2			4	6	
C	1種				2	2	26
	1a種	1			1		
	2種	5			11	16	
D	2a種				2	2	46
	3種				5	5	
	1種	8	1		23	32	
E	2種	1			10	11	78
	3種				2	3	
	1種	4	1		8	13	
F	2種	8		1	33	42	85
	3種	1			16	17	
	(E)種	1			5	6	
G	1種	3			12	15	6
	2種	4			15	19	
	3種				2	2	
H	(F)種	3			12	15	85
	1種		1		33	34	
	2種				5	6	
分類不可		7			39	46	46
合計		57	2	1	1	294	355

表77 石核石材表

石材	頁岩I	頁岩II	硬質頁岩	珪質頁岩				花崗岩	安息岩	鐵灰岩	黑耀石	合計
				粘質	泥質	砂質	粘質					
1種	4	6	3				1		1			15
A 2種	8	18	1	1				3				21
3種			4	1								5
A種小計	12	28	5	1	1	3	1					51
2種	1	5	4									10
B 2a種			1									1
3種			3	3								6
B種小計	1	9	7									17
1種		2										2
1a種			1									1
C 2種	8	4	-2				2					16
2a種		2										2
3種	2	3										5
C種小計	10	11	3				2					26
1種	7	17	8									32
D 2種		7	3					1				11
3種			3									3
D種小計	7	27	11					1				46
1種	2	7	3	1								13
E 2種	11	20	10	1								42
E 3種	3	10	4									17
(E)種		3	3									6
E種小計	16	40	20	1	1							78
1種	1	4	7	1								15
2種	1	4	13	1								19
F 2a種	1			1								2
3種			4	9	1							15
(F)種	2	7	21	2								34
F種小計	5	19	50	6								85
G種	2	2					2					6
分類不可	20	10	14	1				1				46
合計	73	146	110	9	6	3	3	5	205			

D-2グリッド3点と出土数が目立つ。その他2点出土は遺構で5遺構、小グリッドで30地点存在するが、特殊な出土状況を示すものはない。

調査区全体の出土分布状況では、環状集落及びその外側からに集中し、中でも環状集落の東側に多い傾向にある。また調査区北東側の2~10列グリッドからの出土もやや多い。

石材 表77参照。実数355点のうち、頁岩II146点(41%)、硬質頁岩110点(31%)、頁岩I173点(21%)、珪質頁岩9点(3%)で頁岩系で95%を占める。中でも頁岩II・硬質頁岩が多い。また、嵌入石材の黒耀石は5点(1.4%)である。これらの石核の石材選択と剝片石器の石材選択を比較すると、石鎚・石錐・石匙・ビエスエスキュー・不定形石器など小型剝片石器の石材選択に比較的近似する。逆に打製石斧・剝片素材の鍛り類の石材選択とは若干異なる。

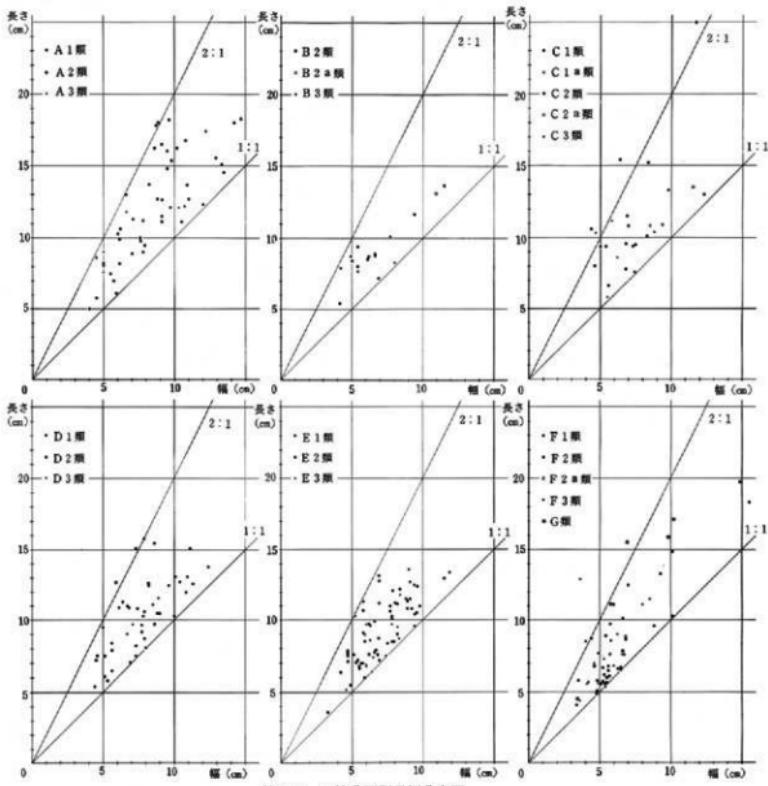
分類別で見るとF種とそれ以外では異なる。すなわちF種は硬質頁岩(110点のうち50点)、珪質頁岩(9点のうち6点)、黒耀石(5点すべて)が極めて多く、良質な石材ほど複雑な剥離作業がおこなわれたと考えられる。

長さ・幅・厚さ 第84~86回参照。分類可能な269点を対象とした¹⁾。計測はまず石核の長さ・幅・厚さに相当する3辺を測り、最も大きい計測値を長さ、2番目の計測値を幅、最も小さい計測値を厚さとした²⁾。

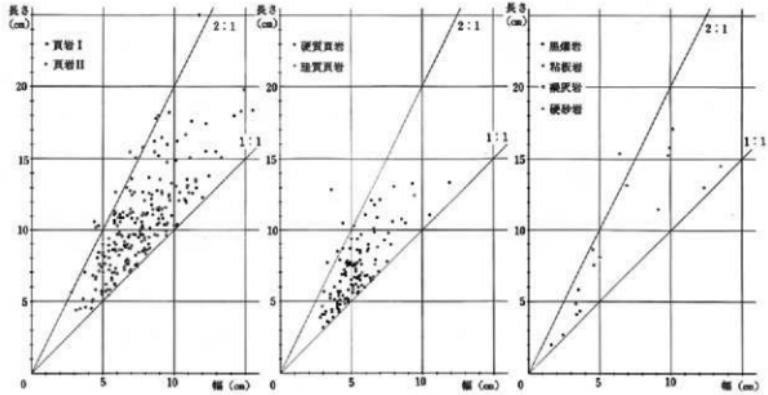
1) E種・F種の中で、(E)種・(F)種は分析から除外した。

2) 分類別に石核の置き方が変わり、各分類間の相互比較ができないためである。

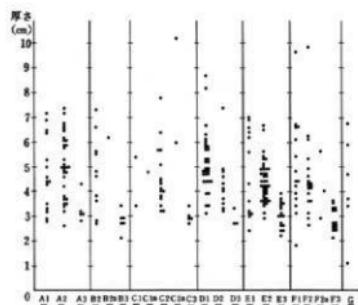
4 造 物



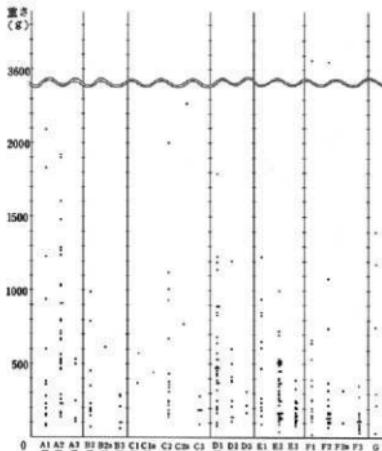
第84図 石核分類別長幅分布図



第85図 石核石材別長幅分布図



第86図 石核厚さ分布図



第87図 石核重量分布図

全体的に見ると長さ5~18cm・幅4~13cm・長幅比2:1~1:1にはほとんど含まれるが、分類別では違いが見られる。すなわちA・D類は小型から大型のものまでムラなく分布するのに対し、B・C・E・F類は比較的小型のものが多く、中でもF類はその傾向が強い。これは、A・D類は剥離作業面や打面が比較的一定するのに対し、B・C・E・F類は剥離作業面や打面が比較的変化し剥離作業の進行が多いことによると考えられる。中でもF類は複数の剥離作業が行なわれ最も剥離作業が進行したものが多いことから推定される。

また、素材別に見ると1類(原石)が大きく、3類(荒割り剝片)が小さく、2類(荒割り礫)が両者の中间の傾向がややある。当然の結果といえよう。

一方、石材別に長幅分布を見ると、硬質頁岩・珪質頁岩・黒耀石・凝灰岩が小型に対し、頁岩I・頁岩II・粘板岩・硬砂岩が大型化の傾向がある。これは前者は原石を見る限り、原石自体が小型であること、石材の良さから石錐や石錐など小型石器に多用されていることや剥離作業が進行しているものが多いことを反映しているものと考えられる。

なお、厚さでは全体的に2~7cmにはほとんど含まれ、長さと幅で見たような大きな違いではないものの分類別・素材別の違いも認められる。

重さ 第87図参照。分類可能な269点を対象とする¹⁾。全体的には100g前後から1300g程度のものがほとんどであり、その中でも500g前後以下のものが多い。分類別ではA・D類が軽いものから重いものまでムラなく存在し、B・C・E・F類は軽いものが多い。素材別では1類が重く、3類が軽い傾向にある。長さ・幅・厚さの反映である。

1) 185ページ1)による。

4 遺物

以上、石核の大きさについて記述したが、これらの石核を見る限り、大型の不定形石器の石核と考えられるものは少なく、打製石斧・剝片素材の礫器類の石核と考えられるものは皆無に等しい。つまり石核の多くは小型剝片石器の石核の可能性が高い。逆に、大型剝片石器は原石採集地（東前に流れる魚野川と推定される）で製作され未成品？・成品として遺跡に搬入された可能性が高い。

w) 剥片類 (708~730)

剝片類としたものは、石核から剥離された目的剝片及びその副産物として生じた剝片（屑片）、目的剝片や礫から石器を製作する際に生じた剝片（チャップや肩片）である¹⁾。これらの剝片類は総数13481点出土している。剝片類の分析は、一部の分析項目を除き27列～38列グリッドの遺構外出土剝片7610点を中心対象とした。

分類 剥片は一般的に打面と主要剝離面（旗面）と背面で構成される。主要剝離面は個々の剝片同士での比較が困難であるため、打面のようすと背面のようすを中心に観察分類した。

①背面のようす

A型 背面のすべてが自然面であるもの。

B型 背面の一部が自然面であるもの。なお、剝片の下端だけに自然面がある剝片はC型に含めた。

C型 背面のすべてが剝離面であるもの。

②打面のようす

1型 自然面打面。

2型 剥離面打面。剥離が1つのもの。

3型 剥離面打面。剥離が2つ以上のもの。

背面のようすと打面のようすを組み合わせると、次のような分類になる。

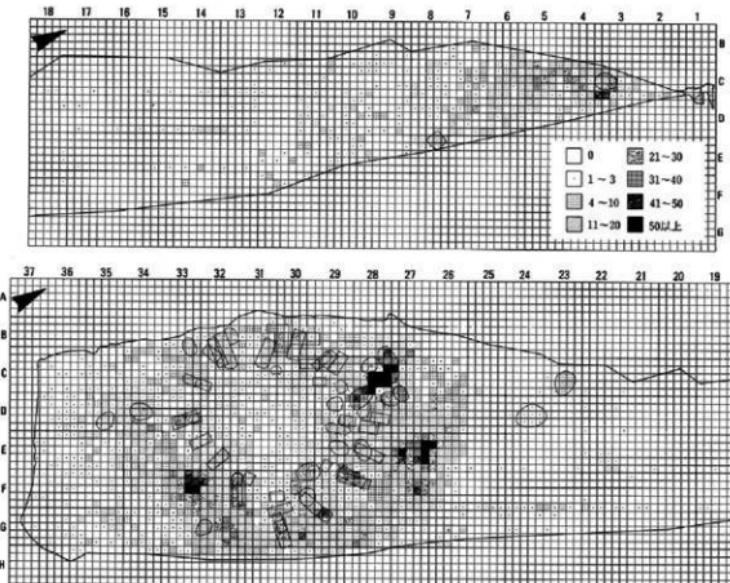
分類	背面のようす	打面のようす	
A 1型	自然面	自然面	(708~709)
A 2型	自然面	剥離が1つ	(710~712)
A 3型	自然面	剥離が2つ以上	(713~714)
B 1型	一部自然面	自然面	(715~716)
B 2型	一部自然面	剥離が1つ	(717~719)
B 3型	一部自然面	剥離が2つ以上	(720~722)
C 1型	剥離面	自然面	(723~724)
C 2型	剥離面	剥離が1つ	(725~727)
C 3型	剥離面	剥離が2つ以上	(728~730)

分類別出土数と出土分布状況 表78・第88図参照。総数13481点のうち、遺構内3278点(24%)、遺構外10203点(76%)である。遺構内出土のうち85%は住居跡からのものである。

分類別の出土数では、前述のように27列～38列グリッドの遺構外出土剝片7610点のうち、黒曜石17点、表78 剥片類遺構別出土数

遺構別	住居跡	大型 フラスコ 状ビット	小型 フラスコ 状ビット	チャップ ビット	土 坑	その他の 遺構	その他の ビット	遺構外	合計
出 土 数	2,771	147	72	18	25	64	181	10,203	13,481

1) 風化や被熱・折れなどから剥離されたかどうか不明なものもごく少数含まれている。



第88図 剥片類出土分布図

接合剥片10点、その他の石材146点を除外し、頁岩I 3708点、頁岩II・硬質頁岩3626点¹⁾、珪質頁岩103点の計7437点を対象とした。このうち剝片分類可能なものは2478点(33%)であり、約2/3は分類不可能であった。

分類不可能な剝片の多くは、風化のため転移痕や打点の不明なもの、打点が欠損しているものや不明なものが大半を占める。この他の理由として、チップや打面再生剝片と考えられる剝片がある。なお、石材別に分類不可能数の比率を見ると、頁岩I 84%、頁岩II・硬質頁岩49%、珪質頁岩39%の順であり、風化しやすい石材ほど多い。

分類可能な2478点のうち、C 2型627点(25%)、B 2型567点(23%)、C 3型338点(14%)が多く、以下B 1型(10%)、A 1型(9%)、B 3型(9%)、C 1型(7%)、A 2型(3%)、A 3型(1%)である。また、背面のようすと打面のようすを別々に見ると、背面がすべて剝離面(A型)は46%、背面の一部が剝離面(B型)は41%と多く、背面のすべてが自然面(A型)は13%と少ない。打面のようすでは、打面が1つの剝離(2型)からなるものは51%と半数を占め、残りは打面が自然面(1型)のもの(26%)、打面が2つ以上の剝離(3型)からなるもの(23%)と、ほぼ2分する。

一方、石材別に見ると、頁岩Iから頁岩II・硬質頁岩、珪質頁岩へと変わらる程、背面のようすは比率がA型(背面がすべて自然面)は低くなり(21%→10%→3%)、B型(背面の一部自然面)は変わらず、C型(背面がすべて剝離面)は高くなる(36%→49%→55%)。また、背面のようすは1型(打面が自然面)は低くなり

1) 少数の粘板岩を含む。

4 遺物

(28%→26%→6%)、2型(打面が1つの剥離)はやや高くなり、3型(打面が2つ以上の剥離)は高くなる(17%→25%→31%)。これは頁岩Iから珪質頁岩になる程、堅くて緻密な石質になり、小型剝片石器に適した石材となると推定されることから、良質な石材ほど剝離作業が進行した剝片が多いという結果になったものと推定される。

ところで、剝片類の分類と不定形石器の素材(表33参照)と比較してみた。ほぼタイプ別出土比率は一致する。つまり、出土剝片は不定形石器を含めた小型剝片石器の屑片と考えられる。少なくとも剝片形状から、不定形石器も剝片類も同じような方法で剝離されたといえよう。

石材 表79参照。前述のように27列~38列グリッド出土剝片7610点のうち、接合剝片10点を除いた7600点を対象とする。頁岩I 3708点(49%)、頁岩II・硬質頁岩3626点(48%)が極めて多く、残りの珪質頁岩103点(1%)を加え、頁岩系で98%を占める。搬入石材と考えられる黒曜石、鉄石英、黒色緻密安山岩は非常に少ない。

剝片石器の各器種・石核と比較すると、石鎌・石錐・石匙・ビエスエスキュー・不定形石器・石核の石材選択にはほぼ近似する。打製石斧とは頁岩系の石材の多さで一致するが、頁岩系の各石材の割合で異なる。また、搬入石材が非常に少ないので資料数が少なく断定できないが、より屑片が少なく、各器種によく用いられた結果とも考えられる。

大きさ 第89・90図参照。27列~38列グリッド出土剝片7610点のうち、長さと幅の計測可能な頁岩I 582点、頁岩II・硬質頁岩1833点、珪質頁岩63点、黒曜石14点の計2492点を対象とする。

剝片の形状別に見ると相対的にA型(背面自然面)が大きく、C型(背面剝離面)が小さい傾向にあり、B型(背面一部自然面)は両者の中間に分布する。また、1型(打面自然面)が大きく、3型(打面2つ以上の剝離面)が小さい傾向にあり、2型(打面が1つの剝離面)は両者の中間に分布する。これは、自然面の残りからA型・1型が剝離作業の初期の段階に得られるものが多いのに対し、C型・3型は剝離作業が進行した段階で得られるものが多いことによるためと考えられる。

一方、石材別に見ると、頁岩Iは大きく、珪質頁岩や黒曜石は小さい傾向にある。頁岩II・硬質頁岩は両者の中間に分布するものが多い。これは、剝片や石核の原石が採集・搬入される段階で、もともと頁岩Iが大きく、珪質頁岩・黒曜石が小さいと推定されることもあるが、小型剝片石器にとって良質な石材はど、より剝離作業が進行すると考えられ、事実、石核の項でも述べたように、小型の石核や複雑な剝離作業が行なわれているのは珪質頁岩や黒曜石である。

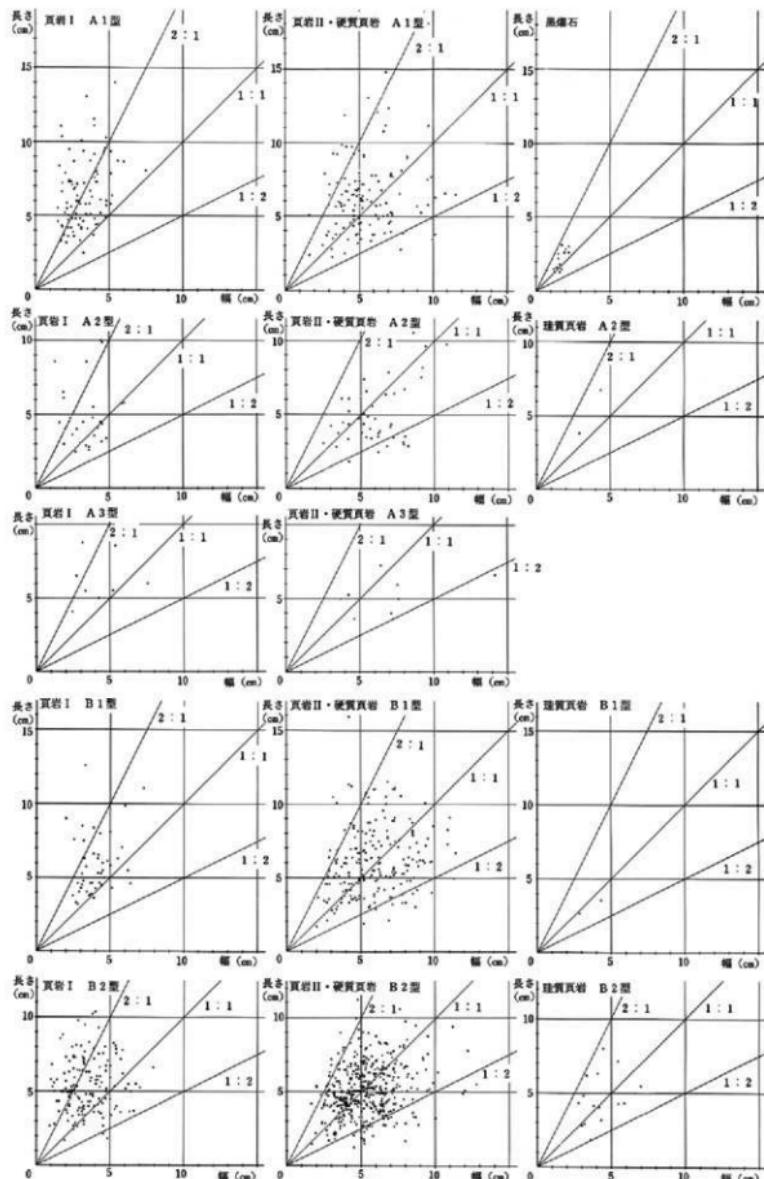
これらの剝片類と剝片石器の大きさを比べると、石鎌・石錐・ビエスエスキュー・石匙・不定形石器の極く一部に使用できる程度の大きさであり、打製石斧や剝片素材の礫器類のような大型剝片石器の素材となり得るのは皆無である。したがって、これらの剝片類は、一部が小型剝片石器の素材を含む可能性があるとはいえ、多くは小型剝片石器の素材を生産した際に生ずる屑片、または剝片石器の製作の際に生ずる屑片が多いと考えられる。

なお、剝片類の厚さ・重さについては分析していない。

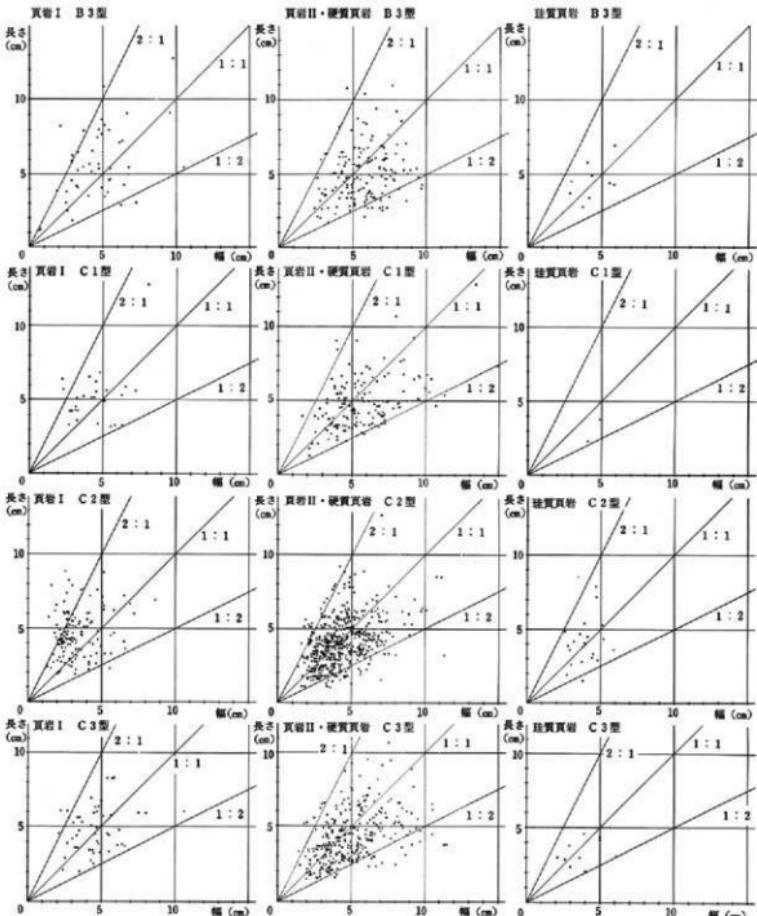
表79 剥片類石材表

石材名	頁岩I	頁岩II・硬質頁岩	珪質頁岩	黒曜石	鉄石英	黒色緻密安山岩	凝灰岩	流紋岩	その他の石材	合計
出土数	3,708	3,626	103	17	3	2	4	16	121	7,600

(27列~38列グリッドのうち、接合剝片10点を除いた)



第89図 削片類石材別・形状別長幅分布図 (1)



第90図 剥片類石材別・形状別長幅分布図 (2)

打面の大きさ 表80参照。打面の大きさ（打面長）と剥片の最大幅を相対的に比較したものである。

打面の大きさと最大幅 打面が最大幅と同じか、ほぼ同じ大きさのもの。計測値で表わすと、最大幅の約9割以上はここに含めた。

打面の大きさ > 最大幅の1/2 打面が最大幅の1/2以上から約9割未満のもの。

打面の大きさ < 最大幅の1/2 打面が最大幅の1/2未満のもの。

分析は大きさの分析で用いた真岩 I 582点、真岩 II・硬質真岩 1833点、硅質真岩 63点の計2478点である。全体的に見ると、1/2以上のもの1799点(73%)、1/2未満のもの679点(27%)である。1/2以上のものの中に

は最大幅とほぼ同じものが445点あり、打面の大きい剝片が多いといえる。

剝片の形状では、2型が1型・3型に比べ、打面が1/2未満のものが多い。これは、2型は打面が1つの剝離からなるもので、他の1型（自然面打面）、3型（剝離が2つ以上の打面）に比べ、より、平坦打面、または打面の安定した石核から剝離された剝片が多く含まれているからと考えられる。

石材別では、前述のように、各石材とも2型が1型・3型に比べ、打面が1/2未満のものが多い。さらに、頁岩Iより、頁岩II・硬質頁岩、珪質頁岩のほうが打面1/2未満のものが多い。つまり、より硬質で緻密な石材ほど打面の小さな剝片が得やすかったものと考えられる。

なお、打面の大きさを不定形石器と比較すると、全体の比率はほぼ一致する。

転移痕 表80参照。主要剝離面（実測図裏面）と背面（実測図正面）との剝離方向の比較である。

0° 主要剝離面と背面の剝離方向が同じもの。背面の剝離が複数あっても、すべて主要剝離面と同じ方向である。

0°+90° 主要剝離面と背面の剝離方向が同じものと約90°ずれるものがある。

90° 主要剝離面と背面の剝離方向が約90°ずれるもの。

0°+180° 主要剝離面と背面の剝離方向が同じものと約180°ずれるものがある。

180° 主要剝離面と背面の剝離方向が約180°ずれるもの。

90°+180° 主要剝離面と背面の剝離方向が約90°ずれるものと約180°ずれるものがある。

0°+90°+180° 主要剝離面と背面の剝離方向が同じものと約90°ずれるものと約180°ずれるものがある。

一般的に0°は打面転移が行なわれない場合、90°は打面が90°に転移された場合の最初の剝離に、180°は打面が180°に転移された最初の剝離に、90°+180°は打面が頻繁に転移する場合に多い剝片と考えられる。なお、A型は背面がすべて自然面であり、剝離方向の比較はできない。しかし、A型の多くは石核の剝離作業段階の最初の剝離で、その後の数回の剝離は同方向（0°）と考えられることやB型・C型の剝片の約90%は0°であることから、その大半は0°と考えられる。

分析では、B型・C型の2169点を対象とし、A型は含めない。全体的に見ると、0°のもの1934点(89%)、90°転移（0°+90°+90°）のあるもの137点(6%)、180°転移（0°+180°+180°）のあるもの56点(3%)、90°と180°転移（0°+90°+180°+90°+180°）のあるもの42点(2%)である。比率を見る限り、主要剝離面と背面の剝離方向が同じものが非常に多く、90°転移、180°転移の順に少なくなる。

剝片の形状別では、打面のようす（1～3型）からは比率に差は見られないが、背面のようす（B・C型）からは、B型（背面一部自然面）は、C型（背面剝離面）に比べ、0°の比率はやや低い。

石材別に見ると、頁岩Iに比べ、頁岩II・硬質頁岩、珪質頁岩の方が0°の比率が低くなる。(93%→88%→83%)。つまり、硬質で緻密な石材ほど打面転移が多いことを反映していると考えられる。

不定形石器の転移痕と比べると、0°のもの65%、90°転移のもの25%、180°転移のもの6%、90°と180°転移のもの4%で、剝片類の転移痕と大きく異なる。これは、明確に説明はできないが、不定形石器の剝片が大きく、剝片類が小さいという大きさの違いとも考えられるが、大きさ別の分析を加えてないため不明である。

折断 表80参照。必ずしも充分な観察ではないが、2478点のうち、195点(8%)に折断が認められた。

剝片の形状別では、A型がB型・C型よりやや比率は高い傾向にある。石材別では珪質頁岩が頁岩I・頁岩II・硬質頁岩よりやや低い傾向にある。

また、不定形石器と比べると、不定形石器の比率25%とは、大きく異なる。剝片から石器が製作される

4 造物

表80 剥片類石材別複数集計表

石材名 頁岩系石材合計

総数 7,437 計測不可能数 4,859

計測可能数 2,478 出土地点 27列~38列グリッド(遺構外)

剥片タイプ	出土数	打面の大きさ		転 移 痕							折断
		=最大幅	>最大幅の1/2 <最大幅の1/2	0°	0°+90°	90°	0°+180°	180°	90°+180°	0°+90°+180°	
A 1型	216	9	149	58							21
A 2型	75	12	38	25							11
A 3型	18	3	14	1							6
B 1型	249	30	176	43	190	14	22	6	11	2	4 20
B 2型	567	90	289	188	493	18	17	15	2	7	15 47
B 3型	212	64	121	27	189	11	6	4			2 10
C 1型	176	43	163	30	164	4	4	2	1		1 18
C 2型	627	99	283	245	590	21	2	7		2	5 36
C 3型	338	95	181	62	308	18			8		4 26
合計	2,478	445	1,354	679	1,934	86	51	42	14	11	31 195

石材名 頁岩 I

総数 3,768 計測不可能数 3,126

計測可能数 582 出土地点 27列~38列グリッド(遺構外)

剥片タイプ	出土数	打面の大きさ		転 移 痕							折断
		=最大幅	>最大幅の1/2 <最大幅の1/2	0°	0°+90°	90°	0°+180°	180°	90°+180°	0°+90°+180°	
A 1型	90	3	78	9							8
A 2型	28	8	16	4							2
A 3型	8	1	7								2
B 1型	46	1	40	5	39	3	1		3		2
B 2型	154	26	91	37	143	2		6			3 16
B 3型	47	13	32	2	44	2	1				
C 1型	27	10	11	6	24		1	2			2
C 2型	133	28	64	41	130	2		1			4
C 3型	49	18	25	6	46	2		1			3
合計	582	106	364	110	426	11	3	10	3		3 39

石材名 頁岩 II・硬質頁岩

総数 3,626 計測不可能数 1,793

計測可能数 1,833 出土地点 27列~38列グリッド(遺構外)

剥片タイプ	出土数	打面の大きさ		転 移 痕							折断
		=最大幅	>最大幅の1/2 <最大幅の1/2	0°	0°+90°	90°	0°+180°	180°	90°+180°	0°+90°+180°	
A 1型	126	6	71	49							13
A 2型	45	3	22	20							9
A 3型	10	2	7	1							4
B 1型	201	29	134	38	140	11	21	6	8	2	4 18
B 2型	368	63	193	142	338	15	16	8	2	7	12 31
B 3型	156	49	83	24	136	8	5	4			1 10
C 1型	147	33	90	24	139	3	3		1		1 16
C 2型	472	68	212	192	442	18	2	3		2	5 31
C 3型	278	75	151	52	251	16		7			4 23
合計	1,833	328	963	542	1,457	71	47	28	11	11	27 155

石材名 硬質頁岩

総数 103 計測不可能数 40

計測可能数 63 出土地点 27列~38列グリッド(遺構外)

剥片タイプ	出土数	打面の大きさ		転 移 痕							折断
		=最大幅	>最大幅の1/2 <最大幅の1/2	0°	0°+90°	90°	0°+180°	180°	90°+180°	0°+90°+180°	
A 1型											
A 2型	2	1		1							
A 3型											
B 1型	2		2		2						
B 2型	15	1	5	9	12	1	1	1			
B 3型	9	2	6	1	7	1					1
C 1型	2		2		1	1					
C 2型	22	3	7	12	18	1		3			
C 3型	11	2	5	4	11						
合計	63	9	27	27	51	4	1	4			1 1

過程で折断が行なわれた反映といえよう。

x) 接合剥片 (702~707)

27列から38列グリッドの遺構外出土剥片を中心に接合した結果、6例の接合 (702~707) があった。接合例が少ないので、接合に充分時間を費やさなかったこと、接合対象を遺構外出土剥片の一部に限られ、遺構内出土の剥片や側片石器との接合を行なわなかったこと、同一石材 (頁岩系) が圧倒的に多く母岩別に選別できなかつたことによる。

702は縱方向數回剝離後、打面近くを數回剝離 (打面調整か剝離作業か不明) する。その後、同一打面を同一方向 (縱方向) に剝離を行ない (剝離作業1)、剥片A・B・Cを剝離している。比較的薄手で、打面の小さい剝片を得ている。703は剝離が一回による打面作出後、同一打面の同一方向 (縱方向) の剝離 (剝離作業1) が3回、その後、同方法の剝離でAを剝離、さらに同方法の剝離を1回、その後、同方法でBを剝離している。703は厚手で打面もやや大きい剝片で、Bは台形状を呈している。

704は交互剝離の途中段階のもので、荒削り礫の稜線上を数回交互剝離を行なうが、稜線を全周していない (剝離作業9)。その後、同方法でAを剝離し、残核Bの裏面下側 (704Bのリング・フィッシャーの入れてない剝離) で1回剝離し、さらにAの剝離で得られた稜線上 (704Bの裏面右側) より剝離を行なっている。704Aは打面は小さいが、厚手で大きな剝片である。705は上面・下面の剝離を行ない、上面に打面を作出し、その後、同一打面の同一方向 (縱方向) の剝離 (剝離作業1) でAを、同方法で1回剝離し、その後、同方法でBを剝離している。得られた剥片A・Bは台形状を呈している。706はまず自然面を打面として剝離 (荒削り?) を加え、Aを剝離する。次に最低2回の剝離で、Bの打面を作出 (荒削りか、打面調整か?) している。707は数回の剝離 (打面調整か剝離作業か不明) を行ない、これを打面にして707の正面左側、同じく上面から3回の剝離を行ない、その後上面からの剝離でAを剝離する。707BではAの剝離後、右側より2回の剝離が行なわれている。その後、再び上面の打面に移り、Bが剝離されている。707は同一剝離作業面に周縁から剝離が行なわれている (剝離作業2)。剥片A・Bは最大幅が打面にある。

y) 板状石器の素材 (731~753)

板状石器の石材の93%を占める泥板岩は、他器種にはほとんど使用されていないことから、板状石器以外の泥板岩だけを抽出してみた。総数566点であるが、接合するものがあるため実数520点である。これらはつぎの分類から、板状石器の原石・素材・未成品及び、製作の際に生ずる剝片であると考えられる。

分類 表90参照。原石の形状により A~D類に4分した。

A類 完成品に適した大きさ (長さ・幅) と厚さの原石

B類 完成品に適した大きさ (長さ・幅) であるが、厚さが厚すぎる原石

C類 完成品に適した厚さであるが、大きさ (長さ・幅) が大きすぎる原石

D類 完成品に比べ、大きさ (長さ・幅) が大きく、厚さも厚い原石

さらに、完成品までの製作段階を第1~第4段階に分けた。

1類 第1段階 原石獲得段階。

2類 第2段階 素材作出 (一次加工) 段階。大きさ (長さ・幅) のあるものは主に折断により、厚さのあるものは板状に剝離され、完成品に適した大きさ (長さ・幅)、厚さにされる。

3類 第3段階 刃部作出 (二次加工) 段階。周縁の一部に二次加工が施される。板状石器の未完成である。

4類 第4段階 完成品。二次加工がほぼ全局する。

4 遺物

なお、D類の第2段階で板状剝離が先行するものはa類、折断による分割が先行したものはb類、完成された素材をc類とした。また' (ダッシュ) は、第2、第3段階で正面に節理面があるものである。

これらのA~D類、1~4類、a~c類、' (ダッシュ) を組み合わせ分類とした。

遺構別・分類別出土数と出土分布状況 表81・82・第91図参照。総数566点のうち、遺構内93点(16%)、遺構外473点(84%)である。遺構内出土の約90%は住居跡からのものである。

分類別では、実数520点のうち、原石・素材・未成品は288点(55%)、第2・第3段階で生ずる剝片・屑片223点(43%)、分類不可7点(1%)である。原石・素材・未成品の288点のうち、分類別に見ると、出土数の多少はあるものの原石別・製作段階別のほぼすべてのものが認められる。なお、A類の第2段階は存

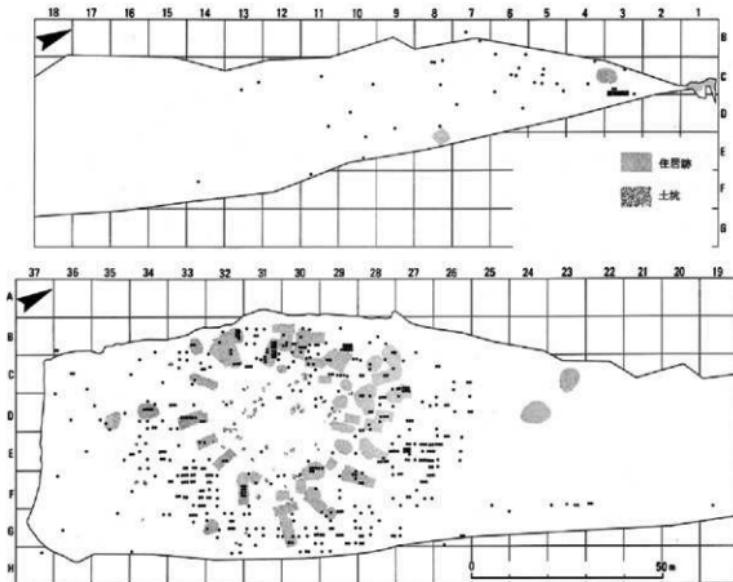
表81 板状石器の素材遺構別出土数

遺構別	住居跡	大型 フラスコ 状ビット				道構外	合 計
		小型 フラスコ 状ビット	トランプ ビット	その他の ビット			
出 土 数	83	1	3	2	4	473	566

表82 板状石器の素材分類別出土数

段階別 原石別	第1段階	第2段階	第3段階	合計	
				A類	B類
A類	A1類 57	—	—	A3類 21	78
B類	B1類 10	B2類 53 B2'類 7	—	B3類 20	90
C類	C1類 26	C2類 13	C3類 1	40	
D類	D1類 7	D2類 22 D2'類 4 D2b類 6	D3類 2 D3'類 3	80	
合 計	100	141	47	288	

その他、3類の分類不可2点、剝片(屑片)223点、分類不可7点
(第2・3段階で混合するものがあり、合計は总数に合わない)



第91図 板状石器の素材出土分布図

在しないが、第1段階の原石＝素材であるため、第2段階を経ず、第3段階の未成品になるためである。

個々の遺構・小グリッドごとでは、21号住居跡7点、28号住居跡8点、37A号住居跡12点、38D号住居跡7点、40B号住居跡5点、3-C-16グリッド18点、27-C-20グリッド6点、27-E-18グリッド7点の出土数の多さが目立つ。その他、複数出土は遺構で11遺構・小グリッドで80地点存在するが、特殊な出土状況を示すものではない。

調査区全体の出土分布状況は、環状集落及びその外側に多く分布する。また、3列～11列グリッドにかけての分布も目立つ。これを板状石器の出土分布図と比較すると、板状石器は環状集落及びその外側にはほとんど分布するのとは異なる。泥板岩は板状石器にだけほとんど使用されていることから、断定はできないが、製作は3列～11列グリッドでも行なわれたが、使用及び廃棄は環状集落及びその周辺でのみ行なわれた可能性も考えられる。

z) 自然礫類

本遺跡はローム層上に立地するため、遺跡で検出された自然礫のほとんどが搬入石材と考えられる。自然礫類に含めたものは、石器とした以外で用途不明の礫・焼石・碎片・集石や配石に用いられた礫・柱穴の根固め石、炉石などがある。また、これらの自然礫類は、大きさ・重さを問わず1個を1点と数えた。したがって、砂利程度の数cm・数kgのものから、数10kgまでの大礫まである。総数24051点の出土である。

遺構別出土数と出土分布状況 表83・第92・93回参照。総数24051点のうち、遺構内より、5846点(24%)、遺構外より18205点(76%)の出土である。遺構内出土の89%は住居跡からの出土である。

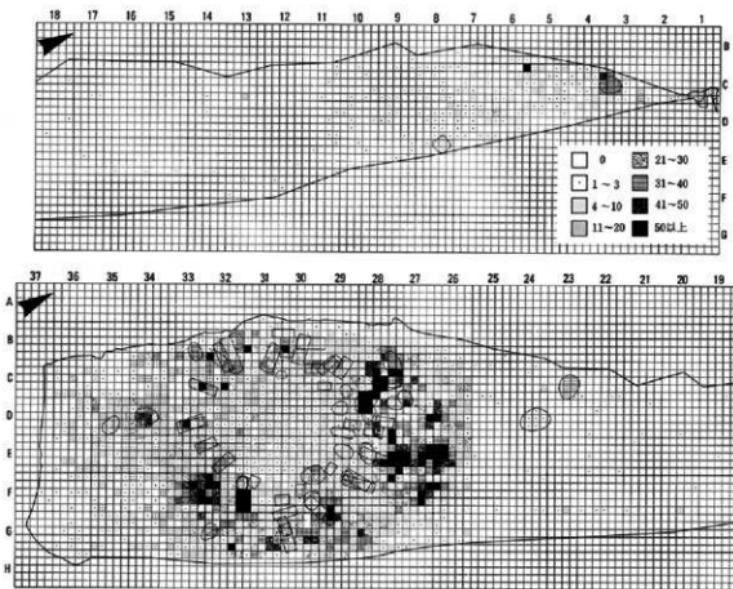
多くの自然礫の性格は不明であるが、炉から出土した自然礫は石組炉・石囲い炉の炉石として、柱穴から出土した自然礫は根固め石として、4-C-1号配石・6-C-1号集石・7-D-1号配石から出土した自然礫は配石・集石として用いられたものと推定される。

調査区全体の出土分布状況は、環状集落及びその外側からの出土が多く、また、1列～8列の住居跡及びその周辺からの出土も目立つ。これ以外では、環状集落内からの出土の多さに注目される。自然礫類だけの分布を見るとさほど明確でないが、各器種の分布と比較すれば大きな違いが認められる。すなわち、剝片類までを含めた各器種の分布状況は、既に述べたように環状集落内からはほとんど出土していない。これに対し、自然礫類はかなりの出土が認められる。また、自然礫の重量別に出土分布を見ると、40kg以上の大礫が環状集落内に集中することは明らかである。環状集落内は土坑の集中する地域であり、ここからの自然礫類は大半がローム層上の黒色土からの出土であること、石器は出土せず、自然礫類だけ出土するのは、土坑上、または土坑上の周辺に何らかの集石・配石・立石などの施設を想定させるが、いずれにしても自然礫が多く置かれ、しかもそれは大礫だったことは事実である。

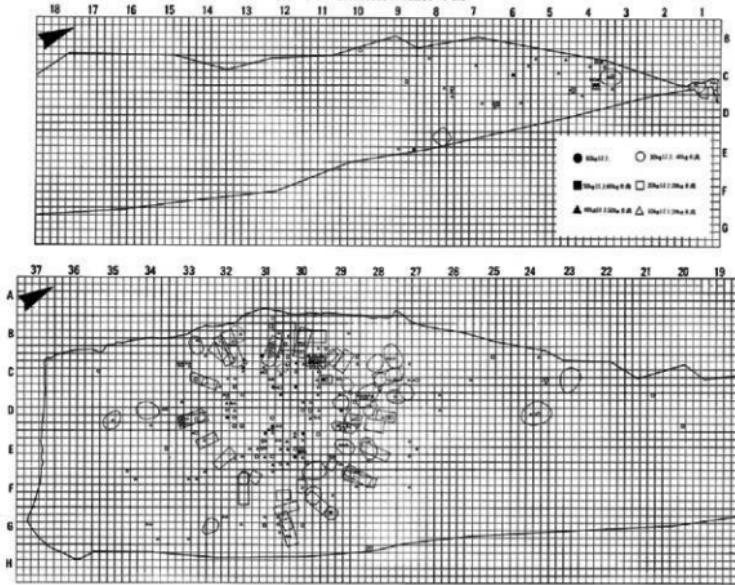
表83 自然礫類遺構別出土数

遺構別	住居跡	大型 フラスコ状 土坑	小型 フラスコ状 土坑	トランプビット	土坑	その他の 遺構	その他のビット	遺構外	合計
出土数	5,195	92	106	42	42	84	285	18,205	24,051

4 遺物



第92図 自然石類出土分布図



第93図 自然石類重量別出土分布図

出土石器一覽

住居財

小フラスコ状土坑・大フラスコ状土坑・トラップビット・土坑・その他の遺構

その他のピット

グリッド

地點名	標高										面積
	石 砾	石 塊	石 塊	石 砾	砂 砾	砂 砾	砂 砾	砂 砾	砂 砾	砂 砾	
1—C—1											1
1—C—4											4
1—C—15											2
1—C—19											2
1—C—20											2
1—C—28, 1											$\frac{1}{2} + \frac{C}{B} - 15 + 20, \quad 1 - D - 11$
1—D—11											2
1—D—16											2
1—D—22											2
2—C	2			2							6
2—C—5				3							3
2—C—18				1							1
2—C—111											
2—C—15		1		3							3
2—C—30		1		1							1
2—C—21				1							1
2—C—25		1		3							3
3—B		1									1
3—C											
3—C—1				1							1
3—C—2											2
3—C—3				1							1
3—C—4	2		2	1		1					9
3—C—5				1							1
3—C—7				1							1
3—C—8				1							1
3—C—9	2										1
3—C—10			1	1							1
3—C—12		2		1							1
3—C—13				2							1
3—C—14				4							3
3—C—15		2		5							1
3—C—16				1							1
3—C—17	1	2		2	1						4
3—C—18				1							1
3—C—19		3		(12)	1	2					3
3—C—20						2					2
3—C—21											2
3—C—23		1	1								1
3—C—25											1
3—C—26		1	2								1
3—C—27											1
3—D—16											1
3—D—17		1									1
3—D—21											1
3—E—23											1
A—C											
A—C—1											1
A—C—2			1								1
A—C—3				1							1
A—C—5											
A—C—6	1	2									1
A—C—7	2										2
A—C—8	1										1
A—C—9											
A—C—10											
A—C—11			10	20							1
A—C—12											2
A—C—13											2
A—C—14	2		10								1
A—C—15											2
A—C—16											2
A—C—17											2
A—C—18											2
A—C—19											2
A—C—20											1
A—C—21											1
A—C—22											1
A—C—23	1	2									2
A—C—24											2
A—C—25											1
A—D—1		1									1
A—D—2			1								1
A—D—6											4
A—D—11											1
A—D—7											1
A—D—12											2
A—D—13											1
A—D—16											1
A—D—22	5	2	1	2							1

基盤名	石	22	23	24	25	合計						合計	自由 度	備 考	
						石	砂	灰	合	石	砂	灰	合		
22—A															
22—C															
22—C—1															
22—C—2															
22—C—3															
22—C—4															
22—C—5															
22—C—6															
22—C—7															
22—C—8															
22—C—9															
22—C—10	1												1	4	1
22—C—11	2	2	0						3				3	22	
22—C—12		2											2	1	
22—C—13														4	6
22—C—14		1												1	22
22—C—15	1	1	1						3				3	22	
22—C—16	5	1							6				6	22	
22—C—17														2	2
22—C—18														1	22
22—C—19	1	2	2	2	1				5				5	22	
22—C—20	1	4	2	2	1				8				8	22	
22—C—21														4	22
22—C—22		2	2	2	2				8				8	22	
22—C—23	1	2	2	2	2				8				8	22	
22—C—24	2	2	2	2	2				8				8	22	
22—C—25														4	2
22—D														4	22
22—D—1														1	22
22—D—2														1	22
22—D—3														1	22
22—D—4														1	22
22—D—5														1	22
22—D—6														1	22
22—D—7														1	22
22—D—8														1	22
22—D—9														1	22
22—D—10														1	22
22—D—11														1	22
22—D—12														1	22
22—D—13														1	22
22—D—14														1	22
22—D—15														1	22
22—D—16														1	22
22—D—17														1	22
22—D—18														1	22
22—D—19														1	22
22—D—20														1	22
22—D—21														1	22
22—D—22														1	22
22—D—23														1	22
22—D—24														1	22
22—D—25														1	22
22—E															
22—E—1	1													1	22
22—E—2														1	22
22—E—3	(2)													1	22
22—E—4														1	22
22—E—5	1	1	1	1	1				5				5	22	
22—E—6	(2)								1				1	22	
22—E—7									6				6	22	
22—E—8		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—9	1								4				4	22	
22—E—10									5				5	22	
22—E—11									3				3	22	
22—E—12									1				1	22	
22—E—13									4				4	22	
22—E—14									6				6	22	
22—E—15									5				5	22	
22—E—16									2				2	22	
22—E—17									3				3	22	
22—E—18									5				5	22	
22—E—19									5				5	22	
22—E—20									1				1	22	
22—E—21									2				2	22	
22—E—22									3				3	22	
22—E—23		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—24		1							1				1	22	
22—E—25		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—26		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—27		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—28		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—29		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—30		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—31		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—32		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—33		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—34		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—35		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—36		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—37		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—38		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—39		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—40		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—41		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—42		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—43		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—44		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—45		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—46		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—47		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—48		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—49		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—50		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—51		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—52		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—53		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—54		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—55		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—56		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—57		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—58		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—59		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—60		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—61		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—62		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—63		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—64		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—65		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—66		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—67		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—68		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—69		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—70		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—71		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—72		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—73		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—74		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—75		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—76		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—77		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—78		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—79		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—80		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—81		1	1	1	1				4				4	22	
22—E—82		1	1	1	1				4				4	22	

地盤名	地盤性状										地盤構成										地盤	
	石	砂	粘	泥	砂	粘	泥	砂	粘	泥	砂	粘	泥	砂	粘	泥	砂	粘	泥	砂	粘	泥
29-D-3																					1	1
29-D-4																					11	14
29-D-5																					1	1
29-D-6																					6	6
29-D-7																					23	8
29-D-8																					1	1
29-D-9																					30	3
29-D-10																					1	2
29-D-11																					1	8
29-D-12																					30	30
29-D-13																					4	4
29-D-14																					1	1
29-D-15																					5	5
29-D-16																					2	2
29-D-17																					30	30
29-D-18																					1	1
29-D-19																					30	30
29-D-20																					1	1
29-D-21																					2	2
29-D-22																					3	3
29-D-23																					11	11
29-D-24																					6	6
29-D-25	CB																				23	8
29-E-1																					2	2
29-E-2																					30	30
29-E-3																					1	1
29-E-4																					5	5
29-E-5																					6	6
29-E-6																					2	2
29-E-7																					3	3
29-E-8																					6	6
29-E-9																					2	2
29-E-10																					30	30
29-E-11																					1	1
29-E-12																					4	4
29-E-13																					2	2
29-E-14																					5	5
29-E-15																					4	4
29-E-16																					6	6
29-E-17																					3	3
29-E-18																					2	2
29-E-19																					4	4
29-E-20																					3	3
29-E-21																					1	1
29-E-22																					2	2
29-E-23																					3	3
29-E-24																					1	1
29-E-25																					3	3
29-F-1																					2	1
29-F-2																					10	10
29-F-3																					3	3
29-F-4																					3	3
29-F-5																					4	4
29-F-6																					6	6
29-F-7																					3	3
29-F-8																					3	3
29-F-9																					2	2
29-F-10																					1	1
29-F-11																					2	2
29-F-12																					1	1
29-F-13																					2	2
29-F-14																					2	2
29-F-15																					6	6
29-F-16																					2	2
29-F-17																					2	2
29-F-18																					1	1
29-F-19																					3	3
29-F-20																					3	3
29-F-21																					7	7
29-F-22																					1	1
29-F-23	CB																				2	2
29-F-24																					28	28
29-F-25																					11	11
29-F-26																					11	11
29-F-27																					1	1
29-F-28																					2	2
29-F-29																					11	11
29-F-30																					30	30
29-F-31																					1	1
29-G-1																					1	1
29-G-2																					28	28
29-G-3																					11	11
29-G-4																					2	2
29-G-5																					11	11
29-G-6																					2	2
29-G-7																					11	11
29-G-8																					1	1

29-F-2-P 1' x 2' x 1'

测点名	高程										高程差	高程中误差
	石 砾 层	25	石 英 层	26	石 英 层	27	石 英 层	28	石 英 层	29		
31-D-13											0	0
31-D-14											0	0
31-D-15											0	0
31-D-16											1	1
31-D-17											1	1
31-D-18											2	2
31-D-21											0	0
31-D-22											2	2
31-D-24				1							0	0
31-D-25											0	0
31-E											0	0
31-E-1				1							0	0
31-E-2											0	0
31-E-3					1						1	1
31-E-5											1	1
31-E-6				1							1	1
31-E-8											0	0
31-E-9											0	0
31-E-10				1							0	0
31-E-11											0	0
31-E-12					1						0	0
31-E-13											0	0
31-E-14											0	0
31-E-15											0	0
31-R-16											0	0
31-R-17				1							0	0
31-R-18											0	0
31-E-19											0	0
31-R-20											0	0
31-E-21			1								0	0
31-R-22			1								0	0
31-R-23				1							0	0
31-E-24					1						0	0
31-R-25											2	2
31-F											0	0
31-F-1											0	0
31-F-2											0	0
31-F-3											0	0
31-F-4											0	0
31-F-5											0	0
31-F-6											0	0
31-F-7											0	0
31-F-8											0	0
31-F-9											0	0
31-F-10											0	0
31-F-12		1									0	0
31-F-13											0	0
31-F-14											0	0
31-F-16		1									0	0
31-F-17		2									1	1
31-F-18											0	0
31-F-19		2									0	0
31-F-20		4	2	1				1	1		0	0
31-F-21		1									0	0
31-F-22											0	0
31-F-23		1									0	0
31-F-24					(1)						0	0
31-F-25		1									0	0
31-G											0	0
31-G-1											0	0
31-G-2											0	0
31-G-3											0	0
31-G-4											0	0
31-G-5											0	0
31-G-6											0	0
31-G-7											0	0
31-G-8											0	0
31-G-9											0	0
31-G-10											0	0
31-G-11											0	0
31-G-12											0	0
31-G-13		1									0	0
31-G-14		4									0	0
31-G-15		1									0	0
31-G-16		4	8								0	0
31-G-17		2	3								0	0
31-G-18											0	0
31-G-19											0	0
31-G-20											0	0
31-G-21		9	12	3							0	0

井位名	石	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423	424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478	479	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495	496	497	498	499	500	501	502	503	504	505	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515	516	517	518	519	520	521	522	523	524	525	526	527	528	529	530	531	532	533	534	535	536	537	538	539	540	541	542	543	544	545	546	547	548	549	550	551	552	553	554	555	556	557	558	559	560	561	562	563	564	565	566	567	568	569	570	571	572	573	574	575	576	577	578	579	580	581	582	583	584	585	586	587	588	589	590	591	592	593	594	595	596	597	598	599	600	601	602	603	604	605	606	607	608	609	610	611	612	613	614	615	616	617	618	619	620	621	622	623	624	625	626	627	628	629	630	631	632	633	634	635	636	637	638	639	640	641	642	643	644	645	646	647	648	649	650	651	652	653	654	655	656	657	658	659	660	661	662	663	664	665	666	667	668	669	670	671	672	673	674	675	676	677	678	679	680	681	682	683	684	685	686	687	688	689	690	691	692	693	694	695	696	697	698	699	700	701	702	703	704	705	706	707	708	709	710	711	712	713	714	715	716	717	718	719	720	721	722	723	724	725	726	727	728	729	730	731	732	733	734	735	736	737	738	739	740	741	742	743	744	745	746	747	748	749	750	751	752	753	754	755	756	757	758	759	760	761	762	763	764	765	766	767	768	769	770	771	772	773	774	775	776	777	778	779	780	781	782	783	784	785	786	787	788	789	790	791	792	793	794	795	796	797	798	799	800	801	802	803	804	805	806	807	808	809	8010	8011	8012	8013	8014	8015	8016	8017	8018	8019	8020	8021	8022	8023	8024	8025	8026	8027	8028	8029	8030	8031	8032	8033	8034	8035	8036	8037	8038	8039	8040	8041	8042	8043	8044	8045	8046	8047	8048	8049	8050	8051	8052	8053	8054	8055	8056	8057	8058	8059	8060	8061	8062	8063	8064	8065	8066	8067	8068	8069	8070	8071	8072	8073	8074	8075	8076	8077	8078	8079	8080	8081	8082	8083	8084	8085	8086	8087	8088	8089	8090	8091	8092	8093	8094	8095	8096	8097	8098	8099	80100	80101	80102	80103	80104	80105	80106	80107	80108	80109	80110	80111	80112	80113	80114	80115	80116	80117	80118	80119	80120	80121	80122	80123	80124	80125	80126	80127	80128	80129	80130	80131	80132	80133	80134	80135	80136	80137	80138	80139	80140	80141	80142	80143	80144	80145	80146	80147	80148	80149	80150	80151	80152	80153	80154	80155	80156	80157	80158	80159	80160	80161	80162	80163	80164	80165	80166	80167	80168	80169	80170	80171	80172	80173	80174	80175	80176	80177	80178	80179	80180	80181	80182	80183	80184	80185	80186	80187	80188	80189	80190	80191	80192	80193	80194	80195	80196	80197	80198	80199	80200	80201	80202	80203	80204	80205	80206	80207	80208	80209	80210	80211	80212	80213	80214	80215	80216	80217	80218	80219	80220	80221	80222	80223	80224	80225	80226	80227	80228	80229	80230	80231	80232	80233	80234	80235	80236	80237	80238	80239	80240	80241	80242	80243	80244	80245	80246	80247	80248	80249	80250	80251	80252	80253	80254	80255	80256	80257	80258	80259	80260	80261	80262	80263	80264	80265	80266	80267	80268	80269	80270	80271	80272	80273	80274	80275	80276	80277	80278	80279	80280	80281	80282	80283	80284	80285	80286	80287	80288	80289	80290	80291	80292	80293	80294	80295	80296	80297	80298	80299	80300	80301	80302	80303	80304	80305	80306	80307	80308	80309	80310	80311	80312	80313	80314	80315	80316	80317	80318	80319	80320	80321	80322	80323	80324	80325	80326	80327	80328	80329	80330	80331	80332	80333	80334	80335	80336	80337	80338	80339	80340	80341	80342	80343	80344	80345	80346	80347	80348	80349	80350	80351	80352	80353	80354	80355	80356	80357	80358	80359	80360	80361	80362	80363	80364	80365	80366	80367	80368	80369	80370	80371	80372	80373	80374	80375	80376	80377	80378	80379	80380	80381	80382	80383	80384	80385	80386	80387	80388	80389	80390	80391	80392	80393	80394	80395	80396	80397	80398	80399	80400	80401	80402	80403	80404	80405	80406	80407	80408	80409	80410	80411	80412	80413	80414	80415	80416	80417	80418	80419	80420	80421	80422	80423	80424	80425	80426	80427	80428	80429	80430	80431	80432	80433	80434	80435	80436	80437	80438	80439	80440	80441	80442	80443	80444	80445	80446	80447	80448	80449	80450	80451	80452	80453	80454	80455	80456	80457	80458	80459	80460	80461	80462	80463	80464	80465	80466	80467	80468	80469	80470	80471	80472	80473	80474	80475	80476	80477	80478	80479	80480	80481	80482	80483	80484	80485	80486	80487	80488	80489	80490	80491	80492	80493	80494	80495	80496	80497	80498	80499	80500	80501	80502	80503	80504	80505	80506	80507	80508	80509	80510	80511	80512	80513	80514	80515	80516	80517	80518	80519	80520	80521	80522	80523	80524	80525	80526	80527	80528	80529	80530	80531	80532	80533	80534	80535	80536	80537	80538	80539	80540	80541	80542	80543	80544	80545	80546	80547	80548	80549	80550	80551	80552	80553	80554	80555	80556	80557	80558	80559	80560	80561	80562	80563	80564	80565	80566	80567	80568	80569	80570	80571	80572	80573	80574	80575	80576	80577	80578	80579	80580	80581	80582	80583	80584	80585	80586	80587	80588	80589	80590	80591	80592	80593	80594	80595	80596	80597	80598	80599	80600	80601	80602	80603	80604	80605	80606	80607	80608	80609	80610	80611	80612	80613	80614	80615	80616	80617	80618	80619	80620	80621	80622	80623	80624	80625	80626	80627	80628	

